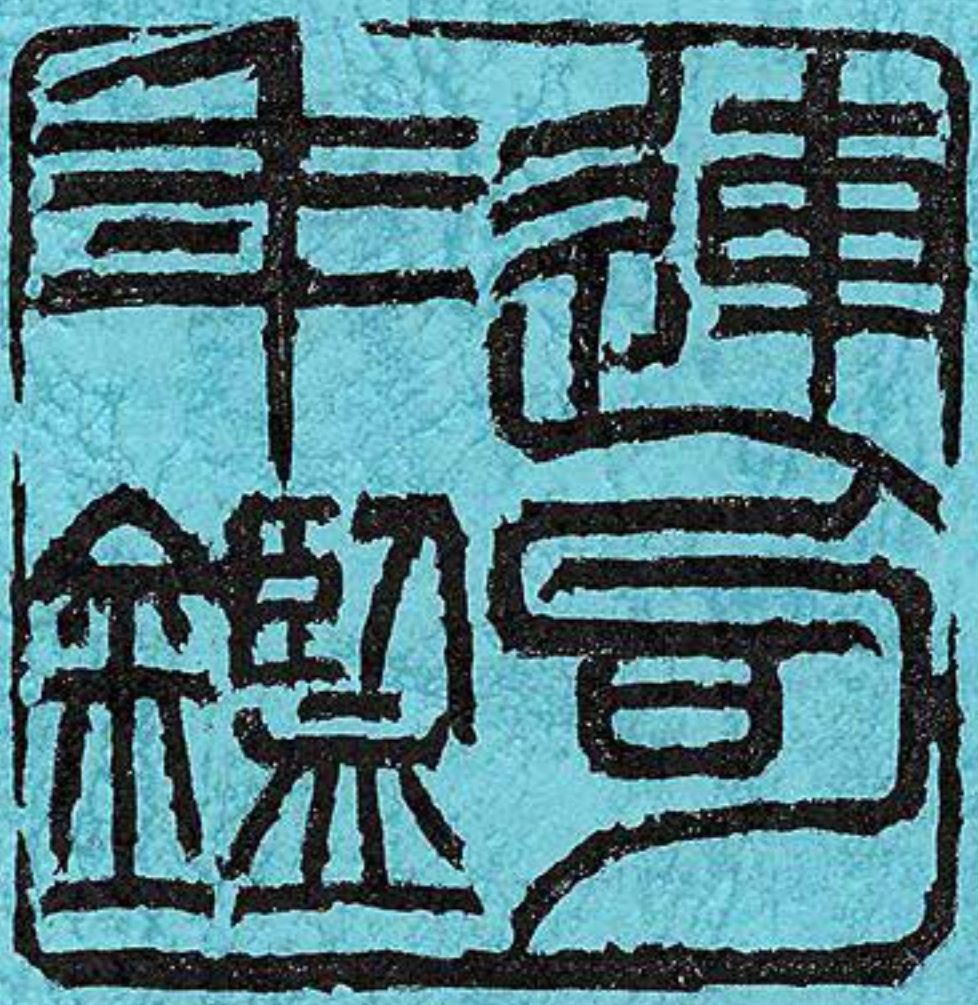


2017

日本連句協会

連句年鑑

平成二十九年版

連句年鑑（平成二十九年版）目次

〈表紙題字・横田思案人〉

日本連句協会平成二十九年総会・全国連句大会の記 …… 7

第三十一回国民文化祭・あいち2016

「連句の祭典」「愛故知新」 …… 9

評論
エッセイ

『猿蓑』巻之五所収四歌仙の構成 …… 大城悦子 …… 13

俳句の産み出す詩語 …… 金子兜太 …… 24

【鼎談】金子兜太俳句の連句的鑑賞 …… 25

宇田零雨のこと …… 東浦佳子 …… 36

回顧

平成二十八年の連句界 …… 和田忠勝 …… 40

（カット・秋葉初枝）

作品

会津の会
「風薫る」……47
阿吽の会
「七つ橋」……48
赤のままの会
「風狂の」……49
秋田県連句協会
「秋田駒」……50
浅草連句会
「宗達の」……51
「心太」……52
あした連句会
「獺祭忌」……53
「台風裡」……54
「金木犀」……55
「冬構」……56
あした芭蕉記念館連句会
「冬の蜂」……57
あした梶の葉連句会
「初詣」……58
あした本庄連句会
「寒菊や」……59
天の川連句会
「孫自慢」……60
伊賀連句会いがまち座
「天高し」……61
伊賀連句会小菊の
「まつりの日」……62
石手寺連句会
「鏡割」……63
市川俳諧教室
「街師走」……64
「街師走」……65
伊豆芭蕉堂
「十万のつつじ
「鳥総松」……66
伊勢原連句会
「嵐にも」……67
「風光る」……68
「魚の目は泪」……69
鰡背座
「太陽の舌」……70
いろは会
「老次の四肢」……71
いわき文音連句の
「ひよどりは」……72
WEBめぎつね座
「たのしい三句
NHK文化センター青山
「春嵐」……73
大住連句会
「晋翁忌」……74
おたくさの会
「上梓」……77
「大輪」……78
おりいぶ連句会
「木鐸の」……79
海市の会
「茶話」……80
鹿児島県連句協会
「観覧車」……81
解纜
「白炭や」……82
月蔵連句会
「走る子も」……83
桂の会
「心太」……84
「紛れし蛍」……86
「小鳥待つ」……87
菊名連句会
「高速道路」……88
くさくき
「春の宴」……89
「師を慕い」……90
「残雪の」……91
「師と酌めば」……92
くさくき川口支部
「小春かな」……93
くさくき北九州支部
「麦の風」……94
「合歓の花」……95
草笛連句会
「彼岸の入」……96
庚申庵連句会
「冠雪」……97
「鶏頭に」……98
興聖寺連句会
「こうの鳥」……100
古都連句会
「蹴上道」……101
「額の花」……102
ころも連句会
「あくび猫」……103
「糸柳」……104
「喘月楼」……105
堺連句同好会
「春の朝」……106
さくら草連句会
「泣き出す児」……107
「巴里祭」……108
「たけのこや」……109
サザン
「成人の日」……110
清の會スノードロップ
「言祝ぎぬ」……111
三金会
「花前の」……112
慈眼舎
「風神も」……114

「孫　娘」……116
「開花予想」……117
猪の会
「春立つ日」……118
獅子門
「獅子門支考忌追善俳諧」……119
「獅子門翁忌追善俳諧」……120
獅子門友楽社
「獅子門友楽社第九世　鵠乎亭宮本光野文台継承俳諧」……121
獅子門蓼杖社
「翁忌追善俳諧」……122
「山笑ふ」……123
獅子門朧水社
「水仙や」……124
下町連句会
「梅ふふむ」……125
「下総台地」……126
夙水会
「絵日記を」……127
樹氷連句会
「新顔も」……128
湘南吟社
「鎌倉の歴史」……129
「美晴の丘」……132
「冬落暉」……133
裾野連句会
「宗祇連歌」……134
成城連句会
「よき旅」……135
「古今伝授」……136
宗祇白河連句会
「古今伝授」……137
草門会
「こねこねこ」……140
「黒南風の九人」……141
啐啄会
「秋祭り」……142
武生連句の会
「庭小春」……143
「神の子」……144
遅刻坂連句会
「青田の風」……145
「芍薬の蕾」……146
「八ヶ岳」……147
「発車のベル」……148
中央連句会
「星が育てる」……149
「コントラバス」……150
「昭和の音」……151
「ビルの空」……152
「アールグレイ」……153
千代の会
「涼新た」……154
「咲きも残らず」……155
筑波連句会
「青葉木菟」……156
「あまめはぎ」……157
つばさ連句会
「あそばせる」……158
でこん座
「夏　鶯」……159
天神連句会
「高々と」……162
桃雅会
「蹴鞠初め」……163
「恐竜の」……164
「冬ざれや」……165
東京かびれ
「神の笑み」……166
「薄墨に」……167
稲門連句会「西北の風」
「共生の」……168
「西国浄土」……170
桃夭樹
「冬ぬくし」……171
徳島県連句協会
「ぼうたん」……172
都心連句会
「俳諧連歌」……173
「影物の」……174
「旧暦で」……176
「デュエット」……178
なかよし連句
「二人で過ごす」……179
奈良県連句協会・若草連句会
「はばたきの時」……180
日本連句協会千葉県支部
「早稲の香」……181
ねずみの会
「青き瑕」……182
野田連句会
「ジュウジロさん」……183
俳諧コミューン
「千本の腕」……184
はいかい都鳥
「ソラマチの」……185
俳諧無心
「十」……186
白塔歌仙会
「火祭り」……187
白水台連句会
「赤蜻蛉」……188
巴世里連句会
「秋桜」……190
花音
「呱呱の声」……191
羽曳野連句会
「銀屏風」……192
浜風
「星祭」……193

「出会ひ橋」……194
日立かびれ
「鳥　渡　る」……195
人妻連句会
「雪釣りや」……196
ひねもす連句会
「漱　石」……197
美々っと連句会
「アロハシャツ」……198
「植田一望」……199
ひょんの会
「暮　年」……200
風狂連句会
「穂すすきや」……201
ふたば会
「やわらかに風連れて」……202
北杜連句塾
「戦　争　の」……203
「向き合える」……204
ほほほ蓮
「母　の　家」……205
ほれぼれ座
「ＩＳ兵士」……206
松山連句協会
「無位無冠」……207
「窓」連句会
「海の匂や」……208
宮城県連句協会
「初　茜」……209
水無月連句会
「草紅葉」……210
柳瀬川連句会
「柿たわわ」……211
夢々連句
「春の雪」……212
「黒薔薇や」……213
横浜ベイサイド連句会
「名　月　や」……214
「ジュラ紀の空」……215
四葩連句会
「光　堂」……216
読売文化センター川口
「金　盃　に」……217
ラピロス連句会
「海くれて」……218
夜の連句会「花李」
「わかば雨」……220
竜神連句会
「花冷えや」……221
連句会ひらめき
「田園風景」……222
連句会未恋座
「あやめ」……223
「秋　桜」……224
連句会遊子座
「初懐紙」……225
「羽抜鳥」……226
「柿たわわ」……227
「梅が香」……228
若笹連句会
「乱数表」……229

地方連句組織

一般社団法人 日本連句協会　定款

年鑑担当

〈編集後記〉……大久保風子

一般社団法人日本連句協会
平成二十九年総会・全国連句大会の記

平成29年日本連句協会総会　臼杵游児会長

第三回一般社団法人日本連句協会総会・全国連句大会が平成二十九年三月十二日（日）に東京都の台東区民会館で開催された。一年中賑わいの続く浅草寺や桜の開花間近な隅田公園に近い区民会館の会場に全国から九十八名の会員が出席。

総会は東條副会長の司会で始まり、先ず臼杵会長より概ね次の挨拶があった。①百名近い出席者へのお礼②二十八年度の行事は略予定通り終了し、財務の健全化が計られたが、会員減が課題③この総会をもって会長を退き、新会長による新体制へ大いに期待する。

第一号議案に入り、和田理事長より平成二十八年度事業全般について報告、高尾副会長より決算報告。三年ぶりで黒字化された主因は会費の値上げや遅延会費の入金・印刷費等の経費の削減や匿名での寄付があったこと等。石川監事の監査報告の後に採決に入り、満場一致で承認された。次に第二号議案の二十九年度事業計画と予算案に移る。理事長より、連句の社会的存在意義を案内書やホームページ等で強調すると共に、国民文化祭はじめ地方大会への積極的参加を続けるとの方針説明。予算面では現在の会員六七

○名をベースに収入計画を立て、広報関係等必要経費は積極的に支出する。予算案についても満場一致で承認された。続いて第三号議案の役員人事へ移る。東日本大震災の年から六年間勤められた臼杵会長と和田理事長が退任され、青木会長、高尾理事長他の役員人事が満場一致で承認。新会長から「人事が若返ったが、四十代の会員がおらず、二十年後の連句協会が心配。新潟や和歌山等連句会組織のない地方についても皆さんのご協力を頂きたい」と挨拶。

総会の議題は終了し、講演会へ。講師は聖心女子大学名誉教授の奥田勲氏で、「心敬の卓越性」について。〈心配り・青・「もなし」〉の資料が配られ、心敬の百韻連歌での付け句の心配りを中心に、七十分の講演が行われた。

青木秀樹新会長

昼食には「深川めし」の弁当が配られ、二十席での熱の籠った実作会は三時半過ぎ迄続いた。その後、今年の国民文化祭「連句の祭典」が開催される奈良県や来年予定の大分県はじめ各地の出席者から様々な連句会開催への呼びかけが続き、第一部の予定案件は四時に終了。

第二部の懇親会は、区民会館の別会場に移り、近藤常任理事の司会で和やかに進められ、旧会長と新会長他の挨拶に続き、新任理事の方々からも抱負が述べられたが「二十年後は私達にお任せ下さい」との頼もしい挨拶もあった。

全ての予定は六時に終了し閉会。

（渡部春水記）

講師　奥田勲氏

第三十一回国民文化祭・あいち2016

「連句の祭典」

「愛故知新」

伝統を「愛」しみ、新しきを「知」り文化は動く

何よりも、募吟に参加頂いた方並びに文化庁・愛知県庁・名古屋市の関係者、本大会のご指導をいただきました日本連句協会関係者の皆様に御礼を申し上げます。お蔭さまにて、プレ大会ならびに本大会・吟行会交流会を無事に終わらせることができました。本大会の会場となりました熱田神宮は、近代俳諧の発祥の地といってよい俳諧の聖地であります。神宮関係者の方々のご支援にも感謝の意を表します。

俳諧の地、熱田神宮の下にいながら、愛知には俳諧同好の士はおりましたが、一つのまとまりにはなっていませんでした。二〇一五年の暮れに、日本連句協会の肝煎りで、愛知県連句協会を立ち上げることになった次第です。その後、隔月おき位に理事会を開き、本大会へ向けての活動が始まりました。この活動を通じて、それぞれのスキルを駆使して、大会の準備・運営にあたることができましたことは、幸せでした。

プレ大会がなんとかこなせましたので、いくらかゆとりができたように思いますが、理事会での計画と役割分担が検討され、募吟応募のこと、吟行会・交流会の作り上げました。こうした活動の中で、威力を発揮しましたのが、パソコンとインターネットでした。このお蔭で、多くの統計作業や連絡、案内が容易にできました。その任に当たった方のご苦労を賞賛しなければならないでしょう。

連句の祭典の中心は募吟です。実のところ、何巻の応募があるだろうか、心が痛む思いでした。二月から五月を応募期間として、年明けから募集要項を配布いたしました。期間に入ると事務局への郵送が毎日のようにきます。更に、インターネットでの投稿も続きました。毎日のように、応募番号を書き入れ、その嵩が増える楽しみがありましたのも事実です。幸いにも五百十三巻の応募がありました。ほぼ六月一杯かけて七人の審査委員の方に審査していた

だいたわけです。この準備も思いがけず大変でした。そもそも五百巻からの作品を七人の選者分だけコピーするには、どうしたらよいのか、と考え込みましたが、幸い、こういうことを専門にしている業者に出会えましたので、一件落着です。わずか一月で審査をして頂きました選者、大野鵠士・狩野康子・小池正博・静寿美子・東條士郎・寿子・東條士郎・佛渕健吾（敬称略）の各位に深甚のお礼を申し上げます。

七月二七日に、熱田神宮会館で選者会議がありました。遠く仙台・四国からお出で下さり、ほぼ半日を掛けて、最終選考が行われました。予め得点順の一覧を用意してありましたので、文部科学大臣賞を始めの各賞が決定されました。会の席上、本大会の実行委員長であり審査委員の杉山壽子様より、実行委員会から奨励賞を三巻出したいとの提案があり、賛同が得られました。特に、高校生の巻いた作品に未来を見たいというものでした。

十月二九・三〇日の両日ともに好天に恵まれました。芭蕉の遺跡を歩く三つのグループに分かれました。名古屋は芭蕉が蕉風を発祥させた地として知られています。それを支えた尾張俳壇の人達が芭蕉を守り立てたのですから、いろいろと見どころがあります。

Aコースは、神宮の南方面、林桐葉達の世界と鳴海の下里知足に関ります。桐葉旧居や七里ノ渡しなどや知足達が建てた「千鳥塚」があります。碑面の「千鳥塚」の文字は芭蕉自身の書になるものだといわれています。下里家は現代も続いています。Bコースは、蕉風発祥の地の碑が中心です。名古屋栄のテレビ塔の北側が芭蕉が逗留し、野水以下の面々と「冬の日」の各巻を巻上げたところです。ここから東へと行き、徳川園にも立ち寄ったりしました。Cコースは、熱田神宮の中を歩いて、例えば、楊貴妃伝説のある泉で、美しくなる水に触れたりしました。

夕方には、交流会が神宮会館の二階ホールで開かれました。およそ百八十名の参加者がテーブルを囲んで話の花を咲かせました。時折、司会者がおどけての指名で、スピーチをさせられたりもしました。臼杵日本連句協会会長は、あしたしっかり挨拶しますと軽く終われました。

アトラクションは、鳴海のど真ん中の連中の「どまんな

平成28年10月30日　実作会（熱田神宮文化殿大ホール）

か」踊り、太鼓持ち芸という滅多にお目に掛かれない至芸にはヤンヤの喝采。一条流おさな会の日本舞踊があり、締めは琴城流の大正琴。「名古屋囃子」に続いて、最後に「花は咲く」が演奏され、会場の人の唱和もありました。大正琴は、名古屋発祥のものです。交流会は、杉山会長の名古屋式「ナモナモ」一本締めのユーモアを、和田さんの一本締めが受けて、盛況のうちに幕を閉じました。

本大会は三〇日午前十時に始まりました。会場は熱田神宮文化殿大ホールです。正面の舞台に、向って左に大会主催者、中央に選者、その右ならびに後ろに大賞受賞者と並び、杉山会長の大会宣言で授与式が始まりました。次いで、熱田神宮を代表して、文化殿部長の挨拶、次に、祭典主催者の文化庁長官官房付田村寿浩氏のご挨拶、続いて愛知県民生生活部次長斎木博行氏のご挨拶、臼杵日本連句協会会長挨拶、来賓を代表されて名古屋市観光文化交流歴史まちづくり部部長山内正照氏が挨拶されました。

大賞の授与は、文部科学大臣賞の鈴木了斎さん以下の方々に順次行われた次第です。その後、審査員を代表して東條土郎さんが総評を行い、受賞者を代表して鈴木了斎さ

んがお礼の言葉を述べられ、表彰式が終了。賞状を持ち勢ぞろいし、記念写真が撮られて

若干の休憩を置いて、愛知県立大学講師の講演となりました。パワーポイントを使って張の芭蕉を中心にした俳諧に関するものでし話しくださり、芭蕉を中心にした尾張俳諧の易く聴くことができました。お忙しい中でのいたしております。

大会の掉尾を飾ったのが、大会出席者全員会でした。文化殿一杯に四十一座が用意されには、愛知・三重・岐阜に跨がる歌枕が用意一の座の「熱田神宮」、二の座の「年魚市潟（一二座の「八橋」はかの業平縁の歌枕です。がそれぞれに和気藹々と付合を楽しまれましば、初めて会った人達が、付合の喜びに浸りであるかのようになりました。この座の中で座は、近藤蕉肝さんの捌きで、国際連句の方日本語で付け合われました。ほぼ三時間にわ句が、各座のお捌きさんの進行で、和やかに巻き進められました。連句の前には、懇親を深めながら、和気藹々の内に時間が過ぎたのです。最後に、その日の座を代表して、「夜寒の里」の座の鈴木美奈子良川」の座の中林舞句、「夜寒の両氏が、それぞれのお捌きの一巻を披講されると会場は盛大な拍手。これで、実作会の終了です。ここで更めて、ご参加頂きました全国の連衆の方々に敬意と感謝の意を表する次第です。

かくして閉会となり、開催者を代表し、杉山愛知県連句協会会長が謝辞を述べられました。次いで、臼杵日本連句協会会長を介在として、協会旗が愛知県から奈良県に引き継がれ、奈良県連句協会会長生駒聰氏が引き継ぎのご挨拶をなさいました。奈良県の連句の祭典がご成功されることを心からお祈りいたします。

愛知県連句協会の一同は、重荷を下ろせたことに安堵を覚えております。プレから始まり気忙しい二年のように思えましたが、多くの座友との出会いに、喜びを覚えたのも確かであります。熱田神宮に育まれ、芭蕉や尾張の俳諧連衆の恩を、更めて噛みしめております。連句万歳。

（愛知県連句協会　青島ゆみを）

『猿蓑』巻之五所収四歌仙の構成

大城悦子

はじめに

芭蕉は元禄二年（一六八九）のいわゆる「奥の細道」の旅を終えた後二年余り関西に留まり、その間に芭蕉の監修のもとに成立したのが、去来・凡兆編『猿蓑』です。

この書は、芭蕉の門人たちが「俳諧の古今集也」（許六『宇陀法師』）、「全く果実を備ふ」（支考『発願文』）などと賞賛した集ですが、江戸時代の注釈が二〇種類も知られているように、江戸時代を通じて広く読まれた集でもあります。また、現代においても、評価が高い俳書です。

『猿蓑』は、乾の巻・坤の巻に分かれますが、乾の巻は、冬・夏・秋・春を発句とする歌仙四巻の連句集の巻之五と、俳文等を収める巻之六とで成っています。坤の巻は、冬・夏・秋・春を各一巻とした発句集で、乾の巻の巻頭と巻末に芭蕉の発句が置かれ、首尾の呼応がみられます。

連句集の巻之五については、諸先行研究の評価の大多数は二句の付合や一句の内容に限定されており、歌仙一巻の構成や、歌仙四巻の多様な構成とその配列の妙、などにはほとんど言及されていません。

しかし、芭蕉が俳諧宗匠となった延宝年間（一六七三～一六八一）は百韻から派生した歌仙形式の草創期に当り、歌仙の構成に関する定型はありませんでした。以後、芭蕉は生涯に亘り、歌仙形式について工夫を続けたのですが、『猿蓑』巻之五は構成に関する芭蕉の工夫が最も成功した一巻である、と思われます。

筆者は、是非とも連句協会会員の皆様に『猿蓑』巻之五の構成の素晴らしさを味わっていただきたいと存じます。

一、俳書所収歌仙の紙面構成

筆者の調査によれば『猿蓑』など芭蕉が大きく関わっ

『猿蓑』巻之五所収四歌仙一覧

2015大城作成

凡例：「ほ」＝時鳥、「ゆ」＝雪、「し」＝時雨

第一：「鳶の羽も」歌仙

三丁表						急の見開き 二丁裏												破の見開き 一丁裏												序の見開き 一丁表					
名残折																		初折																	
裏						表												裏												表					
六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一
春	春花			冬	秋	秋	秋月			恋	恋			夏ほ		冬ゆ			春花	春月	春			夏	夏？			冬？	秋	秋	秋月			冬	冬し
三丁表						二丁裏												二丁表												一丁裏					
						急の見開き												破の見開き												序の見開き					

第二：「市中は」歌仙

六丁表						急の見開き 五丁裏												破の見開き 四丁裏												序の見開き 四丁表					
名残折																		初折																	
裏						表												裏												表					
六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一
春	春花			恋	恋					秋	秋月	秋				冬？			秋月	秋	秋		恋	恋		冬	春花	春	春				夏	夏	夏月
六丁表						五丁裏												五丁表												四丁裏					
						急の見開き												破の見開き												序の見開き					

第三：「灰汁桶の」歌仙

九丁表						急の見開き 八丁裏												破の見開き 七丁裏												序の見開き 七丁表					
名残折																		初折																	
裏						表												裏												表					
六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一
春	春花						夏	夏				秋月	秋恋	秋恋		冬		春	春	春花	秋	秋	秋月			恋	恋	夏	夏		春	春ゆ	春		秋月	秋	秋
九丁表						八丁裏												八丁表												七丁裏					
						急の見開き												破の見開き												序の見開き					

第四：「梅若菜」歌仙

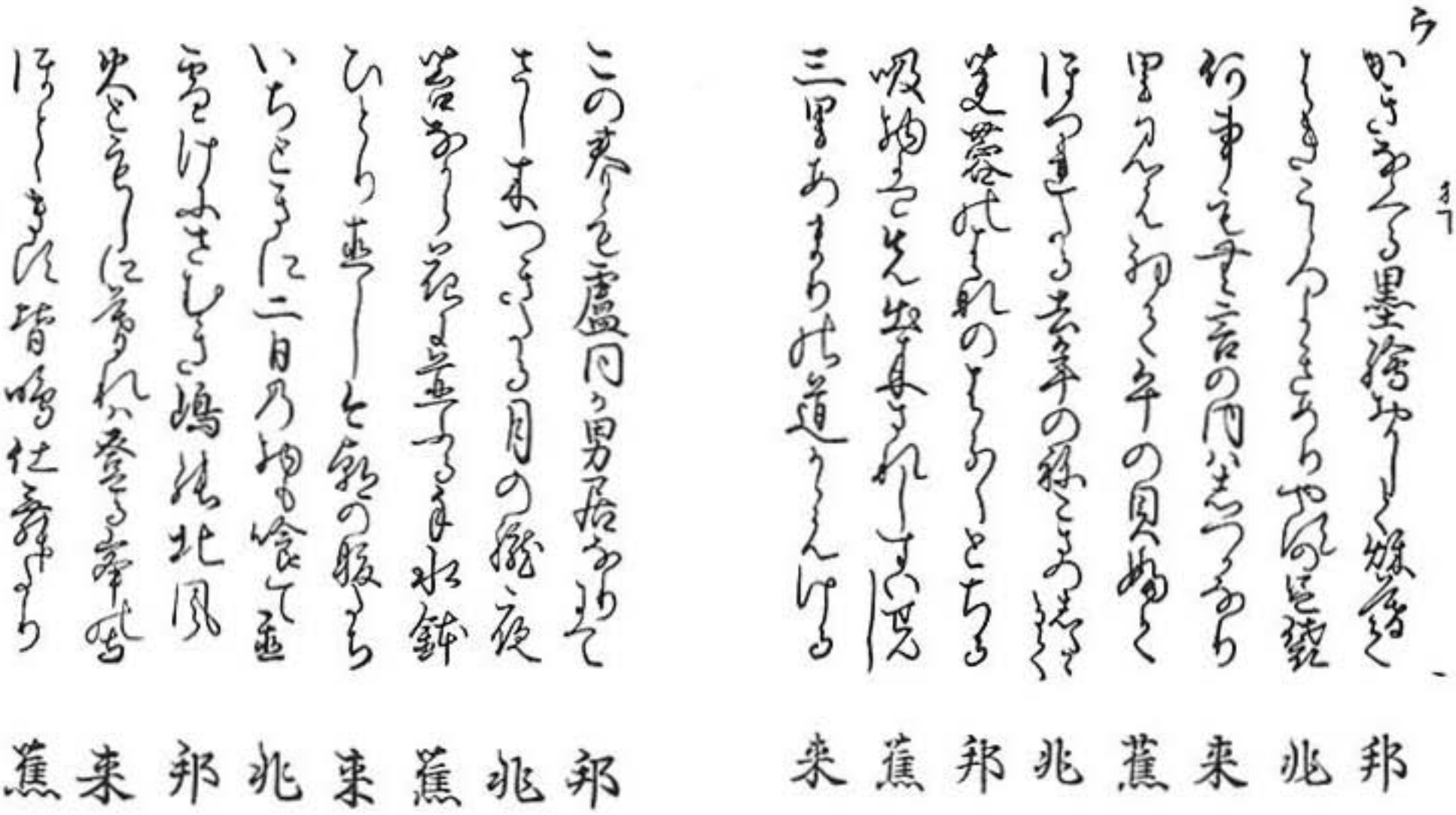
十二丁表						急の見開き 十一丁裏												破の見開き 十丁裏												序の見開き 十丁表					
名残折																		初折																	
裏						表												裏												表					
六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	六	五	四	三	二	一
春	春花	冬ゆ				夏月	夏			冬		恋	恋	恋	夏		春	春	春花		秋月	秋	秋					夏？	秋	秋	秋月		春	春	春
十二丁表						十一丁裏												十一丁表												十丁裏					
						急の見開き												破の見開き												序の見開き					

たらしい俳書の大多数では、歌仙掲載形式が同一です。

当時一般的であった整版本（手書きの文字や画を、版画のように、裏返して版木に彫り込み、刷り上げ、綴じた本）の『猿蓑』は、半紙本（現代の菊判とほぼ同型）ですが、歌仙を半丁（現在の一頁）八行で掲載しています。

前頁「『猿蓑』巻之五所収四歌仙一覧」に示しましたように、第一丁表（左頁）には表六句の続いて半丁ごとに、ウ一句目から名オ四句目まで、ウ九句目から名オ四句目まで、名オ五句目から十二句目までを配して、最後の第三丁表に名ウの六句は何も記されていません。続く第三丁裏には句上以外には、まず、最初の見開き右面の、句上以外は空白の半丁に、左面に掲載された表六句のみを単独で読み、紙をめくって、次の見開きで、裏一二句と名オ四句目までを見渡し、さらに紙をめくって、最後の見開きで、名オ五句目から挙句までを見渡すことになります。

芭蕉の採用した、この形式では、歌仙一巻の



『猿蓑』巻之五、第一歌仙の破の見開き
雲英末雄・佐藤勝明編『影印本　元禄版　猿蓑』（新典社）より転載

第一の見開きは序に、第二の見開きは破に、第三の見開きは急に、各々相当します。読者は、歌仙一巻の序破急をそれぞれ別の見開きで鑑賞することができるのです。

さて、歌仙一巻の構成を考えるには、同種類の句の配置を手掛かりにするのが有効です。筆者は、『猿蓑』巻之五の構成を調査して、同巻で最も重視されたのは、季の句、特に月の句・花の句の配置である、と思いましたので、本稿では月の句・花の句の配置を中心に述べて参ります。

二、『猿蓑』巻之五第一歌仙

『猿蓑』巻之五の第一歌仙「鳶の羽は」歌仙は、

去来

鳶の羽も刷(カヒツクロヒ)ぬはつしぐれ

を発句とする、去来・芭蕉・凡兆・史邦・破・急をそれぞれ四吟で、元禄三年十一月上旬の興行とされます。

イ、すべての面の最後の長句を月・花とした歌仙

この歌仙では、すべての面の最後の長句が月の句・花の句となっており、いわゆる定座が守られています。

なお、『猿蓑』所収四歌仙中、すべての面の最後の長句が月・花の句である歌仙は第一歌仙のみです。特に、名オの月の句は、第二歌仙以下の三歌仙すべてで十一句目を外しており、初ウの月の句が、四歌仙それぞれに八句目から十一句目までのうちの異なる位置で詠まれていることと併せて、『猿蓑』では月の句の位置を意識的に変化させている、と判断されます。

ちなみに、芭蕉出座の歌仙全一二六巻中、表の月を早めに詠むのが通例の秋発句の歌仙三一巻を除いた九五巻のうち、すべての面の最後の長句を月・花の句としている歌仙は一九巻に過ぎません。芭蕉は、この型の歌仙を威儀を正した歌仙として巻いていたと考えられます。

ロ、間に雑一句を挟んで夏と冬とが呼応する歌仙

俳諧では、夏の句は一巻を見渡しながら適当に詠まれている、というのが一般的認識で、事実、そう解釈すべき用例も多いのですが、そのような夏・冬の句の中に、夏の句と冬の句とを間に雑の句を一句または二句挟んで詠む付け方が見られます。連歌や初期俳諧にも作例があり、

芭蕉出座歌仙では全期にわたって見られる付け方です。この付け方は雑の句を挟んで夏から冬へあるいは冬から夏へ季節の転換が明確であり、一巻の構成上意味のある付け方で、筆者はこれを「夏と冬との呼応」と称しています。

『猿蓑』第一歌仙名残折表一句目から四句目は、

名オ　一　いちどきに二日の物も喰て置　凡兆
冬　二　雪げにさむき島の北風　史邦
　三　火ともしに暮れば登る峰の寺　去来
夏　四　ほと、ぎす皆鳴仕舞たり　芭蕉

です。史邦は、前句を、何らかの事態に備えて腹ごしらえをしておく意と解し、その人の居るのは、雪もよいの寒さ厳しい島で、北風が吹きつけ更に寒さを増している、と付けます。次いで去来は、日が暮れると、灯明をかかげに山頂の寺まで登って行く、と航海の目印にもなる常夜灯を灯すのを日課とする人を掲出します。それを受けて、芭蕉は、毎日登っているうちに季節が移り、もう時鳥の鋭い声も聞けなくなってしまった、と打越から大きく転じた、晩夏の句を付けて、夏と冬とを呼応させています。

この夏と冬との呼応には、雪・時鳥という連歌以来の代表的景物が用いられて、古典的風情を醸し出しています。

15頁下段に影印を示しましたが、掲出の四句は『猿蓑集』巻之五の二丁表、見開き左面最後に「雪」「ほと、ぎす」で始まる句が、去来の俤付の句を挟んで並び立っていて、夏と冬との呼応が一目瞭然です。

ハ、同一面に四季を詠み込んだ歌仙

ところで、第一歌仙裏一句目から六句目までは、

秋　ウ　一　かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　史邦
冬　二　はきごゝろよきめりやすの足袋　凡兆
　三　何事も無言の内はしづかなり　去来
　四　里見え初て午の貝ふく　芭蕉
夏　五　ほつれたる去年のねござのしたゝるく　凡兆
　六　芙蓉のはなのはら〳〵とちる　史邦

です。余技にいそしみ、舶来品の足袋をはく、悠々自適の数寄者から、観相の句を契機に、峰入の山伏の下山する様に転じ、それを山村の農民の昼時と見替え、小作百姓などの貧しい生活を趣向しています。裏六句目は前句との付合では農村の蓮田の景ですが、「芙蓉のはな」という高雅な表現で、次なる展開を誘っています。「芙蓉」は、白居易「長恨歌」中で玄宗が楊貴妃を回想する場面で詠まれ、『類船集』「芙蓉（フヨウ）」の付合語にも「美人の顔・玉殿・太液の池」が載っています。この六句目も、前句の「去年の」に懐旧の念を読み取り、このような表現となったのでしょう。

さて、ここにも、夏と冬との呼応が見られます。

乾裕幸氏は、『猿蓑』に載る二ヶ所の「足袋」について考察され、二句を冬の句とされています。また、五句目ですが、「ねござ」は伝統的季語の「簟（たかむしろ）」を俳諧化した語として夏の意を含んでいる、と筆者は考えます。続く六句目は、前述の通り「芙蓉」すなわち「蓮の花」という『連歌至宝抄』にも載る伝統的季語を用いた夏の句です。

このように考えると、

第一歌仙は裏一二句のうちに、秋―冬―雑―夏―雑―春―雑と四季を詠み込んでいます。さらに、前述の通り、この歌仙では名オが雑―冬―夏と続くので、版本のこの見開きは、春三句を挟んで、夏と冬との呼応が二組見渡せることにもなります。『猿蓑』所収歌仙中、一つの面に四季が詠み込まれているのは、この面と第三歌仙名オとの、二面だけです。

なお、夏と冬との呼応は、最も短い、間に雑一句を挟んで夏・冬各一句を詠む付けでも三句を要します。その上、二花三月すべてを春の花・秋の月とすると、春秋は少なくとも三句続けて詠まなければならないので、特に初折裏でのためか、『猿蓑』第一歌仙では、季の句が混雑します。その裏の月は春三句の中で詠まれ、秋三句は省略されています。

二、月雪花・時鳥・時雨の五景物を詠み込んだ歌仙

連歌以来の代表的景物、月雪花・時鳥と、芭蕉が生涯大切にした時雨とを合わせた五景物は、初期の芭蕉出座歌仙に頻出し、特に時鳥は夏と冬との呼応で多用されました。しかし、次第に、五景物すべてと夏と冬との呼応とを明瞭な形で含む歌仙は減少します。貞享以降では、

「つゝみかねて」歌仙（『冬の日』）、「笠寺や」歌仙（『千鳥掛』）、「何の木の」歌仙（勝延筆懐紙）、そして当「鳶の羽も」歌仙の四巻を数えるのみです。

しかし、この四巻は、奉納歌仙二巻と撰集掲載を前提に巻いたと推察される二巻であり、芭蕉が夏と冬との呼応とを、意識的に各巻に盛り込んだ、五景物すべてと判断してよい、と思います。

特に、当「鳶の羽も」歌仙では、序の見開き左面（版本一丁表）の発句で時雨を詠み、破の見開き左面（二丁表）に月・花・雪・時鳥をまとめて詠み込んでいます。

芭蕉がこの五景物を一巻に詠み込む趣向を意識的に行った、と筆者は考えます。

三、『猿蓑』巻之五第二歌仙

『猿蓑』巻之五の第二歌仙「市中は物のにほひや夏の月

市中は物のにほひや夏の月　凡兆

を発句とする、凡兆・芭蕉・去来の三吟で、元禄三年六月上・中旬の興行とされます。

イ、月・花の句を等間隔で詠んだ歌仙

第二歌仙は大胆に月の句・花の句を配置しており、芭蕉出座歌仙全一二六巻中の唯一例で、他に類を見ません。

発句が夏の月の句であるこの歌仙では、表の月・初折の花・裏の月・名オの月を、すべて七句間隔の長句で詠んでいます。名残の花の句は九句間隔ですが、これは、膝送りの座で、七句間隔の名ウ三句目の作者が、初折の花を詠んだ去来に当たるために変更したのでしょう。あるいは、句の花の位置は変えない、という意図でしょうか。ちなみに、『猿蓑』四歌仙すべてで第二歌仙の月・花の句の位置を確認すると、その配置の見事さに驚かされます。すなわち、名残の花の句を除く、四ヶ所の月・花の句はすべて、各半丁の三行目に位置し、その後に五句が続きます。なお、表六句は発句の前に二行分の空白があるので、発句の月の句が三行目に相当します。そして、第二の見開きでは、右面

に花の句、左面に月の句が配され、第三の見開きでは、右面に月の句、左面に花の句が配されているのです。

四、『猿蓑』巻之五第三歌仙

『猿蓑』巻之五の第三歌仙「灰汁桶の」歌仙は、

灰汁桶の雫やみけりきり〳〵す　凡兆

を発句とする、凡兆・芭蕉・野水・去来の四吟で、元禄三年八・九月の興行とされます。

イ、月の句を等間隔で詠んだ歌仙

第三歌仙は、三ヶ所の月を、表三句目・裏八句目・名オ七句目と、すべて一〇句間隔で詠んでいます。なお、花の句は月の句と連動せず、当歌仙の花の句は、裏十一句目・名ウ五句目と、ともに各折の最後の長句です。

月の句を等間隔で詠む形式は、芭蕉出座歌仙では、貞享年間から用例が見られます。貞享元年の「野ざらし紀行」の旅中、

①大垣で旧知の木因と巻いた「師の桜」歌仙（『元禄風韻』）

②名古屋の連衆と巻いた『冬の日』五歌仙中の第五歌仙「霜月や」歌仙、また、元禄二年の「奥の細道」の旅中、

③須賀川で旧知の等躬と巻いた「風流の」歌仙（『菊摺』）

④尾花沢で旧知の清風に再会後二度目の興行「おきふしの」歌仙（『続橋』）、

以上四歌仙で、すべての月の句を一〇句または九句の等間隔で巻いているのですが、以上はすべて、旧知の人々あるいは直前に歌仙を巻いて親しくなった人々との興行です。等間隔で月の句を詠むという趣向に堪える技量を持ち、かつ、その趣向を受け入れた人々との興行である、と言えましょう。

『猿蓑』巻之五第三歌仙は、『冬の日』の連衆の一人である野水を迎え、芭蕉と『猿蓑』の編者である凡兆・去来との四吟で巻いたものですから、この興行も、先の四歌仙と同様に考えることができるでしょう。

ところで、月の季ですが、貞享期の二歌仙はともに裏で他季の月を詠んでいますが、元禄期の三歌仙は三ヶ所すべてを秋の月としています。なお、『猿蓑』巻之五所収歌仙中、三ヶ所すべてが秋の月なのは、第三歌仙のみです。

上記五例は、芭蕉が新風を摸索して旅していた時期の歌

仙に見られ、人的構成に共通性があることから、芭蕉出座口、同一面に四季を詠み込んだ歌仙

歌仙全一二六巻中の五例と数は少ないのですが、芭蕉の意図的な趣向として、月が等間隔で詠まれた、と考えます。

さて、第三歌仙名残折の花の句・挙句は、

春名ウ　五　糸桜腹いつぱひに咲にけり
春　　六　春は三月曙のそら

です。この句の花については『去来抄』「故実」に記述があり、芭蕉は去来の考えを聞いた後、昔は百韻の四花のうち一句は桜でよかったから、と、ここに桜の句を詠むことを許したそうです。変化型歌仙にふさわしい花の句です。

次の挙句は、名オ七句目の月の句から一〇句間隔に当たりますが、「三月」と詠んでいます。三ヶ所の月の句（三月）を等間隔で詠んだ後、等間隔で、月次の「三月」、謂わば文字の月を出して、巻き納めているのです。この名残折の花と挙句によって、第三歌仙は等間隔で月の句を詠んだ前例四巻より一段と趣向の際立つ歌仙となりました。

第一歌仙裏同様、当第三歌仙名オにも四季が詠み込まれています。名オは、雑の句を挟んで、春―冬―秋―夏と四季の移ろいに逆行しながら、名オ一二句のうちに四季を詠み込んでいるのです。

なお、『猿蓑』版本では名オ四句目までと五句目以降とは別の見開きに掲載されていますが、この歌仙の場合、第二の見開き（裏一句目から名オ四句目）でも、春―夏―秋―春―冬と四季が見渡せるようになっています。

去来
野水

五、『猿蓑』巻之五第四歌仙

『猿蓑』巻之五の第四歌仙「梅若菜」歌仙は、

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉

の巻は、元禄四年春、乙州が江戸を発句とする大寄せです。

前書が示すように、この座で巻き始められたのですが、に赴くのに際しての送別の巻き方から、四回に分けて巻かれた、『影印猿蓑』の句上の書と推察されます。発句から裏八句目までが芭蕉・乙州・珍

碩・素男・智月による第一回、裏九句目から名残折表二句目までが凡兆・乙州・去来・正秀による第二回で、この二〇句を携えて、乙州は江戸に赴いたようです。

芭蕉は、この二〇句を伊賀上野に持参し、名オ三句目から名ウ二句目までを半残・土芳・園風・猿雖に巻き継がせ、最後の四句は在京の嵐蘭・史邦・野水・羽紅に一句ずつ付けさせて、満尾しています。これが、『猿蓑』所収「梅若菜」歌仙です。

一方、乙州は、名オ三句目以降を探志・其角・路通など江戸在住の一〇俳人と巻き継いで満尾しており、この「梅若菜」歌仙は、路通編『俳諧勧進牒』に載っています。

イ、初折裏九句目月・十一句目花の組合せの歌仙

第四歌仙の月・花の句は、

表五句目月・
裏九句目月・
名オ十二句目夏の月・　裏十一句目花
名ウ五句目花

です。

筆者の調査によれば、延宝期以前の俳書より最多の月の位置は定まっているとは言えず、各俳書により位置は異なりますが、・十一句目花の組合せです。

芭蕉出座歌仙では、裏の月の位置が前進する一般的な傾向があります。しかし、裏九句目月・十一句目で切れ目無く用いられている唯一の組合せで、貞享期以降では、やや格式張った興行に用いられています。

貞享期以降の芭蕉出座歌仙で、裏九句目に月・十一句目に花を詠んだ歌仙は二一巻ありますが、その中で、裏十句目を雑の句として、この位置で季移りしていないのは七巻のみです。そのうちの四巻は『猿蓑』『炭俵』『続猿蓑』の巻末歌仙と『猿蓑』の巻末歌仙候補(『俳諧勧進牒』所収歌仙)で、『冬の日』巻頭歌仙も同様です。貞享期以降、広く蕉風俳書として示す場合には、芭蕉はこの組合せを、季移りせずに巻いているのです。

ロ、夏と冬との呼応に意を用いた歌仙

「梅若菜」歌仙には、二十一句目、すなわち名オ三句目以降が異なる二種類の歌仙、『猿蓑』所収歌仙と『俳諧勧

進牒』所収歌仙があります。芭蕉が前者を選んだ理由はいろいろ考えられるでしょうが、筆者は、両者の夏・冬の句の扱いの違いも一因ではないか、と思います。

すなわち、『俳諧勧進牒』所収歌仙の二十一句目以降には明確な夏や冬の句は無く、季の句は、名オ十一句目月の句から始まる秋三句と匂の花・挙句の春二句のみで、最小の季の句しか詠み込まれていません。

一方、『猿蓑』所収歌仙の二十一句目以降には秋の句は無く、夏―雑（恋）―冬―雑―夏―雑―冬―春と繰り返し夏と冬が表れます。しかも、そこで用いられている季語は、名オ三句目「汗ぬぐひ」、八句目「大年の夜」、十一句目「夏・破扇」、十二句目「醤油ねさせて」、名ウ四句目「うす雪」であり、巻頭歌仙の夏冬の季語に伝統的な季語が多かったのと対照的に、巻末歌仙では庶民生活に密着した季語が目立ちます。

六、『猿蓑』巻之五の構成

『猿蓑』巻之五所収の四歌仙は、月の句・花の句の位置が周到に構成されており、さらに、俳書掲載に際しては、巻頭歌仙に折り目正しい歌仙を掲げ、第二・第三歌仙には変化型の歌仙を配し、巻末歌仙に芭蕉が晴の興行にしばしば用いる型の歌仙を置いています。この四歌仙の配列は、序は「しとやか」に、破は「さめき句」をして、急は「逸興ある」ようにする、という連歌・俳諧の一巻構成意識を、そのまま俳書の配列に採り入れたものと言えましょう。

補足：紙幅の関係で詳述しなかった根拠などは、大城『芭蕉の俳諧構成意識―其角・蕪村との比較を交えて―』（二〇一六、新典社）に詳しい。関心のある方はご参照下さい。

※新典社より『影印本　元禄版　猿蓑』の写真掲載について許可をいただいた。記して御礼申し上げます。

（早稲田大学大学院博士後期課程修了　日本連句協会会員）

俳句の産み出す詩語

金子兜太

「俳句」、この五七五文字の最短定型詩形から生れる「詩語」を、「事語」と「季語」の二通りに分けて大事にしている。「俳句」の生む詩語は「季語」なり、と限定して受取っている人が多いが、それは間違いであり、あまりにも狭いということ。自然との接触のなかから産み出される詩語である「季語」のほかに、人間社会の現実から生み出される詩語が、俳句にはたくさんあって、それを「事語」と、小生は呼ぶことにしているのである。典型的な事語を挙げれば、渡辺白泉の、

　戦争が廊下の奥に立つてゐた

の「戦争」がある。昭和十四年（一九三九年）の作で、国家総動員法が施行された年の作。「戦争」の現実感（リアリティ）がひしひしと身心に浸透していたときで、この言葉は、まさに生きている詩語なのだ。

　自然と季語の深い結び付きについては、僭越ながら自句で説明してみたい。次の句である。

　おおかみに螢が一つ付いていた　　兜太

「おおかみ（狼）」も「螢」も自然界の生きもので、それぞれに「季語」である。したがって、二つの生きものを結びつけたとき（それも無造作に結び付けたとき）、そこには有り体の「自然」が展開する。色濃く、何か獣の臭い、生きものどうしの呼吸音まで感じられて展ける。「おおかみ」も「螢」も、その螢が狼にとまっているとき、季語の重奏が感じられてくる、とも言える。小生はその情景のなかに、その土台に、「土」――生きものの存在の土――を感じていて、やがてそれは小生の育った山国秩父の土に違いないと思ったのである。それを「産土（うぶすな）」と言う。自然から得た詩語が重奏して、やがて「産土（うぶすな）」を体感させてくれたのだ。

そして痛感することは、白泉の句の「戦争」は「社会」の現実から汲み上げ掴みとられた「事語」、小生の「おおかみ」も「螢」も「産土」の「自然」の体感のなかから掴みとられた「季語」の重なり。ともに五七調最短定型の掌握した、いや産み出した「詩語」。基本に「アニミズム」の存在を見落とすことはできない。

（『十七音の青春２０１６』角川書店　より転載）

（俳人）

鼎談

金子兜太俳句の連句的鑑賞

一般社団法人日本連句協会前会長　臼杵　游児
常任理事　大久保風子
常任理事　吉田　憲助
（酔山）

日本の俳句界を不倒の巨木として牽引されておられる97歳の金子兜太氏は前衛俳句の旗手とも称され活躍されてきました。

一方難解な句の作り手として位置づけられてきたのも事実ではないかと思われます。

そこで連句的な鑑賞を試みることにより兜太俳句の別の映像が鮮明に浮き上がってくるのではないか、連句の本質、付けと転じを指標として味わっていけば異なった展開になるのではと考え、連句人三人による鼎談形式で読み解いて

みました。

世に兜太論、兜太俳句論は既に数え切れないほど出版されています。それはそれにまかせ、我々は連句人として連句の目で兜太氏の名句を論じてみました。参考文献は『金子兜太自選自解99句』のみ。

今まで我々が難解と感じていたものの中にたくさんの発見があり、また多く、兜太俳句の鑑賞がこんなにも面白く、その映像を追いながら辞書を、なんとなく繰っていたときの感銘を与えてくれたのが新たな驚きでした。

吉田：紙面の都合上、先生の敬称を略させて頂くことにお許しを願いまして、私は兜太主宰の「海程」の会員でもありますので口火をきらせていただきます。

兜太長崎時代の句から始めましょう。

彎曲し火傷し
爆心地の
マラソン

【自解】神戸から長崎に移って三年居た。被爆から十三年経っていたが、爆心部の山里地区一帯はいまだに黒焦げの感じで、天主堂は被爆時のまま崩壊してそこにあった。黒焦げの大地に人は逞しく暮しをはじめてはいたのだが、痛ましかった。私のなかに映像が動き出す。それは周辺の峠を越えてマラソンの一団が走って来たのだが、爆心部に入ったとたん、たちまち軀が歪み、焼けただれて、崩れてしまった。そういう映像。その映像を追いながら辞書を、なんとなく繰っていたとき、「彎曲」の語に出会い、この映像がことばになった次第。

（『金子兜太句集』）

吉田：ここで、「彎曲」という言葉の発見によりこの句は形になり得たと兜太は語っています。

まず「爆心地」という句があり、それに「火傷」という句が前へ付き更に前へ「彎曲」という句が付いた。そして後ろには爆心地で開かれている「マラソン」という句が大きく転じて付けられています。「爆心地」という句を挟んで前と後ろでは全く別の世界になっています。

戦争から平和へと言ったところでしょうか。

大久保：『自選自解99句』では毛筆の自書で俳句を三行に分かち書きにしていますが、その一行が一句となり、

その「取り合わせ」が二句一章どころか三句一章で、連句の「三句のわたり」の鑑賞ができますね。

吉田：「爆心地」が中心のテーマになっている。爆心地の息吹、「曲」は前句付けのように付いていますね。「彎曲」という前向きなたくましさを感じて、「マラソン」ものを生きている人々の生き生きとした様を表現した。

大久保：被爆にもめげずに生きる人々の逞しさを長距離ランナーにオーバーラップさせる付け筋ですね。

臼杵：初めて読んだ時は広島の句だと思った。兜太は「戦争」で勿論ショックを受けているが、戦後の日本はまだこんな状態かと長崎の転勤であらためてショックを受けたのだと思う。そこで「彎曲」という強い言葉を付けたんだね。「マラソン」のイメージはたいへん面白い。

大久保：普通は「爆心地」には「悲惨」さが付きますね。臼杵：希望を目指して走っているという気持ちも入っていて、この句は兜太の日銀時代の俳句では一番面白い句だと思う。好きな句です。

大久保：たまたまマラソンする人間を目にしたのでしょうが、困難を乗り越えていく人間を訴えたい、と鑑賞できますね。

吉田：自解で「映像が動きだす」と言っていますが、これは「創作」ということですね。兜太俳句は写生ではなく物語を感じます。

臼杵：そこが連句的だととらえられますね。常識を離れた発思で、「マラソン」は衝撃的に転じた付けです。付かないのではないかと思われますが、ちゃんと「爆心地」に良く付いているんですね。

大久保：サンズイのある「湾」は「入り江」のことだから「湾曲」より「彎曲」の字がいいですね。

臼杵：「彎」の字の方が力強いね、さらに「火傷し」も「やけどし」ではなく「彎曲し」と音読み同士がいいね。その方が悲惨に倒れ込む姿勢を強く表すようだ。

吉田：逞しく走り続けると解釈したいし、兜太のこうあって欲しいという願いや意志も詠み込まれているのではないでしょうか。

大久保：反戦を含んで吐露した句として語られる句ですね。

吉田：兜太代表句となっていますね。

梅咲いて
庭中に
青鮫が来ている

【自解】自家の庭に白梅紅梅が数本あって、白梅が咲くと春と知る。今年の春も白梅が教えてくれた。戸を開けると白梅。気付くと庭は海底のような青い空気に包まれていた。春が来たな、いのち満つ、と思ったとき、海の生き物でいちばん好きな鮫、中でも精悍な青鮫が、庭のあちこちに泳いでいたのである。この句はその想像の景が訪れたとき咄嗟にできた。春到来を大いに喜んでいる作。（『遊牧集』）

吉田：兜太といえば「青鮫の人」の別称があるくらいの代表句ですね。

大久保：句の前半は誰にでも理解できます。そこに「青鮫」なんて凡人は思いつきませんね。兜太が尊敬する詩人や作家の作品に「鮫」があって、頭の隅に持っていたのではないかという解釈論を見たことがあります。潜在意識に「鮫」があったとしても、庭に「鮫」を付けたことに敬服しますね。

臼杵：これは兜太の難解な句ですね。初めは何なのだと反発も覚えましたよ。ところが色々なことを考えるとなるほどなと思えてくるんですね。この句の根底には兜太の郷里を思う理念があると思います。

「郷里の人たちの生活はまるで深海の底を魚が泳いでいるようだった」という思いを他の本で見たことがあります。私たちサラリーマンのささやかな家の庭の梅からは、深海の青を感じ取ることは出来ないけれども兜太の持つ望郷の念を持ってすれば、梅咲く初春は深海なんだろうな。

吉田：梅の蕾や芽の出始めの青さが深海に見える。それを想像した後に、どんな魚をイメージしようか、といったときに「兜太は魚と言ったら鮫」だ、といってるんですね。

臼杵：「鮫」の連想は人によってちがいますね。因幡の白兎が島を渡るのに並ばせた鮫とか、蒲鉾の材料だとか、中華料理のフカヒレスープの「フカ」と同じに思ったり。想像逞しくすると、兜太はトラック島で

見たことがあるのかも知れない。いずれにしても兜太の原体験からすれば「付け筋はあり」なんだね。

大久保：ジョーズのように怖いイメージもあります。大きく転じた付句を思いついてもですか？　と聞かれてくれませんね。付け筋は何太のこの句を知ってから却下されそう。ある俳人が兜太て梅林を深海と感じて見えてきたそうです。ら観梅に行くと、追体験とし木々の間を動く観光客が魚に益々兜太を尊敬して俳句の勉らって、連句の構造を伝えたいですね。

吉田：「梅」から「鮫」への転じで来ますね。

大久保：「春の勢いや驚き、喜び」も詠み込んだのですね。

臼杵：「梅咲いて鮫がきている」とリズムだね。この取り合わせは面白いを越えていま す。大変なものです。

人体冷えて
東北
白い花盛り

【自解】五月の始め、津軽での作。リンゴもさくらも一緒に咲いていた。まさに「白い花盛り」。しかし空気は冷え冷えとしていて、農家の人たちは頬被りをしていた。その冷えた体で農作業ははじめられている。「人体」ということばを遣ったのは、津軽そして東北地方の農家の御苦労を込めたいため。この句をいま思うと、今次「東日本大震災」からの復興に全力を尽くしておられる方たちの御苦労が思えてならない。

（『蜿蜒』）

臼杵：「白」に「冷え」と「東北」がついている。「冷え」と「東北」と飾りを付けずにズバッと言っている。「白」が「冷え」を強調している。花盛りで救いが出てくる。元気が出る。

吉田：兜太の句には最初はどこか悲惨な景があるが最後に明るい救いがあるといえますね。

大久保：北国は一気に花が咲きますね。私は鳥海山をバッ

クに梨畑の花盛りが白い海のように見える故郷の景色を思い出して心が躍ります。駅に到着した電車の扉が開いた瞬間に「冷えた東北」を感じるのです。

臼杵：リンゴや梨など盛りに咲く花は白が多いね。「東北」を真ん中にどんと置いているのがいいね。普通は「東北」とはいわない。普通は「みちのく」といってしまう。私は「東北」という詠み方は残念ながら絶対出来ません。

大久保：「人体」という語彙は客観視した言い方です。景の句だけなら「冷え冷えとみちのく白き花盛り」で終わっちゃう。「人体」があまりにもスバリと指摘した言葉なんだね。いかにも人間が冷えきっていて「東北が寒いんだよ」という感じがでている。「冴え返る」や「冷え冷えと」ではだめなんだよ。「人体冷えて」で強く表される。

吉田：連句的な転じ方という観点では、「人体冷えて東北」までがホッペがピリピリするぐらいもの凄い寒さを詠んでいて、次の「白い花盛り」で一気にパッと暖かさを詠んでいて素晴らしい。

大久保：華々しさ力強さを歌い上げていますね。連句人も自在な心構えを持ち続けていないと「花の座」にこの兜太の「東北の白い花盛り」を持ってくるのに躊躇しますね。

臼杵：いやいや兜太の「花の座」この句は、連句の本来の「花の座」の主旨をもう一度確認するのにちょうどいいよ。「花の座」の主旨は桜に代表されるけれども、花全体、美しいモノ全体を表すものなんです。私は明日にでもこの兜太句でいう花盛りを使って花の座を詠もうと思っていますよ（笑）。

大久保：「人体冷えて」と字余りですが、気にしなくていいのでしょうか。

吉田：俳句は短詩形であると日頃から仰ってます。五七五でなければならないというのではなく、自分の言いたいことをいちばん表せるかたちで言おうと。

臼杵：兜太の句は基本的なリズムは外れていないですね。大きな声を出して読むとちゃんとリズムがあります

ね。素直に自分の気持ちを詠んでいるから、自然体で受け入れられるんですね。

おおかみに
螢が一つ
付いていた

【自解】七十代後半あたりから、生き物の存在の基本は「土」なり、と身にしみて承知するようになって、幼少年期をそこで育った山国秩父を「産土（うぶすな）」と思い定めてきいた。そこにはニホンオオカミがたくさんいた。明治の半ば頃に絶滅したと伝えられてはいるが、今も生きていると確信している人もいて、私も産土を思うとき、かならず狼が現れてくる。群のこともあり、個のこともある。個のとき、よく見ると螢が一つ付いていて、瞬いていた。山気澄み、大地静まるなか、狼と螢、「いのち」の原始さながらにじつに静かに立つ。嵐山光三郎さんがこの句を読んで、「あんたの遺句だ」と言ったのを覚えている。

（『東国抄』）

大久保：うるさい俳人は一句の中に夏と冬の季語が入ってしまってまずい…といいそうですね。

臼杵：連句的には成り立っていますよ。兜太に言わせると「季語」「事語」がある。

「事語」とは選挙・戦争・大恐慌・事件など。「狼」と「螢」は季語と季語であり、それをくっつけるとありようの自然＝あるがままの自然になる。その土台は「土」である。その土がすなわち「産土」である。人は皆それぞれに原郷をもっている。「狼」に「螢」が付いたというのは正にその原郷に即した句だ、といっている。季重なりなど関係ない。要するに自然の季語だ、ということになる。目の付け所は螢にも狼にも行っている。そして、狼は秩父と結びついている。兜太の原風景（「青い海底」の秩父）と結びついている。秩父の三峯神社の狛犬は狼ですよ。最後まで居たのは明治時代で、絶えたのは秩父。螢も秩父の原風景であり、全然唐突ではなく、人間のおおもとの状況を詠んでいると解釈できる。

吉田：「狼」では一連の句があります。「狼」とは怖いもの、そこに「螢」が付いてホッとしますね。兜太の句は最初いい事象を置かず、出始めに厳しい事を言

っておいて最後にホッとさせるんですね。

大久保：見習いたい句作の方法ですね。

吉田：「猪が来て空気を食べる春の峠」の句も同様です。

朝はじまる
海へ突込む
鷗の死

【自解】神戸に移って三年経って、俳句専念をこれからの人生と決めた。そのとき、神戸港の埠頭でつくった句。鷗は魚をとるため海へ突っ込む。その景を見ていて、トラック島で、零戦が撃墜されて海に突っ込む景を直ちに想起した。鷗には生きる営みだが、零戦搭乗者には死だ。自分は〈生きる搭乗者〉でありたい。〈死んで生きる〉でありたい。それが「朝はじまる」。その思いを噛みしめていたのである。

（『金子兜太句集』）

臼杵：日銀神戸支店時代の句ですね。経済の発展や物的繁栄一辺倒の上司にすごく反発していたらしい。朝鮮戦争がおきたとき、「これで日本は救われる」といった上司にものすごく怒っていて、リーダーになどなりたくないと言っていた時代だね。

吉田：軍隊経験が人生観を変えたのかも知れないですね。

「鷗の死」という悲壮感のある語への転じ方が一般人には思いつかないですね。

臼杵：連句には一巻の半分以上に無季がありますから、連句に違和感なく共感できるね。

吉田：季語はそれなりに昔からのイメージがあって強い表現力を持っているが、季語を使わなくても俳句は詠めますね。これが兜太の言う詩語ですね。

大久保：「鷗の死」は読み切れないほど訴えるものを持っていますね。

吉田：「朝」だからいいのですね。朝でもう一句あります。

銀行員ら
朝より螢光す
烏賊のごとく

【自解】勤め先の神戸支店の朝の景。その前日、家族で尾道の水族館にゆき、ホタルイカを見てきた。その景に似た支店の朝のはじまりだった。当時は蛍光灯が一人一人の机にあって、

出勤すると自分の席の灯を点す。店内は暗い。そこに点る灯は、水族館のホタルイカそっくりだったのだ。この景を銀行員への皮肉、批評と受け取る人が多く、社会性俳句の見本として読まれて評判になった次第。（『金子兜太句集』）

臼杵：昭和28年の句ですか。僕は26年に就職して28年に大阪支店に転勤しましたよ。

吉田：今は働き方が問題になる時代になりましたが、昔は早朝から働く人は出世したんですよ。個人商店でも社長は一番早く出社して作業場や室内の灯をつけて回る。これが当たり前でした。

大久保：「ら」に突き放した気分がある。自分は違うと言って皮肉が込められているのがわかります。

臼杵：割り切って働く立場に立っているんだね。はじめは「烏賊の如くに銀行員が働く」は何のことか？　と分からなかったけれども、自解で「水族館で螢烏賊を見た」とあるから、螢烏賊から螢光灯へとイメージが湧いたと分かった。海の底にうごめくホタルイカが大きな事務所で働く銀行員にみえる。

吉田：「銀行員」から「螢烏賊」に転じている。この転じが普通でなく面白い。

大久保：真似をしたくてもできませんね。

臼杵：人生が違うんだから。言葉だけ真似してもおかしいことになる。

酒止めようか
どの本能と
遊ぼうか

【自解】六十代に入って、にわかに歯槽膿漏にやられ、結局総入歯になった。痛風四回、ぎっくり腰、風邪をひきやすくなる、等々。そこで医師と相談して大好きな牛、豚肉を止め、魚、とき鶏とす。そして酒をやめる（タバコは四十九歳のとき止めていた）。そのときに思わずできたもので、「本能」をあるていど自由にしておかないと長つづきしないぞ、と思っていたからである。その、あるていど本能を自由に、がよかった。徒らな禁欲は長つづきしない。余裕のある禁欲を。（『両神』）

吉田：連句では表6句には。あまり出ない句ですね。あばれどころの名残オモテあたり。

臼杵：自分の欲の中のこと。酒を飲むことは、欲望の一つ

で生き物感覚でそれは本能だとみ
煙草は進駐軍があきれるほどのヘ
ったらしい。何もかもやめる聖人
太は自然のありかた、本能や欲望
んですね。俳句鑑賞としての切れ
して、この兜太の句はいいし、好
エンジョイする。人生いろいろあ
る率直な彼の気持ちが出ている。

吉田：兜太は前向きですね。最初は暗い話であってもくよ
くよしないで明るくなってますね
きの秘訣なんでしょうか。

臼杵：戦争でトラック島での苦労、サラリーマン時代の苦
労、俳人協会との喧嘩などさまざまな苦労があって
もそれを受け止めて、自然に即し
られる人生だと感銘しますね。

★兜太の恋句の鑑賞

吉田：妻を詠んだのが次の句ですね。

1．朝日煙る手中の蚕妻に示す
2．独楽廻る青葉の地上妻は産みに
3．雪山の向うの夜火事母なき妻
4．唯今二一五〇羽の白鳥と妻居り
5．病いに耐えて妻の眼澄みて蔓うめもどき
6．合歓の花君と別れてうろつくよ

臼杵：「蚕」の句は新婚時代ですね。秩父ですねこれも。

吉田：「蔓うめもどき」は奥さんの病の時、「合歓の花」
からでしょうね。

臼杵：兜太は連句人ですから奥さんを句材に一生懸命恋を詠
いでしょう。だからフィクションの恋句はな
ったもので、これはこれでいいですね。

吉田：しかし、奥さんを詠んだものではないだろうと思わ
れるものもありますね。

1．谷に鯉もみ合う夜の歓喜かな
2．馬遠し藻で陰洗う幼な妻
3．抱けば熟れいて夭夭の桃肩に鼎

いずれも取り合わせがユニークです。兜太の句は従
来の俳句的鑑賞としては難解であったかも知れませ
ん。情景が次々と展開していくのが連句的ですね。

大久保：連句もポエムが次々と生まれて止まらない。

吉田：兜太の若い時の句にはパワーを感じます。

臼杵：常識的でない面白さが溢れていればすが、それがつくづく連句的であると鑑賞しました。難解さもありま

★雑の句は何句あるか

この度の鼎談の資料とした『金子兜太自選自解99句』のあとがきによれば「百では終りになる」「少しは余裕を残しておくのがよい」とのことで99にしたとありました。

この99句のうち、大久保が勘定したところでは無季俳句は35句ありました。

鼎談に当たって兜太の99句をひとつひとつ丁寧に読み込みました。各々が感銘を受けた句を持ちより、集まった場でまた何度も音読して鑑賞。それぞれの意見を述べ合いました。

兜太俳句を語る言葉の中に「造型俳句」というのがあります。安易な考え方になるかもしれませんが「造型」は連句に通じるものがあると思えます。対象がそれを描写・表現するのではなく「創る自分」がいて創造し表現を行う。連句の付けは打越と前句で創られた世界から転じて別の世界を創ります。そこには「創る自分」がいて新しい世界、情景を表現していきます。そのとき目の前に直接の対象物を必要としません。

前衛、難解と言われてきた兜太の代表作を深く読むほどに連句が見えてくる。兜太の句には新しい連句への誘発にあふれている。鼎談を終えた三人の一致した思いとなりました。

宇田零雨のこと

東浦佳子

私が零雨にはじめて会ったのは、一九六三年の頃であった。大学院の学生であった私が、学部の卒業論文が芭蕉の連句だと申し上げると、中国文学の奥野信太郎教授が、いい先生がいらっしゃるからと、宇田零雨の「草茎」誌をくださった。連句は勉強したいが俳句の実作はとてもと、思い上がったことを考えていた私はぐずぐずと返事もしないでいたが、教授は毎月雑誌をくださった。これではと一念発起して宇田零雨に連絡を取り、草茎婦人句会というのに長女を連れて出席したのがこの年である。以後、子連れの会合出席は無理で、零雨とは修士論文の一部を草茎誌に載せていただく他、雑誌を購読するだけの縁となった。以後長男も生まれ、地方へ転勤した夫に従ったりで、相変わらずの状態であった。そして、一九八〇年ごろ、夫の東京転勤で千葉県に住むことになり、やっと草茎社の連句会に出席できるようになった。

争々たるメンバーの連句会では、毎月出席しても一句も採られない時期が続き、一句採られたときの嬉しさはたとえようもなかった。

連句会は十数名の連衆の集まる組が二つあり、零雨はその二組を捌いていた。連衆の句を執筆が清書し、零雨に治定を請うたのである。零雨は治定句についても落選句についても何も云わないので、私は自分の句を治定句と比べてみて、落選のわけを自分で探すしかなかった。

そうこうしているうちに、草茎五十周年を記念して、零雨の著書「芭蕉語彙」の手伝いをすることになり、私は校訂者となった。

「芭蕉語彙」は、零雨の前書きによると、近松語彙や元禄文学事典などが出版されたのに芭蕉が洩れていることを残念がり、芭蕉の語彙の整理を藤井紫影師に申し出られて着手されたものとある。芭蕉のすべての言葉をアイウエオ

順に並べ、発句・付句・句評・紀行文章・書翰・遺語に分類し、簡単な解説をつけたもので、三段組み二百ページに及ぶものである。原稿はほぼ完成したものが戦災で灰燼に帰し、戦後あらためて作り直し、慶應義塾に提出されて昭和三十五年に博士号〔旧制〕を得られたと聞く。それが一九八四年に上梓された。

ただ、戦後の芭蕉研究の発展は目覚しく、それらの成果を一九八四年の段階では十分に取り入れられなかったため、芭蕉語彙改訂版の上梓を零雨は考えていたが、逝去後の平成八年に子息の晃氏によって上梓された。その間、私は改訂版校訂の仕事に携わっていた。

その間の思い出を一つ。或る時、の芭蕉の、落梧と言う人に当てた書翰が紹介され、芭蕉語彙にも取り入れることになった。

「三越路之風流佳人もあれかしと
と言う箇所で、「佳人」と言う項目がなくなった。佳人の訳は辞書による

〔広辞苑〕

美しい女

〔漢字源〕

1美しい女
2妻が夫をさしていうことば

となっていて、どうもに「この訳はいかがいと、言下に

「心のきれいな人」

と返事が返ってきて、の中で零雨は、芭蕉が福井の等栽だと言ったな人であったようでいておくのほそ道の中が、芭蕉の言う意味も零雨のいうもあまりの名訳に言葉もなく、零雨のであろうと思われるの面目躍如たるものがあるが、成る程俳諧をする場合には、

「あ」と思った。おくのほそ道の話好きだったのは仙台の画工加衛門やことがある。何れも俗念のない風雅る。芭蕉はまた、尾花沢の清風につで

れども志いやしからず
これらの事も頭にあって心のきれいうと推察する。辞書からみれば、意

かれは富めるものなといっている。零雨は

心がきれいでないといけないのだとつくづく思ったし、そうありたいものと願っている。

また、零雨が亡くなって後、書棚の整理に宇田家へ伺った時、柳行李一杯の文書が見つかった。文書は昭和十年前後の新聞紙に包まれ、少ないものは二百字詰め零雨専用の原稿用紙一・二枚、多いものは数十枚を越えるもので、零雨の手書き文字が殆どであった。慌しく新聞紙の表に書かれている書名だけを写して帰った。調べた結果、それらは芭蕉七部集の江戸時代の註釈・解説書の蕉語彙改訂版の仕事が終わって一段落した頃、あらためてこれらの文書を調べてみた。

数十に及ぶ文書の殆どは明治大正期に出版されているものであったが、どうしてもどういう書物かわからないものが一つあった。「翼異考」というもので、二・三の研究者に聞いても解らないということであった。内容は芭蕉七部集の句に就いてのもので「七部集大鏡」の一本の頭注部分であることが判明した。頭注には翼異考という書名はないが内容は合致したが、活字になっておらず、七部集大鏡の頭注部分も傷んで読みにくくなっており、その写しは珍しいものであり何とか埋もれさせたくないと考えていたが、それが早稲田大学の雲英末雄教授のお力添えで早稲田大学の図書館に入れて頂くことができて一安心した。同図書館へは大量の他の零雨手書きの写しがどうしてあるのか、零雨の亡くなってしまった今となっては零雨に聞くことも出来ない。勿論七部集大鏡の写しも有り、大部のものであった。これだけのものを写すというのはどれだけの労力であったかと思う。

零雨に聞けぬ以上想像するしかないが、昭和十年ごろ「古版俳諧七部集」と言う本が刊行されている。これは芭蕉七部集のおのおのを、当時の版本を影印で印刷し、その後に、読み下したものを近代の活字に翻刻したものである。読者は刊行時に近い姿を見ることができるし、読みやすい近代の活字の恩恵によくすることも出来る貴重な本である。七部集七冊のうち殆どが零雨の手になっている。

この事から考えると、大量の写しはこれらの本を作るためのものであったのではないかと考える。江戸の文字を読み解くのに江戸時代の研究書を参考にし、遺漏なきようにされたのではないか。そのために大量の本を写されたのではないか。大正の活字本あろう。間違いないようにするために明治、そして私が零雨の晩年しか知らないのが残念で、気鋭の学者、実作者であった零雨の事を知りたかったと思う。その頃の零雨に会っていれば、私は随分叱られていたことであろう。

「芭蕉語彙」はこのようにして成ったが、零雨はその蔵書を全部戦災で焼いてしまったため、その後は、学者として立つ道を諦め、俳句・連句の実作者に徹したと聞く。

（くさくき同人・日本連句協会会員・協会監事）

平成二十八年の連句界

和田忠勝

平成二十八年という年は、全体的には普通の年であった。勿論少し詳細に眺めれば、緊迫した世界情勢をはじめ、日本銀行は金利マイナス政策の発表をしたり、米国で初めてアインシュタインの予測したという発表があったり、北海道新幹線開通、ニホニウム、参院選与党大勝、ポケモンGO発売、都知事交代、天皇陛下生前退位のご意向表明等・・・連句の材料に事欠かない数多の出来事が数え上げられることである。

そういった中で、連句界は法人化した年であった。

先ず年次総会は、仙台市で開催された。これは二十五年目を迎えた訳である。法人化に続いて、全ての機会を捉えて新しさやアトラクティブな取り組みを軌道に乗せたいという新協会の考えがバックに存在していたからであり、法人化構想を発表し、生まれ変わることを提案した場所であった。そして一般社団法人日本連句協会としての、いよいよ実質的な意味の「新」を打ち出して行く嚆矢としての時期に当たったのである。東北も五年前の大打撃から本格的に復興に踏み出したところであった。大阪は旧連句協会の時代の最後の年次総会を東京での年次総会を迎えた次の、いよいよ実質的な意味の「新」を打ち出して行く嚆矢としての時期に当たったのである。東北も五年前の大打撃から本格的に復興に踏み出したところであった。傷跡が見えなくなるまでには至ってないものの、とにかく復興の気運が盛り上がった処であった。その力を貰いながら、寄り添って連句の隆盛に結びつけたいというのが関係者一同の願いであった。

そして、具体的な提案として、二十年来の会費値上げ案を提起した。これは法人化の結果として、より活性化された組織に改組すべく一年間検討した結果として、協会の

財政体質を健全なものにすることが、全ての問題解決の前提であることが認識されたことにあった。総会までの間、各所で真剣な討議が重ねられたが、大多数の会員の理解と賛意を得ることが出来、総会会場では反対意見なしの大多数賛成で可決されたのである。（但し、総会欠席者の委任状に、反対意見が四十一票有った。）

こうして、懸案の会費値上げが決まり、連句興隆の中心にある日本連句協会の貢献が注目されるところである。

クリアすべき問題は多々あるが、全て能書きでは無く具体的に結果を出さなければならないものである。協会員の高齢化や退会者の続出、連句と遠い若年層へのアプローチ、連句に興味のない地域の取組み、協会員の捌者養成、ウエップ人口への呼びかけ、国語教科書の連句取上げ、視覚化・動画化（YouTube への投稿）等々に着実に取組み、具体的成果を上げることこそ、遠回りしないための道である。

実際的には、個別の活動状況は連句協会を中心としながら連句の普及や連句文芸の興隆に寄与して行く訳である。その個別内容は別紙「主要連句行事一覧表」の通りである。

そしてそれらの記録と出版関係の資料は、左に記す通りである。但し完全にプライベートなものと、行事で紹介したものの報告は、割愛した。

○「都心連句会・湘南吟社二〇一五年連句作品集」百韻、五十韻、世吉を含む全百三十一巻。うち六十巻がかごしま国民文化祭への応募作品。

○「第十四回全国高校生付け句コンクール入賞作品」一万九千二百十句。豊田市文化振興財団刊。

○「国民文化祭かごしま二〇一五文芸祭『連句』大会作品集」三十一巻及びワークショップ作品四巻。

○「平成二八年丙申年歳旦帳」愛知県桃雅会刊。会員と会友の歳旦三つ物他を収録。

○「城沼」第十六号、館林連句会刊。

○「連句集・星の林」第九集　福井県武生連句会刊。

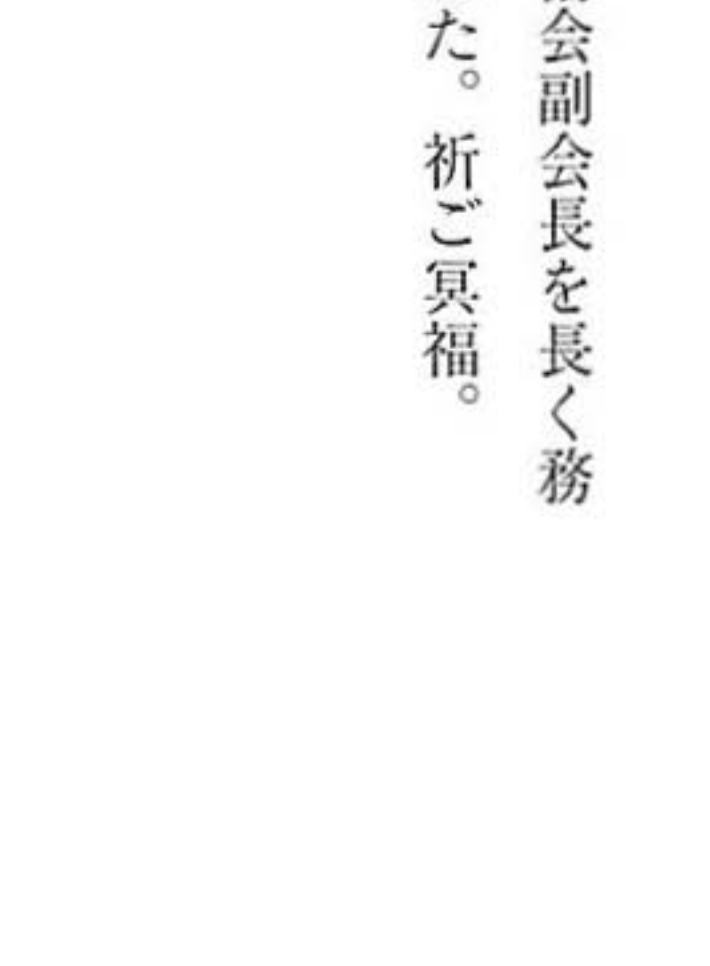
○「ロータス　第十四号」徳島県連句協会刊。

○朝日新聞伊勢版「付け句にＴＲＹ俳諧入門」十二月で二十七回を数えた。伊賀連句会指導。

○「甲州連句を楽しむ会実作集」甲州連句を楽しむ会刊。

（山梨県民文化祭協賛事業）

○「第十回宮城県連句大会実作集」宮城県連句協会刊。
○野田連句会会報「あぜりあ」第十二号刊。
尚、いちいち掲載しなかったものに、猫蓑会「猫蓑通信」、くさくき「くさくき」、桃雅会「桃雅懐紙」、稲門連句会「西北の風」、解纜「解纜」、おたくさの会「おたくさ」、俵口連句会「俵口」、季語研究会「季語研究会会報」等々月刊、隔月刊、季刊、年刊等の機関誌がある。
個人の出版物は大小多々あり、紹介は例年控えているが、第六十七回読売文学賞を受賞されている会員別所真紀子さんの受賞後第一作として「詩あきんど　其角」が幻戯書房より上梓されている。
なお、現代連句集Ⅲの編集人代表で協会副会長を長く務められた品川鈴子さんが十月に逝去された。祈ご冥福。



平成二十八年　主要連句行事一覧表

協　会　行　事	諸　　行　　事
1／23　第6回常任理事会	
2／1　会報連句発行（208号） 13　第6回理事会	2／11　連句を楽しむ会（浦和）
3／27　日本連句協会第2回総会・全国連句大会（仙台市）	3／12　奈良県連句協会は毎月2箇所で初心者講座開催 21　藤祭奉納正式俳諧及び連句会（亀戸）
4／1　会報連句発行（209号）	4／17　鹿児島県連句協会第1回記念連句会 29　えひめ俵口第20会記念連句大会（松山）
5／14　第7回常任理事会	5／4　心敬忌連句大会（伊勢原） 29　大山阿夫利神社奉納正式俳諧及び連句大会（伊勢原）
6／1　会報連句発行（210号） 30　平成28年版「連句年鑑」発行	6／17　兼載忌連句大会（会津若松） 19　花袋連句大会（館林） 19　青時雨忌追善正式俳諧及び連句大会（深川）
7／2　第7回理事会	7／16～17　連句フェスタ宗祇水（郡上） 28～30　夏休子ども連句教室（徳島）
8／1　会報連句発行（211号）	8／16　五山送り火連句大会（京都） 21　協会千葉県支部連句会（市川）
9／3　第8回常任理事会	9／9　白雨祭連句大会・其角座十四世襲号披露式併催（亀戸） 9　愛媛県連句連盟第20回連句の日連句大会（松山） 24　茨城県連句協会連句大会
10／1　会報連句発行（212号） 1　奈良プレ国民文化祭（奈良） 29・30　愛知国民文化祭（名古屋）	10／9　浪速の芭蕉祭（大阪） 12　第20回芭蕉祭・伊賀ふるさと連句大会（伊賀） 15　平和祈願連句大会（松山） 15　芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌追善源心実作会（深川）
11／5　第8回理事会	11／27　さきたま連句大会（川口） 27　俳諧時雨忌連句大会（王子）
12／1　会報連句発行（213号）	12／10　宗祇白河紀行連句賞募集

作品

—連句グループ五十音順

歌仙

『風薫る』

衆判

風薫る大内宿に遊びけり　渡部春　水
ひるがえりたる幟数条　磯直　道
七代目継ぐ陶工の作を掌に　大内善　一
眼鏡の奥に秘める情熱　水
山の端にしずしず昇る望の月　道
目つむりて聴くえんまこおろぎ　一
新曲に芸術祭の評高く　水
チケットを買うネット通販　道
地下街に迷い待合時間過ぎ　一
すねる笑窪に隠す妖しさ　水
おもむろにマスクを外す指の先　道
夜酒ゆるびて現るる冬月　一
理不尽の世とて耐えれば幸の来る　水
帰農のことをやっと決心　道
藁屋根の古き家つぎ子沢山　一
口なめらかな語り部の爺　水
記念樹の花は今しも満開に　道
開帳寺は四斗樽据え　一
蜂（ナオ）の巣を突いて幼児青くなり　水
祖父母の家は過疎の村なる　道
夜の空へトランペットを吹き鳴らし　一
涙をためて光る星屑　水
ああついにアントワネット処刑され　道
壁に闇の魔やもりひそめる　一
音のして蚊帳に乱るる影二つ　水
週に一度の逢う瀬うれしく　道
扇面の古写経額をいただきて　一
パソコン開き難字検索　水
雨の月しばし眺める窓の外　道
バーベキューには鮭を幸とし　一
地（ナウ）芝居の憎まれ役を買って出て　水
なかなかできぬ切腹の技　道
供華多き中に宮札掲げられ　一
人の振り見て我が身を正し　水
花筏波の形にただようて　道
不揃い嬉し里の草餅　一

平成二十八年　五月一日首
平成二十八年十二月十日尾（衆判）

《徳島・阿吽の会》

六条院『七つ橋』

衆議判

秋邸 月今宵無言で渡る七つ橋　恒子
冷ゆる背（そびら）を撫づるのは誰　光明
色葉散る炎の彩（いろ）とならぬまま　信子
睦み合へぬを朱鷺に重ねて　恒子
貸店にをんなひとりの小商ひ　光明
古びし額にかな文字の讃　信子

冬邸 大榾の崩るる音を耳底に　恒子
枯蟷螂の身じろぎもせず　信子
寒牡丹月の光に影を得て　光明
親炙いつしか狂ほしき思慕　恒子
メビウスの帯の表裏に分かれ棲み　信子
夢もふくらむおらが春なり　光明

春邸 年の差を厭（いと）ふことなく勤（いそ）しんで　恒子
吾子を授かり彼岸詣へ　恒子
もののけも花ぢや花ぢやと月の宴　信子
西洋独活のレシピシェアされ　光明
染卵手造り家具に飾られて　恒子
真白きガーゼ眠る外科室　信子

夏邸 愛秘めし袂を濡らすこぬか雨　恒子
浄瑠璃作家心中を追ひ　光明
夏掛の軽さに似たる薄情け　信子
清和の月に恃む縁切り　恒子
削氷にシャンパン注（そそ）ぐホスト居て　光明
深山（しんざん）辿り幽谷に消ゆ　信子

平成二十八年九月十三日首尾　（於・赤坂邸）

〔新形式「六条院」について〕
この形式は、源氏物語に出てくる光源氏の邸宅・六条院に因みます。光源氏が造営した邸宅・六条院は、ゆかりの女性たちをひとところに集めて住まわせるため、邸内を四季の町に分け、それぞれに季節に合った御殿と庭を造り、春の町（春邸）は紫の上、夏の町（夏邸）は花散里、秋の町（秋邸）は秋好中宮、冬の町（冬邸）は明石の御方の住まいとしており、それを各連の名称としました。特徴としては、源氏物語は恋の物語なので各連に恋句を鏤め、雅と俗を織り込んだ恋模様に彩られた連句を導き出す形式です。また、月の座を各連に設けて、四季それぞれの月の姿を詠み、存分に愛でることができるようにしました。

＊句数は二十四句・（六句×四連）。
＊一花四月（花は春季のみ。月は各連に一つ。それぞれ定座は無し）。
＊発句は当季とし、四季順行とする。当季が夏なら、つぎは秋・冬・春の順で進むが、季題は各連一季とする（但し、冬季に新年を付けることは可）。
＊各連の名称もそれに伴い、「春邸」、「夏邸」、「秋邸」、「冬邸」の連と呼ぶ。
＊春秋は三句から五句まで　夏冬新年は二句から三句まで。恋句は各連二句から五句までとする。

創案者・梅村光明

《東京・赤のままの会》

歌仙『風狂の』

本屋良子捌

風狂の旅に出でたつ九月かな　本屋良子
　影濃く落とす十六夜の道　西原淑
オリーブの実を鍬めて食パンに　服部秋扇
　鼻唄まじりドラマ主題歌　勝又丘女
つつがなき異国の友の航空便　高澤貴々
　凍土の彼方揺れる極光　青山牛蟹
ウ橇引きの犬に食事をねだられて　内藤秀穂
　古民家カフェ探し当てたる　黒瀬琢葉
荒れた地に妻はせつせと野菜植ゑ　古川直
　若さ溢れる白き項　赤坂南天
目醒むれば後朝悲し窓に星　山本秀夫
　空の遠くに明け六つの鐘　土屋日菜
芸人にプライバシーのない暮し　永澤未鬼
　ヒッチハイクの麦わら帽子　古田もえ
滴りの落ちてまた落つ音幽か　女
　肩のやさしき里の岩座　貴扇
雪月花逝きし名優舞ひあそび　直
4Kテレビに釘付けの春　ナオ（ドローン）
　宙を見上げる競ふや揚雲雀　蟹
曲り道右へ取りたくない私　穂
　車座になり酌み交はす酒　葉
復興のイベント成功祝ひつつ　天
　窓辺にひらり夏の蝶見ゆ　淑
ひなげしの赤きに負けぬ紅を差す　夫
　胸に滾々愛の涌く音　菜
狛犬の阿吽の呼吸君と僕　鬼
　一眼レフで狙ふ山襞　え
月煌々グッジョブと指突き上げて　女
　父の育てし柿の初生り　貴
ナウ村長の台詞「よしよし」村芝居　穂
　ゆるキャラ柄のネクタイを締め　鬼
店先に贋作の壺並べ立て　蟹
　切り抜き多きけふの新聞　天
底つ世にあでやかに咲け花大樹　葉
　子等の放てば踊る若鮎　良
　　扇

平成二十八年九月二十五日首
平成二十八年十月二十日尾（文音）

歌仙『秋田駒』

秋田駒青磁にけぶる春霞　茂呂雄太捌
　鳥雲に入り描く遠景　佐藤康子
子ら駆ける風船売りに先んじて　伊岡森礼子
　読めばやめれぬ人気エッセイ　瀬川喜美子
まほろばの月にうつろう能舞台　山平富子
　塩辛とんぼついと飛び込み　島きく子
採る者も鑑賞もなき一位の実　落合久美子
　愛の形は幾何学模様　高山紀子
たましいをぬかれ羽衣置忘れ　富子
　ふたり馴染みの映画館へと　天雲成津子
旅に出る濁世の垢を濯ぐため　雄太
　雑学おさめクイズ王取る　礼子
夏野にて中天の月仰ぎおり　康子
　川面に走る葭切の声　智
伊豆の街お宮の松も代替わり　千葉きく子
　じゃんけんぽんで笑顔分け合う　雄太
城址（しろあと）の曲輪ふくらむ花万朶　富子
　おちこちに畑鋤く人の励みおり（ナオ）　智
シーツはためく風の吹くまま　成津子
我が宿はうぐいす張りかきしむ床　喜美子
　オアシス求め隊商の影　久美子
肩書きはとうに捨てたる冬日向　康子
　われを忘れて雪上野球　智
口紅をひきなおしては投げキッス　きく子
　追いかけ抜いてつかむ妻の座　礼子
老いていま腰の痛みもいとおしく　雄太
　お茶を飲みつつテレビ観戦　喜美子
夜も更けて月の光に浮かぶ原　富子
　限界集落軒に干し柿　成津子
杉玉（ナウ）を吊りて新酒の出来知らす　紀子
　魚さばきに慣れた包丁　礼子
建前と本音背をなす腹の中　きく子
　右も左もアイフォン出して　雄太
決意秘め踏みしめ向かう花の道　康子
　おぼろに響く寺の鐘の音　久美子

平成二十八年四月二十七日首
平成二十八年六月二十二日尾
（於・秋田市にぎわい交流館研修室）

二十韻　『宗　達　の』

萩谷準一捌

萩谷準一　宗達の風神もいて花吹雪
山中健雄　若駒を曳く足を引き締め
川崎満里菜　さえずりは春の形見の雀にて
渓山丈介　身も浮き浮きと腰も浮かして
坂根慶子　月（ウ）高く地にベドウィンの祈り満ち
準一　稲打ち続く石の段々
健雄　日が暮れてなお精を出す冬支度
満里菜　妻が気になり眠れない夜
篠原英利　焦がれても手に温もりが訪れず
慶子　小舟放てば紅蓮の炎に

丈介　日（ナオ）常に変化求めて夏芝居
準一　筵を敷いて冷酒酌みあう
健雄　帰り道匂いが今も付いてくる
英利　化粧に惑い蠟はこぼれる
満里菜　恋に燃え月を探せば息白く
慶子　銀狐抱きあとは冥界
丈介　警（ナウ）官の咲かす話の痛快さ
満里菜　空砲を打ち散らす子供ら
健雄　花やぎは食堂彩る新社員
英利　アスファルトにも木の芽雨降る

平成二十八年四月九日首尾
（於・台東区民会館（浅草））

尻取り二十韻　『心太』

萩谷準一捌

草食の男子が啜る心太　城田　咲
　天を見上げてつばめ歓迎　落合正子
芸者行く昼の花街風抜けて　千寿関屋
　毛手櫛をして整える髪　萩谷準一
神業で水面の月真っ二つ　山中健雄
　辰巳の在にかかる馬市　咲
一番のケーブルを見る谷紅葉　正子
　みじんこ眠る棚の水槽　関屋
爽快なコーラス響く大ホール　準一
　オルガが跳ねてしぶき煌めく　健雄
目(ナオ)くじらを立てて仕切るか鍋奉行　咲
　業務終われば冬空の星　正子
欲しいものねだる駄々っ子店の前　関屋
　岬(さき)を巡って来る路線バス　準一
場末の戸開けて見つめる猫の声　健雄
　小枝咥えて励む巣作り　咲
庫裏(ナウ)からの朝餉の香り流る庭　正子
　俄(にわか)仕込みの腕をまくりて　関屋
リテールはこだわりなしに花の雲　準一
　苦悶の色もゆるむ遅き日　健雄

平成二十八年五月　七日首
平成二十八年五月十一日尾
（於・台東区民会館（ナオ四句目より文音））

歌仙『獺祭忌』

俳諧は二人ごころや獺祭忌　白根順子捌

月の光にゆるる熊笹　白根順子
口笛の響く街角爽やかに　石井季康
スキニールック銀輪とばす　高橋たかえ
水鳥のしずかに岸を離れゆき　竹本いくこ
冬の紅葉の映ゆる湖の面　野島一枝
どんどんと旅の鞄の膨らみて　松澤晴美
何処にいったか探す胃薬　宮本艶子
銀婚のいまにして知る妻の愛　順子
阿吽の狛も老いて好日　季康
軽々と手紙の灰は風に舞い　たかえ
丹波黒豆鬼の遺伝子　いくこ
夏芝居書割の月忽然と　一枝
つけっぱなしのテレビナイター　美晴
うたた寝の頬っぺを猫に舐められて　子艶
もたついている論文の想　順子
濃く淡く史実秘めたる花大樹　季康
思い出の山笑う故郷　たかえ
のどろかに葛根湯は喉癒し　いくこ
児ら置き去りに飛び出せる地震　一枝
津波から命救った「てんでんこ」　美晴
写経納めて巡る回廊　子艶
しっとりと聞く源氏香梅雨ぐもり　順子
蛍の闇の甘く匂える　季康
初キッスこのまま消えてしまおうか　たかえ
熊野へ急ぐ安珍の嘘　いくこ
太棹にのせて語れる恋の果　一枝
踊るは「娘道成寺」なり　晴美
いびつなる月見団子のご愛嬌　艶子
なんてったって俺は濁酒　順子
松手入れすみて狭庭の景ひそか　季康
足音聞き分け魚寄り来る　たかえ
マネも来たモンマルトルに画架立てて　いくこ
ゆったり下るうららかな坂　一枝
遠霞万朶の咲き誇り　晴美
夢を大きく揚がる連凧　艶子

平成二十八年　十月　五日首
平成二十八年十二月十五日尾（文音）

歌仙『台風裡』

高尾秀四郎捌

台風裡こころに凪の海もてり　高尾秀四郎
　淡き残月隠す群雲　古閑純子
フルートの音に林檎の早熟れて　田口晶子
　卓にいつもの手びねりの陶　戸田徳子
崖土の崩れ固めて山眠る　二村十専
　ダウンコートのフード深めに　宮脇美智子
熊が出て限界部落大騒ぎ　後藤典雄
　女性の記者はポニーテールで　秀
誘われて闇の鏡に映る彼　純
　かなたの橋に渋滞の列　晶
米国の大統領選品を欠き　徳
　ロッカールーム出たら酒場に　専
冷めやらぬ都会を濡らす夏の月　秀
　曝書不要の電子図書館　純
ひさびさに片道切符でぶらり旅　徳
　捨てる神あり拾う神あり　晶
友達の違う一面花吹雪　純
　春愁胸に沸々と湧き　秀
再(ナオ)びのゲーテの生地麦青む　専
　煩悩いまだ数多はびこる　徳
末期ガンブログで入る広告料　晶
　花屋になると幼少の頃　秀
凍る夜に相席で聞くコンサート　純
　楫火で燃ゆる腿の鳴き竜　晶
草の庵瞑想の日々過ぎゆきて　徳
　ゲームソフトで魔王撃退　専
厳格な夫の墓碑に問い直し　秀
　笑いヨーガのやっと身につく　純
蒼き月呑みて湖底の黙深む　徳
　凛と辺りを制す鈴虫　晶
秋(ナウ)澄む日晋山式に招かれて　徳
　茶屋で語らう老若男女　専
暮れかけて時計の針に目を凝らし　秀
　一筆書きでかすむ家並を　徳
花万朶都大路に千代の声　晶
　快癒嬉しき風光る午後　純

平成二十八年　十月　十日首
平成二十八年十一月三十日尾（文音）

執筆

歌仙『金木犀』

渡部春水捌

金木犀旧家の庭に香りけり　　春水
　月に囁く独り居の窓　　江森京香
初鮭を思いもかけず贈られて　　越智みよ子
　欲を張らずに暮らし穏やか　　岸田芳雄
日向ぼこ老女の会話かしましく　　鈴木哲也
　籐の籠には蜜柑山盛　　山田他美子
横町（ヨウ）の角にオープンネットカフェ　　京
　天変地異に備え万全　　み
出会いしは避難所となる空き校舎　　芳
　恋占いを引けば大吉　　哲
急行と普通電車は別ホーム　　他
　思い違いで何時もどじ踏む　　他
ライブ果て那須高原の月涼し　　哲
　宿のおすすめ氷白玉　　芳
もてもてのぽっちゃり系のアスリート　　京
　末広亭で落語三昧　　み
地酒酌むお国訛の花の宴　　春
同姓多き噂りの里　　春
遠足（ナオ）の子等の行列乱れなく　　み
　膝が痛いとぼやく福助　　芳
海荒れて豊洲移転は潮けむり　　京
　サイクリングで浜辺すいすい　　哲
手袋のミッキー・ミニーの絵が笑い　　他
　はっと見惚れる毛糸編む指　　み
元カレのメールが因で仲縺れ　　春
　ついうっかりと鍋が真っ黒　　京
大神に大鈴鳴らし詣でたる　　芳
　歴史を語る油滴天目　　哲
月清し叙勲式典厳かに　　他
　テレビ取材の黄落の森　　他
やや（ナウ）寒のロンドン塔に残る秘話　　哲
　夏目漱石斜め読みする　　芳
髭剃りに昭和の残る理髪店　　京
　客に構わず猫は居眠り　　み
待ち兼ねた北海道に花開く　　春
　屯田兵を偲ぶ春宵　　執筆

平成二十八年　十月　四日首
平成二十八年十一月三十日尾（文音）

歌仙『冬構』

次山　和子捌

ぬくもりのことば蓄え冬構　次山和子
　ちらちらちらと舞える綿虫　川上綾子
選り抜きの若い企業家集まりて　川岸富貴
　各々進む視野を世界に　三澤律乃
管弦が月へ上っていく夕べ　森川敬三
　芒の波に入れば吹かるる　矢倉澄子
ビル街のべったら市の賑わしく　富
　名橋匿す高速道路　綾
昨日会い今日スピードの告白で　和
　打てばひびくを傍らに抱き　律
何も彼も軒の鴉に見透かされ　澄
　西も東も尽きぬ政争　敬
夏の月サハラ砂漠に赤く浮く　〃
　クレオパトラの盃に冷酒　富
長台詞吐いて悲劇を盛りあげる　律
　石垣だけを残す山城　綾
天空の深さへ吹雪く花の昼　和
　寺寺の鐘春宵に聴き　律
茶摘み籠いっぱいにしてほぐす指（ナオ）　綾
　オリンピックのロゴは市松　和
候補地の彩湖の夢は消え去りて　律
　機微満載の四コマ漫画　澄
影像に似た青年に暖炉の火　富
　寒夜の闇の動き激しく　敬
安普請そろそろリフォームしなくては　綾
　パンフレットに話題はずみぬ　律
神棚に願いを込めて宝くじ　綾
　的を目がけて引き絞る弓　敬
「菊と刀」読みかねている霧月夜　澄
　旅の鞄の触れてひやひや　和
殊（ナウ）の外もみじ色濃き一里塚　敬
　思いもかけぬ雨の降り来る　綾
襖絵の虎の眼光爛爛と　澄
　建国の日の旗を掲揚　富
幹に咲く花に産声聞き止めて　和
　テトラポッドのうららかな浜　律

平成二十八年　十月四日首
平成二十八年十二月三日尾（文音）

十八韻順候式雪月花　『冬の蜂』

川上綾子捌

起　ひと刺しの武勇もありや冬の蜂　川上綾子
　旧家の庭に光る侘助　渡部春水
　我が道を襟を正して進むらん　石井季康
　新入社員似合う制服　鈴木哲也
承　天平の甍を染めて春の雪　岸田芳雄
　隣り合わせの相撲の桟敷　松澤晴美
　陶酔の夢路に誘うテクニシャン　川上綾子
　テレビ通販クーリングオフ　渡部春水
　近海に怪しき船の出入りして　石井季康
　色のはみでた絵手紙が来る　鈴木哲也
転　月の夜に麦酒泡盛吟醸酒　岸田芳雄
　ＴＰＰの行方混沌　松澤晴美
　そぞろ寒下北の猿群をなす　川上綾子
　いたこの山に進む紅葉　渡部春水
　インバウンドびっしり乗せたバスの着く　石井季康
　あまり見掛けぬ電話ボックス　鈴木哲也
結　けなげにも咲き切っている帰り花　岸田芳雄
　包丁始めに意義を正して　松澤晴美

平成二十八年十一月二十三日首尾

（於・江東区芭蕉記念館）

十八韻順候式雪月花　『初詣』

川岸富貴捌

(起)初詣米寿は今や通過点　角田双柿
　笹子鳴きつぐ山の辺の道　白根順子
プチ企業ママさん達は奮起して　川岸富貴
　高く高くと飛ばす風船　宮本艶子
(承)淡雪の積もりタイヤにチェーン巻き　三澤律乃
　湯水を張って待つ下心　江森京香
穂希さん愛の結晶ふわり抱く　伊藤稜志
　末は五輪の金を目指せる　双柿
伏せをする盲導犬のＩＱは　順子
　空港勤務汗の清掃　艶子
(転)振り向けばゾンビが笑う夏の月　律乃
　いよいよ満つる平成の御世　京香
温め酒酌んで全快確かめる　富貴
　砂糖たっぷり吹きし干柿　双柿
ルーブルへ貧しきころを憶う旅　順子
　岬の影は波が繰り　艶子
(結)餅花にオール電化の台所　稜志
春を呼び込む小さき買物　富貴

平成二十九年一月十二日首尾

(於・熊谷藍屋)

十八韻順候式雪月花　『寒菊や』

古閑純子捌

古閑純子
田口晶子
越智みよ子
竹本いくこ

起 寒菊や畑の中にひかりいて　　純子
　赤白黄色弾む毛帽子　　晶子
　飛行雲空のキャンバス縦横に　　みよ子
　春光を背に並ぶ釣舟　　いくこ
承 たびら雪舞い始めたり西行忌　　みよ子
　名俳優はひと日署長を　　いくこ
　江戸前の気質に引かれ半世紀　　純子
　築地豊洲と弥次郎兵衛揺れ　　晶子
　焙煎の深き匂いに導かる　　みよ子
　老鶯の音にハモる横笛　　いくこ
転 月満ちてスイカ・メロンの丸々と　　純子
　ふと笑みこぼす白衣観音　　晶子
　鎌納めヘミングウエイ読破せな　　みよ子
　そぞろに寒し膝のシャム猫　　いくこ
　滾り立つ南部鉄瓶黒々と　　純子
　戦没の碑の文字の流麗　　晶子
結 花嫁にめぐる盃冬館　　みよ子
　春を間近に衣桁の小袖　　いくこ

執筆　いみ　晶　純　い　み　晶　純　い　み　晶　純　み

平成二十八年十二月二十一日首
平成二十九年一月十一日尾
（於・はにぽんプラザ）

二十韻　『孫自慢』

芹田恵子捌

お揃ひの袴着姿孫自慢　芹田恵子
紅葉散る中記念撮影　浜口泰子
床の間の画軸新装するならん　橘朱鷺子
土産の銘茶憩ふひととき　酒匂道代
月照らす石垣の上猫の行く　戸部よしみ
電話で誘ふ糸織の姫　恵
君と僕松茸狩りで深い仲　泰
山の彼方の人に書く文　朱
トランプの勝負けゲーム始まるよ　道
豊洲騒動誰が何したと　よ

観光地巡る船旅超人気（ナヲ）　恵
シャドウダンスの汗拭ふ月　泰
抱籠持ち出してくる独り者　朱
夢ではないと悟る柔肌　道
通勤路ネクタイ締めつつ走りをり　よ
キャラ弁作りはまる母親　恵
村（ナウ）はづれ目立つ赤屋根薬師堂　泰
鶯聞きつつ伸ばす足腰　朱
花大樹宴は酣きりもなし　道
ふらここ揺れる屋上庭園　よ

平成二十八年十一月十九日首尾
（於・参宮橋代々木倶楽部）

歌仙『天高し』

森田満枝捌

嬉々として児らは付け句に天高し　梅田とほる
教師小走り野菊咲く頃　森田満枝
月清し湖上に舟を漕ぎだして　馬岡裕子
六十巻の源氏読み解く　福田和幸
楢の木にしがみついてる蝉の殻　藤井克幸
絵簾ゆれる奥の床の間　町野正子
帯(ウ)締めをきりりと決めて和服よし　松岡芳恵
何故か気になる人の振舞　山村としお
夜半まで話弾ます間柄　満枝
礼拝堂に祈る賛美歌　裕子
城を背に観光客はポーズ決め　和幸
翁の愛した風の吹く街　克幸
パトカーのサイレン厳し月氷る　正子
ノレン掻き分け先ずは熱燗　芳恵
担当がまたも失言やらかした　とほる
オンリーワンの個性作品　としお
色形丈さまざまに花の雲　和幸
入学式は紺色スーツ　裕子
ナオ(ぴ)いと飛ぶ雲雀の音に振り向いて　克幸
世界発信ＰＰＡＰ　正子
お互いの腹探り合う両巨頭　芳恵
飴売りひとり辻堂の前　とほる
寄りて散るジャンケン遊び炎天下　としお
冷素麺の薬味いろいろ　満枝
昔から島倉千代子大ファンで　裕子
東京だよと手と手つないで　和幸
この人について行きます何処までも　克幸
気にかかり出すちょっとした癖　正子
鼓の音響き渡れり後の月　芳恵
体育祭は家族総出で　とほる
特(ナウ)Ａの伊賀米握り桶に盛る　裕子
シャッター開く若き跡継ぎ　満枝
町行事文化遺産に神ってる　正子
マークシートの今日は冴えてる　芳恵
これ以上何も求めず花の雲　とほる
都を遠見初蛙聞く　としお

平成二十八年　十月一日首
平成二十八年十二月九日尾
（於・絵手紙いろはアトリエ＆文音）

歌仙『まつりの日』

村中のアイデア集めまつりの日　峠　美晴捌

浴衣の児等を脅す見世物　福森豊子

伝統を生かす晴れ着を外国にて　田中とし子

船頭テナーカンツォーネに酔う　峠　美晴

陰薄き昼月を置く薄原　山村としお

新米入荷知らす地下街　としこ

凶漁の銀の秋刀魚を盛り上げて　美晴

目指すメダルは黄金の色　豊子

メール攻め粘りで勝ちを奪われて　美晴

子弟の愛は現場ご法度　としお

秀才は群よりはずれ漂いて　豊子

しがらみ薄き女性宰相　としこ

年越えの賑わい新た月高し　としお

一期一会に囲む熱燗　豊子

涎掛け街道地蔵へ掛けてやり　美晴

熊野へ向かい真っ青な海　としお

詩びとの詠まれし花と出会い得て　豊子

霞のかなた勤皇の郷　としこ

眠（ナオ）たげに笥を掘る手伝いに　美晴

慣れた手付きでインスタグラム　としお

震災のニュース上塗る事多し　豊子

同じメイクのモデルつぎつぎ　美晴

熱帯魚水輪作らず水槽に　としお

ビル照り返しかたかげもなし　豊子

なんとなく気になる人の縁をきく　としこ

頼り鞄に出張に発つ　としこ

年齢差こだわらぬ世に慣れもして　豊子

近頃流行のバランスボール　としこ

極大の月のニュースに成る程と　豊子

すずむし鳴かす駅のサービス　美晴

みにしみて衣装ケースを入れ替える（ナウ）　豊子

小中校のマラソン大会　としこ

取立ての産品人気空き地の露店　美晴

ポケモンゲット一ッ時のもの　としお

山化粧（けはう）花あちこちの資のとき　としこ

願いを付けて飛ばす風船　美晴

平成二十八年　七月四日首
平成二十八年十一月八日尾

（於・峠宅）

歌仙『鏡割』

大前や槌を振り上げ鏡割　山本あとり捌
　円を描きて舞へる初鳩　山本あとり
クロッカス窓辺で祖母は読書して　大月西女
　雪解雫に耳を傾け　松井洋子
軟東風に誘はれるまま月の土手　洋子
　おもちやのやうな汽車が過ぎゆき　あ
浮(ウ)動票動かす術はないものか　西
　北海道の信号は縦　洋
四畳半一間が愛の住処なる　西
　日焼けの彼の寡黙よろしき　あ
蟻地獄もがけばもがくほど落ちて　〃
　末広がりにブランド偽装　〃
秋桑の園の静けさ月今宵　西
　漸寒の中拾ふ万札　井ノ口カ
鮫を食めば故郷の父母思ひ　子
　めらめら燃ゆるチャンプへの夢　西
車座の花見の衆の賑やかに　西
　春星にじみ響く警笛　あ
本(ナオ)堂のおぼろに動く阿弥陀の眼　西
　天井裏を鼠走るか　カ
習ひ事平成の児は忙しく　あ
　光源氏は実はロリコン　〃
逢ひたさに雪雷も気にならず　西
　蒲団に火照るきぬぎぬの肌　カ
ひつそりと座敷わらしは立ち去つて　西
　みやげの数が足りぬ旅後　あ
力士みな地方巡業サイン攻め　カ
　昔の老いはつつましく生き　〃
月映えて里山の墓きらめかす　洋
　テレビ相手にぬくめ酒酌み　〃
毬(ウ)栗の痛さを猫は知つてゐる　西
　周防大工の仕事残りて　中居由美
土地ごとに色変はりたる屋根瓦　あ
　斜め斜めに窓を打つ雨　由
ロビー展丸くなりゆく花氷　西
　浴衣ではしやぐ子らの無邪気な　執筆

平成二十七年十二月　四日首
平成二十八年　一月十五日尾

（於・天野庵）

歌仙『街師走』

街師走昭和レトロの馬水槽　伊藤貴子捌
青空市の弾む白息　鈴木すず
イベントのお座敷列車乗るならん　木暮佳右
ご当地グルメ叶うB級　伊藤貴子
満月を見つめいる猫すすき原　鈴木すず
風澄み渡る威銃鳴り　木暮佳右
甘(ウ)たるいあんぽ柿です召し上がれ　伊藤貴子
手渡しならばおてて握れる　〃
なれ初めはああの時と笑いあい　佳右
呆けた母が皆を盛りあげ　貴子
棟上げのおこわどっさり届けられ　すず
木遣りくずしの鼻歌も出て　万里
ダービーの本命どうかゲートイン　〃
湖水涼しく月も涼しく　すず
すっきりと旅は独りに限るわね　万里
ムード楽しむ居酒屋の隅　〃
その昔あつめて花の首飾り　佳右
杉菜の囲む礎石大小　貴子
畑(ナオ)打ちの飯詰に赤子泣きくずれ　すず
ドローンのゆくえ鉄塔の上　万里
密会をフォーカスされしあの記者に　すず
すべてを捨てて暮らし泥沼　〃
隣国のゴネ得は駄目灸すえな　貴子
画像に見えるいろり燻ぶり　佳右
板前の何の不機嫌庭の枯れ　貴子
部厚き肉にまたマヨネーズ　佳右
恐竜の巨大化石のいる館　貴子
スタンプラリーここでおしまい　佳右
頭に鼎痴れ者月の狂歌会　貴子
大き瓢箪漂着物か　佳右
代(ナウ)代の海苔箸を挿すさざ波に　貴子
常着干しある暮れてさみしき　〃
下校時の三角四角腹ペコよ　佳右
語って聞かす敦盛のこと　貴子
花万朶下山の僧に出会いけり　〃
築地のきわに斑雪解け　佳右

平成二十八年十二月　九日首
平成二十八年十二月二十日尾
（於・千葉市若松公民館）

半歌仙　『街師走』

斉藤一燈捌

菩提寺の護符がポストに街師走　斉藤　一燈
少し濡らして時雨明るく　伊藤　貴子
仔犬連れ散歩の足も弾むらん　佐々木リサ
洗いざらしのニット小粋に　木暮　佳右
棚田から見上げる月の煌煌と　〃　リサ
どこからとなく砧打つ音　貴子　〃
躬のさびの清らになりて菊なます　リサ
労わり合いて同病の人　貴子　〃
許されぬ恋を貫き五十年　リサ
米寿の媼お砂踏みする　一燈　〃
温泉と酒でもてなすプーチンを　佳右　〃
月が涼しく照らす列島　貴子　〃
河童忌をネタに集まる悪友ら　リサ　〃
眉つばものの事実かずかず　貴子　〃
コンサート中止の丘の赤い屋根　佳右　〃
乗込み鮒の跳ねた水の輪　貴子　〃
通し矢の弦鳴り響く花吹雪　リサ　〃
房総の山並低く笑いし　佳右　〃

平成二十八年十一月十七日首尾

（於・千葉市千葉市民会館）

歌仙『十万のつつじ』

石渡蒼水捌

十万のつつじお琴の協和音　　石渡蒼　水
　蝌蚪の群れなす公園の池　　宮澤次　男
サラダ菜を喜ぶ友へ宅配で　　田中てつ
　新幹線はけふも混みあふ　　谷川稔　子
稽古了へ十六夜仰ぐ裏どほり　　男　て
　蚊帳の名残りを止む煤の間　　男　て
先ず壁に裸婦像のあり美術展　　水　て
　女子学生に燃ゆる情恋　　稔　て
絹雨に相合傘も久しぶり　　稔　て
　足手まとひの小犬愛らし　　男　て
大地震熊本城も壊滅す　　水　て
　通りすがりでスープ一杯　　稔　て
月をふみ杣人帰る囲炉裏端　　男　て
　家族揃ひてかこむ寒鰤　　男　て
居酒屋の金の屏風に富士の山　　稔　て
　遠距離バスが唄の合唱　　稔　て
咲き盛る花はいほえに満ちあふれ　　水　て
母のぬくもり羽織り外出　　稔　て
子（ナオ）遍路も同じ装束鄙の径　　男　て
　災害のあと放置した侭　　〃
医師ゆえに己の死期を知る知らず　　稔　〃
　北朝鮮の水爆実験　　男　て
祭笛将軍にこり有頂天　　男　て
　浮草のびる軒の水甕　　水　て
農鳥が方向定めみちのくへ　　て
　速達便で届く履歴書　　男　て
レクサスやベンツもいらぬ君の傍　　〃
　憲法論議夫婦別姓　　稔　て
しみじみと時代のロマン照らす月　　〃
　蟷螂窓に獲物待ちをり　　水　て
赤（ナウ）い羽根募金に笑顔絶やさずに　　男　て
　輓馬は喘ぐゴール目指して　　て
閑かなる棚田おしやべり下校生　　水　て
　碇泊船の灯りちらちら　　稔　て
花の下焼きたて団子ほほばりぬ　　て
　凧揚げ合戦天地にぎはひ　　執筆

平成二十八年四月十八日首
平成二十八年五月十五日尾
（於・伊東市中央会館）

歌仙『鳥総松』

豪邸の相応しきかな鳥総松　　石渡蒼水捌

塀の内での羽子つきをせり　　宮澤次男

竹林の静寂に初音清々し　　谷川稔子

どうける子供春の七草　　沢村二郎

せせらぎの淀に映る朧月　　稔

ゆらりゆらりと揺れる湯けむり　　次

焼売（ウ）の「シュウちゃん笑顔」道の駅　　梅谷静子

恋の行方は車まかせに　　二

声高に好きだ！と叫ぶ竜飛崎　　次

蚊帳の中へと忘る携帯　　二

遊歩道ふわりと肩に桐一葉　　稔

黒人霊歌誰が唄うか　　水

月の照り漢は路地を右左　　稔

ドレスの裾に野分烈しく　　次

築山を掘り起こしたる猪の群　　水

少年ひとり弄ぶ玉　　二

描きたくも移ろい変る花の彩　　稔

島から島へ架かる初虹　　うらけし緑のバッジ女生徒ら　　田中てつ

後期高齢免許返上　　二

取り替えの毛糸の帽子辻地蔵　　て

風化の文字の消えかけており　　稔

生でよし煮つけ又よし寒の鰤　　稔

忘年の会和み明るく　　二

くじ引きかじゃんけんぽんで決める順　　次

やけど覚悟の恋と知りつつ　　て

辿り着く終着駅は夢の中　　富

ブランデーグラス回す掌　　次

暁のスーパームーン鳥過る　　て

水草もみじ赤い遠富士　　静

急（ナウ）ぐ足釣瓶落としの径蛇行　　二

ラジオが告げる急落の円　　て

寝転んで占いの本読み耽る　　稔

天気予報は確率を増す　　二

鍬置いてマイクを握る花舞台　　次

栄螺壺焼遠きうなさか　　執筆

平成二十八年十一月二十日首尾

（於・伊東市中央会館）

歌仙『嵐にも』

竹中正弘捌

嵐にもたえし阿夫利の梅しろし　竹中正弘
　わらぶき小屋に燕また来る　前田明水
耕牛を追ふ童部（わらんべ）の眼の澄みて　中尾美琳
　泥の畦道ひかり踏みゆく　竹田梵子
十五夜の団子いびつも構わずに　池田佳子
　稲架かけ慣れぬ奉仕活動　成田玲香
管長の墨痕淋漓紅葉狩　水梵子
　自閉症てふ業も清浄　〃琳子
魔の声にあらがい難く通いつめ　弘香
　性転換もいとわずにして　梵子
世の中は色々ありてそれで良し　子弘
　鰻をつかむ池のにぎわい　弘子
ガムランの響きも涼しヤシの月　梵子
　浅き眠りの吊床の夢　琳梵
北壁の氷にしばし身をのべて　梵代
　のど飴欲しいプロポリス入り　代梵
花吹雪あびて踊れば天女めき　梵琳
風船とばし酒屋オープン　琳
鏡面にロートレックの春の燭（ナオ）　今井みつ代
　落ち込む気持奮い立たせる　弘水
平米が百万円もする北京　梵子
　肉より皮の方がおいしい　子弘
馬具屋から創めて世界ブランドに　弘水
　女性ジョッキー逃がす大穴　水子
朝夕の読経おこたる破戒僧　子琳
　下司でもいいのあなただけなの　水代
週刊誌ネタの割れるは次号へと　琳梵
　ゴーストライター微博（ウェイボー）の陰　梵代
旅なれて月下の街を闊歩する　代琳
　とんぼう柄のかろきアオザイ　琳水
歯（ナウ）ごたえはおかず要らずの今年米　水子
　大黒様を祀る日銀　子琳
ひょいひょいとITダイス転がして　琳梵
　野焼の後に芽生え見えそめ　梵代
花の枝は心に形を合せつつ　代梵
　時を忘れて山羊の毛を刈る　梵琳

平成二十八年二月二十一日首
平成二十八年三月　二十日尾
（於・伊勢原シティプラザ）

歌仙『風光る』

風光る阿夫利の峰のただ青し　廣崎竜哉
　小綬鶏遠く甲高き声　礼子
大皿に桜餅盛り友待ちて　ちひろ
　無人の駅舎汐香る町　ジョウ
見返れば月にまっすぐ砂の道　竜哉
　秋の袷の親子仲良し　湘山
牝迎えキリンパンダのさわやかに　博山
　ケニアの人のやわらかき腰　ジョウ
アラフォーはこれ見よがしの女振り　礼子
　やすやす嵌るハニートラップ　雅楽
新婚の優勝大関綱目指せ　湘山
　重力波とてついに捉える　博山
熱帯夜河童出そうな気配して　礼子
　涼しい月に憂き世忘るる　ちひろ
床框螺鈿の千鳥飛べばこそ　ジョウ
　舞扇にも付けし鑑定　竜哉
桃源へ花の扉を開け放ち　博山
　黄蝶の止まる玉の簪（かんざし）　雅楽

千場（せんば）ひで子捌

宇佐美湘山
大津博山
千場ひで子
海老原雅楽
近藤礼子
増井ちえこ
林ジョウ

競（ナオ）漕の櫂の雫の迸る　廣崎竜哉
　北斗星てふ切符手に入る　礼子
シャンペンのグラス翳して目くばせを　ちひろ
　私の好みロシア系です　ジョウ
グラマーが「異国の丘」を熱唱し　竜哉
　噺家修業家事に明け暮れ　湘山
小料理屋鍋焼き仕込む裏小路　博山
　どこまで続く祖父の炉話　竜哉
NHK精霊もいて守り人　ジョウ
　古城を映す碧水の湖　ちひろ
故郷に帰りて仰ぐ娥眉の月　竜哉
　菊の細工の武者を繕う　湘山
にぎやか（ナウ）にランドセル去り昼の虫　礼子
　監視カメラは辻の遠近　博山
痩せ馬とドン・キホーテの果てぬ夢　ちひろ
　逆立ちすれば禍福さかさま　ジョウ
花筵無礼講にて陣を取る　竜哉
　旅の朝寝に陽ざしやわらか　博山

平成二十八年二月二十一日首
平成二十八年三月　二十日尾
（於・伊勢原シティプラザ）

『魚の目は泪』

脇起半歌仙　芭蕉翁

行く春や鳥啼き魚の目は泪　　芭蕉翁
八重山吹きの咲き染める路　　増井ちえこ捌
永き日を新進画家はべレーにて　　前田明水
サンドイッチに辛子たっぷり　　大津博山
木の間よりもる月影の陶の町　　飯田せつ子
回覧板は赤い羽根付き　　増井ちえこ
温室の外に横たう捨て案山子　　子
おそるおそるとシニア婚活　　山
猫被り年も鯖読む丙午　　つ
急な呼び出しスッピンのまま　　水
年の暮今年も同じ独り酒　　山
聖母観音夢に現れ　　山
夏の月調べはバッハカンタータ　　水
セレブ所有のヨットひしめく　　つ
お白洲にさらされる前議員辞め　　え
若手に老舗託す麗日　　水
予後も良し窓に明るき花吹雪　　山
鎮守の森に放つ蝶々　　水

平成二十八年度第七〇回芭蕉祭特選作品
平成二十八年四月二十四日首尾
（於・伊勢原シティプラザ）

『太陽の舌』

無季語歌仙

太陽の舌が私を追いかける　　日下部敦世
　瀝青割って伸びる巻き蔓　　松澤龍一
疲れたら休むがボクの信条で　　江畑哲男
　容は疎らの昼のシアター　　志田則保
近未来別荘で見る地球の出　　山本由宇呆
　リーンリーンと一人居の庭　　世
ウ園児らと三夕の和歌諳んじる　　龍
　天下泰平花鳥風月　　男
呼び鈴が見会いの話持って来る　　保
　トイレ掃除は軽い罰則　　保
ロボットの愛撫激しく正確に　　呆
　水素不足で止まる自動車　　世
助けての叫び無情の風が斬る　　世
　凝寂残し吸血鬼去り　　龍
その刹那見たいと思うビッグバン　　男
　ひだまりのねこあくび大きく　　男
老絵師の肺の中まで桃色に　　世
　創刊号のインクの香り　　龍
ナオ実家より釘煮炊きたて届く頃　　保
　言い過ぎはダメ選挙応援　　呆
お揃いのTシャツまるで似合わない　　世
　眠られぬ夜はサドでも読んで　　龍
後ろから前から攻めるテクニック　　男
　ムチを叩いて逃げる本命　　保
リーダーで名探偵で学童で　　保
　オリンピックに続く寝不足　　呆
がんばった銅が輝くサンバの夜　　世
　年齢という壁を乗り越え　　龍
渋滞の窓を彩るいろは坂　　男
　銀波に濡れる宿の飛び石　　保
ナウ賑わいの去った浜辺をポチと行く　　保
　味方の顔で握手しておく　　呆
語尾濁す癖も兵法かも知れず　　男
　終日のたりのたり転寝　　保
酒柱立って長屋の運試し　　呆
　光集めて駆ける少女ら　　執筆

（注）既存の季語を使わないで月、花、春夏秋冬を詠む。

平成二十八年七月　九日首
平成二十八年九月二十二日尾（文音）

歌仙『老次の四肢』

北原春屏捌

老次の四肢の力や梅雨晴間　北原春屏
　ふと見上ぐれば湧くよ北齊の龍　平良孝子
声高くピカソの青と筆振つて　近江綾乃
　前行く人の香りほのかに　井内温雄
草庵の石橋照らす十三夜　新宮照彦
　傾ぐ案山子のしばし踏ん張り　松本奈里子
柿ヶ一つ君の褒美に残つてる　神藤洋爾
　宝石箱の鍵が開かない　谷澤節
言ひ訳も愚痴も優しく聞く広さ　吉村佳代子
　二人で夢中椅子取りゲーム　石田千枝子
停年になると三食喰らふ気ね　孝子
　ダイエットとて蓬髪も刈る　春屏
冬の道膝鍛へんと膝痛め　孝子
　高き山門磴冴ゆる月　照彦
ここからはペットの散歩禁じます　千枝子
　給与は出たかリオの警官　佳代子
熊さんと八つあんが引く花車　千枝子
竹の秋風小野をわたりて　春屏
ニホニウム料峭の気の中にあり　温雄
　我が胸に棲む北齊の龍　洋爾
マネキンのトップモードの肌ピンク　照彦
　首のすげ替へ誰が都知事に　孝子
祇園会の注連縄切りは真つ二つ　佳代子
　牛頭馬頭汗の頬を弛めて　春屏
無理せずと言ひつつ厳しヨガの技　温雄
　愛されたのか騙されたのか　佳代子
だけれども妻との仲は五十年　洋爾
　たまさか電話詐欺かセールス　孝子
月白し心の内を見透かして　千枝子
　猫の背撫でて濁り酒飲む　小堀由紀子
渓流に紅葉かつ散り遊山船　佳代子
　トロッコ列車座席ガタゴト　照彦
灯り消え終着駅に客一人　宇野正明
　傘にささやくに春雨のうた　孝子
折紙の小鳥さへづる花の陰　奈里子
　幼稚園児に風やはらかし　千枝子

平成二十八年六月十八日首
平成二十八年九月十七日尾
（於・京都市国際交流会館）

《いわき・いわき文音連句の会》

佐藤禿山兄追悼

歌仙　『ひよどりは』

林　宗海捌

ひよどりは試練の海を越え行きぬ　禿山
　涼新たなる旅立ちの朝　遊糸
来し方を家郷の月に眺むらん　俊輔
　薬あれこれ入れるポシエット　笑女
妹は姉に似合はぬ器用者　宗海
　吊り床揺れる薫風の庭　禿山
水族館人気抜群大くらげ　遊糸
　酢物味濃き嫁の手料理　俊輔
四捨五入すれば傘寿よ背の丸み　笑女
　枯蔦からむ宮の狛犬　宗海
難問が解けて空には冬の月　禿山
　誕生なるか女性領袖　遊糸
移り香のスーツに残る帰り道　俊輔
　逢瀬重ねる焼肉の店　笑女
迷惑は口先だけとすぐに知れ　宗海
　相槌打つもうはのそらなり　禿山
ジグソーのゴジラ仕上がる花明り　遊糸
縞のキルトに蒲公英の絮（ナオ）　俊輔
　港目指して下る坂道　宗海
園児らのラジオ体操露晴るる　山
　集ふママ友尽きぬおしやべり　糸
家事番は草むしりなど屁の河童　輔
　女形の台詞やつと覚える　女
寝乱れの顔を繕ふ隠れ宿　海
　咬み痕なぞる紅差の指　筆
ペアカップ割つてうしろは振り向かず　糸
　賽は振られつ渡るルビコン　輔
望月のさやかに照らす島の影　女
　琵琶を弾じてしばし秋興　海
山（ナウ）の湯は合掌造り紅葉焚く　糸
　御堂の池を過（よぎ）る天雲　筆
石垣の崩れに残る夢の跡　女
　眼下の街に飛ばすドローン　輔
散る花にゆふべのこころ遥かなる　海
　霞隔つる幽明の境　筆

執筆

平成二十八年　八月九日首
平成二十八年十一月十日尾（文音）

KUSARI　『たのしい三句たち』

一月一日（金）

うかれ猫つま先立ちでいそいそと　あずき　(No.122763)

心休めてゆるり生きよう　ザリ

サイコロが飛び出してきた初箒　兎

一月十四日（木）　(No.122953)

移民船どの星区へと別れ行き　タヌ公

新たな進化神に委ねる　ゆづ

ガラケイで何か文句がありますか　美句志

一月二十日（水）　(No.123023)

ウルトラの星が故郷じゃしょうがねえ　タヌ公

多数派じゃない正義弾かれ　カンちゃん

水たまり避けて歩くか踏み込むか　みのり

一月三十日（土）　(No.123176)

女スパイの漆黒の髪　あずき

祖母ゆずり息するように恋をする　小町

一日限り酔芙蓉燃え　ザリ

二月二日（火）　(No.123243)

ベンチには一枚鳩の羽落ちて　タヌ公

雪のウサギが小さくしゃみを　カンちゃん

亡き母の星をさがしている少女　藍

二月二日（火）　(No.123246)

ちひろの切手買いに行かなきゃ　美句志

桃色のコスモスゆれる美術館　ザリ

立ちすくむのは遠い日の影　ひわ

二月四日（木）　(No.123263)

逃げ水の先に揺らめく君の影　深凪

神様どうか勇気下さい　ひわ

讃美歌が落葉の街に流れきて　コロン

二月五日（金）　(No.123278)

9条の重みまたひしひしと　ザリ

良くなると信じていたいこの世紀　ひわ

冬の砂丘のひとこぶらくだ　天球

二月八日（月）　(No.123323)

泡立てばアフロディーテが生まれ出て　タヌ公

巻き髪濡らす貝のバスタブ　ゆづ

雨がくる梔子の花よく匂い　霜月

二月二十九日（月）　(No.123576)

ポテトチップの袋がさごそ　兎

生きることあれこれ悩みまたゲーム　合

首や背中に湿布ペタペタ　おなすさん

三月六日（日）　(No.123653)

ツンとしてモデルはマント翻し　コロン

あんな男に騙されたとは
蛸の足くつくつ煮てる春の宵　藍
三月七日（月）
思い出を振り払っては今日の糧　小町
敗戦と言う重さずっしり　(No.123669)
落蟬は片翅ひろげ掃かれゆく　唯
四月一日（金）
絆創膏をはがす決断　露
息止めるその時間だけ無となって　兎
デジタル表示になるビッグベン　(No.123940)
四月四日（月）
密やかに咲く柊の花　ゆづ
レコードでプレイバッハをかける宵　あずき
あの頃という駅に降り立ち　ひわ
四月七日（木）　(No.123980)
公演はダブルキャストで幕が開く　ひわ
馬の脚A馬の脚B　藍
奥さんの人参サラダ絶品で　兎
四月八日（金）　(No.124019)
当面は議員辞職は決めてない　鵜
烏の鳴き声みんなおんなじ　兎
気にみちた針葉樹ある大社　コロン
五月二十七日（金）　(No.124031)
ヒロシマの71年前のこと　不用之助
大統領機青空へ発つ　唯
指きりはウソをつかないおまじない　露
七月九日（土）　(No.124637)
ウルトラマンどうもゴジラにラブメール　麦
3分だけの恋なんてイヤッ　コロン
食べごろよ私もカップヌードルも　ザリ
七月十四日（木）　(No.125201)
跳ね橋の傍にキャンバス置いたまま　天球
パンの欠片を鳥と分け合う　カンちゃん
僕らだけ残っちゃったねこの世界　タヌ公
九月二日（金）　(No.125365)
秋風に浅間のけむり流れゆき　コロン
何が悪いのブログ炎上　まちぼうけ
セルフィーの斜め45度目線　のら
九月六日（火）　(No.125665)
空高く君が好きだと狼煙あげ　ゆづ
遠距離交際次々と壁　ザリ
草引いてちょっぴり地球軽くする　兎
九月十日（土）　(No.125711)
素直に言えたあなたへの愛　ひわ
長いキス猫がするりと出ていった　藍
落書き消されさびしがる塀　兎
(No.125764)

九月十五日（木）

ドミノのピースそっと並べて

いつの間に茶色い戦争ドアの外

枯野の沖に小さき馬魂碑　　毛繕いする猿の行列

九月十八日（日）　十二月十九日（月）　ゆづ

太古の森に巨大クレーター　(No.125826)　(No.127278)

覗いたら見つめ返した君はだれ　天球　もと

孔雀の羽根を持つオダリスク　道草　タヌ公

九月二十三日（金）　兎　カンちゃん

青い空キューバの国の巻きタバコ　(No.125863)　(No.127334)

ドンガバチョとは愛犬のブル　まちぼうけ　コロン

ツナ缶を人様用かと確かめて　カンちゃん　あずき

十月十一日（火）　もと　もと

アメリカの大統領選泥仕合　(No.125932)　(No.127359)

ひらりとめくるトランプの札　不用之助　ハッピー

手のうちにキング4枚いざ勝負　兎　ひわ

十一月二十七日（日）　のら　コロン

見たくなし見たい気もあり大統領　(No.126445)　(No.127415)

アキバでお面買ってすぐ着け　伊都　天球

テレツクテン神楽ばやしが始まって　藍　唯

十二月十三日（火）　天球　兎

団塊世代は七十歳に　もと

第3次大戦の影忍び寄る　タヌ公

合　(No.127172)

ザリ

平成二十八年一月一日―十二月三十一日

（No.123207～No.127454）より抜粋

（於・HP矢崎藍の連句わーるど総合BBS）

歌仙『春嵐』

和田忠勝捌

春嵐過ぎて榛名の影の鋭し　松村妙子
　蝌蚪を掬って瓶に入れる子　宮脇昌子
桜散り漸く安堵仕事手に　柏元章
　ＢＧＭに合わす足元　昌
宵の口帰り仕度に精だして　吉川みつ子
　鯛焼ひさぐ横丁の月　臼杵游児
銀座には社会鍋出る頃となり　〃
　ネットで買って被災地支援　妙
イケメンに詐欺疑いつ深入りし　昌
　悪の囁き心躍らせ　村井昭三
搾乳器片手に仕事はげむ今　佐藤玻瑠
　桔梗の壺で生きる床の間　章
名墨を磨りつつ待てり月の友　児
　新酒の出来を篤と味わい　三
民意問う五輪の旗を受ける人　昌
　犬の散歩で候補者を知る　章
花の寺笑まい仄かに観世音　妙
　永き日を鈍行でゆく老夫婦（ナオ）　昌
レトロな茶房薫る珈琲　児
　写メールで安否の問いに応えおり　章
情報弱者孤独感増し　三
　いつになく親しみこめる選挙中　章
小便小僧今日は浴衣で　昌
　手をつなぎ連れ立ちて行く祭の夜　児
気付かれたくて髪を短く　章
　マフラーを幾重にも巻く向い風　妙
千切れ千切れに聞こゆ唄声　由
　月皓々国境めざす人の群　章
音信不通が盆の話題に　昌
　かりがね（ナウ）は常の如くに渡り行き　児
土管仕掛けのマリオ現わる　三
　原っぱは住宅街に変貌し　章
名残の雪に車待つ列　児
　窓開けて花の雲見るローカル線　三
青き踏みおり夢多のちちはは　み

平成二十八年四月十八日首尾
（於・ＮＨＫ文化センター青山）

歌仙『晋翁忌』

斉藤一燈捌

陽も風も草木も和む晋翁忌　斉藤一燈
すいと軽やか至る玄鳥　伊藤哲子
落慶の新客殿の温かに　小林静司
堂々として軸の墨跡　渡辺祐子
硯海に月の雫を享くるらん　別所真紀
太刀魚上げて悦に入る子ら　鈴木善春
わが宿にいまだ割れざる椿の実　中澤柚果
セーラー服の衿の白さよ　鈴木美奈子
彼といて小石を拾う苑の路　二上貴夫
愛の重さは計り切れずに　中尾美琳
雨垂れのノイズがとどく彼方より　竹村半掃
平和なりけり一椀のメシ　大塚丈湖
バーゲンで炭酸水をまとめ買い　鈴木ちかひ
月を涼しく渡りたい橋　中根明美
引揚げの苦労話を懐かしみ　石川桃瑪
魔王の騎士にまさるA・I　櫻田野老
餅花を飾りはなやぐ江戸歌舞伎　静司
祖母の遺した小袖まといて　前田明水
史書は皆男のいくさうたてしや　真紀
玩具の箱をひっくりかえし　明水
むらさきに百色眼鏡燦めきて　貴夫
高嶺の恋を胸に密かに　祐子
巴里うまれマダム好みの美少年　哲子
時限爆弾棚の上です　美琳
笛太鼓ならして湾の遊び船　一燈
ビール十杯詩五十篇　美奈子
左廻り右側通行ジョギングを　ちかひ
週刊文春カメラ抱えて　野老
サルトルとニーチェを語る望の月　善春
おかめこおろぎ長椅子に聞く　桃瑪
お袋は心に生きて走り蕎麦　丈湖
ドローン自在に大空をゆく　半掃
縄文の聖地の跡に電波塔　柚果
何かうごめく啓蟄の朝　真紀
阿夫利峰の雲来て翳る花万朶　宗匠
凩合戦の秘策授ける　執筆

平成二十八年四月二日首尾

（於・伊勢原上行寺新客殿）

―鈴木漠『連句茶話』刊行に寄せて

蜻蛉『上梓』

鈴木　漠捌

春闌くや上梓めでたき連句茶話　梅村光明
　手籠満たせるこごみ、薇　三神あすか
子供等の弾けたる声弥生野に　赤坂恒子
　オーケストラが一斉にやむ　山口雅登
月光に誘ひ出される音符たち　鈴木　漠
　定時たがはぬ夜学点灯　中野百合子
地芝居の台詞合せに所作も入れ　辻　久々
　愛の告白ぎこちなく為し　山名　才
日が経てば経つほど夢でも逢ひたく　自由律　中林ちゑ子
　湯湯婆を抱いて眠る習慣　〃　在間洋子
風に鳴つてゐる枯蔦が道づれ　〃　安田幸子
　電気と磁気とは兄弟にや　〃　土井幸夫
汚れし家鴨を小流れへ追ひ込み　〃　あすか
　俳号は我鬼といふ河童忌　〃　光明
くもの糸にすがる思ひは悲しい　〃　雅登
敷島は神様が多過ぎ　〃　恒子

片ゑくぼ笑顔にひかれプロポーズ　百合子
　独身貴族プライドを捨て　漠
明り消しカーテン越しの月今宵　才
　銀木犀の香る静寂　久々
ぬくめ酒針の噂も棒となり　洋子
　運筆の先自由自在に　ちゑ子
花の下うとうとするは占ひ師　幸夫
　くりやの窓に懸かる初虹　幸子

＊蜻蛉形式。林空花創案「胡蝶」のヴァリエーション。トンボの形態、4枚の翅と胴体になぞらへる。ナカ8句は自由律。ただし長句十七音、短句十四音に調へる。

平成二十八年四月十七日首
平成二十八年五月　八日尾

（於・兵庫県私学会館）

テルツァ・リーマ『大輪』

鈴木　漠捌

朝顔の大輪の耳そばだてる　（秋）　a　辻　久々
われからの音が寄する円窓　（秋）　b　赤坂恒子
古文書をめくる手捌き月は照る　（月）　a　中野百合子

秩序を超えて自由なノマド＊　（雑）　b　梅村光明
美丈夫がバンジョー奏でウィンクし　（恋）　c　三神あすか
藻塩焼くごと身を灼く竈　（恋）　b　鈴木　漠

歳末の地下街の店売り尽し　（冬）　c　山名　才
蕪の茎漬京の友より　（冬）　d　土井幸夫
豊かなる生活教育また福祉　（雑）　c　中林ちゑ子

風の又三郎来る日和　（雑）　d　安田幸子
終りなき夏と思へど雲流れ　（夏）　e　山口雅登
皮脱ぐ今年竹の葉そより　（夏）　d　森本多衣

たつぷりの墨汁つかひ言ひ逃れ　（雑）　e　矢野千代子
バックミラーに青き蛙が　（春）　f　植村　孝
仙郷にひそと咲くとふ花焦がれ　（花）　e　在間洋子

野遊に出て飛鳥、斑鳩　（春）　f　執筆

注
＊ノマド　流浪の民。遊牧民。
＊テルツァ・リーマ（三韻詩）。中世イタリアに起源をもつ脚韻定型詩。三の倍数行プラス一行で構成される。十四世紀初頭のダンテ『神曲　La Divina Commedia』は全一〇〇曲、一万数千行がこの形式で書かれた。
押韻形式は　aba/bcb/cdc/ded/efe/f

平成二十八年八月二十日首
平成二十八年九月　四日尾

（於・兵庫県私学会館）

《高松・おりいぶ連句会》

歌仙『木鐸の』

木鐸のごとく終日百舌高音　　沖津秀美捌

スーパームーン上る山の端　　沖津　秀美

新走りお国自慢のきりもなし　　岡田明子

猫が伸びする大欠伸する　　池内眞弓

箒目のすがしき庭に雨がきて　　新開悦子

槐の花の薫る径ゆく　　田中藤子

名古屋場所入り待ち出待ちギャルが増え　　清水定代

イケメン力士続く黒星　　悦

やんちやほど鍛へ甲斐あるおもしろさ　　藤

いつのまにまあ婦唱夫随に　　明

手招きの老占ひ師薄笑ひ　　明

眠れる獅子がむつくりと起き　　悦

雪合戦敵は誰やら月皓々　　代

口に蕩ける風呂吹の蕪　　代

Uターン親の跡継ぎ宮大工　　美

デビッド・ボウイ　ロック魂　　美

桃色に虚空みだりて飛花落花　　弓

ひらり暖簾をくぐる春光　　藤

這ひはひを始めた嬰児に祝ふ雛　　弓

ゼリー・ビーンズまづはどれから　　悦

朝のヨガ夜の看経ルーティーン　　代

越の秘湯に咲ける湯の華　　代

掌に余る胸乳の汗ばみて　　美

褥にかざる昼顔の白　　弓

絡まれる人間模様罪を呼び　　美

タンス預金を狙ふ甥つこ　　藤

逃げ足は八艘跳びのE難度　　弓

投稿DO画いいねすごいね　　悦

月淡しおいてきぼりの我が海馬　　代

残る蛍の過ぎる草庵　　悦

にぎやかなマドンナツアー秋うらら　　明

グーテンターク・ボンジュール・チャオ　　代

彩雲に透く皆既蝕美しく　　美

宇宙に馳せる少年の夢　　弓

満開の花の浄土に迷ひ込み　　藤

心字の池に蝌蚪の紐揺れ　　明

平成二十八年一月十六日首
平成二十八年四月十六日尾
（於・CO－OP小会議室）

非懐紙尻取り押韻『茶話（チャット）』

鈴木　漠捌

お喋りに森羅万象浮いてこい　梅村光明
濃い藍染めも粋な羅（うすもの）　赤坂恒子
物腰も余所行きにする茶席にて　永田圭介
二転三転いつものに決め　永田康子
木目込みの人形月にいよよ映え　上田真而子
生え際さやか髪を靡かせ　淵沢純平
稼ぎなし駆落ちの恋芒原　辻久々
ハラスメントの果ては煉獄　岡本信子
極道をやめて情けの道ひとつ　三木英治
十津川峡の吊り橋ぞ良き　鈴木恒子
預金から冬の月光引き出さん　小池正博
賛否を問うて鍋は河豚ちり　在間洋子
ちりあくたエントロピーに増ゆる性（さが）　土井幸夫
探し求める幸（さち）はいづこぞ　安田幸子
去年今年放浪猫の帰るなり　時里二郎
成駒屋屠蘇にその頬赤く　矢野千代子
隠処（かくれが）は伊丹にありて文披（ひら）く　今村欣史
楽書（らくがき）謀る折（をり）丁（ちやう）に虻　清水恵子

あぶな絵も美しく見え花の影　東條士郎
陽炎の坂乳母車押し　鈴木漠

＊尻取り押韻は挙句から発句へ循環回帰。

平成二十八年七月二十八日首
平成二十八年八月　十日尾
（於・白雪ブルワリーヴィレッジ長寿蔵）

歌仙『観覧車』

観覧車寒九の雨を丸く切る　梅村光明捌
沖に鯨の泳ぐ内海　大山今日
征戎の旗と棚田を引き継ぎて　梅村光明
母子楽しげに続く手遊び　田代洋里子
昼月に行司の声の高く澄み　郡山節郎
赤蜻蛉弾く古きオルガン　前田豊
我が物と印付けたる野木瓜何処　弓場桐女
また惑はさる甘き言の葉　日高うんま
腐れ縁愛を深める大胆さ　五郎丸照子
たぐり寄せても糸は縺れて　光明
自分史は傘寿迎へて終章に　今日
待望の孫おくるみの中　節郎
歌姫のドレスを照らす夏の月　豊
薩摩の盃に焼酎を酌み　永濱瑞穂
もてなしは郷の育む黒豚で　桐女
したり顔にて般若経詠む　豊
弾痕に今はを偲ぶ花の果　照子
挨拶交はす遠足の列　うんま
土匂ふ淋しき午後は鏡見る　今日
懐メロ聴けばよぎるあの頃　光明
訳ありのアンクレットをさりげなく　瑞穂
ピカソ展ゆゑ解るふりして　節郎
聖家族教会ほんにひえびえと　洋里子
庭飼ひの犬炬燵ほしがり　豊
無沙汰詫び無事を届ける年賀状　桐女
姫始めなぞ遥か昔よ　うんま
生き難き定めに馴れし左利き　照子
ケーキ焼く人目尻下がりて　今日
満月はメルヘンに満ち兎棲む　光明
梁を仕掛けて獲りし落鮎　洋里子
秋祭太鼓踊りの鉦の音　桐女
熱き掻揚げ吹いて頬張る　うんま
被災地の友に応へるボランティア　照子
くまモンも出て守る石垣　今日
比類なき心の花に覚えあり　光明
息呑んで観る蒲公英の絮　洋里子

平成二十八年一月二十一日首
平成二十八年五月　七日尾
（於・鹿児島市よかセンター&文音）

『白炭や』

脇起世吉

別所真紀捌

白炭やかの浦島が老の箱　　翁
蜜柑剝きつつ母は語部　　別所真紀
寒稽古誠の一字掲げあり　　山田右左子
締め直したるビオロンの弦　　鈴木美奈子
絵タイルを嵌めれば壁にガレー船　　渡辺柚
家出の猫を探す探偵　　小松知二
湖の面に散る月光ヶのおぼろにて　　西川菜帆
開き初めたる梅の馥郁　　服部秋扇

百ゥ年の次の百年蚕飼ふ　　江下緋紗
振り返へり見る少年の空　　伊藤哲子
ジョーカーを引いてしまひしはつ恋は　　福永千晴
泪のナイフ砥ぐよジェラシー　　扇
本命と柩覆ひて後知りし　　柚
病葉を踏みし哲学の径　　奈
デカンショと伝説つたへ冷酒を　　哲
崖の羅漢を濡らす夕立　　帆
飢餓の子をマンスリー寄付で救ひましよ　　扇
むごき映像飾る言の葉　　晴
にんまりと床柱背に生き御魂　　紗
赫々揃ふ鶏頭の丈　　知
花相撲軍配月に翻り　　哲
打ち上げ待ちてすだく蟋蟀　　石

若冲（ナオ）はラピスラズリを磨りに磨り　晴

狂気すれすれ意地と本気と　柚

貝印聖地巡礼道標　知

胸の奥処に埋火のあり　紗

禁断の罪負ふふたり凍てを抱き　柚

しづくとなりて雪女消え　扇

ヒラリーはガラス天井破られず　紀

実現するか移民排斥　右

風紋の砂漠に覇王樹林立し　帆

鰻の匂ひ満ちる駅裏　哲

便利屋は子守・買出し・ふき掃除　〃

郷土訛りののこる介護士　右

月の出を遅しと待ちぬ草泊　紗

ボージョレヌーボ唄へシャンソン　奈

朝顔（ナウ）も種となりたる千代尼の忌　扇

いぬゐの井戸に吉相を観て　帆

パッチ穿き梯子曲乗り鰯背なり　奈

叱咤激励師弟なごやか　晴

進化する明日のロボット怖ろしき　〃

睢鳩漁る料峭の磯　扇

青丹よし大和まほろば花埋む　紀

緑萌えそむ新しき島　柚

平成二十八年十一月十七日首尾

（於・セシオン杉並）

歌仙『走る子も』

走る子も萩の花くず除けて行く　伊藤　草雨捌
　後追ひかける白き夕月　青山晴峰
この秋を惜しみつ宿の窓あけて　瀧澤樵子
　谷川の音どつと入り来る　尾関　龍
青蛙ほつぷすてつぷはいじやんぷ　瀧澤三休
　縁台将棋外野うるさく　伊藤草雨
孔明(ウ)も官兵衛も去り夜は更ける　晴峰
「私は歴女」と君はかがやく　樵子
「かわゆい」と皆に言はれて落ち着かず　龍
　降りみ降らずみさだまらぬ空　三休
いやはやと大統領選にあきれ果て　草雨
　逆転さよならグランドスラム　晴峰
雪の道灯りはいらぬ月皓々　樵子
　味ようしみたおでんの玉子　三休
「風姿」と石彫の在り御堂筋　草雨
　じつと動かぬ托鉢の僧　晴峰
明けそめし空にとけゆく花の雲　樵子
　今日は江の島ボート競技に　龍
肩組(ナオ)みて歌ふは寮歌春灯下　三休
　時は移りて今や仇敵　樵子
博士にもならず大臣にもならず　晴峰
　目指した道をひたむきに行く　龍
大年寺忍び音もらすほととぎす　草雨
　星ふる如くほたる飛びかふ　三休
帰らぬを覚悟の上で発つ知覧　樵子
　天長地久二人でひとり　晴峰
火あぶりになりてもいとし名を呼びて　草雨
　高さを誇る南アルプス　龍
外に出でてスーパームーン幾たびも　三休
　芝生の庭に結ぶ露霜　樵子
銀(ナウ)杏散る古寺の屋根隠すまで　晴峰
　ディランは歌ふ風に吹かれて　三休
哀惜はつもりつもりて慨嘆に　樵子
　子役の仕草に笑ひ弾ける　晴峰
盃に花びら浮かべ花見酒　三休
　猫の目細くあたゝかき午後　龍

平成二十八年　九月二十五日首
平成二十八年十二月二十一日尾（文音）

歌仙『心太』

イーゼルをたたみ茶店の心太　吉田酔山捌
初鰹のとまる赤松　河田水尾
書斎には秘蔵の壺の飾られて　種川とみ子
ゴルフ場へと通ふ週末　松田俊夫
再会を約して仰ぐ円き月　吉田酔山
山の湯宿に茸市立つ　北川稔
栗(ッ)をむく渋に染まりし細き指　水
行きつ戻りつ文を待ち居り　稔と
直木賞妻と涙の受賞式　俊と
サルベージする持寄りパーティー　稔と
おばさまは韓流ドラマ狂ひにて　俊と
寒の三日月機窓より見る　稔水
隣席と風邪声同志ご挨拶　章稔
テロや暴力何処も彼処も　柏元章
サンバにてオリンピックを歓迎し　俊と
遅刻遅刻と駆ける子供等　稔と
老木に艶なる花の咲き乱れ　章と
酒ふるまひて鬼踊りする　おなじみのシルバー理髪客のどか　俊と
ぐるぐる回る三匹の虎　稔と
今朝も亦部長威張つて長話　章
桂米朝もつと聞きたい　俊
懐かしきミニスカートの古写真　と
氷いちごをあーんして食べ　稔と
宵宮でこんな二人になりました　章
道を忘れて頼るケータイ　俊
測るたび腹囲体重増えに増え　章俊
毛生え薬を持ち歩く兄　山
満月を傍に置きかこむ盤　俊
秋風運ぶチャルメラの音　稔
木(ナウ)の実降る庭に淋しさ募り来て　章
パソコン教室集ふぢぢばば　水
コーヒーの自慢話で盛り上がり　稔
手作りの菓子甘さ控へめ　俊
反芻の牛の眼に映る花　山
ドレススカーフ春の装ひ　章

平成二十八年六月二十九日首
平成二十八年八月　三十日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『紛れし蛍』

闇深き方へ紛れし蛍かな　古川柴子
　予報通りに吹くは黒南風　柚
手造りの椅子に最後の釘打ちて　游児
　四齣漫画読み耽り居る　直樹
高層のビルの挿頭せる二日月　ドーピングせるメダル大国　安恵
　南瓜収獲地下の農園　柴子
万鬼祭児のそれぞれのみやげもの　世の隅にひつそり暮らす性分で　游児
　銃の規制がまたも課題に　游児
フェルメール神秘的なる澄んだ青　冷酒少々夜の楽しみ　知二
　眞珠のピアスそつと外せる　白檀の香りいづくの扇から　藤樹
告白の後は大胆好きにして　看板娘錦絵となり　游児
　枯れた蓮にも明日はあるのさ　決着は眞剣勝負武士と武士　柚
冬満月照らす上野のホームレス　トランプもよしヒラリーもよし　知二
　近頃滅つた町の野良犬　測られぬ未来を月の嘆きをり　藤樹
異文化の屋台賑はふ駅の裏　鯊釣る親子並ぶ岸壁　安恵
　何かが変はる予感嬉しき　峠越え友と参ぜし御命講　游児
学舎に花咲き散りて卒業す　鍵を咥へし鴉頭上に　柴子
　墨堤濡らす荷風忌の雨　卓袱台をたためば広き四畳半　直樹
　　触れ太鼓行く春場所の街　柚
　　花満ちて客に披露の金蒔絵　柴子
　　大和まほろば霞棚引く　直樹

平成二十八年六月二十九日首
平成二十八年八月　三十日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『小鳥待つ』

小鳥待つ蹲の水溢れさし　　河田水尾
　辿る庭先こぼれ散る秋　　臼杵游児
月の窓討論会は熱帯びて　　渡辺　柚
　五輪終幕いとも華やか　　橋本直樹
レトロなる茶房に流るピアノ曲　　北川　稔
　仕立おろしの浴衣ごはご　　〃
富士詣世界遺産に列続き　　柚
　昔巻狩今は調練　　児
核兵器反対の声澎湃と　　直
　握手会へは会社早退　　直
薔薇色の人生などは無いと知り　　柚
　百八の鐘パソコンで聴く　　柚
背筋を伸ばしつ仰ぐ寒の月　　児
　友の訃報にひとり酒酌む　　水
宿帳の癖字骨太右上り　　直
　門構えだけ残る本陣　　稔
読みふける時代小説花の午後　　直
漸く腰をあげて炉塞ぎ　　柚
何時(ナオ)の間に少なくなりし雛あられ　　直
　国境越えて群れる難民　　直
棟上げの仮設住宅次々に　　稔
　語り部タクシー三時間です　　柚
お掃除も食事作りもロボットで　　直
　ショートパンツの脚のすらりと　　水
アンニュイに横たふきみは籐寝椅子　　柚
　若冲画伯裸婦に恋せる　　〃
湯治とて柚子湯に浸る爺と婆　　直
　風運び来る猿の啼き声　　児郎　出口治
直ぐ近くスーパームーンまざまざと　　直
　先を争ひ落ちる団栗　　直
オルゴール(ナウ)また捲きなほす文化の日　　水
　過ぎにしことは茫々として　　直
ふるさとは東京沙漠といふ処　　治
　卒業式の予行演習　　水
花一枝簪に挿して騎馬の武者　　直
　春の名残りに吹くは篠笛　　治

平成二十八年　九月二十四日首
平成二十八年十一月二十六日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

二十韻　『高速道路』

衆議判

天の川高速道路真南に　生田日常　義
濁り酒きく名月の宿　杉浦芳子
七輪の秋刀魚の煙目にしみて　大塚綾子
角駆け抜ける子らのにぎやか　高山鄭和
スマホ持ちコンビニ探すイラン人　近藤礼子
片言英語恋の予感が　新井節子
帯を解く翡翠大玉気にしつつ　和
ヒップホップで痛めたる腰　吉田酔山
揺るるたび磁器風鈴を見やる猫　礼
赤富士かかる玄関の壁　和

家出する短き詫び状母に書き　池田やすこ
魂込めてボール蹴りあげ　綾
手袋のサイズぴたりと当てる彼　こ
夫婦湯舟で見上ぐ凍て月　礼
里山は工場団地へ様変わり　節
ぬらりひょんとてついぞ居辛く　和
神主は修士課程を修了し　山
別荘で聞く小綬鶏の声　節
雑草の芽吹きし庭に花のひら　綾
碁盤を囲む麗らかな午後　礼

平成二十八年　十月　三日首
平成二十八年十二月二十日尾
（於・菊名コミュニティハウス）

歌仙『春の宴』

磯　直道捌

大内善一　叔母百歳甥は傘寿や春の宴
永見徳代　庭に咲き出づ梅の馥郁
東浦佳子　行く道ははるか囀り溢れつつ
佐藤澄江　福の一字の大き扁額
小川廣男　月今宵来し方美しき父祖の里
石川としじ　ちちろ虫鳴く路地の裏径
安藤君子　教会の鐘の音ひびき爽やかに
新相節子　胸に手を当て祈る永遠にと
岡村和可　二階から老師の謡なやましき
山澤カツ子　玄関わきに子供自転車
駒村多賀子　川越の町並みつづく蔵造り
倉澤以世子　寄り添えばなお利酒の酔
躰中ぬい子　白南風に手を握りあい月の暈
遠藤久美　煙たなびく蚊遣火の渦
善一　介護終えひとりの夜はカップ麺
渡辺ハツエ　安アパートはがたぴしとして
永雄瑞子　和服着て花の下なる異邦人
田村昌江　旅愁の雲にシャボン玉舞い
吉田武憲　送り送られここでお別れ
服部早苗　ラヴレター逢う日逢う時あざやかに
佐藤治子　宅配便でとどく好物
鈴木裕子　炬燵して一家団欒笑い声
柳田トシエ　電飾聖樹輝いており
佳子　ふと迷う異国の街を行く如く
徳代　エルメス・ビトン並ぶ横文字
カツ子　姿見に同窓会の服チェック
ぬい子　あちこち汚しまといつく犬
以世子　降りそそぐ月の雫を萩宿し
多賀子　水の澄みたる軒のつくばい
久美　逝く秋に膳をかこみてとろ汁
君子　社の縁のひろびろとして
節子　古都の道女子マラソンが走り抜け
としじ　予選めざして競い合いたる
江末典子　歓声のどよめき烈し花万朶
稲川久見子　うからやからの暖かきかな
磯　直道　子雀が地蔵の肩で羽根休め

平成二十八年二月二十六日首尾
（於・川口総合文化センター・リリア）

歌仙『師を慕い』

師を慕い花をたどりて二十年　大内善一
頬にそよ風鳥帰る空　吾妻山
仰ぎ見る山々なべて霞みたる　城戸雅康
本当の空かくもありなん　遠藤久美
昇りくる望の月なり煌々と　倉澤以世子
笊に盛られる里の茹で栗　戒能多喜
在祭つどうはらからひきつれて　佐藤澄江
思えば遠き初恋の人　長瀬光江
勝ってよし負けてもよしと馬の汗　岡村和可
蕎麦を堪能舌鼓うち　新相節子
「くさくき」の弥栄祝い酌み交わし　大江加代子
乗り越えて来し寒月の夜　渡辺ハツヱ
冬波を実習船は分け戻り　村上孝枝
青春の歌唄う若人　沖村むつ子
恒例の吟行会に各地から　高橋鈴子
宝満栽いざや出発　松永由紀
災害の泪を癒す桜咲き　川崎たけお
ただうらうらと過ごす永き日　小川廣男

磯　直道捌

磯　直道
利根川　裕
鈴木美砂子
一色采子
鈴木安一
渡辺俊子
山澤カツ子
井上雨道
星野秀夫
白鳥恵里子
武智紀美
永見徳代
東浦佳子
守口　薫
佐藤治子
渡部奈緒
廣渡雪路
清　きくえ

平成二十八年四月十八日首尾

（於・岳温泉あづま館）

歌仙『残雪の』

残雪の眩しく鳶は高く舞う　磯　直道捌
　のどけき野辺にうかぶ昼月　〃　直道
遠足の子等菜の花の中にいて　服部早苗
　口笛吹いてよぎる自転車　渡辺ハツヱ
国を出て駐在暮し早や十年　〃
　昨日も今日も暑さつづける　小川廣男
蝙蝠のひらりと寺の裏に消え　ハツヱ
　待ってもこない人と知りつつ　廣男
選り好みしているうちに行かず後家　佐藤澄江
　ペットブームは猫に変りて　石川としじ
辣韮がカレーのわきにつつましく　新相節子
　風船葛揺るる路地奥　吉田武憲
月今宵世の隅々を照らしたる　〃
　ひとりぼっちで案山子淋しげ　〃
カネからみ都知事自ら辞職して　ハツヱ
　医者の前ではあがる血圧　〃
大川の花屑分けて船のいく　〃
天に届けとゆらすふらここ　節子
　蜜蜂はここを先途と飛び回り　廣男
ネット告白噂炎上　〃
ブーメランいずれ戻ると笑う妻　節子
　ポケモンGOで西へ東へ　澄江
旅好きと言えどあの世は早すぎる　〃
　扉を叩きやまぬ北風　ハツヱ
遊歩道銀杏落葉で埋めつくし　〃
　鈴の音ひびく神宮の杜　〃
ビル街の呼び名のなにか古めきて　澄江
　多種多様なる外人の客　ハツヱ
夜半の月流れ行く雲よせつけず　節子
　温め酒を独り楽しみ　澄江
身に入みて哀れをさそう鹿の声　ハツヱ
　候補地二三決めるのに難　武憲
寄付つのる帳簿早々廻り来て　大内善一
　空の青さがつづくこの頃　〃
故里は見渡す限り花万朶　澄江
　春惜しみつつ口遊む唄　〃

平成二十八年十月十六日首尾
（於・川口総合文化センター・リリア）

歌仙『師と酌めば』

師と酌めば残雪の嶺々光り合う　磯　直道捌
　千金の夜をのぼりくる月　磯　直道
咲き満てる梅の老木匂いて　服部早苗
　ペットをつれて励むジョギング　東浦佳子
休日のカジュアルルックとりどりに　佐藤治子
　古風な店で氷菓食べつつ　永見徳代
御輿(ウ)待つ祭姿のいなせなる　佳子
　芽生えし恋の噂ちらほら　徳代
肩寄せて地震の街のボランティア　〃
　高速道路未だ渋滞　永雄瑞子
期待せる小さき田圃にみのる稲　〃
　赤とんぼ飛び風のさわやか　徳代
夕月に逝きたる人を偲びつつ　早苗
　平家琵琶の音耳に残れる　〃
あやかしの惹きいる舟か波の間に　治子
　政治のゆくえ賛否両論　瑞子
花咲きて散りて白寿を生きる母　佳子
　牧をせましと走る若駒　うらうら暮れかぬる頃楽しみて　瑞子
　座禅の肩に痛き一撃　早苗
じゃじゃ馬を口説き落とせば人の妻　安藤君子
　計り難きは女心よ　徳代
病窓に大きな霰降り出せる　佳子
　旅の写真の年賀状きし　早苗
そこここにT字路のある城下町　佳子
　会津若松墓所の多くて　徳代
ふるさとで予後を養うことにせる　早苗
　ローランサンの画集鞄に　徳代
名月をつとよぎりたる宇宙船　君子
　団栗独楽で遊ぶ子供ら　治子
秋(ナウ)日和五輪のメダル四十余　佳子
　世界の国旗はためいており　君子
つつがなく何事もなく安堵して　治子
　加減よろしきお薄いただき　佳子
就職の記念の花のほころびし　〃
　希望に満ちて開く北窓　早苗

平成二十八年十月十六日首尾
（於・川口総合文化センター・リリア）

歌仙『小春かな』

磯　直道捌

窓硝子青く透きたる小春かな　磯
　白い足袋はく祖母の足元　直道
どこからか朗々謡聞こえきて　田村昌江
　幼なの舞台胸がどきどき　石川としじ
昼の月幻のごと覗くらん　新相節子
　風のさやげる荻の一叢　稲川久見子
ヴ棚経の僧はバイトのにわか僧　直昌
　今も変らぬ故郷の川　と
長風呂が気になりそっと声をかけ　節
　視野をよぎるは鳥の影かも　久
蚊遣りの香ときおりほのとただよいて　直
　月涼しさに浴衣姿を　と
大臣の辞職会見号外に　昌
　溜まるストレス上がる血圧　直
海外に「ハチ」の映画を放映し　と
　今さかんなる渋谷界隈　節
若者が両手に掬う花吹雪　久
温かご飯独活の天麩羅　昌

ナオ恋猫の鳴き声夜半にこだまして　節
　八卦の出店暗き灯の下　久
相性は良いか悪いかためらいつ　直
　頭に浮かぶ彼はいずこに　昌
人だかり兄は若手のコメデアン　と
　熱燗あおり急ぎ家路へ　節
枯枝のおたけびを招く細き道　久
　高みに見ゆる産土の杜　直
狛犬の頭をカラスのぞきこみ　昌
　いつもゆれてる山の吊橋　と
望月の影は水面にゆれており　節
　茹で栗さげて友の来訪　久
ナウさわやかな旅の話にもりあがる　直
　老人クラブいつもにぎやか　昌
喫茶店どこもかしこも禁煙と　と
　デートの春着何を着ようか　節
相聞の文もまじって花の屑　久
　翁の句碑に黄蝶白蝶　昌

平成二十八年十一月十九日首尾

（於・川口西公民館）

歌仙『麦の風』

麦の風銀輪は黄に呑まれけり　廣渡雪路
いろとりどりの夏帽の子等　佐藤ゑつ子
くっきりと川面に浮かぶ山見えて　松田千佐代
開いたままの読みかけの本　ゑ
名月は茶室の窓を照らすらん　千
しきりに集(すだ)く虫の合唱　雪
爽籟(ウ)に阿羅漢さんの眠り癖　ゑ
壁の名画は若き深水　篠原正明
赤い糸結ばれたまま共白髪　ゑ
夢で会いたる相愛の亡夫　千
大臣となりし後輩笑み浮かべ　雪
五臓六腑に染みわたる酒　ゑ
裏門の松にかかりて冴える月　正
テレビ画面に諏訪御神渡り　千
アルバムの旅の思い出なつかしく　ゑ
プードル鳴いてねだるお散歩　千
ガラス張りビルに映りし花吹雪　正
句帳に記すのどかなる刻　千
藤房(ナオ)の肩にふれたる人の列　正
同級生と交わす挨拶　雪
危ないと知りつつ覗く恋の淵　ゑ
逃避行したイケメンの彼　千
由緒ある書院の欄間鴛鴦涼し　ゑ
土用の鰻塗り盆の上　ゑ
青空に高く舞い上ぐ竹蜻蛉　正
再び三度襲う震災　ゑ
足腰の弱りし母を介護して　千
大波小波寄せる砂浜　千
原発の建屋に曇る盆の月　ゑ
推敲の筆迷う肌寒　ゑ
故郷(ナウ)の天守に映ゆる照紅葉　千
イベントホール出店賑わい　ゑ
金髪のピエロかわいや人集め　雪
ひとはけの雲ゆるく流れて　ゑ
鉄の街眼下に見ゆる花大樹　千
陽炎もえて塔の傾く　正

平成二十五日首
平成二十八年十二月二十二日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

歌仙『合歓の花』

村上孝枝捌

合歓の花紅を刷かんと空仰ぐ　孝枝
　おはぐろ蜻蛉遊ぶ川の辺　康夫
旨き茶を淹れて友達もてなして　敏夫
　碁石碁盤をやおら取り出し　雅子
向嶺をはなれて昇る望の月　常子
　刈り入れ近きさ揺らぎの稲　孝枝
旅の宿霧笛長々引きずりて　雅子
　老いても恋はいつもどきどき　敏夫
三度目の結婚決意定まらず　敏夫
　電光板を濡らす大雨　雅子
自爆テロ納得いかぬパリの街　常子
　冬の三日月いたく寂しく　孝枝
鍋の底煮凝見つけ喜ぶ子　敏夫
　テレビはどこも料理番組　雅子
熟練の医師も胆石取り出せず　常子
　神苑の鳩うずくまる午後　孝枝
爛漫の桜そびらに盃重ね　敏夫
　万歳の声飛ばす風船　雅子
体操選手くるりバク転　雅子
　喧騒の中に貴男の面影を　常子
日記に記す愛し言の葉　孝枝
　打ち水に京の格子戸ひっそりと　常子
涼しき風の生るる蹲踞　孝枝
　ふと覗く座敷わらしの笑い顔　雅子
トランプ効果株価上がりて　敏夫
　高き山踏破も下り要注意　雅子
行方不明の魂に念仏　孝枝
　刻待てるスーパームーンのぼり初め　敏夫
影を写して障子貼る人　雅子
　連雀の群れチリチリと鳴き交わし　孝枝
リュック背にして捜すポケモン　敏夫
　洞窟に縄文人の骨見つけ　雅子
湧きくる水の永久に絶えなく　孝枝
　八重の花彩そのままに房落とし　雅子
ぽっかり浮かぶ春の白雲　敏夫

平成二十八年　八月二十五日首
平成二十八年十二月二日尾
（於・北九州市立貴船市民センター）

『彼岸の入』

脇起歌仙

立花千代満捌

毎年よ彼岸の入に寒いのは　正岡子規
　音もしづかに降れる春霖　立花千代満
仕舞屋にぽつりぽつりと雛の客　高木幸恵
　眼鏡フレームポルカドットで　名本敦子
タクシーに行き先告げてすぐ睡り　千
　月光にぬれ匂ふ新緑　敦
立札に「まむし注意」の文字見えて　幸
　そそくさとゆくバックパッカー　山岡良春
黒髪とファドの音色の忘られず　敦
　ハーフの美人子供三人　幸
真実は神のみぞ知る藪の中　千
　公私混同政治混沌　幸
門前で犬の吠えゐる寝待月　幸
　どこへ隠さうどぶろくの壺　良
今さらに先師の教へ身に沁みて　敦
　座り胼胝にも個性あふるる　敦
花満ちて金毘羅歌舞伎真つ最中　幸
風にふはりと赤い風船　幸
店頭（ナオ）にやつと出ました蓬餅　千
　電動自転車バッテリー切れ　千
プーチンの遅刻常套手段にて　幸
　お湯に浸かるも旅の醍醐味　良
寄り添ふは一つ目小僧かもしれず　千
　夫の粗は見ぬ松の内　敦
破魔矢受け不倫の過去はご破算に　幸
　人通りなき雨の街角　幸
窓ガラス曇つてをりぬカフェテリア　千
　好きな香りのハーブ育てて　敦
尋問の部長刑事に月明り　良
　途切れがちなる邯鄲の声　千
傾（ナウ）ぎつつ精霊舟は沖めざし　敦
　夢に終りしホールインワン　幸
地球儀に印をつける旅のあと　幸
　飛行機雲はほどけつつ消ゆ　良
花万朶見知らぬ人と相笑みて　敦
　光のどかに手話の美し　千

平成二十八年十一月十九日首
平成二十八年十二月十七日尾
（於・松山市民会館並びに文音）

歌仙『冠雪』

冠雪の裾を隠して雲の秋　菅本　つね捌
　待宵月は残照の中　名本敦　子
走り蕎麦支度ととのう頃ならん　菅本つ　ね
　魚拓を飾るリビングの壁　寺岡美千穂
箒持ち校長先生忙しく　〃
　蚊取線香煙らせておりウから元気連れ立って行くきもだめし　敦　子
胸の動悸のシンコペーションお姫様だっこはいつになるのやら　中田くに子
　筋トレマシン選ぶ通販　つ　ね
自分への褒美たまにはステーキで　敦　子
　鍵盤すべて叩くエチュード　くに子
白兎月に小耳をぴくぴくと　美千穂
　囲炉裏をかこむ親子七人　く　に子
ビー玉を覗けばみんな逆さまに　堀元み　え
　スイング・バイに賭ける探査機　敦　子
花浴びて天を指さす甘茶仏　菅本　つね
　黄砂曇りの瀬戸の島々　ナオ春の夢フルカウントでホームラン　美千穂
魔法の杖で呪文唱えて　くに子
腰痛の患者混みあう整形科　つ　ね
　マイナンバーは何のことやら　み　え
恋多き閨秀画家の夕端居　敦　子
　すだれは無口睦言の傍　美千穂
新聞を勧誘員にせがまれて　つ　ね
　憂さを忘れて二合半の酒　み　え
友誘い団体バスで秘湯旅　くに子
　バッグの中の飴ちゃんの数　敦　子
うっすらと雲を纏える月の舟　美千穂
　仄かに薫る木犀を嗅ぐ　つ　ね
ナウ久々に氏子出そろう村芝居　み　え
　元気な婆は破顔一笑　くに子
生ゴミを突く烏を追っ払い　菅本達　雄
　模様替えして気分転換　山本栄　里
たたなわる遠近の山花朧　つ　ね
　初虹淡き子規のふるさと　執　筆

平成二十七年十月二十一日首
平成二十八年一月十九日尾

（於・庚申庵）

歌仙『鶏頭に』

鶏頭に錆のきてゐる海の音　　中田くに子　捌
うす皮ほどの淡き眉月　　堀元みえ
ほつこりと炊きし里芋小鉢にて　　中田くに子
父の日記はたつた一行　　寺岡美千穂
新型に替へて洗濯乾燥機　　名本敦子
枯蟷螂のすがる縁先　　〃
困の温泉街に人力車　　みえ
打ち出の小槌旅のお供に　　くに子
憧れの女から秋波送られて　　美千穂
互ひに隠す恋の遍歴　　くに子
鵜簀の消えて月光いや増せる　　みえ
瓶の梅酒はキッチンの隅　　敦子
近頃のテレビ番組つまらなく　　美千穂
リタイア以来趣味はオカリナ　　みえ
前場後場株価の上下気にかかり　　敦子
水晶の数珠腕できらきら　　美千穂
飛び跳ねてきやりいぱみゆぱみゆ花の下　　くに子
初虹にじむ新宿の空　　敦子
亀鳴いてツインタワーは揺れはじめ（ナオ）　　美千穂
ほろ酔ひの夜は夢の翼に　　くに子
いつの間にどこより来しかエイリアン　　みえ
お安くしまうす崖上の家　　美千穂
地震、テロ心配の種きりもなし　　くに子
未来信じてごまめ数の子　　敦子
湯ぼてりのうなじ艶めく姫始　　みえ
床旧りてなほ仕草いとしき　　美千穂
錠剤で高血圧をなだめつつ　　敦子
未練の残る大臣の椅子　　くに子
月まどか阿吽の狛の鎮まりて　　みえ
山の窪みに天狗茸生ふ　　敦子
秋（ナウ）高くホームの叔母はつつがなく　　美千穂
羽織り解いてしやれたバッグに　　くに子
焙煎のコーヒー香るクラス会　　みえ
仔犬じやれ合ふ日溜りの庭　　美千穂
水軍の物見の跡に花万朶　　くに子
浅葱に霞む里をみせばや　　敦子

平成二十七年十月二十日首
平成二十八年二月十六日尾

（於・庚申庵・文音）

歌仙『こうの鳥』

川島七重捌

空遠くこうの鳥舞ふ彼岸かな　川島七　重
　ペンペン草の騒ぐ畑面　大月西　女
入学児負ひては下ろすランドセル　渡部晃　子
　鍵をしつかと三畳の部屋　荻山玲　幸
カップ酒語り合ひつつ愛でる月　晃
　園のベンチに風のさはやか　西
白檀の香り仄かに捨扇　玲
　ネールアートの派手なデザイン　七
育メンの元祖は憶良かも知れず　七
　浮気の果に議員失脚　晃
今もなほ基地問題は尾を引きて　晃
　神父はいつも布教活動　西
隠沼に月を眺めるかはたろう　玲
　祭太鼓に拍子取る足　七
爆買に薬の棚が空になり　七
　そつぽ向く猫反省の猿　西
花守は花の由来を得々と　西
　土やはらかく日射しあたたか　玲
汐干狩ブリキのバケツ水洩つて　子（ナオ）
　信じられないけふの運勢　玲
いつまでも余震の続く南阿蘇　優
　自由自在にドローン操り　晃
冬帽子伸び放題の髪隠し　七
　楫明り揺れ結ばれし愛　西
年重ね異夢同床の夫婦にて　玲
　馴れて親しむサロンパス張り　優
ボクサーはサンドバッグを打ちつづけ　晃
　死んだ魚に小さき墓建て　西
望の月太古のままの渓照らし　玲
　誰も知らずに茸増えゆき　晃
アンパンマン（ナウ）列車見送る秋袷　優
　げんこつ飴にほつぺふくらみ　七
先生と呼ばれ嬉しき退職後　玲
　楯の処分に困るこの頃　晃
街路樹の今を盛りの八重の花　優
　濡れていかうか春雨の中　西

平成二十八年四月　十六日首
平成二十八年四月二十七日尾
（於・愛媛県生活文化センター）

歌仙『蹴上道』

石井順子

梅雨晴れ間鐘の音通る蹴上道　秀嶋登志子
　子育て急ぐ燕の親御　竹本俊平
落語好き楽屋の奥に師を追って　冬日庵訥平捌
　付き合い酒の店に新顔　井原弦
話尽き裏木戸出れば三日の月　竹内千代子
　まだあたたかき栗飯の籠　石井順子
青々と透きとおる水秋さがし　及川つとむ
　山里抜けるバスに揺られて　弦
ひっそりと寄り添う女薄化粧　俊平
　禿にそっと襖閉めさす　〃
PLは初戦を落とし休部へと　つとむ
　薬をヤクと読むは危うし　上田真而子
空港の閉鎖さわぎに夏の月　弦
　連句帰りに祇園囃子を　訥平
借り物の浴衣はなんと左前　真而子
　新商品の慣れぬ口上　弦
花の宴下戸も上戸も無礼講　登志子
空もおぼろに早や明けそめて　俊平
猫の子はまだ名はつかずダンボール　登志子
　大家のわしも仮設住宅　俊平
駐在の巡回連絡日を空けず　つとむ
　霜の降りない内海の島　訥平
サンタさん僕の靴下わかるかな　真而子
　人気アプリの極秘情報　弦
恋心まだまだ言えず明烏　登志子
　そのまま奥へ消える衣擦　俊平
半櫃にカセットテープきっちりと　訥平
　天皇丘で何を念うか　つとむ
不揃いの月見団子はてんこ盛　登志子
　去来忌を期し一句献上　真而子
コスプレの簑笠杖にアキアカネ　俊平
　入場門を通行証で　弦
翼鑁と今も現役河口堰　訥平
　隷書篆書をすらすらと書き　つとむ
ログハウス窓に入り込む花吹雪　俊平
見上ぐる空に架かる初虹　真而子

平成二十八年六月　十八日首
平成二十八年八月三十一日尾
（於・京都市国際交流会館）

歌仙『額の花』

岡本利英・品部三酔捌

白川の清き水音額の花　三原寿典
レンタル浴衣散策の路　出来千苑
茶屋の床鶏の掛け軸鮮やかに　井尻荷葉
正座の膝を少し崩して　木村禮子
伸びをする猫の見上げる三日の月　品部三酔
コップ酒には枝豆が合う　山内鯨酔
ふるさとの妹憶いだす契草　広瀬松石
単身赴任帰国叶わず　齋藤桂
昼メロのような恋愛してみたし　岡本利英
地震警報突如画面に　三酔
産土の社再建願いたる　寿典
わんぱく坊主石けりをして　美音
冬の月一人自分と影法師　紫苑
畝まっすぐに大根畑　桂
大阿蘇は土黒々と雨に濡れ　美音
道の駅にて薯饅頭食べ　紫苑
花らんまん抑揚楽し郷言葉　桂
蛙の声が空に透れる　千苑
磨崖仏おぼろに霞む村はずれ　寿典
砂漠を緑化してオアシスに　荷葉
クーデターロも続発地球揺れ　千苑
ゲリラ豪雨も此処や彼処に　三酔
駆け込んだお化け屋敷で抱き合って　荷葉
水着の跡をたどる唇　美音
玉の輿噂早くも隣町　桂
古き家並みの続く街道　寿典
温泉にもしや漱石いたりして　紫苑
羊羹一切れ青磁の器　美音
海暮れて満月ゆらり昇りくる　荷葉
菱食の列鉤の字になり　寿典
吟声の洩れくる野辺は末枯れて　美音
黒光りする廊下長々　桂
挽きたてのモカ珈琲の香しく　荷葉
紋白蝶を追う幼たち　寿典
花筏右へ左へ帯になり　千苑
大空高く上がる風船　紫苑

平成二十八年六月十八日首
平成二十八年七月十六日尾
（於・京都市国際交流会館）

歌仙『あくび猫』

魚の氷に上るや屋根のあくび猫　石川　葵捌
　沈丁の香を運ぶそよ風　石川　葵
新入生文芸部へと誘われて　繁原敏女
　キャラメルラテをテイクアウトし　伊藤良重
月天心まだ眠らないビルの街　石川桃里
　銀漢渡り探査機はゆく　重
姑の芋茎の味は真似できず　葵
　手練手管はくずかごの中　重
花魁はめでたためでたの丸髷に　女
　でき婚五年いざハワイへと　葵
波静か亀の子走る月の浜　女
　短夜に聞く教会の鐘　重
ビジネスマン英語レッスンスカイプで　企
　シェアハウスにはシンプルな家具　重
政権の支持率おっと急降下　桃
　世渡り上手小石踏んづけ　女
一合に酔ってほろほろ花の山　重
遍路の衆の並ぶ菅笠　重
　城跡に子規の句碑あり胡沙来る　桃（ナオ）
戦国ドラマクライマックス　深津明子
ただいまは正真正銘素浪人　長坂節子
　六法全書と空の財布と　葵
エレベーター雪になるわと甘い声　矢崎　藍
　僕はいつでも君の湯たんぽ　重
ほんとうの愛は根っこで結ばれて　坪井まちこ
　アレルギーかな鼻がむずむず　節
給食に地産地消を奨励し　桃
　立待月エンディングノート頁繰り　節
深まる秋の蝶の鱗粉　ま
　にょきにょきと湿地茸平茸箒茸　藍（ナウ）
トンネルを抜けトンネルに入る　葵
　液晶の画面見つめて会話中　節
男同士のこれが本音か　藍
　笙をもつ飛天の舞に花満ちて　重
Vitaminカラー春のスカート　藍
　ま

平成二十八年二月二十三日首
平成二十八年三月二十二日尾
（於・豊田市福祉センター）

歌仙『糸柳』

雨細く雨より細き糸柳　伊藤良重捌
　遠く近くに蛙鳴く声　繁原敏女
畑打ちの父は自慢の鍬干して　間瀬芙美
　短冊の字は少し金釘　稲垣渥子
リビングに紺の絣の小座布団　伊藤良重
　いざよう月にあいに行きたい　長坂節子
憧(ウ)れの役者の舞台夕紅葉　坪井まち子
　そぞろ寒とて肌を寄せ合い　渥美節
ここ一番全て脱ぎ捨て素になる　間瀬まま
　コンビニにあるドリップ珈琲　稲垣渥子
「アベ・ノー」の金子兜太のプラカード　伊藤良重
　もじずり草を持った幼児　長坂節子
海亀の産卵始まる月の浜　坪井まち子
　三文の得拾う暁　渥美節
厨から飯炊く母の声がして　間瀬まま
　通学定期チャージ完了　稲垣渥子
連山を花の雲にて被きたる　伊藤良重
　見知らぬ町へ蒲公英の絮　長坂節子
釣(ナオ)り船に獲った鰯の光る背な　坪井まち子
　朝昼晩と薬忘れず　渥美節
不気味にも繰り返される震度七　間瀬まま
　啼いてばかりの野良の虎猫　稲垣渥子
評判の本屋大賞平積みに　伊藤良重
　熱燗を酌む新発意の友　長坂節子
木枯らしのハルピンの道コツコツと　坪井まち子
　幸せの裏不幸せあり　渥美節
アラフォーの意地は易々曲げられず　間瀬まま
　恋泥棒に心奪われ　稲垣渥子
月昇るサンバのリズム遠のいて　伊藤良重
　木の実転がるユースホステル　長坂節子
秋(ナウ)の彩地産地消のお弁当　坪井まち子
　祖父の遺影は軍服を着て　渥美節
強面のイナイナイバアに子の笑顔　間瀬まま
　お雛飾りの客人を待つ　稲垣渥子
清元の声透き通り花ほろろ　伊藤良重
　仔猫とともにうたた寝の夢　長坂節子

平成二十八年四月二十六日首尾
（於・豊田市福祉センター）

執筆　矢崎藍

歌仙『嘯月楼』

風薫る嘯月楼の円き窓　問瀬芙美捌
金兎銀兎の跳ねる滝つぼ　稲垣渥子
「本屋大賞」候補作品揃えいて　長坂節子
プリペイドカード残り気になる　問瀬芙美
空港でアニョハセヨの声を聞く　渥
行き交う人の吐く白い息　芙
寒牡丹薬の帽子の中で笑む　節
はじめて君と添いし丑三つ　渥
永遠を誓うと易くついた嘘　由川慶子
革の聖書を置いたテーブル　〃
海賊船でそうな海に月の影　節
南京袋に詰めるじゃがたら　渥
鎌納め長男やっとUターン　芙
枝折戸ごしに噂広がる　節
トランプのジョーカー引くか米選挙　慶
ランチメニューに箸とスプーン　芙
花満ちて前へ前へと鳩の胸　節
落ちてはすぐに消える淡雪　渥

開帳の観音さまの抱く舎利　矢崎藍
海鳴りを聞く宿のコーヒー　芙
我が出自問わず語りに語りたる　慶
明治御一新そこに誤り　〃
ブランドの夏シャツボタン掛け違え　深津明子
駅に向かって走る夕立　板倉合
人生はゆっくり恋は急がねば　慶
瞳を閉じて壁ドンを待つ　坪井まちこ
ラデッキー行進曲で幕は降り　渥
一日五錠のコンドロイチン　芙
酔い覚めの水を欲しがる魔女の月　合
風に吹かれて鴫の早贄　藍
隼人瓜ごろり畑にはびこって　〃
活動量計つけた右腕　合
宗匠のなかなか取れぬ座りだこ　慶
先祖代々使う文机　明
象列車今はまほろし花吹雪　福井直子
かくれんぼする蝶と子供ら　芙

平成二十八年五月二十四日首尾
（於・豊田市福祉センター）

歌仙『春の朝』

衆議判

ふるさとに久しく坐る春の朝　中沢昌重
　紅白の梅咲き競う庭　北濱祥子
ツーリング強東風の中駆け抜けて　大谷信恵
　山に谺す声のはつらつ　高須節子
赴任地にスーパームーン明々と　杉美鶴
　砧打つらし遠くかすかに　昌重
身にぞ入む安寿こいしやほーやれほ　祥子
　ただ一筋に極めゆく技　信恵
苦も楽も共に背負いて来世まで　節子
　結婚指輪ゆびにくい込み　美鶴
町隅に歴史を刻む紀念塔　昌重
　平癒祈願の宮まもる猫　祥子
ロボットが決まり台詞で案内し　信恵
　我が胸を射る寒の三日月　節子
解体のマグロあっという口をして　美鶴
　シェアーハウスに笑いあふれる　昌重
散る花へ艫櫂を取りし渡し守　祥子
　のんびりせせるさざえ壺焼　信恵
嘩(ナオ)りを振りかぶりつつ野道行く　節子
　旅の記念に絵葉書を選り　美鶴
みぎひだり異国情緒のたっぷりと　昌重
　カーニバルとてサンバハイレグ　祥子
はしゃぐほどアタックするの嫌いなの　信恵
　ヨット操り今が最高　節子
水平線入道雲が湧き上がり　美鶴
　トランプ相場興味津々　昌重
洞窟にあるは髑髏か財宝か　祥子
　妄想好きは軽くかわして　信恵
月の光ヶ森羅万象現し出し　節子
　座敷わらしが貸小袖着る　美鶴
見渡(ナウ)せば畦に伏したる捨案山子　昌重
　独りしみじみ二合半を酌む　祥子
托鉢の読経近付く雨後の路地　信恵
　夢で膨らむ入学鞄　節子
新聞に載りし始めたる花便り　美鶴
　動きも速きふたつ蝶蝶　祥子

平成二十八年十一月二十三日首
平成二十八年十二月　十八日尾

（於・三番館）

《さいたま・さくら草連句会―その二》

歌仙『泣き出す児』

蛍が頬に止まって泣き出す児　　風子
　青葦原をなでる夕風　　〃
厨よりエプロンからげ声かけて　　九天
　タレント猫は置物のごと　　風子
月球儀登りゆくのはキャタピラか　　風子
　首をもたげて遠く視る秋　　九天
丸善（ウ）の一隅灯す檸檬あり　　田中安芸捌
　蝶ネクタイのドアーボーイに　　城山九天
われ知れず触れし小指の燃えてきて　　大久保風子
　汁粥さえも喉を通らぬ　　田中安芸
失敗は母性くすぐるやさしさに　　風子
　越冬燕身じろぎもせず　　安芸
寒月を猪口に受け取り酒を酌む　　〃
　退職したらブラックホール　　安芸
明日からは別人格を創りいて　　九天
　獺魚を並べ祭し　　風子
無造作に花咲く枝を大壺に　　安芸
初虹渡る夢の足跡　　九天
新（ナオ）社員言葉の限りを実況し　　風子
　無住の寺にノラの住みつく　　〃
ロボットの介護はひとを寄せ付けず　　九天
　古稀のはなこはとこしえの旅　　風子
隣の娘白い衣の巫女となり　　九天
　刃傷沙汰も乗り越えたれば　　仁村玲流
いきさつの証拠の文を紙魚が食い　　風子
　落ち着かぬことと帰省子の尻　　布田三保子
コンビニのバイトのシフト組み替えて　　玲流
　半年待ちの心療内科　　風子
ぽっかりと山稜にかかる望の月　　三保子
　足元濡らす枯草の露　　九天
食（ナウ）べて呑み泣いて笑って村芝居　　三保子
　無重力だよ見得を切ってる　　九天
われわれのルーツは何処か探す舟　　風子
　大波小波今も昔も　　九天
北国へたなびいてゆく花の雲　　三保子
　一家総出で作る数の子　　玲流

平成二十八年六月十六日首
平成二十八年七月二十一日尾
（於・浦和コミュニティセンター）

二十韻　『巴里祭』

萩谷準一捌

萩谷準一　お針子のかがるボタンや巴里祭
伊藤哲子　夏茱萸口に見入る少年
武井敦子　新装のバーガーショップ列出来て
高沖知恵　体揺らしてノラ猫がゆく
松澤龍一　厠から漱石愛でる望の月
準一　秋の野遊び思い出しては
哲子　筒井筒幼き恋の夕芝居
敦子　今は堕落の良妻賢母
知恵　父に似ぬ娘が財産奪い合い
龍一　ＤＮＡの検査結果は

準一　ちゃん(ナオ)ちゃんこ着て実家から逃げ帰り
哲子　凍月遥か杖柱なく
敦子　都知事選支援が増えて立候補
龍一　声をからして人を煙に
知恵　よもすがら彼の背中で爪を研ぐ
準一　ハムソーセージ好きになってね
哲子　大宰府(ナウ)へ深い仔細を祈念する
敦子　春一番の吹きそむる頃
知恵　ほろ酔いの袂にかかる花の雨
龍一　「地上の星」を聴いて踏青

平成二十八年七月二十日首尾
（於・浦和コミュニティセンター）

『たけのこや』

脇起半歌仙

臼杵游児捌

翁

たけのこや稚き時の絵のすさび　盛興　澁谷
　奥の座敷に吊す薬玉　航　伊藤
サテライトスタジオ人の囲みゐて　時子　福島
　大先輩と顔を合はせる　游児　臼杵
たたなづく山々黒く月今宵　土筆　山中
　木通熟していよよふくらむ　十詩　榊原
鷹柱ひとすじ高く余呉の湖　航　
　母子をむすぶ三井寺の鐘　興　盛
意のままにならぬ糸なり片思ひ　子　時
　息ぴったりと和紙の工房　游児　
なつかしき歌声喫茶再現し　十詩　時
　窓辺によれば冬ざれの月　土筆　
事故死せる熊そのままに車過ぎ　興　盛
「北越雪譜」今に読み解く　航　
隠居して地図作らんと夢果す　子　時
　池のほとりに亀鳴くを聞き　游児　
酒蔵の白壁続く花の街　十詩　
　風もなきまゆるふらここ　興　盛

平成二十八年七月二十日首尾

（於・浦和コミュニティセンター）

歌仙

『成人の日』

岡村糸子捌

成人の日に夢語る晴れ姿　大村さち
床の間飾る初富士の軸　杉山俊子
歴史本求め本屋に立ち寄りて　岡村　耿
お座り上手繋がれし犬　小野里子
月の舟漕ぎゆく先に雲の波　奥平大生
薄たなびく里山の原　岡村糸子
道祖神絡む蔦の葉そっと取り　島　苅田
バス停で待つ背な丸き婆　ち
一目惚れ孫の嫁にと声を掛け　俊
婚姻届あとは出すのみ　耿
地魚と地ビール並ぶ月の下　里
木立を抜けてそよぐ涼風　大
懐かしき童謡唄う子供達　糸
契約更新カズに喝采　苅
湯畑に近い旅館は活気満ち　ち
熊本城の復興は未だ　俊
トランプの先行き憂う花吹雪　耿
春よ来い来い鳥は連なり　里

ナオ
新入生元気に跳ねるランドセル　大
いざこざ多い社宅生活　糸
鬱病の彼にほだされつい同居　苅
食事の仕度後ろからハグ　ち
物置の米櫃の蔭残る虫　俊
成り済まし詐欺多い年末　耿
日韓で物議をかもす慰安婦像　里
遥かに思う蜜月のころ　大
不景気と言えどデパ地下長蛇列　郡司恵風
居酒屋で待つ紳士独酌　奥平広子
災害の記憶新たに十三夜　糸
サックスの音深く身に入む　苅
ナウ
秋麗御苑広場は黄に染まり　ち
久しく会わぬ友に絵手紙　俊
新しいレシピ開拓ネット見て　大
期待に応え遂に横綱　里
花の径故郷に錦飾ろうぞ　恵
草木は萌える城の麗らか　広

平成二十九年一月　十三日首
平成二十九年一月二十七日尾
（於・岡村宅及び文音）

佛渕雀羅捌

待雪庵立机祝吟

世吉『言祝ぎぬ』

言祝ぎぬ松雪草の志　下鉢清子
春まだ浅き野辺の日溜　松島芳子
きらきらかに海越えてゆく蝶ありて　佛渕雀羅
巡歴詩人筆を走らす　松島正一
動かざる牛を引き出す驟雨明け　小林清衛
石像の待つ山の頂　松島渉
ロープウェイ月の桂ももみぢする　宮崎正美
黄色い嘴の秋刀魚塩焼き　松島依子
受け得たり恩師の猪口の新走り　大塚和子
十字架かかる部屋の静けさ　宮内志乃
伝来のハモンドオルガン高らかに　久保田庸子
真つ赤なカーディガンをひつかけ　浅賀丁那
肩の雪払つてくれた君想ふ　吉藤とり子
贈つた指輪あれはどうした　清子
早朝の芝刈る音に起こされて　清衛
犬の散歩とラジオ体操　とり子
父の日の父はいつもの父であり　志乃
縁に眺めるなめくぢの月　清子
たよる神たよれぬ神の相場道　雀羅
出垨させぬ西の剛腕　庸子
東より花を養ふ雲ひとつ　丁那
天に井戸ありひばり名告れる　正一

凩（ナオ）合戦村の老若浜を占めぬ　清子
六文銭の旗ののどらかな　庸子
とつくにの人々を盛る民泊よ　とり子
はしかはしかと言葉通じず　渉
ねえ聞いた噂のスーパーチューズデイ　志乃
ジョーカーのないトランプは嫌　とり子
ふはふはの海鼠肴に独り酒　丁那
捨てた男の針供養する　とり子
筐底に未練たつぷり懸想文　清子
上本郷の番地跳び跳び　和子
大いなるおむつであんよ上手なり　志乃
声たて笑ふ夢の中より　芳子
糸電話月まで届く重力波　渉
さいかちの実で洗ふ黒髪　志乃

ジプシー（ナウ）の瞳に秋の愁ひ濃く　清子
七回転び人の世の旅　庸子
鬼ばかり住む里住まば都にて　丁那
飾りを付けた馬のしりがい　芳子
出るべきか出でざるべきかEUは　正一
はつきりせよと写楽にらまへ　庸子
たまさかは墨摺ることも花の庵　雀羅
つるし雛を訪れる風　清衛

平成二十八年二月二十九日満尾
（於・松戸市老虎亭）

歌仙『花前の』

植木陽子初折捌・品部三酔二折捌

花前の気配ほのかに人通り　植木陽子
　今朝の菜飯の色をまず愛で　秀鳴登志子
鉢で飼うおたまじゃくしは足生えて　品部三酔
　おあし速かれ財布軽かれ　上丹三郎
友去りて独り淋しく寝待月　平良孝子
　酒の肴は集く虫の音　登志子
無農薬農家の田の実よく育ち　三郎
　墓が立っても嫁ぐの厭と　孝子
押しかける婿入候補のきりもなく　三酔
　千姫御殿今は空家に　〃
物語いろいろ作る観光課　陽子
　鞴祭も四か国語で　孝子
月煌々気合いの満ちる寒げいこ　登志子
　禅入門の無音の朝餉　三郎
雨止みて風に揺れてる鎖樋　登志子
　ポストにことりよき便りらし　陽子
隅田川桜吹雪の舟下り　孝子
　岸に初鮒狙う人々　三酔
暮遅く遠き鐘の音もう帰ろ　登志子
　寂しがり屋のコロがすり寄る　孝子
下見ずに上ばかり見るヒラメ族　〃
　のぼるくだると京は平等　三郎
邸宅も間借りの部屋も蒸し暑く　〃
　竹夫人抱き孤りかも寝む　孝子
メロドラマハッピーエンドでテレビ消す　登志子
　そうこなっくちゃお宮寛一　三郎
海見えぬ防潮堤は風情なし　孝子
　産土の村遠く旅せん　三酔
山の端の三日月更にかじらるる　三郎
　刈田に残る案山子破れて　登志子
天高くパラグライダー風に載る　〃
　日韓結ぶ韓流の歌　孝子
首傾げ通訳欲しいカタカナ語　登志子
　陸に上がったカッパ船乗り　三郎
揺れるままダム湖に浮かぶ花筏　登志子
　かすかに聞こゆ佐保姫の唄　孝子

平成二十八年三月十八日首
平成二十八年四月十五日尾

（於・京都市国際交流会館）

半歌仙　『風神も』

近藤蕉肝捌

風神もチョコ欲しげなり春一番　近藤　蕉　肝
Aフラットでみゃあと恋猫　鵜飼　佐知子
花便りあちらこちらとメール来て　内田　遊　眠
明日の行方はあなたまかせに　福嶋　鬼　火
月出でて湖（うみ）にうまれし金の道　聖成　美智子
紅葉まんだら山を縦走　林　ジョウ
ヲ奥多摩にみみず鳴く声したような　狩野　びんや
ギヤマンの窓歪むガス燈降らずとも相合い傘でレンガ街　山﨑　団　栗
虜にされて嘘を信じるシリーズの００７熱き罠　〃
ブラックホール*夢に波打つ　びんや
冬将軍釦（ぼたん）飾りに疑問符を　団栗
差し入れ酒に夜廻りの月　鬼火
羊羹で大臣の職棒に振り　ジョウ
カラスも笑う洒落た説法　佐知子
ほうたんを濡らす甘露の涙あり　美智子
触れまほしきは紗袷の袖

*ブラックホール　重力波の観測成功

平成二十八年五月十八日首尾
（於・喫茶室ルノアール中野北口店）

二十韻　『孫　娘』

近藤蕉肝捌

ながめせし世に飽くころや後の月　近藤蕉　肝
　食い物ばかり多き夜の夢　狩野びんや
茨苓をかごにやまもり掘り当てて　鵜飼佐知子
　事典片手にまずは一服　内田遊　眠
新緑のフリーウェイから居留地へ　林ジョウ
　太鼓たたいてうたう酋長　福嶋鬼　火
しばらくは原油価格も安定し　蕉　肝
　ディランの授賞凩に舞う　びんや
レシートに名句をめもる午前四時　山崎団　栗
　恋という字を変と書きをり　遊　眠

会うたびに美しくなる孫娘　団　栗
　巫女の衣装に隠す文身　佐知子
フラスコに地酒たっぷりゼミの部屋　〃
　酩酊先生かます蘊蓄　遊　眠
寒月に東北弁の火の用心　鬼　火
　こな雪こんこまろぶ犬たち　ジョウ
農場の境界線は見えもせず　蕉　肝
　若草食みし朝の初乳　団　栗
花冷えの掌のみの温かさ　びんや
　道をきく君うららかな声　ジョウ

平成二十八年十二月二十七日首尾
（於・喫茶室ルノアール中野北口店及び居酒屋「えん屋」）

歌仙『開花予想』

人はいさ開花予想は八日先　　遊眠
　行こか帰ろか残された雁　　〃
新社員ネクタイまたも確かめて　　ジョウ
　フレッシュ野菜値の上がるらし　　鬼火
紅葉狩ちらしを配る月の宿　　団栗
　瀬音も高き秋の渓谷　　近藤蕉肝
神の手と言われる枝のさわやかに　　林ジョウ
　寡黙で粋な宮大工なり　　佐々木有子
御しげりのほのほ薇かにゆらめかん　　内田遊眠
　誰にか見せん姿見の肌　　福嶋鬼火
盗むべし図書館の本友の妻　　山崎団栗
　スピード違反免許取り消し　　鶏飼佐知子
月に睨み哮り立ちたるアロハシャツ　　有子
　祭太鼓の乱れ早打ち　　佐知子
これ以上呑み込めません鵜匠様　　団栗
　パスワードすら覚え切れない　　鬼火
寒菊の遺影はずっと志学にて　　〃
心慰む君のみ言葉　　遊眠

物差し(ナオ)で姿勢直され昭和の子　　遊眠
　日の丸弁当ならば上等　　〃
3Dプリンターにて村作り　　ジョウ
　オリンピックの聖火台どこ　　鬼火
背伸びして龍に手を打つ女学生　　団栗
　太宰を真似て熱き文書く　　聖成美智子
この恋は永久欠番バーの奥　　遊民
　芯に当りて逆転となる　　有子
さわったらぴょこんと跳ねる青蛙　　〃
　痩せの薬で儲け百億　　鬼火
満月は地球きらって遠ざかる　　ジョウ
　長き夜には筋斗雲呼ぶ　　佐知子
松(ナウ)茸の森は秘密の風の渦　　鬼火
　福島復興加速させてよ　　ジョウ
また一機発つ空港のお供なし　　団栗
　のどけき磯に釣り糸を垂れ　　美智子
御衣黄の朝の光りの花かげに　　遊眠
　アブラカタビラ春眠の夢　　美智子

平成二十八年三月十三日首尾
（於・喫茶室ルノアール中野北口店）

《東京・猪の会》

獅子

『春立つ日』

付け回し

集いくる亥年の輩春立つ日　松澤龍一
若草摘んで作る冠　鈴木すず
遠望の大観覧車うららかに　安楽明郎
湾岸の街沈む喧噪　竹崎梨野
読(ウ)みかけの本の栞に月の光ゲ　渡辺柚
ハローウインだぞ仮装行列　諸藤留美子
地芝居の主役の彼におひねりを　すず
ホストクラブで呷るドンペリ　龍一
破(ナオ)戒僧丸儲けして散財し　梨野
慶良間の沖に背美鯨浮く　明郎
夕暮れは砂場の遊具使い切る　留美子
チョコたっぷりと母のクレープ　柚
日(ナウ)焼けした順に並んで始業式　龍一
弟からのお古兄へと　すず
老いぬれば見る花いよよ美しく　明郎
手紙をつけて放つ風船　梨野

平成二十九年二月五日首
平成二十九年三月一日尾（文音）

遺吟脇起短歌行『獅子門支考忌追善俳諧』

大野鵠士捌

支考

梅村五　月　陽炎の糸よりあがるひばり哉
武仲登志春　野中の川に鮒の巣離れ
各務恵　紅　春場所の新番付を楽しみに
田邊桂　月　眠くなるまで漕げる揺り椅子
早野千　尋　望月のチャペルの屋根にくつきりと
宮本光　野　風爽やかに鯊過ぎ
寺島惠利子　秋袷裾の乱れを気にしつつ
藤井大　和　鏡の中の君に告白
津田公仁枝　漆黒のアルファロメオを購入し
瀬尾千　草　海鮮ピザにチーズたつぷり
赤塚つねみ　花冷えの港の遠く見えてをり
藤塚旦　子　折しも今日は啄木忌なる
松橋五　笑　塞ぎたる炬燵に部屋の広々と
松尾一　歩　テレビのニュース地震速報
高橋せい子　キャスターの黒き瞳に目が留まる
赤尾千恵子　はるかに住める人を気にかけ
松原東　川　革命と恋にその身を捧げよと
矢橋初　美　針を呑むかに呷るテキーラ
面手美保子　凍て空の月を兎の跳ね出るか
名和よちゑ　葉陰ひそかに竜の玉あり
小松八洲子　喜びも悲しみも越え幾山河
大野鵠　士　翡翠の指輪大切にせむ
執筆ゆ　い　夢にさへ天上天下花吹雪
背鰭光らせ躍る若鮎

平成二十八年三月二十七日首尾

（於・獅子庵）

遺吟脇起歌仙　『獅子門翁忌追善俳諧』

大野鵠士捌

翁

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき　大野鵠士
　終の栖に香る柊　瀬尾千草
新しき電子書籍の開かれて　矢橋初美
　今日の天気を口々に褒め　宮本光野
山の端を離るる月のまん丸に　村井枝葉
　かがしの着たる長きエプロン　早野千尋
ウラ去来忌の去来の墓は石ひとつ　小栗知柚
　爪音響く胸の淋しく　藤塚旦子
今の顔人から見たら増女　奥山ゆい
　はにかむ君の愛の告白　樋口かほる
ゴンドラの水の上にてゆらと揺れ　藤井大和
　ジグザグ描きかはほりの飛ぶ　武仲登志春
月眺め持て余したる夏休み　角田道子
　書斎の縁にパイプ燻らす　松原東川
ノーベル賞また候補にて終れるや　松原洋子
　横断歩道変はる信号　草
花冷えの駅に銅像立ち尽す
　春のコートの翻る裾
ニノヲ連れ立ちて都をどりを観にゆくか
　インド韓国タイに中国　鵠士
カレー屋はどこも自慢の味を出す
　学生多き昼休み時　尋
初雪とはしやぐ彼女の若々し　洋
　妻の幻影白鳥のやう　春
この辺りポケモン隠れゐるといふ　い
　駐車禁止の立て札のたつ　川
男坂後に付き来る地域猫　葉
　華頭窓より木魚打つ音　野
夜咄の茶事粛々と十三夜　美
　古きをたづねつね新走り酌む　旦
名ノウ秋の波寄せては返す波頭　道
　サナトリウムのひつそりとあり　る
塒へと帰る鴉を見送らむ　野
　空の高きを漂へる雲　草
幔幕の風に揺れたる花の宴　鵠士
　かくも目出度き蛤の味　い

執筆

平成二十八年十二月四日首尾

（於・笠松古民家　杉山邸）

短歌行

『獅子門友楽社第九世
鵠乎亭宮本光野文台継承俳諧』

市橋みち捌

祖師芭蕉ゆかりの中山道は赤坂の地に、昭和十三年獅子門友楽社は産声を上げ、本年喜寿を迎えるに至り、この度、第九世詞宗に鵠乎亭宮本光野雅を迎えることになりました。
新詞宗は清楚な中に凛とした雰囲気を湛え、探究心も深く識見にも恵まれております。今後ますます友楽社の発展に貢献されんことを祈りここに一句

金生山望む街道風薫る　矢橋初美
子燕顔を揃へたる頃　宮本光野
図書館の童話に心憩はせて　杉野ちゑ子
ウォーキングの夫婦連れ立ち　市橋みち
空耳(ウ)の狸ばやしも月の下　田邊桂月
地蔵の祠落つる団栗　早野千尋
澄む水に緋鯉真鯉の深呼吸　高木初枝
料理洗濯すべて出来ます　一柳国子
恋人はパンツスーツの美人秘書　竹中昌子
今日も弁当開く公園　高木秀子
花吹雪言葉なくして見るばかり　瀬尾千草
野山を走る蒸気機関車　小松八洲子
親馬(ニヲ)に仔馬のひたと寄り添へる　三摩玲子
万葉集に防人の歌　大野鵠士
不器用で世渡り下手な君一途　松尾一歩
隠し子あると知らなかつたわ　高木澄子
操作するDNAは神を超え　鈴木隆雄
お湯が沸いたと薬缶告げたる　西田みさ
燗酒を呑みすぎ月の赤くなり　名和よちゑ子
蓬莱島に黒き冬波　ちゑ子
名(ウ)手を尽くし探し得たらむ裘　国子
雨上りたる晴れやかな苑　寺井淑子
蕉翁の心尋ねむ花の旅　鵠士
五十七番宿場うららか　執筆

平成二十八年六月二十六日首尾
（於・ロワジールホテル大垣）

遺吟脇起
歌仙　『翁忌追善俳諧』

瀬尾千草捌

宮守よわが名をちらせ木葉川　松尾芭蕉
緋なる袴にふはと雪虫　瀬尾千草
ガラス張りシックなカフェの開店し　岡本満智子
焼き菓子の香のそこはかとなく　蒼井遙
十五夜の月の兎を探しをり　田中啓子
青磁の壺に活くる桔梗　青木久美
ウラやや寒の甍来るハイヒール　伊藤弥生
恋の予感に胸のときめく　満智子
君のことずつと前から好きだつた　梅田えみ子
ディズニーシーに長い行列　満智子
からくりの時計とびだす小人たち　竹内昭子
襟の刺繍をやつと仕上げる　啓子
夜蟬鳴く声に気付けば繊き月　弥生
怪談芝居告ぐる開幕　久美
町役は鰡背角刈り雪駄履き　満智子
秋田犬連れ外つ国の人　啓子
花冷えの電光ニュースとめどなし　千草
パンジーの白黄色紫　満智子
ニノウ故郷へボート競技を誘致せむ　河合はつ江
風の知らせる時の移ろひ　船渡文子
マッチョなるイケメンゴリラ待ち受けに　後藤朱乃
新刊の本届く宅配　武山慶子
加湿器の甘い匂ひの部屋に満つ　遙
彼を思ひてセーターを編む　はつ江
余りにも一途な女房重荷だよ　〃
三つ星狙ふ凄腕のシェフ　文子
水耕の野菜さまざま育ちをり　朱乃
嘴太鴉あたり睥睨　遙
自転車で塾へ行く子に宵の月　文子
よなべ仕事の祖父の矍鑠　〃
ナノウ秋深く名作映画楽しみに　はつ江
飛騨の苞なる酒は辛口　昭子
古刹よりゆつたりひびく鐘の音　遙
流るる雲をしばし眺むる　慶子
南より北へと向かふ花行脚　本屋良子
土柔らかき耕しのあと　執筆

平成二十八年十一月十八日首尾

（於・岐阜鋳物会館）

歌仙『山笑ふ』

懐に絎文遣跡山笑ふ　岡本満智子捌

龍の天へと昇りたる頃　瀬尾千草

新社員１Ｔすぐに会得して　河合はつ江

きりり結べる紺のネクタイ　草

暮れかぬる夕べ早くも小望月　江

今年酒てふ幟はためく　〃

地芝居の殿様の役射止めたる　満

すべて知りたい彼のあれこれ　草

絶対にノーベル賞を取らせます　江

洗濯物の風にふらふら　草

豆腐屋の喇叭聞こゆる三丁目　江

同じ話を繰り返す祖母　草

寒濤に弄ばるる月の舟　草

くつきり残る犬橇の跡　満

絵葉書をエアーメールで送らむか　満

口遊みたるボサノバの曲　江

友好の記念の花の今盛り　草

午後の日差しに陽炎の立つ　草

春の風邪癒えて散歩の歩をのばす　満

バレーコートに上がる歓声　江

外つ国の色鮮やかな小旗揺れ　草

新装なれる街の図書館　満

家系図に思はぬ人の名を見つけ　江

長押の槍に在りし日の夢　草

洗ひ髪ゆつくりと梳く黄楊の櫛　満

孤高の画家の狂ほしき恋　草

中世の城に妖精棲むといふ　江

豊かな香りワイン蔵より　草

名月に競ふ虫の音遠く聞く　満

秋彼岸会に唱和する経　〃

ひたすらに公孫樹散り敷き時過ぐる　江

大震災は五年前なり　草

鳩の群れ話すかに首傾げ　〃

ポップコーンを探すポケット　江

たれかれも皆美しき花の下　満

紺の暖簾の掛かるうらうら　草

平成二十八年三月　十四日首
平成二十八年三月二十五日尾

（於・岐阜鋳物会館）

遺吟脇起
歌仙

『水仙や』

水仙やしろき障子のとも映り　名和よちゑ捌
炭火おこしてあたたむる部屋　翁
拝見の喫茶去の軸鎮まりて　名和よちゑ
あれこれ探すネット買物　清水青瓢
テレビでは月光浴びる宇宙船　田邊桂月
田舎住まひに嬉し豊作　伊藤百雲
足元の草に蟋蟀鳴きしきる　五十川直靖
英字新聞いつも鞄に　松岡裕子
外ツ国に何はともあれ暮らす幸　北浦典子・
夫のおはこに声を合せて　五島洋子
銀舎利に醤油をかけし頃思ふ　松野孝子
下宿の住所寺院回廊　杉本利明
月涼し科白稽古は大声で　澤井国造
電球めがけ火取虫飛ぶ　直靖
書棚には読む事のなき本ばかり　赤塚つねみ
スマホをタップ絵文字スタンプ　よちゑ
天守閣視野の限りを花の雲　衣斐佐和子
恒久平和願ふ盛春　桂月
輪中村畑打ち仕事はじまりぬ　百雲
太鼓叩いてはしやぐ若者　よちゑ
優勝に商店街は赤づくめ　裕子
ゆつくり走るマッダの車　典子
突堤に並んでをりぬ柳葉魚釣り　青瓢
派手なジャンパー五感全開　国造
甘くちの酒にルージュも潤みたる　直靖
転けたふりして君に抱かれ　利明
マンションの鍵に二人のイニシャルを　つねみ
松吹く風に遥か伊吹嶺　孝子
月耿耿水の都を輝かせ　桂月
框あかりに猿の腰掛　青瓢
菩提樹の実をば集めて数珠作り　洋子
間違ひ電話足を滑らす　孝子
自転車の補助輪外してVサイン　佐和子
ユーモア交へ話すロボット　国造
花明り届く木彫りの芭蕉像　つねみ
亀鳴く池の深き静寂　百雲

執筆　洋子

平成二十八年十一月十三日首尾
（於・大垣市・江月寺興行）

半歌仙　『梅ふふむ』

伊藤哲子捌

梅ふふむ江戸の香りの初天神　櫻田野老
　角切紋の女正月　伊藤哲子
マラソンを犬と並んで眺め見て　菅原通済
　名代饅頭八個購入　鈴木すず
良夜なり水琴窟の鈴やかに　通済
　新酒酌みつつ描く未来図　野老
夕ウ映の鞍馬の山を雁渡る　哲子
　一夜限りと心定める　すず
手作りの赤いサラファン身に纏い　すず
　吟遊詩人海に向かった　哲子
異文化は鯨の価値を否定する　野老
「おもちゃのチャチャチャ」野坂昭如　通済
夏安居に月の面影雲の上　哲子
　たまに聴こえる竿竹売り屋　すず
続編を二度寝して見る春の夢　野老
　母の得意の芹の白和え　通済
ファミリーと御近所そろう花宴　通済
キューバンルンバ踊る蝶々　哲子

平成二十八年一月十三日首尾

（於・亀戸　梅屋敷）

半歌仙　『下総台地』

鈴木ちかひ捌

真っ黒な下総台地木の芽張る　高山英子
雪解風ゆく天守閣跡　伊藤哲子
大鍋に貽貝どっさり茹で上げて　鈴木ちかひ
新味求めてレシピ取り出す　白石一有
満月に手を振る孫は三歳児　櫻田野老
芸術祭の用意万端　菅原通済
ヴィオロンの音色と競う虫時雨　鈴木すず
絹のドレスの深きスリット　小田みみこ
目くばせをして別々に宿を出る　鵜飼佐知子
青僧らしく歩み静かに　英子
後継者不足で悩む集落の　すず
為すことのなき冬眠の熊　哲子
雲の凍つ月光ゲで書く請求書　哲子
一杯飲み屋ケセラセラセラ　通済
湘南をスピード無視のヨットゆく　佐知子
八重垣姫も実はロボット　英子
花社花に魅せられ男坂　ちかひ
骨董市に春惜しむ衆　すず

平成二十八年三月九日首
平成二十八年三月二十三日尾
（於・亀戸梅屋敷・アンフェリシオン）

歌仙『絵日記を』

絵日記を跳ね出しさうなあまごかな　妙島秋男捌

ひぐらしないてはや新学期　三木祐子
月の舟星の林に渡らひて　飯田寿美
電池切れても予備はあります　西岡礼子
いらつしやい笑はぬロボットお出迎へ　妙島秋男
夏空までも続く坂道　寿
寺町の日傘のをんなふと消える　祐
ブラックジヤツクのメスに委ねて　秋
黙々と網を繕ふ漁師たち　礼
猫はここから旅立たんとす　祐
抽斗に形見の指輪仕舞ひおく　寿
イヴの夜おさへたプラザスウイート　秋
あなたへの手編みマフラー月の柄　秋
実習場所は博物館で　礼
やれやれと胸撫で下ろすリオ五輪　寿
楕円軌道は狂ひもなしに　祐
遠方の友より届く花便り　祐
八朔柑の香気たちたる　礼
入相の和泉式部忌風やさし　寿
真つ赤に染まる喧騒の街　祐
我独り新ビジネスを興さむと　寿
夢は大きく書斎小さく　石原真紀子
お遊戯の園児見てゐる縞蜥蜴　秋
このまま溶けてサファイアになる　寿
近松の心中今は埒もなし　真
密会の夜の積雪の音　布
さつそうと二人乗りしてカフエ巡り　祐
海辺のキスはちよつとしよつぱい　秋
貝殻は月の雫に照らされて　秋
持ち寄る新酒ビンも倒れる　布
運動会家族テントのカラフルに　祐
味もさまざま親子丼　真
移転するどこへ病院・魚市場　寿
魑魅魍魎が大笑ひする　秋
川沿ひは絵巻のごとき花の宴　寿
残る雁がね空仰ぎつつ　真

平成二十八年八月二十八日首
平成二十八年九月二十五日尾
（於・西宮市市民交流センター）

歌仙『新顔も』

新顔もまじへ杜氏の来たりけり　いぬじま正一
　粉雪まとふて活気づく蔵　紺野　愛
手作りの料理持ち寄る女子会に　久我妙子
　あみだくじでは束子手にする　是行修吉
満月の青き光の部屋に座し　紺野笙治
　花野の果てに消ゆる終電　正
嵐（ウ）後一家総出の栗拾ひ　愛
　忘れた頃に又も腰痛　妙
ひもとけば思はぬ栞はらり落つ　修
　残り香薄く君のマフラー　笙
クレーンの先に刺さりし冬の月　正
　名さへ知らない草に惹かれて　愛
移住する故郷はすでに過疎の村　妙
　納税額はうなぎ登りに　修
境内の闇をひつそりよぎるもの　笙
　無言電話の続くこの頃　正
津浪痕残る街道花ほころぶ　愛
　親爺すすめる旬の独活和え　妙
万燈（ナオ）の高野を訪ね空海忌　修
　零時過ぎても作業終はらず　笙
飼い猫の戻らぬままに雨となり　正
　空爆無残涙する子ら　愛
遠き日に愛読したるリルケの詩　妙
　野宿重ねて佐渡の夕焼　修
泡盛を赤ピーマンの水割りに　笙
　蓼食う虫もありの世の中　正
バットマン高層ビルを抜けて飛び　愛
　猛犬注意門に張り紙　妙
石段を上り詰めれば月の寺　修
　浅漬け添へて夜食お茶漬け　笙
冬隣（ナウ）パイプ掃除の紙縒り縒る　正
　襷十字にハミングの妻　愛
人参を嫌ふ亭主とわかる頃　正
　ちんちんちんと下がる遮断機　修
風神の大きく煽る花吹雪　妙
　甘茶こぼれて濡らす袖口　笙

平成二十七年十二月　一日首
平成二十八年　七月十二日尾（文音）

《東京・湘南吟社—その一》

百韻『鎌倉の歴史』

小林静司捌

鎌倉の歴史を刻む破魔矢かな　小林静司
御慶とび交う白砂海岸　和田忠勝
侘助に円相軸を掛け替えて　和田ひろ子
玉露を淹れてひとり安らぐ　松田ぼくる
ラジオより万葉講座流れおり　永田吉文
出湯占領猿の一群　白井暎子
山巓の栗名月を仰ぐ頃　広崎竜哉
ビデオカメラを廻すやや寒　秋山よう子
田仕舞を祝いて友と美酒を酌む　速藤尹希子
み寺のほとり語り行く娘等　鈴木善春
胸の奥いとしき写真しのばせて　今村苗
淡き想いをいかに伝えん　村井昭三
裾野まで全容顕富士の山　坂田酔彦
田子浦には製紙産業　高島幸子
揚雲雀楽しそうなる声を聞き　尹
夕月ほのと雛の家の客　ろ
若布入りおにぎりたんと召し上がれ　暎
次から次にカフェにコンビニ　三
人事課は派遣社員を頼りにし　吉
作り笑いで鬼が誘う　猪飼たかし
爆買いの会場飾る花氷　苗
エレベーターに匂う香水　竜
二オ 老いの身に貼ったり塗ったり忙しく　ろ
本当かしら美人薄命　う
韓流のドラマ見出せば切りもなし　る
社長の息子トラブルメーカー　吉
騙されぬ知恵を絞って今日も過ぐ　幸
イケメンゴリラフィアンセに似て　尹
四月馬鹿自分以外は皆利口　勝
単線列車抜けて春塵　苗
燕飛ぶ酒場通りを真っ直ぐに　幸
救世観音に参詣の杖　尹
異文化をいつの間にやら包み込み　三
太極拳をカルチャーで知る　吉
月の出に岩鼻探す翁あり　春
武者をしのぶか叢の虫　吉
二ウ 竹の春炎激しき登窯　彦
水平線に漁り火の見え　竜
新しき元素命名任さるる　司
屋根の烏が笑う度忘れ　浅沼小葦
国民の平和守るは義務として　春

何が何でも通す法案
夏の月不眠地獄の夜を徹し
鳴かず飛ばずの蟬の抜け殻
緑陰のベンチオーナー指定席
内緒だけれど彼は鬘よ
ＣＯＰ合意の先はどうなるの
ヨーロッパへと目指す難民
シュプールを描くゲレンデ華やぎて
終相場に温き懐
足跡は兎か狐裏庭に
海外へ向けボランティア隊
井戸を掘る尊きものに玉の汗
朝昼晩とほとぎす聞く
麻羽織きれいに畳む母の所作
孫に教える舟の折紙
ぐんぐんと飛行機雲は一文字
パイプオルガン響く聖堂
当節は登校拒否もあたりまえ
恋の行方は自己の責任
お下髪少女まことに美しく
花の終わりは淋しさよなら
願い事沈める湖に朧月
小さき紅貝守り袋に

彦
映
る
幸
吉
た
竜
う
葦
吉
映
司
勝
尹
竜
吉
尹
る
苗
三
吉
藤沼亜緋子
葦

桃青のこよなく愛す義仲忌
卻の返る深き木曽谷
吊橋を渡る向うに冬銀河
牡蠣と蟹とをめいっぱい喰い
尼遊女女歳時記彩りて
賽銭泥棒論す交番
列島は地震噴火のたてつづけ
転校生はちょっとグラマー
月明り頬寄せ合って花灯籠
赤い茸がやき餅を焼く
小鳥来る繕うだけの針仕事
見返り阿弥陀秋の時雨に
さりげなく監視カメラの置かれいて
鑑定団も迷う珍品
相続にうからやからの押しよせる
甘い言葉に負けたリア王
独り飲むオンザロックでウイスキー
嫉妬というは女偏なり
身を包むとはなばかりの水着にて
パラソルだけが隠す口づけ
エルニーニョ地球の気候狂いつつ
世に知られたる麻薬大物
脱獄に成功したる朝ぼらけ

春
竜
葦
勝
う
緋
た
吉
緋
幸
葦
た
吉
る
ろ
う
竜
三
司
苗
尹
苗
る

出版界は下降曲線
五十年過ぎし売春禁止法
人生ゲーム上り賽の目
碁敵は荒巻提げて月の門
渡り廊下に凍蝶の翅
寒々（ナウ）と柳条溝を思い出し
戦を知らぬ子の代となり
新語得て膨らんでくる広辞苑
夢が詰まったタイムカプセル
大甕に釉薬のたれ艶やかに
人間国宝東風に誕生
花巡り七福神も兼ねて訪い
三の替りの柝がちょんと鳴る

ろ勝る苗吉竜葦三葦彦吉三緋

平成二十八年一月四日首尾
（於・鎌倉生涯学習センター玉縄分室）

土屋実郎師三回忌追善連句会

歌仙『美晴の丘』

夏隣る美晴の丘に忌を修す　秋山よう子捌

遺影に届く日差しあたたか　秋山よう子

母子草庭渡る風やさしくて　松田ぼくる

孫の並べるおはじきの列　浅沼小葦

四阿の軒より仰ぐ月今宵　高山鄭和

袂でそっと払う後れ蚊　速藤尹希子

葦刈女カチューシャの唄くちずさみ　う

僧のつまずく赤い唇　葦

縁切りを生業として早や九年　和

灯点る屋台燗もつく頃　尹

先生はフルーツパッフェお好きとか　う

虹消えぬ間に絵筆取り出す　る

月待ちて泰山木の芳しく　葦

エンジン音の響くガレージ　和

雪深き限界村に医師赴任　葦

つぐらに眠る嬰と三毛猫　和

花莚飲めや歌えのバカ騒ぎ　尹

君が代ズボン尻に春泥　う

南気(ナオ)の中権禰宜のしずしずと　る

津波避難はてんでんこにて　葦

ようそろと兵学校の声高く　和

はるかな空を翔ける銀翼　尹

七草の粥に我が夢溶かし入れ　う

結初を解く覚悟してます　る

マグダラのマリアを真似たポーズさせ　葦

共に戒律犯す戦き　和

忘れたきことばかりあり旅鴉　尹

釣果自慢の爺はご機嫌　う

兄貴から声かけられて月の浜　る

しつけしたまま秋袷着て　葦

体育(ナウ)祭武者絵写しのゲート立つ　和

天気予報はいつも大雨　尹

ピザパイをレシピ通りに焼き上げて　う

とんび注意と立てる看板　る

花の宿湯加減の良き露天風呂　葦

休耕田に揚げる連凧　和

注　君が代ズボン…着がむすほど着古した先生愛用のズボン

平成二十八年五月一日首尾

（於・横浜市港南区上永谷　土屋邸）

歌仙『冬落暉』

白井暎子捌

冬落暉富士は影絵となりにけり　暎子
　葦の枯葉のそよぐ湖　廣崎竜哉
バスガイドマイクの声をはりあげて　幸子
　腕白坊主テレビ大好き　暎子
中天に昇りきったる望の月　竜哉
　千鳥足にて虫すだくなか　幸子
ウダンディを気取り帽子の赤い羽根　暎子
　トランプをきる若き手品師　竜哉
不思議なる彼の魅力がたまらなく　暎子
　夫婦の夢は世界一周　幸子
買うことが趣味となりたる宝くじ　竜哉
　数打ちゃ当たる下手な鉄砲　暎子
賑わいし祭に露店活気みち　暎子
　夏の月差す寺のおお屋根　竜哉
明日のこと思いなかなか眠られず　幸子
　ふえる羊に犬をふやそう　暎子
咲き満ちて牧にこぼるる花大樹　竜哉
　青き踏みつつ未来みつめて　幸子
リオ逆上がり見守る婆のどらかに　暎子
　鬼に金棒小野に鉄棒　竜哉
幸せは歩いて来ない掴むもの　幸子
　バーゲン中は掏摸を警戒　暎子
風邪予防家に帰れば直ぐ嗽　竜哉
　寒九の水は薬にもなる　幸子
不祥事の議員に公人自覚なく　暎子
　遊び相手の女性次次　竜哉
今度こそはっきりしてよ男でしょ　暎子
　ペットの鸚鵡口真似に凝り　幸子
城跡の石碑に月の皓々と　暎子
　新酒に酔いて詩吟朗詠　竜哉
ナウ一言の挨拶交わし松手入れ　暎子
　築山の陰尊徳の像　幸子
節約は貯蓄の増える元であり　幸子
　いつも笑顔で暮せますよう　竜哉
花の雲鎮守の杜を包み込み　竜哉
　亀鳴きそめる里の平穏　暎子

平成二十八年一月　十七日首
平成二十八年二月二十四日尾（文音）

歌仙『宗祇連歌』

小林静司捌

万緑や宗祇連歌に親しめり　小林静司
声涼やかに華やげる句座　田口明子
沖からのフェリー近づく港にて　大庭初江
地産地消の野菜売る店　高木千代子
メールにて月の茶会に誘わるる　水野森雄
残暑の団扇風を呼び込むウ　井上輝夫
姉よりも背高き妹の秋袷　宮原うた子
ふたりの笑顔つむぐ幸せ　溝口喜代子
待ちかねし求婚の夜を乾杯す　佐藤まさ子
唄が泣かせる「ああ上野駅」　小林春野
戦後とは祖国苦難の時代にて　望月やゑ子
何がなんでも子には教育　竹井英夫
氷面鏡(ひもかがみ)月に照らされきらきらと　賀茂博美
主を待ちてつける熱燗　竹井清子
淡々とイチロー記録更新す　明子
天変地異と人の生き方　森雄
指先の反りも揃いて花の下　英夫
東風やわらかにせせらぎの音　うた子
「葉隠」(ナオ)を読みて命のあたたかし　千代子
ＥＵ離脱国民の意志　博美
未来向け視察目的リオ五輪　輝夫
公私混同せぬが信条　まさ子
母縫いし柄が気になる初浴衣　喜代子
生簀船には多いイケメン　やゑ子
若い日々活きたいものよ恋をして　清子
いつか夢見るシンデレラ姫　博美
わすれもの硝子の靴がありました　輝夫
ぴくりと動く飼犬の耳　明子
月をあび家路を急ぐ塾帰り　春野
執筆書斎香る木犀　森雄
「君が代」(ナウ)の制定の日があると聞き　千代子
複製ながらルノアールの絵　うた子
十四種画眉鳥美しく鳴きわける　喜代子
明けゆく浜にしらす網引く　まさ子
御用邸花めでらるる両陛下　宗匠
笛に整列遠足の児ら　初江

平成二十八年六月二十五日首尾
（於・裾野市東西公民館）

歌仙『よき旅』

荒井　慈捌

よき旅の終りの髪を洗ひけり　荒井　慈
まだ眼裏に残る鵜篝　原田安恵
悠久の大河の流れ事もなし　佐島和人
詩を詠みつつ盃の応酬　片山茂樹
二胡の音に聞き惚れて居る月今宵　慈
蒲の穂絮のゆるびゆく頃　恵
村長(ヴ)が新米供ふ神・仏　茂
工場誘致やつと目途つく　和
「婚活」のチラシ軒並配られて　恵
不倫の相手親友の妻　慈
色恋は我れ関せずと膝の猫　茂
寒月光はいとも妖しく　和
なかなかに除雪進まずラッセル車　慈
家苞とする小芥子人形　恵
いつまでも笑顔忘れず年重ね　茂
とりも直さず無病息災　和
八卦見の当らぬもよし飛花落花　慈
のどかに暮れる故郷の山　恵
桑(ナオ)の葉を食ぶる蚕の音高く　和
急な階段登る屋根裏　慈
隣国は何が何でも核武装　茂
きれいどころの揃ふパーティー　恵
円舞曲熱き思ひに我忘れ　和
ガラスの靴の乙女いづこに　茂
雅なる領巾ひるがへし熱帯魚　恵
裸の子等の駆け出してゆく　慈
藩校は今も厳しく劍の道　茂
駐在さんの急ぐ自転車　和
後の月うからやのうち揃ひ　恵
美術展には並ぶ力作　茂
竜田姫(ナウ)山野を染める色づかひ　慈
翁の句碑の残る城跡　和
ハイウエイ島々結ぶ橋いくつ　慈
入社式には洒落た制服　恵
花守の努力実れる花盛り　茂
牧縦横に走る若駒　和

平成二十八年六月二十二日首
平成二十八年七月二十七日尾

（於・成城クラブ）

歌仙『古今伝授』

爽籟や古今伝授の宗祇水　恵
　城下町には秋蝶の舞　慈
月今宵差しつ差されつきりもなし　児
　工場誘致やつと目途つく　恵
ロボットの所作スムースにスマートに　慈
　連発銃を磨く狩人　児
恋（ウ）心内に秘めたる寒詣　恵
　連れて逃げてと豪華客船　慈
もう時効カスパの迷路住み馴れて　児
　三ヶ国語を自由自在に　恵
熟年の合唱団のハーモニー　慈
　葛饅頭は京の名物　児
釣忍ひそと軒端に月渡る　恵
　夢見つ眠る吾子笑ひ出す　慈
お蔭様箪笥預金に目減りなし　児
　オレオレ詐欺の下手な声色　恵
花吹雪タカラジェンヌの男役　慈
人も居らぬに揺れるふらここ　児
　親雀（ナオ）チーチッパと子に教へ　恵
　無神経なる町の騒音　慈
黒髪の乙女のモデル写真館　児
　戦に散りて還らざる方　恵
島民のやさしき言葉涙して　慈
　忘れ潮には逃げまどふ魚　児
サングラス弱さ隠して仁王立ち　恵
　浮人形は肩を怒らせ　慈
百号の大作かかる社長室　児
　国会審議今や酣　恵
バスを待つ母子に月は笑みこぼし　慈
　雁来紅の賑はひ　児
過（ナウ）疎の村力合はせて冬支度　恵
　縁先で飲む番茶一服　慈
残されし命大事に人と犬　児
　南無阿弥陀仏有難く聞く　安
餅花の商店街にエトランゼ　児
　いろはかるたに時を忘るる　執筆

臼杵游児捌

原田安恵
荒井慈
臼杵游児

平成二十八年八月二十四日首尾

（於・成城クラブ）

百韻『古今伝授』

宗祇より古今伝授の明の春　狩野康子捌

お重はみだす伊勢海老の髭　狩野康子

対岸に畑打つ人の見えもして　田畑剛

凧合戦の声が飛び交ひ　千葉惠子

縁側に回りうかがふ孕猫　藤田とよ

老舗通りの代替はりする　中込とし郎

物知りの一家言あり月見酒　和知貴寿

誕生日の子髪に野菊を　久保田直

地芝居を村の誇りと槍枝岐　田代洋子

カーテンコールユキヲニナガワ　高田春男

郵便夫赤いポストの腹開けて　康子

葛饅頭を手のひらに受く　剛

神の木にしがみつきたる蟬の殻　惠子

ときに無視する徐行信号　とよ

初恋のあの日に戻る反戦歌　とし郎

トレビの誓ひ永遠に守らむ　洋子

次郎柿有明月に寄り添うて　直

鎌研ぐ音に跳ねるこほろぎ　緑川一男

この扉押せば不倫と知りながら　瀬谷節子

籠背負ひ目印たどる茸山　高杉正生

精霊たちは苔を褥に　惠子

枝伸ばし花爛漫と咲きほこり　和知延

雀の雛を拾ふグランド　剛

震度七朝寝の夢によみがへる　康子

祖母似と言はれ開くアルバム　小高寿江

旅に出て思ひ出つくる蔵の町　松島弘行

楽翁拓く南湖公園　富永航太

ひそやかに水琴窟の奏でゐて　茂呂雄太

スマホ操る細き指先　竹島美代子

冬の闇二人の姿包み込み　小松寛

身を切る風に心寄せ合ふ　阿部崇史

めくるめくる天女の気分無重力　平原正一

母の古里世界遺産に　吉原一夫

民挙げて守りし城の大手門　川崎輝美

ぱつとひらめきレシートにメモ　国分恵

月涼し川の底には何かゐる　戸倉克彦

薔薇のアーチをくぐる通夜客　惠子

兄弟で仲良く分ける氷菓子　吉田裕人

撫でて撫でてとねだる愛犬　富永智佳子

余裕などないが優しさたつぷりと　洋子

空は空　色　水は水　色　剛

とよ

寄り添ひ歩くリオの街角　とし郎
鍛へたる筋肉美しきアスリート　節子
廊下滑らす五玉算盤　直
月朧付きがなかつた皐月賞　角田喜一
しいしいしいと田螺鳴くなり　輝美
中日に誘ふ近所の媼どち　雄太
間欠泉にあがる歓声　一夫
学び舎に希望を点す帰り花　星浩次
千枚漬けの匂ふ食膳　正一
*久々に会つたマドンナ凍蝶に　裕人
じやがたら文に滲む哀しみ　康子
正露丸万能薬といふけれど　木田眞智子
村を見守るやうに里山　田中裕子
子どもらの声で溢れる谷津田川　新国真理恵
イコンに祈る戦なき世を　寿江
初鶏の行方確かむ藪の中　正生
孤独の影がくぐつまはしに　春男
週刊誌政治資金の不正など　洋子
棚の十手の房は紫　裕子
ともかくも性善説にすがり付き　雄太
帰つておいで除染終了　一夫
寄り合へば縁台将棋夏の月　澁見正則
「雨ニモマケズ」ビール飲み干す　恵子

*ニウタンバリン電池切れまで叩く猿　眞智子
卒寿の背筋しやんと伸ばせる　とし郎
恋のつぼ力太郎に教へられ　とよ
嫁女としては過不足のなし　剛
乗り越えし苦難の時代懐かしみ　正一
水鏡には桜映え　輝美
参道のあの世に続く吹溜　直
野菜の高値嘆く主婦たち　とし郎
月明り昨日も今日も寝正月　根本克己
宝船にはポケモンがゐる　正一
新元素命名権を与へられ　康子
行書草書といとも達筆　星悠
南米に初の五輪の大花火　岡谷光昭
作りたてとて弾む蜘蛛の囲　渡邊仁子
*ナオ雪渓をしかと踏み締め進み行く　貴寿
靴職人の腕の確かさ　洋子
表札にいまも残せし主の名　剛
石の蛙は賽銭を載せ　惠子
十秒の壁突破せむ桐生君　康子
ドラフト指名母校万歳　とよ
厚切りの大根煮込む大鍋に　直
くねくね曲る冬耕の畝　とし郎
ゆびきりに代はる絵文字のメールきて　洋子

変なをぢさんひと言もなく
あれこれと人工頭脳もてはやし　恵子
ナイトビショップチェスの盤上　康子
関の戸を自在に漏れて月明り　深沢眞二
真葛ヶ原に分け入るは誰　とよ
福島（ナウ）の復興示す今年米　直
パワー漲る新任の知事　とし郎
その中にレディハーレーダビッドソン　洋子
従兄弟世代はいつか疎遠に　恵子
朝日差すいつもの窓に雲流れ　康子
潮の満ち干を測り海苔掻　剛
櫓より眺めし下界花の雪　鈴木和夫
百葉箱に戯れる蝶　とよ

平成二十八年五月二十八日首
平成二十八年六月二十二日尾
（於・白河市中央公民館・文音）

歌仙『こねこねこねこね』

村松定史捌

木の芽寒ム骨は六八(ろっぱ)の蛇の目傘　　村松　定史
裳裾みじかく雪解道ゆく　　清水風子
波のどかのつぽりと掌に溢れゐて　　山地春眠子
時計の止まる昼前の村　　浅岡照夫
かけ声を聞いて出て来た今日の月　　高松　霞
芋茎(ずいき)干し終へほく安心す　　はまさきひろし
ウ紅葉かつ散るおヨネはくどく嫁の口　　〃
旅をさせたらこの為体(ていたらく)　　風子
ピストルから青い煙がゆらゆらと　　春眠子
盗み見てゐる預金通帳　　照夫
蝿虎感電してコンピュータ故障する　　春眠子
油断できない日本ダービー　　霞
月の出に百合は頭を垂れてをり　　照夫
水盤舎にて魂(たま)を濯がむ　　風子
珍皇寺の辻で求める幽霊飴　　ひろし
困つたときの顎つまむ癖　　春眠子
花万朶世阿弥の舞が呼び出され　　霞
小町九相図とこしへの春　　ひろし
ナオ酒酌めばこねこねこおやねこね　　霞
万能細胞苦笑ひする　　定史
メトロ下り迷路抜けると空にゐて　　照夫
ドロップキック客席を越え　　春眠子
病室の窓を映して神田川　　霞
届く手紙は雪女より　　照夫
ウラミナドナイワ凍雲満ちてゆく　　霞
ここぞと言ふと締まる門　　坂根慶子
飛石のふためぐりして美術館　　中村安伸
指差確認山のトロッコ　　照夫
月光は豪気な闇に負けざるよ　　穴澤とこ
公達集ふ残菊の宴　　慶子
ナウロボットの歩幅くらゐはかまどうま　　風子
売れた毒魚に踊るマスコミ　　ひろし
住むならば東の瓢(ふくべ)西の樽　　春眠子
鳥に言葉を教へゐる人　　照夫
花箒筆も絵の具も炎なり　　安伸
紙風船の降りるゆふぐれ　　霞

平成二十八年三月十九日首
平成二十八年四月十六日尾

（於・北とぴあ）

『黒南風の九人』

半歌仙

山地春眠子捌

黒南風を負ひて九人や木曽塚に　村松定史
若亀ひとつ梅雨了る頃　西川なほ
高速道深夜のバスはさびしくて　井上成美
かすかに遠く月と山脈　穴澤とこ
いかがかな自家栽培のピーナッツ　小池舞
盃洗ひ新酒待つのみ　浅岡照夫
鵲と橋を渡れば行き止まり　岡部瑞枝
暮しはじめの卓は小さく　定史
日を選びいちどきに干すシャツその他　舞
バリから従姉妹おしやべりに寄る　はまさきひろし
その程度では揺るがない信仰心　瑞枝
退職決まり綿虫が飛ぶ　照夫
月を背に翁は霰掌に受ける　定史
加賀棒茶汲み病気自慢で　なほ
「みみつちい」つてどんな意味かと尋ねられ　瑞枝
抜参して懺悔録書く　なほ
又玄も目覚めて来よと花の暁　山地春眠子
夢に蝶々のあちらこちらへ　成美

平成二十八年六月二十九日首尾

（於・義仲寺無名庵）

歌仙『秋祭り』

秋祭り笛の奏者も老いにけり　石川光男捌
　奥の院まで鯛の声絶えて久しき　杉野辨一郎
古民家に月の光りの差し込んで　柏原知子
　お伽噺を孫に聞かせる　市川美代子
折り紙の折り目折り目を丁寧に　石川光男
　鳥へと残す実南天映ゆ　美美
空耳か裏木戸叩く寒の風　辨光
　安保改定如何に憲法　光知
横車道理は隅に押しやられ　知美
　カルピスの味初恋の頃　美美
洗い髪白き襟足月赤し　光知
　夾竹桃の木には毒あり　知美
病室に面会謝絶赤文字で　美知
　富者の驕りを家政婦は見た　知美
築地塀曲がりて僧は食堂へ　美知
　池面を揺らし鯉が伸びする　知美
花の川瀞もタッポも舵まかせ　美知
　葦味噌を煮る夜の雨音　知美
春暁の目覚めに淡き遠鴉　知美
　噂話も絶えて久しき　笠真下草
書架にある手垢塗れの和綴本　草美
　弦の切れたる琴そのままに　美美
老いの身に生きた幸せ根深汁　辨知
　雪を冠りし富士の掛軸　草草
先祖には名だたる武士も有りしとか　光光
　渡すバトンが虚仮てコロコロ　知知
手鍋下げ捨てし故郷忍ばれる　光光
　恋句巧みに君が寄り来る　草草
二日月虫に預ける草の閨　知知
　宅急便に毬栗を入れ　美美
人肌の酒欲しくなるそゞろ寒　草草
　鐚銭握りし駄菓子屋の前　光光
君車掌僕に縄電車運転手　辨辨
　札所詣りは杖を頼りに　美美
妖精の宿るが如く花の散る　美美
　鏡の中を子猫横切る　知知

平成二十八年九月二十二日首
平成二十八年十月　二十日尾
（於・埼玉県大里郡寄居町よりい会館）

二十韻　『庭小春』

石本志明・小山柴門捌

燃やすもの囲ふものあり庭小春　石本志　明
　冬至湯浴びて冬至南瓜　和田てる子
金棒の宵街並を行き過ぎて　三木蓮糸
　手をつなぐ子の声の楽しさ　天谷自閑
早寝してスーパームーンを見逃せり　てる子
　銀杏黄葉を君と踏みしめ　蓮糸
菊の酒差しつ差されつ四畳半　自閑
　トップ騒がし外ッ国の乱　〃
てにをはを幾たびも替へ元の句に　てる子
　胸に深々鎮魂歌聴く　白崎ひろ子
初蛍(ナオ)川の流れに揺れ飛びて　蓮糸
　夏の月背に親子寄りそふ　前田高宏
連衆に笑ひ上戸の二三人　てる子
　サインを送る折りたたむ指　自閑
いとほしと封切る文に老いの影　蓮糸
　雪重たげに光一筋　高宏
地球(ナウ)儀に紙の飛行機墜落す　てる子
　春一番にショール外して　蓮糸
いざ狂へ弘川寺の花のもと　小山柴門
　風に吹かるる蒲公英のわた　高宏

平成二十八年十一月十八日首
平成二十九年一月二十一日尾
（於・越前市文化センター）

二十韻　『神の子』

水上潤子捌

着飾りて神の子となり七五三　山口由紀子
　綿虫追ひて踏みし玉砂利　清水季扇
道の駅地産地消を商ひて　酒井泉
　こころ和めるコーヒーの香　水上潤子
若きらに昔を語る月の宴　斉藤越二
　おわら祭で君を見初むる　季扇
火の恋しミサンガ交はす赤き糸　由紀子
　留学の娘の便りぱつたり　潤子
偏頭痛起る兆しの空模様　季扇
　不思議の国の兎跳び出す　〃
夏木立出勤前にジョギングを　徳永さおり
　朝月の下唄ふ早乙女　梅田君枝
島々の風景今も変はらずに　越二
　秘密は墓まで持つて行くから　橋本枯野
あの夜の契り忘れぬ紅行燈　越二
　漱石流の髭はやらず　潤子
補聴器をつけて父親饒舌に　君枝
　春のスカーフ風にさらはれ　季扇
入江には花誇らかに白き船　枯野
多島海にて蝶と戯る　さおり

平成二十八年十一月十八日首
平成二十八年十二月十七日尾
（於・越前市文化会館）

歌仙『青田の風』

大久保風子捌

みはるかす青田の風や八つの峰　谷口螺々子
　麦藁帽が右に左に　小林喜一
集まれとリーダーシップ発揮して　半田有杜
　たて笛吹けば子等と犬猫　田中安芸
ようそろと面舵いつぱい弦の月　仲本お池
　浜辺に群れ咲く白き磯菊　井田瑞亭
お社に柿羊羹をそつと置く　今富千辺
　届くメールは♡（ハート）連打ち　久保田朴
あこがれのマドンナあいつ射止めたと　大久保風子
　分別あれど捨てられぬ縁　山中主水
夢に抱く小さき乳房のほころびぬ　安芸
　口でとろける河豚の煮凝　喜一
雲間よりもれ出づる月影冴へて　朴
　地獄の釜の蓋の開く音　お池
歯痛には閻魔さまさへ耐へられず　有杜
　春きざす朝バスを待ちつゝ　螺々子
花を見て宿では枕投げをして　千辺
　蚕ひたすら桑を食みたる　螺々子
若駒（ナオ）は大平原を駆け巡る　喜一
　場末のシネマ私鉄沿線　お池
フレンチは行列の店二つ星　安芸
　博物館へ母の手を引き　風子
黒びかり土偶女神のしやくれあご　瑞亭
　永六輔は大往生す　有杜
聞き役と答へる役のほとゝぎす　千辺
　炭酸水にはぜる吐息の　安芸
からみ合ひ奈落の底の底までも　有杜
　胸の炎は今も消さずに　田朴
断捨離の予定手帳に後の月　瑞亭
　酒酌み交はす色葉散る里　田朴
秋（ナウ）団扇開店記念に配られて　千辺
　ローカル列車は糠雨の中　有杜
我ひとりガイドブックにない旅路　田朴
　だまし舟ならチラシで折るよ　安芸
鶴ヶ城ライトアップに飛花落花　喜一
　皆して聞かん亀の鳴く声　風子

平成二十八年七月二十九日首尾
（於・八ヶ岳さんどりよん）

《東京・遅刻坂連句会―その二》

歌仙

『芍薬の蕾』

半田有杜捌

芍薬の蕾に雨のひとしづく　山縣敬二
　耳をすませばはつなつの声　半田有杜
工事見る少年の顔輝きて　小林喜一
　リターンエースラインぎりぎり　石田耕庵
鉛筆をなめなめやつと月一句　青柳祥風
　山は連なり紅葉果てなし　小野酔陶
寄り道のよの字も知らず雁の列　有杜
　あの人この人土産手に手に　敬二
美味いもの路地裏にあり古都暮れる　喜一
　羽衣まとふ僕のアモーレ　祥風
バスタブの泡もろ共に君を抱く　酔陶
　失くしちまつたあのスペアキー　有杜
落葉焚き灰の中から出でたるは　敬二
　月にも届けひびく寒柝　喜一
爆睡のミケは鼾と寝言まで　祥風
　深き入江に打ち寄する波　有杜
群れて咲く花より我は老一樹　酔陶
　独活の味噌和へ酒は吟醸　敬二
初虹（ナオ）は木曽三川をひとまたぎ　喜一
　檀家廻りはいつもポルシェで　祥風
金メダル取つてくるぞと勇ましく　有杜
　昼夜逆転寝不足必至　酔陶
乱れゆく汝が黒髪のかぐはしき　敬二
　蚊もいとはずに長き口づけ　喜一
ふられ癖それでいいのとかき氷　祥風
　古き社の扉かたむき　有杜
湖北には兵どもが跡数多　酔陶
　舟に揺られて魚釣る日々　敬二
病める者健やかなる者月上る　有杜
　縦横斜め裏からも秋　祥風
そぞろ（ナウ）寒待つた待つたのへぼ将棋　喜一
　遠くを見据ゑる龍馬の銅像　酔陶
偉人伝得たる知識は漫画から　敬二
　空き家を生かしルームシェアする　喜一
風あらば花のワルツをシャンゼリゼ　祥風
　灌仏会にも青い目のひと　酔陶

平成二十八年五月二十一日首
平成二十八年八月　五日尾（文音）

歌仙『八ヶ岳』

塙　於玉捌

代牛や田の面に映る八ヶ岳　山中　主水
風の匂ひも夏きざす頃　塙　於玉
深呼吸一気呵成と筆とらん　仲本　お池
パクチー盛つて海南鶏飯　井田　瑞亭
杯交はすスカイラウンジ望の月　横田　思案人
警官の立つやや寒の道　今富　千辺
時代祭維新の砲兵あどけなき　稲葉　和平
リリアン編みのお守り進上　主水
片恋は波間漂ふはぐれ魚　於玉
もろ手に余る豊満な人　お池
赤衣着て外また歩きの山男　瑞亭
しあわせ指数最高値まで　思案人
枯蓮の池を月光そろそろと　千辺
紅頭高く丹頂の舞ひ　和平
手もとから大事なガラス取り落とし　主水
阿古屋が弾くは胡弓の調べ　瑞亭
故郷の花の隧道ほろ酔うて　お池
亀よ出で来て鳴きたくば鳴け　千辺

ナオ
病室の窓のかなたの春の虹　思案人
解けないパズル抱へうろうろ　於玉
あつちつち尻焼く出湯川の中　千辺
茹でてぶつ切り溜りがオツさ　主水
芭蕉布の髭の剃りあと触れたきに　於玉
西日差し込む四畳半とは　お池
砂浜で回し飲みしたコカ・コーラ　瑞亭
いづこともなく響く笛の音　思案人
国境の消えて知らない人ばかり　千辺
顔厳かに奈良の大仏　和平
月の影御堂の屋根にしるく差す　瑞亭
入れ子の箱に椎の実を詰め　於玉
ナウ
羽虫にも頼りなげなる秋の風　主水
朗らかなりし留守電のこゑ　お池
遙かなる我らがルーツたどる草舟（ふね）　思案人
名もなき者に石の勲章　千辺
段葛花も新たに輝ける　和平
まどろみをればうららかな夢　執筆

平成二十八年五月　二十日首
平成二十八年七月二十九日尾
（文音・ウラ9句目より折端まで大久保風子捌）

歌仙　『発車のベル』

走り梅雨発車のベルも湿りける　　田中安芸捌

窓に手を振る子は衣替　　高井辛六

波静か見知らぬ鳥の二羽浮きて　　田中安芸

何か動いた魚群探知機　　久保田朴

月載せて連山憩う音のなく　　大久保風子

栗飯ほくとほどよく炊ける　　新田透舟

「藤村の濁り酒」酌む岸近く　　武井蛙女

かすれし声は糸電話越し　　秀島一生

あの頃の見境なしの恋の果て　　辛六

つきぬ涙も涸れて幾歳　　安芸

骨抜きのマンションいよよ建て替えに　　田朴

踏まれる前の霜の凛々しさ　　風子

月冴える己が歴史の行く先は　　透舟

篠笛流るるふるさとの城　　蛙女

柿色の托鉢の列プノンペン　　一生

ミサンガ切れて願い叶うか　　辛六

花吹雪今日見納めと仰ぐ空　　安芸

震える脚で仔馬すぐ立つ　　田朴

政治家は一年中を万愚節　　風子

砂漠さまよい捜すオアシス　　透舟

今にして父の大事な継茶碗　　蛙女

腐れ縁にも世間体あり　　一生

まんまるな媚薬を包むオブラート　　辛六

浴衣の君は薄紅の頬　　安芸

空っぽの寝蓙けだるき白昼夢　　田朴

ばかのあいてはこれでおしまい　　風子

無頼ゆえ義理人情を死語とせず　　透舟

微風に揺るる薄いカーテン　　蛙女

丸窓に嵌る満月床照らし　　一生

松ぼくり蹴る小社の道　　辛六

秋寂し帰宅を急ぐ足音に　　安芸

受賞小説すでに売り切れ　　田朴

人工の知能の狙う匠業　　風子

機織り機から幾何学模様　　透舟

朝の陽の花色に染む大八州　　蛙女

磯菜摘みつつ無事をこれから　　辛六

平成二十八年五月二十一日首
平成二十八年八月　十五日尾　（文音）　　執筆

歌仙　『星が育てる』

満天の星が育てる凍豆腐　　松田ぼくる　捌
　金屏風背に資客を待つ　　坂田酔彦
片言の外国人は饒舌で　　佐藤晴子
　五七五を作る愛嬌　　今村苗
月球儀未知の起伏を繰り広げ　　る
　初鴨鳴けば犬は耳立て　　彦
杜鵑草（ほととぎす）コップに小枝活けさせん　　晴
　分厚い眼鏡かけた校長　　苗
百組の媒酌目指すお世話好き　　晴
　次のデートに勝負服着せ　　る
お別れの気障な仕料（しぐさ）もルパン風　　苗
　蝉の蛻（もぬけ）がしがみつく壁　　彦
烏丸の祇園囃子は月に和し　　彦
　高いところにようお越しやす　　晴
燥買いのうっとりとするウォシュレット　　る
　直行便の遅延又もや　　苗
花ひらきたれば名所は人の群　　晴
亀が鳴くよとちらと耳打ち　　苗
尺八をもてあそぶ手に春長け　　彦
　塵ひとつなき寺の広縁　　る
かたくなな姑の予後を労わりつ　　苗
　乾漆の杖贈り励ます　　彦
厚かまし求愛メール又も来て　　る
　気づかぬ振りで今日もゴミ箱　　矩口ひろ子
猿曳が猿と分け合うチョコレート　　苗
　負の財産となりし別荘　　彦
愛蔵のロマネコンティは飲み干して　　る
　クルーザーではダンス三昧　　苗
コソ泥の歯噛みしている月明かり　　彦
　企業秘密の蕈まだ出ず　　ろ
やや寒の山峡に夢追い求め　　苗
　座敷童に笑われている　　る
伝来の掛け軸実は北斎と　　苗
　石碑の陰に溶ける淡雪　　る
花吹雪孫はエプロン広げおり　　苗
　若鮎ピチと跳ねる掌　　彦

平成二十八年一月十九日首
平成二十八年二月十六日尾
（於・港区烏森生涯学習センター）

短歌行　『コントラバス』

今村　苗捌

夏闇をコントラバスを担ぎ来る　古谷裕子
　月太り行く蝉生るる頃　伊藤航
友達と標本あまた見せ合って　坂田酔彦
　にんまり笑いかわす熱燗　今村苗
寒(ウ)さ好き犬唾み合うこと忘れ　航
　妻の浮気がオット危ない　苗
メールには逢いたいとだけ書いてあり　裕
　きしみつつ開く隅の仏壇　航
朝には厚顔の知事夜半の辞意　彦
　タイムズは書くtoo sekoiなど　裕
炊き立ての御飯にかける花鰹　航
　椎間板の痛みほろほろ　苗

東京(ナオ)タワー歩いて登る親と子と　苗
　風死す街に誰の香りか　航
恋はまだ知らないみたい浴衣がけ　裕
　岸辺の舟はゆるくたゆたい　苗
月今宵独眼竜の夢のあと　彦
　世界眺める清き田雲雀　苗
思いきり打てばフォウルの芒原　彦
　座敷童子は小走りに消え　苗
一(ナウ)幅の薄墨の軸床の間に　航
　黒森歌舞伎旅の目的　彦
和をもって花・花・花のおもてなし　裕
　風やわらかに暮れて行きけり　苗

平成二十八年六月二十一日首尾
（於・港区烏森生涯学習センター）

短歌行　『昭和の音』

鈴木美奈子捌

梅雨晴間昭和の音か蝉時雨　坂田酔彦
　ほほえみ交す池の睡蓮　鈴木美奈子
町内の太極拳の切りもなし　永田吉文
　路面電車の二十分待ち　浅沼小葦
摩天楼風の連れくる青き月　奈彦
　いつもの老舗ボスと利酒　葦吉
触れないで毒茸といふわたしです　吉彦
　手品のやうにぱつと翔ぶ恋　彦葦
参院選与党見事に過半数　葦奈
　大ブリテンも明日はだうなる　奈彦
奥千本中千本の花くぐり　彦葦
　春の日傘を回す幼ら　葦吉
分教場は陽炎の中　吉奈
　渋（ナオ）きのど糸に託して俊寛忌　奈彦
山荘に呼び和食もてなす　彦葦
地図にない道を探しに旅に出て　葦吉
　テロリストから甘い囁き　吉葦
騙された振りして手にはコルト持ち　葦奈
　翅をたたんで眠る白鳥　奈彦
月中天炭の日落ちた雪達磨　彦吉
　ニホニウムへと師弟協力　吉奈
満貫の牌に八十路の夢を賭け　奈彦
　株で儲けて払ふ税金　彦葦
キリストもアラーもおいで花筵　葦彦
　分教場は陽炎の中　吉葦

平成二十八年七月十九日首尾

（於・ばる～ん（新橋））

非懐紙　『ビルの空』

丹下博之捌

鰯雲徐々に動くやビルの空　功刀太郎
しめじ朝市一盛りを買う　伊藤航
石畳冷やかし歩く下駄履きで　白石一有
いい娘いるかな旅の気安さ　丹下博之
モスクワも言葉いらずの闇の闇　太郎
出産めぐり死ぬの生きるの　航
遠ざかるサイレンの音さびしさよ　一有
数珠つなぎなる春の山彦　博之
淵蒼み獺魚を祭る頃　航
絶滅危惧種肌をぶるんと　一有
枝を編む堤を作るごとく編む　博之
雑兵幾千木曽の夏山　太郎
ひとりゆく「風に吹かれて」ボブディラン　航
背筋に高く波の花浴び　一有
樽酒の鏡を破らん鬼の舞　博之
ゼリーふるわす緑陰の卓　太郎

平成二十八年十月十八日首尾

（於・港区生涯学習センター・ばるーん）

二十韻　『アールグレイ』

今村　苗捌

秋の日をアールグレイの香り立つ　苗
　どこにでも行く月明かり浴び　裂
蓑虫の鳴くか鳴くかと耳たてて　裕
　窓の隙間をこじ開ける猫　理
ウ石庭を掃く禅僧の腕細く　苗
　絵葉書ことり胸騒ぎする　裂
我が恋は淡くはかなきまほろしか　理
　洗濯物のひるがえる軒　裕
ムーミンの遊んでおりぬ雲の峰　裂
　左手にジングラス冷やして　苗
ナオ片隅に弦のゆるんだピアノ弾き　裂
　港の手配写真千切れし　苗
今ならば越えてしまえる心地して　裕
　肩を抱きてクリスマスイブ　理
柊の花に夢見る月白く　苗
　埃被りし高麗の壺　裂
ナウ週末に世論調査の電話きて　理
　陽炎の中走り抜ける子　裕
トンネルを出ずれば肩に花の塵　裂
　ついと姿を隠す山鳥　苗

平成二十八年十月十八日首尾
（於・港区生涯学習センター）

歌仙『涼新た』

高岡風蘭捌

白川や水のしぶきも涼新た　丸山景子
　雲の爽けき行合の空　井原弦
塾へ行く子ら賑やかに月出でて　品部三酔
　自転車止まるタコ焼き屋台　井尻荷葉
ガムこれはバーチャル食品呑み込めぬ　北原春屏
　狸葉つぱの裏でどろんと　出来千苑
小春日の呆け初めたるさびしさよ　高岡風蘭
　もはや死ぬまで逢へぬ面影　春屏
挙げてない結婚式を今日やらう　弦
　後妻つぎつぎ生業となる　千苑
Uターン先祖の田畑受け継ぎて　三酔
　土竜むつくりちよろり野鼠　荷葉
蟻落つる吟行後の手帖より　上田真而子
　月早や高し冷酒の縁　春屏
鐘の音に色ありとせばにじむらむ　景子
　旅も終りの湖見はるかす　春屏
舞ひ上り波に小紋の花吹雪　景子
　逝く春を追ふ画家のキャンパス　三酔
帰宅しても一度出づる暖かさ　荷葉
　朝日を受けて山の襞濃く　春屏
釉薬のどろりとかかる焼き具合　三酔
　何諍ひし利休秀吉　弦
夜咄の席に出るやら出ないやら　千苑
　杜にくぐもる木菟の声　福島佳子
告白の返事を直に迫られて　三酔
　狙ひは体それともお金　荷葉
難病の治療開発加熱ぎみ　弦
　母の手当の暖かかりし　荷葉
月見むと河原の芒摘んでくる　弦
　翠黛さらにけぶる夕霧　春屏
秋澄みて深まりゆけば書三昧　風蘭
　終点はまた始発駅なり　佳子
俄雨蝙蝠傘の頼もしさ　荷葉
　路の凸凹光る春泥　春屏
子を誘ふ小学校の花盛り　荷葉
　天まで届け競ふぶらんこ　三酔

平成二十八年　九月三日首
平成二十八年十二月三日尾
（於・京都市国際交流会館）

歌仙　『咲きも残らず』

散りもせず咲きも残らず花万朶　井原　弦捌
川上遠く霞む北山　上田真而子
暮れかねる駅に異国語飛び交ひて　北原春屏
道に香りの流る珈琲　福島佳子
生バンドビート効かせて昼の月　晶部三酔
タップを踏んで踊る城址　出来千苑
瓜坊が青空市に迷ひ込み　高岡風蘭
キャッと騒いで腕取る彼女　井原　弦
力なきアンカー髭の色男　〃
次々抜いてバトンを渡す　三酔
傾いた会社は遂に身売りして　春屏
遠吠えはるか滅ぶ狼　三酔
月冴えて隊商の列城門へ　井尻荷葉
崖に崩れた仏像の址　佳子
朝々に茶粥を炊いて古都閑か　三酔
ダイヤのやうな日照り雨降る　佳子
梅と桃さくら同時に咲き誇り　荷葉
新手閃き七冠の春　風蘭
風光る窓の眺めの広々と　弦

真珠筏の伊勢志摩の海　丸山景子
瓔珞へ戸外の明りほのかなる　三酔
ヨガの修行の裸足生活　春屏
猫仲びをした後さつと百足追ひ　千苑
錦小路は魚屋多し　三酔
この恋も考へ過ぎて迷い出す　春屏
親が取り合ふ嫁か婿殿　風蘭
義太夫の二十四孝を切々と　千苑
しぶきをあげて流れ渦巻く　春屏
名月が大吊橋を横切りて　風蘭
村中こぞり秋の祭を　千苑
祖母の味松茸飯の懐かしく　弦
仏壇の奥小さき十字架　風蘭
身辺を雀のやうに単純に　荷葉
親友となら愛蔵の盃　佳子
花追ひて北へ北へと旅の空　真而子
ゲームに飽きて田螺取る子ら　千苑
風（ナオ）光る窓の眺めの広々と　佳子

平成二十八年四月二日首
平成二十八年八月六日尾

（於・京都市国際交流会館）

歌仙『青葉木菟』

陵を塒としたる青葉木菟　　鵜飼佐知子捌
　濠をうずめてひらく睡蓮　　鵜飼　佐知子
夏座敷宝づくしの帯締めて　　小田英珠
　手紙を添えて送る自分史　　朝倉和子
うつし世を照らしてしずか望の月　　〃
　名代の杜氏新酒売り出す　　東海林さくら
地芝居の白塗り女形盃を投げ　　鈴木壽子
　記録破られ漏らす強がり　　和子
廊下には色の褪せたる経絡図　　三浦康子
　開かぬ踏切あちらこちらに　　佐知子
からかわれ涙ほろりと泣きぼくろ　　英珠
　コートのままで強く抱きしめ　　英珠
神の留守無職なれども祝婚歌　　康子
　月光の溶く凍てし艫綱　　明朗
傍らにアラビア文字の硝子壜　　英珠
　妖精の杖軽くひと振り　　康子
花吹雪ビッグエッグを孵化させん　　和子
遠足の児の瞳輝く　　さくら
願い込め総出であげる出世凧　　佐知子
　先祖代々長命の家　　和子
ジョギングとダンスとラジオ体操と　　英珠
　かき揚げにする蚕豆のいろ　　康子
へそくりの株の儲けで船旅へ　　〃
　流し目受けて夫を忘れる　　英珠
恍惚の末に閻魔にすがりつき　　佐知子
　参賀の列の小旗ひらひら　　和子
染め糸の手毬作りを教えられ　　英珠
　バックパックの金髪が行く　　康子
がちゃがちゃの鳴きだしてより闇かるく　　さくら
　谷川岳に日月のたたずむ　　明朗
茸狩の秘訣誰にも教えない　　佐知子
　3Dにてマリオ出現　　康子
朝ドラの旧き街並ジオラマに　　さくら
　白魚たっぷり卓を賑す　　明朗
列島に寧けき刻を花万朶　　康子
　制服うら記念撮影　　さくら

平成二十八年七月九日首
平成二十八年八月四日尾
（於・ハイライフプラザいたばし）

歌仙『あまめはぎ』

密田妖子捌

藤江紫虹　あまめはぎ紙の大鉈ひらめかす
二羽智子　縋りつく子へゆれる繭玉
吉本芳香　春の海はるか遠くを弓なりに
田川利公　一浪の末晴れて入学
多田史代　ふいに聞く故郷訛り月おぼろ
永多澄枝　ふれ合いサロン習うちぎり絵
加納俊子　バースデー得意料理の揃い踏み
村上町子　肩にもたれてほろ酔い機嫌
密田妖子　妻の座にやっと坐れたこの奇跡
高見よ志子　自惚れ鏡に軽くハミング
北野眞知子　ビザ無しの旅はリュックとスニーカー
宮村千鶴子　けもの道ある街のうら側
瀧澤尚子　月昇る神の宿りし嶺の上
紫虹　ひょんの実吹いて脳は溌剌
智子　白妙の懸崖菊が人寄せて
芳香　お洒落な小物並ぶ店先
利公　花の雲帰り急がぬ展望台
史代　肩の辺りを胡蝶ひらひら

平成二十八年　十月　二十日首
平成二十八年十二月二十五日尾　（文韻）

ナオうららかな刻を落ち行く砂時計　澄枝
俳句談義に増える教養　俊子
地球出て未知の世界を覗けたら　町子
三半規管とても精巧　妖子
美少女の床運動の軽やかに　よ志子
絵馬を裏へと返す寒風　眞知子
幸せに気付かぬ友へ雪見舞　千鶴子
お惚気ばかり聴けば聴くほど　尚子
ビオラ弾く叶わぬ恋に泣きながら　紫虹
税を逃れる術を学ばん　智子
和やかな月見茶会に招かれて　芳香
竹馬の友と語る長き夜　利公
ナウ弓矢まだ構えしままの捨て案山子　史代
歩けるうちはスローながらも　澄枝
アトリエに狭しと並ぶ土器破片　俊子
おまわりさんの錆びた自転車　町子
創業者お手植えの花今盛り　眞知子
親交結ぶ鯛の浜焼　尚子

歌仙『あそばせる』

猫じゃらし時代の風をあそばせる　八尾暁吉女捌
　犬の巻尾にそそぐ月光　八尾暁吉女
冬支度転居の家は広すぎて　宇野恭子
　ちょっと甘味のコーヒーを入れ　暁
読書会一番乗りは卒寿翁　恭
　縞の甚平着こなしも粋　暁
勇ましき祇園祭の辻回し　暁
　監視カメラの増えた近頃　恭
ユニークな廃材利用パン屋さん　恭
　独身主義の看板をかけ　暁
ほれました月を背にした雪女　暁
　せつなさ募る寒猿の声　恭
石佛のひそと佇む里はずれ　恭
　心うれしく絵筆はしらせ　暁
コンサート人の字呑んでピアノ弾き　暁
　特等席になぜか空席　恭
花の宴国際会議最終日　恭
　箸で器用につまむ独活和　〃
蜜蜂（ナオ）が頭の上を幾度も　恭
　すり傷絶えぬ野球少年　暁
突然に科学に目覚め夢語り　暁
　微生物にも賞をやりたい　恭
群青の世界を分かち夫婦滝　暁
　逢える予感につける香水　恭
理解者がいつの間にやら恋敵　暁
　強い絆で山坂を越え　恭
ガラス張りエレベーターのドアしまり　暁
　中身わからぬマイナンバー制　恭
十五夜の膳に皆々舌鼓　暁
　新酒辛口しこたまに酔う　恭
鮭（ナウ）の群れ母なる河を遡上する　〃
　癌も痴呆も逃げる勢い　暁
千回は死んだと笑う切られ役　恭
　霞の幕をあけるのは誰　暁
地図を手に歴女ら巡る花の城　恭
　いくさ知らずの春陽の国　執筆

平成二十八年　十月十八日首
平成二十八年十二月　四日尾（文音）

百韻『夏鶯』

木之下みなみ　ひと声は恋の終わりか夏鶯
表ひろ　海桐の花の白のはじまり
今泉良一　起きぬけの珈琲砂糖たっぷりと
松澤龍一　麻の袋に星の印が
ろ　飛車と角行ったり来たり二日月
みみ　行水名残盥伏せられ
ろ　叱られし子供の寝息虫しぐれ
龍　開演のベル耳に響いて
良　新宿の演説佳境笑う月
みみ　動く歩道の風は爽やか
ろ　野良猫へ狗尾草を摘み戻る
良　町が焦げつく醤油の匂い
龍　始業前ラジオ体操漬物屋
ろ　木の間にぬっと隣のおやじ
二ウ　脚フェチの男ふたりが立ち話
みみ　窯変のごと君の豹変
龍　雨音のジャズボーカルに魅せられる
良　スー・レイニーをずっと追っかけ
みみ　黒革の分厚い聖書横抱きに
ろ　筆太で喫茶去と書く店のドア
龍　月の都に思いを馳せて
良　きつね花母の遺せし袖鏡
ろ　孫に剥かせるお見舞いの梨
みみ　雁渡しはためく船の信号旗
二オ　銚子電鉄ぬれ煎を売る
龍　しまいまで語らずにいく茶人帽
良　ガラス鉢選る市の中路
みみ　すれ違うクラスメートは髭伸ばし
ろ　眠られぬ妻ラブソング聴く
良　億年の付文届く今朝の夢
龍　改憲などと馬鹿にしないで

頭もぎれたマネキン運ぶ　ろ
ゆるキャラのなかで時給の玉の汗　龍
ソプラノ響く海の夕焼け　良
裏側に回ってつまむチョコレート　ろ
当たり障りのなきが飽きられ　み
空の無い街に住むひと住まぬひと　良
蜃気楼には墓碑の犇めく　良
ひっそりと平家の里の花炎える　ろ
遥か春嶺ものものふの詩　み
日(オ)蓮の隠れし谷戸へ畔を焼く　龍
頑固な父が遂にスマホを　龍
この辺に出没レアなモンスター　み
きゅうきゅうと鳴る彼の鞄(ニウ)　良
釣りバカにほんとの心わからない　良
魚の腹から真珠ひと粒　ろ
ふるさとの寺の柱に謎の疵　龍
線香の火を口で吹き消す　龍
広縁に髪結う姉妹紅うすく　良
とうすみ蜻蛉影さえも透き　ろ
焼酎を温めちびちび呑みはじめ　み
あの頃この頃愚痴の数々　み
天窓を訪うのはどなた初嵐　ろ
蹲照らす月のさやけし　良
シーツ干す竿の先には籾香り　み
洗張りする板を立てかけ　ろ
さくさめの刀自は離れで茶の稽古　龍
老いてますます力みなぎる　良
帝国の王座を守るチェスの駒　ろ
貴族の地位を捨てて堕ちゆく　み
ホイッスル縺れ話の問いに吹く　良
離婚届を鞄に入れて　龍
新しい門出に貰うワンピース　み
毛糸で編んだポーチはおまけ　ろ
月冴えてカバヤ文庫に「怪奇島」　龍
生きていますと明かりを灯す　良
ひとひらの梅が正客緋毛氈　ろ
うつらうつらと巣籠りの鳩　み
書(ナオ)留の手紙を運ぶ西ようず　良
ガイド試験に見事合格　龍
白髪染めどんなカラーにしようかな　み
淡い思いのルージュをひいて　ろ
「おい飯」と夫に背ナよりどやされる　龍
きょうは鬱かも家はみしみし　良
傷跡のひとつふたつがする意見　ろ
泪で掬うスジャータの渦　み
湯の街に硫黄漂う夕間暮れ　良

塗り下駄鳴らしネコの出勤
おんやまああののほさんじゃああありませんか
「十三や」の箱にのぞく半月
廃校の職員室に蚯蚓鳴く
飛べるだけ飛べ秋空の凧
ポーカー（ナウ）のジャックウインク猿酒
うしろから読む推理短編
暗闇にぐるぐる回る防火灯
写真が趣味の河岸の仲買
またたびにペルシャの「タマ」はポーズ取り
春を絡める銅像の指
花軍大東京の坂と渓
舟漕ぎ出せば揺れる陽炎

良龍ろみ龍良みろ良龍ろみ龍

平成二十八年五月　三十日首
平成二十八年十二月二十四日尾
（於・野田市市民会館、文音）

二十韻　『高々と』

八木紫暁捌

高々とボール蹴る児や春きざす　八木紫　暁
　東風の空から鳥たちの声　河端　洋
国望む畦焼く煙あちこちに　簑島萬骨
　平和を求め街を行進　福武光風
月を待ち窓辺に座り水羊羹　林田真里子
　固定電話に受ける父の日　浅野黍穂
衿元を粋に抜いたる京美人　後藤　泉
　アラフォーなるが故に真剣　暁
戯れ合いに見せて本音を探りあい　骨
　軽いシェイクで注ぐカクテル　洋
冬道もハイブリッドで燃費良し　風
　ランナー辛い寒の雨降り　子
添い遂げん夢のありかのカレドニア　穂
　堅い契りに枕しとどと　泉
半島の岬の句碑に月明かり　暁
　浅茅生散らし龍虎相打つ　骨
会心の絵師にっこりと筆を掴き　洋
　骨董品の評価上々　風
駆ける子等花の蕾に立ち止まり　穂
　蛤に似るあたらしき貝　洋

今村八

平成二十八年二月二十一日首
平成二十八年三月　二十日尾
（於・福岡・行動医学研究所）

歌仙『蹴鞠初め』

島田裕子捌

鞠それて人垣くずす蹴鞠初め　島田裕　子
　淑気漲る浅沓の音　杉山壽　子
肘掛けに頬杖をつき書読みて　中森美保子
　柱時計に時刻合はせる　大澤和　豪
月昇る庭の木の葉の揺れやまず　豪
　ちちろ虫鳴く塀の片隅　裕
村芝居老いも若きも楽しげに　壽
　ほのかな灯り見そめたる女　保
下駄鳴らしバック姿の粋なこと　壽
　ＡＴＭを置きしコンビニ　裕
巷ではおれおれ詐欺の難しきり　豪
　安否の電話母へ欠かさず　保
ひとめぐり池の廻りの月涼し　保
　甚平干さる二階軒先　壽
ドームでは各社のブース説明会　豪
　スマホ片手に足早に去る　豪
ふるさとへ車窓の花と駅弁と　裕
　お遍路さんにお茶の接待　壽
境界線せまりくるかに春の波（ナオ）　壽
　スローテンポで唄ふシャンソン　保
文法につまづき古文嫌になり　裕
　ごはん出来たと炊飯器言ふ　壽
湯豆腐に小半の酒「鬼殺し」　保
　風邪こじらせて咳のとまらぬ　豪
危ふしと知りつつ近づく悪い癖　裕
　本気になつて掴む妻の座　保
宝くじ運に恵まれ大当たり　豪
　基礎研究に募る寄付金　裕
痩身の師は月影に佇みて　保
　不知火見たと報らす写メール　壽
気（ナウ）がつけば着のみ着のままそぞろ寒　豪
　馴染みの漫画仮装行列　裕
じゃんけんで決めた学級委員長　壽
　ピースサインを送るスタンド　保
花吹雪すり抜け昇るケーブルカー　保
　山の頂霞たなびく　裕

平成二十九年一月　十五日首
平成二十九年二月二十二日尾
（於・熱田神宮文化殿）

歌仙『恐竜の』

伴野末季捌

恐竜の歯の並びをる氷柱かな　伴野末季
雪深くして山峡の里　松尾博雄
かくれんぼ園児声あげ散り散りに　武村利子
ネットで本を頼む先生　八雲鏡湖
差し込むは土間の天窓からの月　博雄
静寂の中につづれさせさせ　末季
集(ウ)ひきし輩揃ひ今年酒　鏡湖
やつと実つた初恋の女　利子
よく似合ふパンツルックも矢絣も　末季
模様替へしたショウウインドー　博雄
運動は足の屈伸右左　利子
日本生まれの横綱の四股　鏡湖
煌煌と月渡りゆく夏館　長谷川芳子
暑中見舞ひの届くこのごろ　末季
海外に住んで久しき商社マン　博雄
古典落語をしみじみと聞く　鏡湖
花の城金のしやちほこ逆立ちに　利子
うららうらら夢を見る亀　芳子
爺(ナオ)婆のお蔭参りも中ば過ぎ　末季
孫へのみやげ味噌煎餅を　博雄
宝くじ売場に旗の翻り　利子
絵馬に祈願の大き校名　鏡湖
成績をもつとあげたいマスクの子　芳子
じつとながめる鞍の指　末季
両親を幼き頃に亡くしたる　博雄
手練手管を極め入婿　芳子
為すすべて気にいらんとて妻の臀　末季
牡の飼犬軒の片隅　博雄
満月を仰ぐ家族の笑みこぼれ　鏡湖
歩きスマホで夜学への道　末季
秋(ナウ)小寒宅配の荷を「尾島屋」へ　博雄
商店街に宣伝の歌　鏡湖
故郷の母安かれと筆を執り　芳子
かしぐ額縁元に戻して　末季
層塔の礎石がでんと花の寺　博雄
いづこと知れず鳴くは鶯　鏡湖

平成二十九年一月二十五日首
平成二十九年二月　八日尾
（於・熱田神宮宝物殿のち尾島屋）

歌仙『冬ざれや』

宮川尚子捌

冬ざれや空にまつすぐビルの線　宮川尚子
　握手してゐる春を待つ雲　杉山壽子
郷土史の講座を孫と受講して　長谷川芳子
　拉麺すする音は交互に　波多野茂子
月明し旅のパンフは卓の上　松尾博雄
　相千両の下駄に蟋蟀　尚
針穴へ斜めに糸を秋袷　壽
　熟年ですが初恋に似て　芳
郊外の畑でふたり週末を　茂
　記憶はいつも曖昧なまま　壽
お掃除はルンバにまかせフラメンコ　中森美保子
　流浪の民に吼えるトランプ　芳
峡谷の蛇行の川に夏の霜　茂
　竹馬の友と菖蒲酒呑む　尚
ぢいちやんのボンボン時計鳴る客間　壽
　南の国の大使館員　茂
花に遭ふことの幸ひ神の技　尚
　猫の背中に陽炎が揺れ　壽
弟（ナオ）に教はりながら凧揚げる　茂
　四角四面の性格が仇　芳
卓球のサーブは時速百キロ超　壽
　ソナタ奏でるしなやかな指　尚
暖炉には太き薪のくべられて　芳
　年の晩にも棋譜並べする　壽
縞紬大正柄の長羽織　茂
　港が見える丘でサランへ※　尚
掛け替へのない生涯を共白髪　静子
　鬼になつたり仏だつたり　尚
打ち上げしかぐやが探る月の謎　青島ゆみを
　遺愛の硯洗ひ清める　壽
バス（ナウ）を待つ人の帽子に柿紅葉　芳
　会計報告いつもどんぴしや　茂
新薬が残り時間を始まりに　壽
　名水汲みに長き階段　芳
花の雲押し上げてゐる屋根の鯱　島田裕子
　街もうららか声もうららか　茂

平成二十九年二月　四日首
平成二十九年二月二十五日尾　（文音）　尚

※サランへ…（韓国語）愛してる　執筆

歌仙『神の笑み』

秋天や神の笑みまで見えさうに　早田維紀子捌

昼月右手にパラグライダー　大竹多可志

客人に木の実団子を饗すらん　早田維紀子

尻尾ぷるぷるおねだりの犬　坂本たみ

新品のハモニカを吹く姉妹　大山とし子

水着のあとがくつきりと付く　井上千代子

待ちかねし糺の納涼（すずみ）連れだちて　佐々木リサ

ワイングラスに透くる横顔　と

君に逢ふために生まれてきたんやで　維

「信じています」三度目の妻　た

お茶受けはスイス土産のチョコレート　千

はつぱふみふみ巨泉逝きたり　リ

初鶏に月影淡く傾きぬ　多

しもやけの耳痒くなる頃　可

つぶやきがパッと広がるツイッター　志

大海原を小船漂ふ　〃

花筵はみ出すほどに酔ひもして　維

一年生を背負ふ先輩　た

虚子の忌を日がな連句に遊びたる　千

路地にひつそり石の道標　と

長男は漫画家となる夢を持ち　多

おつと危ない高齢者鬱　リ

又仕舞ふ古い写真と登山靴　維

滝の飛沫が払ふ悪霊　た

トランプの言葉に世界混乱し　み

好き好き好きと駅の落書き　と

髪の根の熱くなるまで愛されて　多

移り香残る狩衣の袖　リ

筆硯を文机に置く月今宵　〃

実りの郷（さと）を巡る雲水　多

野（ナウ）の色を纏ふ少女の軽やかに　リ

趣味が高じて開く道場　千

受賞してあとが続かず旅に出る　多

泥鰌掬ひも板に付きたり　維

国引きの丘をひねもす花吹雪く　た

未知の世界に飛ばす風船　み

平成二十八年　十月　九日首
平成二十八年十二月十八日尾

（於・墨堤庵）

短歌行　『薄　墨　に』

薄墨に描く山並後の月　大山とし子

列成し渡るかりがねの声　小出民子

碁敵に古酒も新酒も用意して　井上千代子

昇進願ひ吉報を待つ　佐々木リサ

笑顔にてタラップ降りる旅の人　民

つつじロードに多き二度咲き　と

不意打ちの恋に溶けたる雪女　千

幼馴染で糟糠の妻　リ

供へ物たやさず祀る屋敷神　民

サプリメントも時に有効　と

車座の花見の宴に栗鼠の来て　千

長閑に暮れる天領の里　リ

大山とし子捌

ナオ
クレソンを育む流れたどりつつ　民

水源といふ一滴に合ふ　と

恐竜の卵の化石すぐそこに　リ

勇気を出して頼む鑑定　千

絵巻物若紫の愛らしく　と

真夏の磯に燃え尽きし恋　民

月涼し詩吟を低くホームレス　千

上野の森は深閑として　リ

ナウ
公約の都民ファースト期待され　民

老舗の和菓子家苞にせむ　と

濃く淡く川面を染めて花筏　リ

ローカル線にゆらぐ陽炎　千

平成二十八年　十月　二日首
平成二十八年十二月二十八日尾

（於・墨堤庵）

稲門祭笠着俳諧

世吉『共生の』

共生のうた限りなし紅葉焚く　江窓哲子
宴に揺るる池の弓張　佛渕雀羅
小牡鹿は遠山脈に目を据ゑて　山地春眠子
みうちに顫ふもののかすかに　高山英子
駅までの道を楽しむ若葉風　小太刀昌雄
水中眼鏡並ぶ店先　安楽明郎
看板にサーカス来ると大書され　高山鄭和
知らぬ同士ではづむおしやべり　鈴木ちかひ
ウおもかげを甲斐路に追へば初時雨　野中山水
コートに隠す古き恋文　松原邦博
あなたが坐る石鹸の匂ひして　菊池信子
心に抱くすてきなワセジョ　鷲海量良
鐘の音がカルカソンヌの城包む　諸江昭旦
ミディ運河に舫ふ屋根船　西川なほ
夏の月私の胃には油そば　柴田祐里
汗をよく吸ふボクのハンカチ　江畑哲男
さんざめく俳諧席に一句あり　大谷似智子
人生只今上昇中です　遠藤勇汰
冬も夏もわが青春を春秋会　田中寿三郎
今は昔の入学式よ　室屋浮ら宇
「紺碧の空！」一皆で歌ふ花吹雪　谷口和彦
車椅子にて浅蜊掘る浜　須賀祥枝

残る鴨早稲田祭まで残る気か（ナオ）　松本　望

オレなら貰ふノーベル賞を　平井昌美

失敗をせぬからどうぞご安心　小野寺　敏

ふと振りかへりあなたの笑顔　得重貴史

今はまだ叶はないけど諦めぬ　須郷梓大（あずさ）

女はすべて俺を求める　神原　憧（しょう）

公園の猫にも名あり漱石忌　矢島康吉（やすよし）

先輩ですかいかが熱燗　中村暢夫

トランプは下ネタ流では勝てないぞ　和田　宏

魔法の杖で場面転換　小田みみこ

捨てし夢思ひ出さるる熱帯夜　脇　務

春日大社の遷宮祝ふ　白石一有

ジャズに酔ふマイクの先に満月が　高橋岩太郎

風の盆にて笠置き忘れ　成田茂昭

鶴巻の下宿なつかし玉子めし（ナウ）　森田　寛

安部球場は今は図書館　春眠子

私が自転車で翔び五十年　福原正昭

再来週にはお経が来る　神永朝紀

空瓶がずらりと並ぶ厨口　八田眞子

井戸端の脇小さき赤き目　哲子

由緒ある庭園に今花の雲　安室龍男

弥生の山に歌とどろかす　発生川賢司

平成二十八年十月二十三日首尾

（於・早稲田大学大隈庭園）

《東京・稲門連句会「西北の風」―その二》

半歌仙　『西国浄土』

武志兄西国浄土月の道　伊藤哲子
舞う糸遊の名残り惜しみつ　西川なほ
秋深く言葉少なきひとのいて　山口和生
小体の店で酌み交わす酒　浅岡照夫
シェーカ振る蝶ネクタイの翼鑢　高橋夜潮
鰤起し聴きいそぐ漁師ら　竹田金糸雀
厳寒になかなか点かぬ燧寸の火　和生
寺山修司やまぬ母恋　哲子
少年のグレイの嘆き尻ポッケ　なほ
きみの姿を探す校庭　照夫
説教の神父の強さときめきて　夜潮
鍵を渡され越せぬ一線　金糸雀
巴里祭の運河に蒼き月映し　和生
わらわやみなる戦時のなごり　哲子
平和好き三笠宮のほほえみを　なほ
読書会では手品などみせ　照夫
花老樹わが青春は華やかに　夜潮
大草原を駆ける若駒　金糸雀

平成二十八年十月二十七日首尾

（於・早稲田大学校友サロン）

《東京・桃夭樹》

和漢行歌仙

『冬ぬくし』

○印は韻 [葉]

鵜飼佐知子捌

腐葉土のふわりふわふわ冬ぬくし　鵜飼佐知子
御用納農協○　臼杵游児
山荘に住む人増えて賑やかに　近藤蕉肝
いつも遅れて届く郵便　高橋賢
月皓皓馬眠　永田吉文
雲隆隆鵙喋○　賢
路傍販松茸（ウ）　游児
焦らしてみたり拗ねてみせたり　佐知子
3D湯あみの西施出現す　蕉肝
子だくさんにもほどがあるでしょ　賢
政府増税図　游児
市民流汗厭○　〃
炭鉱のシフト終わりて月涼し　蕉肝
川筋玄海接○　游児
願い込め地域おこしの太鼓打つ　賢
熱涙耐仁侠○　賢
神前花筵酔　吉文
初虹追ってバイク疾走　賢

喧嘩（ナオ）凧漂落　佐知子
首領猿豊頬○　蕉肝
古典研究滞　賢
新刊執筆渉　〃
投扇興優雅　游児
女賀客は風呂敷を解く　伊藤哲子
憂愁の心の疵を秘めしまま　〃
背ナの観音溶かす背徳　〃
病窓にもモーツァルトと偽せ薬　賢
受刑者信囁○　櫻田野老
月影に家伝の刀じっと見る　游児
芸術祭の評価多様で　吉文
畦豆（ナウ）入竹籠　賢
羊羹出塗筐○　〃
宿下駄緩緩　佐知子
錬金術を笑う糸遊　蕉肝
絢爛の花洛をゆるり右大臣　野老
地球の端で鞦韆を漕ぐ　吉文

平成二十八年二月九日首尾

（於・銀座成城クラブ）

歌仙『ぼうたん』

東條土郎捌

三輪　和
東條土郎
二橋満璃
関　真由子
岡本信子
竹内　菊
竹内紘子
濱本紫陽
西條裕子
乾　久恵
佐藤清幸
伊藤　東
赤坂恒子
井上久美子
　敏子
豊井明美
梅村光明
中原瑞枝

ぼうたんを前に失ふ言葉かな　和
　萌せるもののひそと小満　土郎
気まぐれのピアノに指をすべらせて　満璃
　焼き立てマフィン紅茶たつぷり　真由子
月円か乗りたきものに飛行船　信子
　レジャーランドに出会ふ虫売　洛中落胡
相撲草ぷつつり切れて笑ひ沸き　昇
　大きくなつた三男の丈　菊
なぞりゐる夫の遺筆の愛ほしく　裕子
　ふはり纏へる甘き移り香　清幸
青汁も黒酢も無料試供品　恒子
　われ関せずと猫は欠伸す　漠
デモ隊の集まる凍てし月のなか　光明
　着ぶくれの衆Uターンして　敏子
レッスンの成果見せたるジャズダンス　明美
　続く秘訣は「いい加減」なり　光明
数寄者の心映すか花の顔　枝
乙女の腕に抱く春愁　瑞枝
風光る外人墓地を吹き過ぎて　鳥子
　七度一分の微熱下がらず　義人
鬱の字が桝目のなかにしやがみこむ　一美
　トランプショック市場直撃　春信
早朝の喉も裂けよと初稽古　尊
　餅をつまらせ救急車呼ぶ　和
雨の寺仏陀おのづと視線伏せ　士郎
　軒の雀の交はすおしやべり　満璃
羊皮紙に記す宝の隠す位置　真由子
　ロンドン塔に美し亡霊　信子
文豪は久しき妻と月を待つ　洛中落胡
　丸き林檎は庭先で揺れ　昇
脱具象新酒のラベル考案し　菊
　なんて奇抜なシマウマの縞　裕子
昇進を首長くして望みたる　清幸
　うららかに夢むすぶ日溜り　恒子
平仮名をくづせるごとき花筏　漠
　誰が散らすか桜海苔干す　光明

平成二十八年五月二十二日首
平成二十八年十月　十八日尾
（於・渭東コミュニティセンター&文音）

第二十八回青時雨忌追善正式俳諧興行

俳諧連歌

解簾の季節好みし師なりけり　静司
並べて涼し名人の棋譜　忠勝
遠浅の浜に青鳩戻り来て　ひろ子
老舗の菓子をひさぐ街道　よう子
外国の賓客招き月見会　文
秋の袷も美しきお点前　亜緋子
古都（ウ）の宿小牡鹿の声近く聴く　ぼくる
若き学僧ことばやわらか　幸子
簪の噂きびしい橋の下　酔彦
新幹線で通う週末　映子
ボランティア寄り添うことがまず基本　昭三
医療チームの一睡もせず　雲子
月寒し民家の壁に銃の痕　紅
木枯しついて伯林の旅　聡
初心者のトランペットはエンドレス　柴子
くるくる回すリスの輪車　智南美
総務部は総出花見の支度にて　柴子
畳いわしに地酒セットで　越女
みどり（ナオ）の日昭和天皇懐かしく　静司
文化遺産の石垣に立ち　忠勝
宇宙より唯一見えし人の業　ようこ
アンドロイドに思い思われ　文
現身の恋にやせたる悔しさよ　亜緋子
三尺寝でも膝枕欲し　ぼくる
大口を開けて煙吐く蚊遣り豚　幸子
煩い親父子供嫌がる　酔彦
先達が手を引いてやる峠越え　映子
注連太々と高千穂の宮　昭三
オウオウと呼ぶ声月にこだまして　雲子
紅葉狩する広き湖　紅
開店（ナウ）の店に女優の秋ショール　越女
神保町また小川町また　聡
民の側立つ政治家をこころざす　柴子
行く水の果て翁みつめて　智南美
真っ先に汽笛抜けゆく花の峡　柴子
ふるさと便の届く春昼　越女

平成二十八年六月十九日

（於・江東区芭蕉記念館）

宗匠　松濤軒静司
脇宗匠　抱虚庵忠勝
知司　今村苗
執筆　鈴木善春

連衆　花司　永田吉文
香元　和田柚香
配配　高直子
硯硯　高恵子

源氏『彫物の』

彫物の男大人し芋煮会　和田忠勝捌

桜紅葉の浮かぶ川の面　今村　苗

月代は稜線少しづつ染めて　浅沼小　葦

持ち重りするピアノ曲集　和田忠　勝

おもちゃ箱ロボット犬を選ぶ子等　和田ひろ子

水着干されしベランダの隅　葦

古簾暇な床屋の手の遅く　苗

デイトの場所へ下見しながら　ろ

監督は気のない振りで又口説き　勝

ピンポンパンと国跨ぐ愛　苗

カーテンの陰で涙の同級生　葦

縁の切れめに覗く寒月　葦

枯葦のバサリと鳴りて動くもの　苗

荷揚げも出来ぬ韓国の船　ろ

投資家は金とプラチナ買い漁り　勝

遺言書かず逝きし頭領　苗

パソコンをパンと綴じれば花の午後　葦

鰯の鮓のとととのいし膳　葦

二オ春雨は庭石濡らすほどの良さ　勝

舫い結びで解る犯人　ろ

膝元に切れた念珠の玉がとび　葦

袖振りはらい逃げる雛僧　苗

宇治の橋渡れと姫の浮かび出て　ろ

比翼の塚の朽ちし片蔭　勝

失いし恋を探しにほととぎす　苗

胸に刺さりし紅薔薇の棘　葦

首長選女人各地で活躍し　勝

何かとなれば騒ぐマスコミ　ろ

酒盛りの今闌の月の夜半　葦

脇本陣で聞きし虫の音　苗

二ウ読みさしの本を畳みて炉火を欲し　ろ

マルクス褪せてピケティ購う　何　堀田季

盗掘の王家の秘宝売り出され　山　大津博

緑の簾に長い恋唄　勝

嫁が君天井裏のみそかごと　苗

くぐつまわしは噂振り撒く　葦

月面に抱き合う二人着ぶくれて　何

果てなん夢の醒める後朝　ろ

繰り返し震度を告げるNHK　勝

からくり時計鳩が出たまま　山

誘われて並ぶ運座の花莚　葦

あやかるまいぞ和泉式部忌
旅半ばダム放流の弥生尽（ナオ）
便器のすぐに詰まる病棟
職退いて女房に顎で使われる
歳はとっても愛し愛され
だまされて憎んだことも懐かしや
妖しの森に埋める亡骸
日焼止め塗り合うゲイの兄貴たち
祭囃子のヒャラリテケテケ
稀勢の里巨人錦織不甲斐なく
山と山とをつなぐ吊り橋
月明り漂蕩の猫尾を立てて
特ダネ探す記者に残る蚊
ハロウィーン仮面が走る五番街（ナウ）
世界中から演奏家呼び
コンシェルジュ数カ国語を流暢に
下萌踏んで朝の散策
神々は今日が宴か花の杜
かたびら雪を受ける掌

葦苗勝山何ろ苗山葦勝ろ何葦苗勝山何ろ苗

平成二十八年九月二十三日首
平成二十八年十月十四日尾
（於・港区三田綱町・湊座）

世吉『旧暦で』

鈴木善春捌

旧暦でゆったり行かん成人日　　鈴木善　春
　初鶯の聞こえくる径　　永田吉　文
杉の花とび出すほどに咲き栄えて　　和田忠　勝
　髪を被える春のスカーフ　　秋山よう子
野遊びの子は父の背にまどろみぬ　　浅沼小　葦
　暇にまかせて永字八法　　猪飼たかし
マンションの書斎を照らす月明かり　　吉
　風船蔓活けられし籠　　う
ウ地芝居の科白もすべて暗記して　　葦
　茶碗につけた口紅のあと　　吉
嫁ぎゆく夫は海上保安官　　た
　多忙な割に子沢山なり　　う
草野球兄弟従兄弟一とチーム　　勝
　塾に通えば仇同士に　　吉
原爆で戚しをかける愚かしさ　　葦
　バカヤローなら世界共通　　春
有明の月涼しげにひらひらと　　葦
　芭蕉稲荷の幟旗揺れ　　吉
小上がりで酌み交わす酒くつろぎて　　う
　八十路にかかる掏摸の親分　　葦
満開の花を見上げる旅行客　　勝
毎年もらう玉筋魚の味　　た

鐘霞む坂多き町猫も住み（ナオ）

野も山も皆我が財産さ

捜し物追えば追うほど遠ざかり

息をひそめし妖怪の影

始まれば下がるばかりの株価とか

流れの淵瀬区別なきもの

手袋を落とした女（ひと）にかける声

聖夜のデートどこへ行こうか

外つ国の客かき分けて小物買い

長蛇の列の続く駅前

自転車の将棋倒しに風の道

待宵草のひっそりと咲く

灯り消し月の蒼さに浸りおり

病の床に栗の羊羹

う　葦

春　葦

吉　葦

た　勝

う　吉

春　葦

勝　葦

う　春

爽（ナウ）やかなモンゴル力士弟子思い

念仏唱え寺も隆盛

幼稚園待機児童に配慮あり

オルガンを弾く女先生

留学のパリ郊外を懐かしみ

野焼きの里に独りたたずむ

街中の老青集い花筵

香り求めて蝶の祭典

吉　葦

た　勝

吉　葦

春　葦

う　勝

平成二十八年一月十日首尾

（於・横浜市綱島　抱虚庵和田忠勝居）

歌仙『デュエット』

おんぶしてデュエット競う蛙かな　今村　苗捌
　昼の畔道すみれ蒲公英　中村コッコ
酒一合若鮎旨くきりもなし　功刀太郎
　暖簾新し板前の意気　種川とみ子
繊月の仄かに赤きビルの肩　畑中美穂
　硯洗いて太き字を書く　今村　苗
やや寒も我は関せずジム通い　太
　天然ボケも人格になる　〃　コ
忘れ物三歩あるいて又忘れ　コと美
　女たらしと見えぬポスター　美〃苗
空港に手に手をとって逃避行　苗と太
　コートダジュールパラソルの陰　太と美
ジャスミンの香が月光を包み込み　美
　ピカソをぱくる父の肖像　太
東大の首席卒業介護士に　太
　女性家族は倶会一処なり　苗
朝顔のかくも小さき帰り花　〃
温石替わり膝に猫のせ　苗
　しめ縄を風の盆地に飾りおり　太
一反木綿天高く飛び　美
騙されて泣きあかしたるひとりっ娘　太
　ジハードという熱のうとまし　苗
婆ちゃんの葛根湯は義理で呑み　太
　利休鼠の単衣気に入り　と
緑陰にゼリー震えて忍ぶ恋　太
　互いの体オイル塗り合い　と
街角はレゲエにのった海の香が　太
　瓶にわずかな砂がゆらめき　樺由美
里帰り姉と妹に月映える　コ
　クランベリーの大盛りの籠　太
秋時雨網の引き戸の閉めにくく　由
　晴れたる朝をグライダー飛ぶ　コ
大いなる自然の声が聞こえ来て　太
　豪華な雛を作る職人　由
花開く異国の客も浮かれ出で　〃
　改札口の上に子燕　苗

平成二十八年二月十九日首尾
（於・港区生涯学習センター）

《仙台・なかよし連句》

仙台市立国見小学校五年生合同
指導　五年担任の先生方と伊藤敏子

冠付・脇起半歌仙

十七班

『二人で過ごす』

陽炎にぐいぐい猫の鼾かな　一茶
かかえるの声がゲロゲロとなく　香恋
げ元気よくちょうちょと遊ぶ子どもたち　向希
ろろうそくのろうたまっておちる　遥輝
ううさぎいる夜空の月が輝くよ　悠太
に西にふく風さわやかにふく　菜々
ぐゥくりひろいたくさんひろえてうれしそう　香恋
いいしやきいもを食べさせ合った　向希
ぐぐっと来る告白されてなみだでる　遥輝
いいつもふたりでよりあって過ごす　悠太
ねねすごしてデートの時間すぎていた　菜々
こここちよさそうみんなねころぶ　香恋
の野原でのみんなで月見楽しいよ　向希
いいすにすわって麦茶いただく　遥輝
び比例する2倍3倍円周率　悠太
ききそもんだいを受験生とく　菜々
か川ぎしにさいてる花をながめてる　香恋
ななかよく別れ進級するよ　向希

平成二十八年二月二十二日首尾

注・なかよし連句は今年で十六年目。

仙台市立国見小学校は平成二十七年度に貝森小学校を統合。平成二十五、二十六年度にわたり統合に先立って、国見、貝森小学校の三年生の合同なかよし連句会が先生方の温かいご理解のもとで「しりとり六調」を行った。その学年が昨年の二月に三クラス合同で二時限で半歌仙を巻き上げた。脇起には芭蕉・蕪村・一茶の発句を立て、時間内に巻き上がるよう発句を冠にいただき巻き始めた。二十一巻の半歌仙がすべて時間内巻き上がって百三名が達成感を味わった。作品の評価も大切だが、感想カードの「連句は心をつなぐ」「新しい友達が出来た」「またぜひ挑戦したい」とあるように、班毎に集中し、知恵をしぼり合い、笑いが渦く、その場の雰囲気はこの一巻で十分お伝え出来ると思う。

二十韻　『はばたきの時』

小池正博捌

羽ばたきの時は来りぬ松の内　小池正　博
　初鶯の声のさやけさ　平良孝　子
お誘いがあれば迷わず参加して　山本天　球
　休暇願いてボランティアなり　米倉洋　子
望（ウ）月の弓月ヶ嶽に重々し　生駒さとし
　紅葉の奥に女人棲むとか　孝　子
秋の蝶胸高鳴りて君と行く　林　典　子
　先を案じる半跏思惟像　木戸ミ　サ
西瓜割り海辺の文字に子ら騒ぐ　さとし
　蔵の下には蛇がにょきにょき　典　子
トランプ（ナオ）が呟き声でカード切る　さとし
　閉会式の大ファンファーレ　洋　子
愛あればＬＧＢＴみんなよし　孝　子
　夜明けのしじま残る沈香　〃
月の舟寒鮒を釣る人の居て　天　球
　ふくろうカフェのチラシ目に止め　〃
瓢箪（ナウ）の酒から駒を振り出した　さとし
　すってんてんになって家路へ　天　球
故郷の花下遊楽はたけなわに　正　博
　色とりどりの凧上がる空　ミ　サ

（於・奈良県文化会館）

平成二十九年一月十四日首尾

歌仙『早稲の香』

早稲の香の風に目覚めて誕生日　　斉藤一燈
　卒寿の翁月待ちの縁　　伊藤貴子
単線の駅舎は秋に色づいて　　松澤龍一
　取り出してみる派手なエプロン　　木之下みなみ
主夫業が意外と似合う定年後　　志田則保
　朝一番のしわぶき一つ　　江畑哲男
冬ウ空へ凛と裸の大欅　　成島静枝
　目印に持つ赤い花束　　井上晴
青き目の異人現れ抱かれて　　大内善一
　昔を恋えり夢と分かるも　　長野純顕
総合のリゾート目指すカジノ法　　丹羽武正
　お国自慢の料理かずかず　　大島直子
空港の土産売り場に茜さす　　森婦美子
　バスの中にも暑さ対策　　馬場由起子
過疎の村破れ蕻簀に月のりて　　鈴木すず
　遠き街騒招かれしかに　　岡和水
海見える丘に万朶の花大樹　　佐々木リサ
　母のぼた餅甘すぎもせず　　木暮佳右
ウナオうららけし二胡の奏でる富士の山　　毎野月胡
　雲たなびきて端かかりおり　　伊藤正博
ラピユータへ行く相客に「君の名は」　　佳右
　スマホはいやよちゃんと目を見て　　高山英子
迂闊にも酔いが言わせたプロポーズ　　久我妙子
　知らん顔して座布団の猫　　由紀子
箸姫の心に揺れる梅雨の月　　武正
　氷菓に挿せる銀色の匙　　直子
墨つぎの滲じみおもしろ美濃の和紙　　婦美子
　遺言したためしまう仏壇　　すず
集き鳴く虫の世界のそそとして　　リサ
　秋場所担う稀勢の里関　　妙子
ナウそぞろ寒牛久ワインで大パーティ　　英子
　文学賞の帯の艶やか　　みなみ
詫び状の誠意認める筆の跡　　則保
　待ちぼうけする人に淡雪　　静枝
夕さりの鬼泪山より花の声　　貴子
　仔馬の影を長く曳く牧　　片山李紅

平成二十八年　一日首
平成二十八年十二月十七日尾（文音）

歌仙『青き瑕』

硝子戸に青き瑕ある薄暑かな　漠
　みづみづと生れ蝉の透翅　真紀
経糸に緯糸の杼を走らせて　士郎
　カルチャーセンター若きざわめき　アンズ
月昇る小さき星を伴ひつ　忠勝
　地下鉄出ればまことと秋なる　静司
新盆に訪はんと急ぐ草の庵　博雄
　愛用硯父の形見に　真紀
匿されし文匣に母のラヴレター　士郎
　木魂のごとし淡き慕情は　アンズ
魚さびし眠れるときも瞳いて　忠勝
　零るる砂の粒はいくばく　直道
アンデルセン童話の月にマント着せ　了斎
　枯野を急ぐ侏儒七人　静司
ああここも過疎となりたる細き道　博雄
　老いこそ逃るまじけれと笑む　真紀
財界を率いて花の国となす　執筆
秘仏開帳半世紀ぶり　漠
残る鴨課外授業で数へられ　真紀
　マダムX夜は変身　士郎
洗濯のあとはアイロン釦付け　アンズ
　方便の内に神宿るらん　忠勝
退院の祝ひも酒があれば佳し　直道
　漫画の本は廃棄しませう　了斎
訳あつて破格の安い不動産　静司
　枇杷の熟れたる金印の島　博雄
睦まじき仲は風鈴品選び　アンズ
　わが女房は昔マドンナ　士郎
厠へと起きて寝待ちの月に遇ふ　忠勝
　完投の肩しこる漸寒　直道
乾盃の勝利の声は爽やかな　了斎
　明日は今日よりもつと良くなる　静司
いささかの俠気まだある社長にて　博雄
　仙洞御所に踏みし白砂利　真紀
盛衰の歴史を閲し花連綿　執筆
いのち限りと競ふ囀り　漠

平成二十八年十二月満尾

（文音・ねずみ軍団）

歌仙　『ジュウジロさん』

付回し

イカルスヘジュウジロさんの射る矢羽　松澤龍一
　蝉も息のむ歓声の中　木之下みなみ
昼下がり遠まなざしに海秘めて　諸藤留美子
　おしゃれして行くホームパーティー　志田則保
億ションの最上階を月覗き　渡部春水
　ピアノ・ソナタに揺れるコスモス　井上晴
公園(ウ)を犬と散策暮の秋　白石一有
　チケット取れず来ない元カレ　成島静枝
穴うめに買った真珠の首飾　遊人
　胸の谷間に黒子ちらつき　龍一
遠望のマリンタワーに灯が点り　みなみ
　鳥の群れ来るナイトクルーズ　留美子
月冴えてワイン談義の姦しく　則保
　年末賞与期待外れる　春水
挑戦の司法試験は六回目　晴
　岩をも穿つ雪解の水　一有
約束を覚えています花の窓　静枝
強東風抜ける上野浅草　遊人
つけうまと逢魔ケ刻(ナオ)の半仙戯　佛渕雀羅
　お忘れ物と肩を叩かれ　龍一
レントゲン写真にうつる鉤鉗子　西川なほ
　母の遺伝子鉄人を産み　みなみ
泣き虫の愛ちゃん太郎の嫁になる　松島アンズ
　ポップコーンの弾け喚声　留美子
宵宮のリズムはズウンと響きいて　荻谷準一
　空きっ腹には効きし冷酒　則保
喉もとをシナモンの風駆け抜ける　三浦侃
　紙飛行機の美しき旋回　春水
ピカチュウを探す大人を月笑う　日下部敦世
　待ち草臥れて眠る藁塚　晴
おもい(ナウ)のほか隣の婆がとどけ来る　伊藤哲子
　回覧板に委任状添え　一有
退職後行方不明は二人ほど　山本由宇呆
　夜半の雨から畑黒々　静枝
たたなずく山懐の花の日々　和田忠勝
　弟子一人待つ炉窯の茶事　和田ひろ子

(注) 発句の「ジュウジロさん」は野田のお祭りの「津久舞」に登場する蛙のお面を頭にかぶった曲芸師（とび職）で、市街の駐車場に高く建てられた十字の柱の上で色々な演技をし、最後に四方八方に矢を射る。野田の夏の風物詩の一つ。

平成二十八年七月十九日首
平成二十八年十月十一日尾　（文音）

歌仙『千本の腕』

光州（クァンジュ）炎天地に千本の腕が伸び　松澤龍一
　子らの背よりも高き向日葵　野村路花
底辺のレベルアップを志し　白石一有
　同胞（はらから）と酌むうまき安酒　鈴木美奈子
ふるさとの訛で語る望の月　路
　琵琶かき鳴らす古民家の秋　龍
うそ寒のシナリオなりや大ブリテン　奈
　お望み次第悲恋得恋　有
クロカンを捨てぬ熟女の開くバー　龍
　革命歌にはキスで応へて　路
記念日は警備厳重天安門　路
　いざ蹶起せよ鎌の月凍つ　奈
着ぶくれて朝刊くばる人を待つ　有
　山田太郎も今は爺か　龍
一週間に十日来いとエカテリナ　奈
　外交狡知版図拡大　有
地球儀の日本列島花の色　龍
　紙風船をそっと畳んで　路
めかり（ナオ）時棚からおろす薬函　有
　いはんや悪人をやと甘ったれ　奈
都民ならせめて謝罪を聞きたいと　路
　党の指令を運ぶ白鳩　龍
守り抜け世界遺産の第九条　奈
　うちなんちゅうの旱星指す　有
抱籠に団鬼六を読み耽る　龍
　ほどいてみたい鶸色の帯　路
阿呆になるしあはせの髪梳きをりて　奈
　鏡に映る雲は雲追ひ　龍
方円の器と遊ぶ水と月　有
　糸瓜さらすが婆の手しごと　奈
声色（ナウ）で村芝居への誘ひあり　路
　大立ち回りで鬘（づら）のすっ飛ぶ　有
看板は歩いて五分武家屋敷　龍
　蹴りたい小石見つからないよ　路
ミヂカビノハッパフミフミ花の暈　龍
　万年筆のペン先に春　有

平成二十八年六月二十七日首
平成二十八年七月二十五日尾
（於・御徒町「ルノアール」及び文音）

《東京・はいかい都鳥》

歌仙『ソラマチの』

佛渕雀羅捌

佛渕 雀羅　ソラマチの朧にうたのカモメかな
鷺沼茜子　さくら流るる川舟の午後
岩崎孝則　門出の草餅わける嬉しさに
林翠哥　汽笛の音に眠られぬ夜も
則羅　たどり着く月の国にも骨休め
哥茜　紅葉狩りとて引き出した牛
小俣美月　案山子らにおじぎしている異邦人
脇添明子　パリの友へと送る写メール
上山妙美　空こえていちごのごとくほほをそめ
茜哥　次に逢ふならグラスのしづく
羅則　思いつつ銀座かけぬけハイヒール
則茜　テロ語りつつ食べるB定
哥羅　海面に凍えてゆれて月の影
妙哥　明日が来ればすべて消えゆく
茜妙　カステラの黄色が背中押してくれ
羅茜　ぐるぐる廻りあの子バターに
茜羅　万華鏡飽かず見ている花の雨
哥茜　まぶたを閉じてつつむ春愁
則哥　そよかぜに吹かれ遍路の二人旅
妙則　青森弁の唄が聴こえる
哥妙　人真似の好きな鸚鵡を預けられ
羅哥　不惑の倅未だ帰らず
則羅　ジュテームで始まる朝のクロワッサン
茜則　言わせてみたいほんじゅーるかな
妙茜　いちめんのどくだみの白十字架に
哥妙　完熟トマト投げられる人
うう　ユーロなし円も失くしたお買い物
則哥　ほっと一息五輪観戦
茜則　さまざまな蹤とびかう十三夜
羅茜　舞台の袖を守る蟋蟀
哥羅　猪と言われるほどに体張る
則哥　骨身にしみる孫のもみもみ
茜則　開拓の村の朝日に乳搾り
妙茜　浜見るために早く起きだす
哥妙　岩山の花に遊べる隠れ鬼
執筆　スマホの奥に入りこむ春

平成二十八年四月十一日首
平成二十八年八月　七日尾
（於・墨田区業平　林電子会議室）

《東京・俳諧無心》

攝津幸彦没後二十年　追善興行

脇起オン座六句　『十』

浅沼　璞捌

第一連

秋　十月十日の十字懸垂聖ならずや　攝津幸彦

☾　十文字槍させる月光　曳尾庵　璞

ふしあなをひろげていけば本となり　北野抜け芝

おとぎ話を語り始める　西原紫衣花

冬　山奥の古き民家の雪兎　泉山友郁

冬　どれも形が似てる冬帽　二三川　練

第二連

本命は別にゐるよとさゝやかれ　櫛田有希

恋　幼馴染は幼馴染で　みなまだけい

恋　たゞひとりデートスポットへの下見　禰覇　楓

空き巣するにはちやうどいゝ肥後　青木ともじ

夏氷　氷室から将軍様に献上し　加藤湖標

夏　監督席に扇風機据う　副島亜樹

第三連［自由律］

R　マリリン・マンソンはブリーフ派ださうだぜ　堀江　烋

R　少年はみなＢＯＯＷＹ　鈴木日向子

仏像写真持ちよつて食べるポッキー　神崎千佳

靖國の空がけむたい　ともじ

「週刊文春」はどこまで追つてくるのか　城前佑樹

マジ迫る〆切　瀧本真知子

第四連

恋　化粧してスカート折つて姉別人　練

恋　相合傘の骨抜かれたる　紫衣花

カルシウム配合といふものを飲み　有希

新　せつせとこなす宇古呂毛知打　烋

新　鬼太郎が笑ふがごとき初鼓　二川智南美

朝比奈三郎にしき絵とかや　真知子

第五連

石　目には目を歯には歯ごたへある石を　抜け芝

石　コンゴ戦争コルタンを掘る　智南美

大勢のトルソーすべて地図のうへ　友郁

ポケットにある赤いチャコペン　楓

花　花屑と上司の声と歳時記と　椿屋烏

春　ポケットにない春の角瓶　執筆

［註］第四連四句目「宇古呂毛知」うころもち＝土竜の古名

平成二十八年　十月十三日首（於・曳尾庵）

平成二十八年　十月三十日張行（於・小竹地域集会所）

平成二十八年十二月十八日尾（於・旭丘地域集会所）

『火祭り』

難語歌仙

須永恆雄捌

火祭りは夢を現と解く秘鑰　須永恆雄
　射干玉の闇へ精霊蜻蛉　益子和子
穴惑い如何なる宿怨有りつらむ　上村以和
　変身以前は沈魚落雁　浅井笈羅
組香や鞠躬如と聞く夜来香　柳瀬亜湖
　李白観月一斗詩百篇　吉田剛恆
轆轤挽く匠の首に影縋る　以和
　窟猫あり悟道の風あり　和亜
虎落笛幼馴染に似たる蓉女　亜恆
　君のマフラーと流離の羇旅　恆以
啖呵売泣き売なんぞで香具師稼業　以果
　見世清掻きに花魁道中　果笈
孤月寥寥わが空閨に竹夫人　笈以
　栩栩然として雛罌粟潜る　以恆
黄昏は誰にでも来る蒼朮焼く　恆笈
　四面楚歌愚よ汝を如何にせむ　笈亜
花咲かば告げむと云いし優しさよ　亜和
　壱越断吟「春の曲」弾く　和果
老圃ひとり畑中にあり揚げ雲雀　果笈
　梁上の君子鼠族の棟梁　笈以
屋根裏に忘れた袖は薄縹色　以恆
　蛇化して小癋見の藪睨め　恆亜
青丹よし覇者に剳らる蘭奢待　亜果
　曝涼に見る綾羅錦繡　果和
暑気なれば曹達麪醴進上　和以
　合歓そよぐ影仙袂撲る　以果
鷺鏡や恋する心覗き見る　果恆
　起り破風より五楽の妙調　恆亜
月も出づ銚釐の酒も上燗に　亜笈
　藍球爽勝欣喜雀躍　笈和
山葡萄背負籠に盛り柚の道　和以
　謎の呪文はルンペルスティルツヒェン　以恆
習坎も需つに如くなし淵明かり　恆笈
　料峭の朝楾にお湯　笈亜
花の床貴妃嫋やかな蜾蠃がる腰　亜和
　海原はるか竜天に登る　和果

平成二十七年十二月九日首
平成二十八年六月三十日尾（文音）

忠臣蔵『赤蜻蛉』

赤穂

赤蜻蛉の影のよぎりし蔵の壁　大西素之
色なき風に遠き潮騒　岡田伊勢子
月今宵胸突坂を登り来て　杉山豚望
小兵なれども厚き信望　向井由利子
柔道は九段にして書家といふ　名本敦子
庭に転がる靴の片方　豚
木から木へ渡し手製のハンモック　敦
不意に鳴きだし夢破る蟬　素
高千穂へ神を案内し猿田彦　伊
系図広げて半可通なる　伊
唇の厚きは福と伝へられ　豚
唯ゐてくれるだけでしあはせ　敦
愛の巣の六階までを駆け上り　素
エアープランツ育つ貝殻　伊
丹田に力を込めて謡初　由
杉の秀先にかかる寒月　素
早番の看護士急ぐ霜の道　敦
高い税金安い給料　〃
バーボンで前後不覚に酔ひつぶれ　由
いつも濁れる城堀の水　伊
都庁にも清新の風吹き入れよ　素
十八歳の選挙初めて　敦
天と地の間に花のはらはらと　伊
勝鶏抱いて土佐のはちきん　西

大西素之捌

賦

大石内蔵助
潮田又之丞
寺坂吉右衛門
村松喜兵衛
間瀬孫九郎
片岡源五右衛門
木村岡右衛門
不破数右衛門
神崎与五郎
菅谷半之丞
倉橋伝助
武林唯七
近松勘六
貝賀弥左衛門
奥田貞右衛門
杉野十平次
早水藤左衛門
大石主税
前原伊助
堀部弥兵衛
間新六
小野寺十内
間十次郎
勝田新左衛門

磯浪の砕けてしぶく受難節　磯|貝十郎左衛門
平謝りに馴れるこの頃　横川勘平
ドローンまた高圧線に引つかかり　大高源吾
公式好きの頭でつかち　矢頭右衛門七
心太食べて結論うやむやに　村松三太夫
孫に教へる雨乞踊　奥田孫太夫
薬指金の指輪を持て余し　岡野金右衛門
刃傷沙汰は岡惚れの果て　岡島八十右衛門
矢のやうな恋の視線に抗へず　矢田五郎右衛門
国境越えて消ゆる馬橇　千馬三郎兵衛
雪女山も野原も知り尽し　小野寺幸右衛門
好奇心こそ智慧の源　赤垣源蔵
誇るべき平和憲法とこしなへ　茅野和助
仏足石に残る雨水　大石瀬左衛門
月光に吾子の寝息の安らけく　堀部安兵衛
久しく聞かず木の実降る音　間瀬久太夫
扁額の「士魂」も薄れ萱は穂に　萱野三平
三本の矢を束ねかねたる　三村次郎左衛門
惣領の甚六なれど優しくて　原惣右衛門
埴生の宿に届く吉報　吉田忠左衛門
裏口を出づれば広き沼沢地　吉田沢右衛門
春風つれて富良野路の旅　富森助右衛門
喜びも悲しみも超え花の下　間喜兵衛
かすみの中を天馬翔けゆく　中村勘助

（於・道後白水亭）

平成二十八年七月六日首
平成二十八年七月二十二日尾
形式「忠臣蔵」＝四十八句　二折　二花三月。表（赤）八句、裏（穂）十六句、名残表（浪士）十六句、名残裏（士）八句。
各句には赤穂四十七士と萱野三平の氏名の一字を詠み込み、発句と折立には「赤穂浪士」の各一字を入れる。

短歌行　『秋桜』

大竹恵子捌

ゲレンデにふはり揺らめく秋桜　大竹恵子
　高く低くと鳴ける蟋蟀　各務恵紅
洗ひたる鋤に満月映りゐて　奥山ゆい
　誰が焼くのかパンケーキの香　津田公仁枝
アパートの一人暮らしに砂埃　い
　岸に逆巻く夏の大波　紅
雲を割り祭り太鼓の響きくる　い
　鰯背な男探す雑踏　枝
モンローのやうな肢体をもてあまし　い
　望遠レンズ決まる焦点　紅
鐘楼に色を添へたる花朧　枝
　老いた番犬春の夢見る　恵
〃

ニオネーブルの甘き果汁を滴らし　い
　藍のバンダナ彼の好みか　枝
止まり木に寄りて待つ間の鬼ころし　い
　ＢＧＭは懐かしのジャズ　紅
遠出する車ガソリン満タンに　い
　ネイルアートは雪の結晶　日比野実紀子
凍て月に人も疎らな広小路　枝
　景気回復祈るお守り　い
ニウ刻々とオリンピックの迫り来て　紅
　いつも鞄に電子辞書あり　枝
鳥の声絶ゆることなき花大樹　実
　野を伸びやかに駆ける若駒　恵

平成二十八年　十月一日首
平成二十八年十二月三日尾

（於・岐阜日本海庄や）

花音『呱呱の声』

聖五月黎明を裂く呱呱の声　三輪　和捌
拍手の中に割れる薬玉　三輪　和
水含むあぢさゐの色さまざまに　竹内　菊
人馴れしたる猫の絡まり　二橋満璃
膝に置く詩集をそつと脇へ寄せ　佐藤清幸
新涼の気の甘き揺蕩（たゆたひ）　菊和

大病の危機乗り越えて共白髪　清幸
ずつと変はらぬ田作の味　満璃
歌合戦（ナウ）いづれが勝てどお元日　菊和
社の古木深閑として　清幸
語らるるおどろの歴史秘話　満璃
静かな余生どうぞのどかに　菊和
啼鳥に目覚め万朶の花の宿　和
遥か沖合海市ゆらめく　満璃
鯖雲（ウ）の空掻ひ潜り渡る月　清幸
出会つてしまふ七夕の庭　満璃
菊の香と愛に包まれハネムーン　菊和
別れの予感何かぎくしやく　和
山上のわが身のなんとちつぽけな　満璃
綿虫の舞ふ外湯への径　清幸
占（ナオ）ひは吉と出でたり寒椿　清幸
意外と冷える十代の票　満璃
漱石もニーチェも読まずポケモンGO　菊和
すらすら言へたアイラブユーと　清幸

（於・交流プラザ）

平成二十八年五月十五日首
平成二十八年八月十四日尾

形式「花音」について
二十四句・二折は簸と同型。一花一月。オ、ウ、ナオ、ナウを四季に分け、それぞれに「季節の花」を一句詠み込む。発句は当季から始め、順に進める。折端で次の季の初句を詠み季を移ろわせる。ウ一句目に月、ナウ五句目に花、ナウ一句目に音楽を。（グループ名「花音」に因み考案したものです。）

歌仙『銀屏風』

西田舟人捌

旅の宿屏風の銀が冴返る　藤本則子
　素焼きの壷に白梅一枝　和田澄子
鶯の声に驚く猫のゐて　阿部愛子
　走り根またぎ奥の方へと　西田秀花
月天心影絵世界のわきおこり　則子
　括れ忘れしうかつな瓢　愛子
朝霧(ウ)の立つや楠公出城あと　澄子
　貸切り列車農婚パーティー　秀花
肩がふれ映画そこのけ胸キュンと　則子
　移り香まとひ夜明けのコーヒー　愛子
道標は旧かな使ひあと何丁　則子
　石垣の間に羊蹄の花　秀花
にはたづみ浮かべて揺れる夏の月　澄子
　不細工犬も今はブームに　則子
三才児丸に目と鼻チョンもつけ　澄子
　希望新たに地震(なゐ)を生きゆく　秀花
紅しだれしだるる中をほろ酔ふて　舟人
　上着脱ぎすて黄沙を払ひ　愛子
病み癒えて清荒神礼参り(ナオ)　〃
　乳酸菌で朝の健康　秀花
囲碁界のＡＩ知能恐怖かな　澄子
　アナログ大事デジタル大事　舟人
巻尺のぱしっと戻る日の短か　秀花
　暮のボーナスネオンざわめき　則子
政治屋の心貧しく言ひ逃れ　澄子
　票に奢りて反省もなし　秀花
恋の路アクセルふかしもう一度　則子
　愛しき人の面影追ふて　澄子
わが涙月の雫の溢るごと　則子
　船酔ひしつつ太刀魚すくふ　愛子
踊(ナウ)り子の襟足にじむ風の盆　〃
　蟻の門渡り整然として　秀花
東山祇園ばやしや袖からみ　澄子
　父の遺伝子藤山直美　則子
花いかだ水の流れに身を任せ　澄子
　土手の柳はゆらりゆうらり　秀花

平成二十八年二月二十五日首
平成二十八年六月　九日尾
（於・大阪狭山市金剛）

歌仙『星祭』

星祭佃煮小屋は川に立つ　渡辺　柚捌
十日の月を受くる手甲　渡辺　柚
野紺菊素焼の壺に投げ入れて　城倉吉野
革の表紙の史籍全集　伊地知義子
人形に小さきピアス蚤の市　金井笑子
木枯し纏ふ地下鉄の客　堀尾一夫
ノーサイドグランドに座し天仰ぎ　柚
マドンナ遠く淡き憧れ　野
恋人と言ってもいいのと聞いてみる　夫
怪しく動く猫の眼力　義
テームズに壊れた夢が流れゆき　柚
千本杭のシルエットのみ　夫
網取りのここ一番と夏の月　笑
馴鮓にほふ古里の土間　野
軍用機校舎の窓を震わせて　節
長き睡りのタイムカプセル　節
語り継ぐ津波の跡の花大樹　笑
きぎすが鳴けば農事はかどる　柚
鐘(ナオ)朧礼拝堂は石造り　節
子の名忘れし母朗らかに　野
問診の女先生普段着で　夫
ポットに咲かす中国のお茶　笑
霜の夜は首に纏かるる手のぬくく　野
重なり合って寒牡丹濃き　夫
旅に遇うムカサリ絵馬よ堂の壁　節
不易流行そしてかるみへ　同
添削の朱線の箇所はいつも助詞　柚
ビルからビルへ空歩く人　笑
執着を捨てて晩年水の月　節
枡に塩のせ今年酒呑む　夫
牧閉(ナウ)ざすポケモンつひに探せずに　柚
親より脚の長きおかっぱ　野
朝まだき鼻息荒き調教師　夫
ゲルの真上に幻日を見る　節
アダージョの余韻漂ふ花の波　笑
窓に飛びこむ蝶のひらひら　筆

執

平成二十八年七月七日首
平成二十八年八月四日尾
（於・神奈川県民サポートセンター）

歌仙『出会ひ橋』

小林節子捌

花筏右へ左へ出会ひ橋　小林節子
激つ瀬をゆく若鮎の影　城倉吉野
島人の集ひ凧揚げ競ふらむ　沖津たんぽぽ
タイムカプセル眠る校庭　彦坂英治
月今宵ブロンズ像の黒々と　酒井敬子
酌みつつ唄ふ重陽の酒　堀尾一夫
すこやかに吾子育ちゐて相撲草　野野
かの糸電話残る耳許　治治
アイラブユー指輪差し出す跪き　敬敬
築きて崩す砂山の城　夫夫
原発は何時の間にやら此処かしこ　野野
そ知らぬ顔の半眼の猫　節節
ユニクロのすててこのまま仰ぐ月　ぽぽ
山車のお囃子遠く聞こゆる　英英
尼寺へ行けと言はれて菓子づくり　敬敬
つまづく石もかりそめの縁　夫夫
車窓絵は夢の続きの山桜　加藤亀女
祈る復興春の虹にも　金井笑子
飾られて散髪店の吊し雛　伊地知義子
口笛で吹くウイリアム・テル　水野禾甫
父と子のいさかひいつもお八つまで　甫甫
逃げ足速き役人の常　笑笑
狸罠まんまと掛る二人して　夫夫
神の留守には道ならぬ恋　野野
手相見の手持無沙汰の大欠伸　笑笑
終着駅は始まりの駅　夫夫
四年後はＡＩ五輪となる兆し　節節
天むす三個折ぎに包んで　亀亀
抱き起す母の重たき昼の月　野野
絵の中の町暮るる白秋　敬敬
妖怪も家族連れなり雁渡る　甫甫
立ちっ放しのマネキンの笑み　野野
工場のラジオ体操始業前　夫夫
鼠返しの寂びる高倉　義義
名優の老いを語れる花の庭　笑笑
海越えてゆく蒲公英の絮　甫甫

平成二十八年五月七日首尾
（於・神奈川県民サポートセンター）

歌仙『鳥渡る』

むらさきに烟る岬や鳥渡る　　鶴岡育枝捌
　遊覧船にあがる眉月　　大竹多可志
地芝居の出番待つ子が手を振りて　　石井斐子
　ガムとドロップポケットの中　　澤畠シツ子
どちらかと言へば猫より犬が好き　　伊香渚
　文字摺草が風にゆらゆら　　高野敏子
夕立に縁台将棋また明日　　黒澤都茂黄
　返し忘れし一冊の本　　シ
空港に若きカップル抱き合ひ　　多
　新郎の父とてもダンディー　　渚
アドリブで場をもり上げるピアノ弾き　　都
　手話の勉強少し始めん　　斐
禅寺の古き回廊木の葉舞ふ　　敏
　冬満月が煌と出でたり　　渚
都庁には奇奇怪怪の物の怪が　　シ
　食べて太つてはけぬスカート　　多
満開の花の大路に立ち尽し　　渚
　ひらりひらりと飛ぶは双蝶（ナオ）　　斐
店先に栄螺焼く香の漂ひぬ　　都
　旅びとが買ふ辛口の酒　　多
舞殿に現る巫女は我が子なり　　シ
　昔気質の職人の町　　都
早くより筍掘りに精を出し　　斐
　麦藁帽子深くかぶりて　　斐
ひたすらに五輪めざしてボール蹴る　　渚
　恋の呪文を朝な夕なに　　多
いつときの嘘と知りつつ闇の底　　敏
　大統領の替はるアメリカ　　都
難民のテントの嬰に月明り　　渚
　南瓜のサラダ大皿に盛る　　敏
医者（ナウ）いらぬ長寿の里の柚子たわわ　　多
　ロケ隊のバスけふも来るらし　　都
放し飼ひされたる山羊が草を喰み　　渚
　デッサン帖に描く若鮎　　敏
唄もでて今たけなはの花の宴　　渚
　蒼天に浮く気球うらうらか　　シ

平成二十八年　九月十二日首
平成二十八年十一月十四日尾

（於・多賀図書館）

歌仙『雪釣りや』

雪吊や男結びの縄の先　平岡一九八
　冬晴れに沸く市民マラソン　横山越子
下書きはミルクプリンを食べながら　佐藤蟻珠
　速達で来る督促の文　松澤龍一
英会話芸のうちよと月笑う　木之下みなみ
　菊人形のあげた片足　八越
自転車で力士が駆ける秋時雨　珠
　席詰めるからここにおいでよ　龍
さりげなく御居処に伸びる彼の指　みみ
　平行線は遂に交わり　八越
人妻の外反拇趾を含みつつ　珠
　曲にのれない一人カラオケ　龍
甜瓜輪切りにされて皿の上　珠
　月を目指して歩むででむし　みみ
時々は振舞い水を頂戴し　龍
　ご馳走しても島は返らず　珠
花衣その上からの割烹着　越
　伸び縮みする遠足の列　八
静かなる頭そろえて葱坊主　遊人
　逆らえぬ僕塾でうとうと　八
延長の定年までは後二年　みみ
　短日の富士凛と聳えて　越
休耕の畑に高く餅の音　珠
　ふるさと捨てて街のキャバクラ　龍
今日もまた身の上話聞いてやり　みみ
　あなたの肩に手をおくときは　八
便箋は透かし模様の和紙が売れ　越
　木天蓼舐めてタマはゴロニャン　龍
帰れない二十三夜のシンデレラ　珠
　後れ蚊がきて募る焦燥　珠
秋刀魚焼く換気のファンを強にして　龍
　新横綱に牛久湧き立つ　龍
えんぴつを探せば消しゴムばかりなり　珠
　ついてない日は鉢に水やり　珠
壮大な後藤純男の花屏風　みみ
　風にまかせる春の片雲　越

執筆

平成二十八年十一月十八日首
平成二十九年　三月十日尾（文音）

《徳島・ひねもす連句会》

残歌仙（ざんかせん）『漱石』

衆議判

漱（ナオ）石に張り合うて見る春の夢　梅村光明
それから後は知らぬ存ぜぬ　上田真而子
きなこ餅つまみ食ひした犯人は？　赤坂恒子
仏に尻尾生えてをります　木村ふう
納涼舟（すずみぶね）ゆく波任せ風任せ　真而子
片肌脱ぎに覗く彫物　光明
裏街道歩けば恋に躓きて　ふう
美しすぎた業を悔やめる　恒子
コンビニのバイト社会の窓になり　光明
お江戸はまたも恥の知事選　真而子
何はさて違へず空に昇る月　恒子
露草ひそと青を極める　ふう
古酒（ナウ）新酒並べて置かれ迷ふこと　真而子
スマートフォンと暮らす僥倖　光明
随行の苦労は書かず旅日記　ふう
父母の笑顔にほんに癒され　恒子
花陰にまだ乗り馴れぬ車椅子　光明
朝の陽を浴び跳ねる若駒　真而子

平成二十八年七月二十日首
平成二十八年八月十二日尾（文音）

◆新形式『残歌仙（ざんかせん）』について

歌仙として巻かれるところを、裏十二句までで止められたものが「半歌仙」と名付けられ流布しています。本来、巻かれたであろう残りの名残表と名残裏は、随分と悔しい思いをしてきました。そこで、巻かれなかった歌仙の残りを、名残表から巻き進めるという形式が、この「残歌仙」であります。

創案者　梅村光明

旅『アロハシャツ』

アロハシャツ風通しよき村役場　弥生
　百日紅の満開となる　由紀
子供らは土管に隠れ遊ぶらん　清華
　枕辺に置く名作全集　喜美子
様々な人の往き交う望月夜　淑美
　お国訛りを懐かしむ秋　弥生
新蕎麦を食べ比べするひとり旅　喜美子
　地理に詳しく白鵬に似て　弥生
今どきの結婚式は簡略に　清華
　いつも手抜きの掃除洗濯　淑美
蹲踞に花屑散らす昨夜の雨　喜美子
　深呼吸して山笑い初む　清華

衆議判

小池弥生
羽田野由紀
柿沼喜美子
成田淑美
弥生
喜美子
田口清華
喜美子
弥生
由紀
淑美
清華

不器用（ナオ）が巣箱づくりに四苦八苦
　もひとつ増やす防犯カメラ
愛情も溢れすぎれば疎まれる
　余命を知って恋の道行
月寒く黒く鎮もる上田城
　裏で鮫鰊吊るし切りする
果（ナウ）てもなく五輪予算をふくらまし
　マグマの動き神のみぞ知る
立見席オペラグラスは必需品
　曲水の宴資を尽せる
悠久の古都を染めあぐ花吹雪
　のどかに走るＳＬ列車

弥生
由紀
清華
喜美子
淑美
弥生
清華
喜美子
清華

平成二十八年八月十六日首
平成二十八年十月十八日尾
（於・富士見市みずほ台コミュニティーセンター）

ソネット　『植田一望』

成田淑美捌

夏館風に水の香ありにけり　成田淑美
　山の裾まで植田一望　大堀春野
どこまでもスポーツカーを走らせて　中村ゆみ子
　ダイヤル合わせボサノバを聴く　仲澤輝子

復興の進む相馬に昇る月　ゆみ子
　手に手を添えて迎え火を焚き　輝子
睦言を夜長の床に繰り返し　淑美
　主治医の名前呼び捨てにする　春野

気まま旅寒海苔あてに雪見酒　輝子
　今に伝わる落城の秘話　淑美
ブラタモリ地図を読みつつ街歩き　春野
　園児の集う庭に燕が　ゆみ子

花守に命あずけて花万朶　淑美
　パンを小脇に春の霜踏む　輝子

平成二十八年六月二十二日首
平成二十八年七月二十七日尾
（於・川口ジョナサン）

《神戸・ひょんの会》

テルツァ・リーマ『暮年』

鈴木　漠捌

宮崎鬼持
松本昌子
鈴木　漠

服部恵美子
永田圭介
梅村光明

三木英治
淵沢純平
昌子

漠
恵美子
光明
圭介
英治

籐椅子に海彼(かいひ)夢見る暮年かな　漠
風鈴の音にしばし微睡(まどろ)み　恵美子
遠来の友をもてなす酒肴(さけさかな)　光明
老いにもめげず跳人(はねと)試み　圭介
行く末は月の世界と嘯(うそぶ)きて　英治
ハロウィン仮装吾妹(わぎも)の軽(かろ)み　昌子
恋の綾巧みに綴る詩の書き手　漠
いつかの道に南天の赤　恵美子
那智の滝注連(しめ)張る役も村掟　光明
八咫烏(やたがらす)指し嬰(やや)はかあかー　圭介
雙六(すごろく)の一番乗りの旗立てる　英治
春着の筈が残る襟垢　昌子
適不適問はず作業を割当てる　漠
陽炎の野に生を愉しみ　恵美子
花簪懐かし今やエレキテル　光明
種蒔く影も薄き現(うつ)し身　圭介

東條士郎　執筆

＊テルツァ・リーマ（三韻詩）。中世イタリアに起源をもつ脚韻定型詩。三の倍数行プラス一行で構成される。十三世紀初頭のダンテ『神曲 La Divina Commedia』は地獄篇・煉獄篇・天堂篇の全一〇〇曲がこの形式で書かれた。押韻形式は aba/bcb/cdc/ded/efe/f

平成二十八年七月　一日首
平成二十八年七月十五日尾（文音）

歌仙『穂すすきや』

衆議判

穂すすきやハイウェイ走るひた走る　千
　間近に浮かぶ富士の初雪　正
月今宵一句ものして短冊に　尚
　するり坊やの外す智恵の輪　妖
Tシャツは自然素材にこだはりて　正
　やつぱり鮎は塩焼がいい　妖
噴水に並びて高き受難の碑　眞
　下宿の頃の実らざる恋　千
今はもう関白宣言どこへやら　正
　誰も認める旅の達人　尚
玉葱の屋根のモスクに鳩は群れ　眞
　スマートフォンが発火するとは　千
手帳にはぎつしり埋まるお付き合ひ　千
　意思表示する臓器提供　眞
月光の波間に鯨潮を吹く　千
　つくしつんつんと原つぱ　妖
存分に絵筆を揮ふ花盛　尚
復活祭に新しい靴　千

密田妖子
いぬじま正一
瀧澤尚子
北野眞知子
宮村千鶴子
正
眞
正
尚
妖
眞
尚
正
正
妖
眞
千

風光るなにかいいことありさうな（ナオ）
　打ちつぱなしのゴルフひととき
大統領いよよせばまる捜査網
　ふるさと納税人気上昇
お似合ひのふたりに育つ筒井筒
　後に先にと奥の院まで
見たくないものは見ないとサングラス
　苺ことさら好きだつた母
留守電に用件残す頼りなさ
　届く書留ハンコ下さい
夕暮は寂しと月のうさぎたち
　菊人形が大見得を切る
自然薯（ナウ）の土の香りを愛すべし
　息をするさへ辛い通風
猫好きと猫嫌ひとの屋台酒
　こんな事までわかるパソコン
花の雲かしこの山はご神体
　窯出しの朝春の虹立つ

平成二十八年　八月二十一日首
平成二十八年十二月　十八日尾
（於・富山市星井町公民館）

歌仙　『やわらかに風連れて』

谷口久子捌

やわらかに風連れてきぬ夏の蝶　尾崎志津子
　ほたるぶくろの揺れる片隅　品部三酔
隣家のピアノいつしか童謡に　植木陽子
　心おどらせ足をおどらせ　鈴木那美
酒酌みて龍頭船に月を待つ　三原寿典
　氷頭膾とて箸を伸ばさん　星野焱
朝(ウ)ほらけ彩る山に人の列　山本紫苑
　手に手をとりて脇道にゆく　志津女
繰り返す嘘と知りつつ許しいて　谷口久子
　罰してやれよ東京都民　寿典
野良犬は雨の匂いに戦ける　焱
　お稲荷さんの掃除当番　陽子
新しき靴をおろして冬の旅　紫苑
　ロンドン塔にかかる凍月　久子
靄の中切り裂きジャック息潜め　焱
　空き瓶三つ四つ傍に転がる　三酔
野仏も夕暮れ時に花疲れ　寿典
　磯巾着の触手ゆらゆら　焱
大(ナオ)掃除一家総出の大童　志津女
　いつのまにやら魔女も交じりて　志津女
何もかも宅急便で届きます　焱
　止まりしままのからくり時計　久子
蓮の葉にアメーバーめく水の玉　焱
　サマーハウスで鉢合わせして　焱
人柄に惚れ御曹司捨てちまい　三酔
　こんなもんだと思うこの頃　焱
参院選投票権も若くなり　寿典
　鴉がひょいと網持ち上げる　焱
初月に影曳いて行く離れごぜ　久子
　じょんがら節のそぞろ身に入む　三酔
穂(ナウ)芒のみな呆けたる宿の庭　寿典
　石の配置は星座のごとし　志津女
名物に美味いものなど無しという　焱
　仔馬の駆ける草原眩し　寿典
絢爛の花は唯々咲き誇る　焱
　松の緑よとこしえなれと　志津女

平成二十八年六月十二日首
平成二十八年七月　十日尾
（於・京都市国際交流会館）

歌仙『戦争の』

戦争の匂いぽろりと毛虫落つ　狩野康子捌

年代物の幟高々　狩野康子

機の音働き者の背を押して　松ノ井洋子

幼馴染はいつもちゃん付け　秋田てる子

観劇の余韻そのまま今日の月　熊坂昌子

静まりかえる初鴨の池　谷田部弓子

不機嫌の訳は曖昧新酒酌む　康子

空頑張りはいつも見え見え　洋子

お互いに恋と結婚スルーする　弓子

箪笥に眠る祖母の白無垢　昌子

位牌とは不思議なるもの俄か雨　てる子

逆さ睫にてこずっており　康子

活性を願い脳トレ毛糸編む　洋子

樹氷おどらせ尖る月光　弓子

ちびっ子はいちいち親の真似をして　昌子

遠眼鏡にて覗く極楽　洋子

吾れ知らぬ世を生きぬいて花爛漫　康子

あいさつのよう蝌蚪の紐揺れ　てる子

春の旅白石和紙を土産にせん　昌子

国際会議招致する知事　てる子

ひと言が為替相場を左右する　康子

サンドイッチに芥子よく効き　洋子

紫外線男も日傘挿すそうな　弓子

鉢にのびのび琉金の鰭　昌子

寅さんの香具師の口上懐かしく　てる子

貧乏神を連れて嫁入り　康子

これからはあなたに抱かれ羽化するわ　洋子

涙もろくて甘え上手で　弓子

十三夜里帰りする肉筆画　てる子

目玉おやじの秋思深まる　昌子

ボサノバのリズムで歩く茸狩　康子

軽トラックが俺の相棒　洋子

爺の旗登下校の児見守りて　弓子

出番増えたる気象予報士　昌子

花の山空の蒼さを際立てる　康子

アンテナショップに海胆桜蝦　てる子

平成二十八年八月二十日首
平成二十八年九月　十三日尾
（於・北仙台コミュニティセンター）

源心『向き合える』

狩野康子捌

向き合える児と白鳥に空のあり　狩野康子
　小流れに背を伸ばす寒芹　佐々木嘉宇
一服の茶に安らぎの刻を得て　高橋玻斗子
　興にまかせて大鼓打つ　蔦とく子
ウ月白の中帰りくる盥舟　秋葉芳成
　画家のモデルは秋薔薇のごと　康子
鏡には乱れし蚊帳の名残見え　嘉宇
　帽子真深に道祖神様　とく子
職人の技の冴えたる型染めに　芳成
　紙芝居屋の声音懐かし　嘉宇
ロボットが会社案内する時世　とく子
　難民選手集うリオの地　康子
花便り家族写真も添えてあり　とく子
　波の置き去る小さき寄居虫　紀子
ナオ朧夜の地下聖堂の秘密めく　玻斗子
　岩塩掘りの苦労ぽつりと　とく子
カウンターバーにバーボン呷りつつ　紀子
　裾捌き美し女形なり　玻斗子
生霊となりて通いし冬座敷　康子
　納豆を食べ悪阻養う　とく子
軍用機わがもの顔に格納庫　紀子
　オゾンホールが綻びており　康子
ホームラン当り喜ぶ夏の霜　玻斗子
　竹酔日は元気凛凛　嘉宇
ナウ老猫に学ぶ独りの過し方　浜田則子
　料理の手順孫に教える　とく子
濃く淡く織りむらのあり花の山　則子
　楽譜ふわりとめくる軟東風　芳成

平成二十八年九月十四日首
平成二十八年十月十八日尾

（於・仙台市文学館）

歌仙

『母の家』

付け回し

木犀の風入れにけり母の家　岡村糸子
深き庇に何時迄草よ　大久保風子
月仰ぎ旅行の幹事引き受けて　糸
俳句手帳に雅号書き入れ　風
投函のポスト歩いて二十分　糸
百合鴎群れ橋くぐりゆく　風
編みかけのセーター部屋の片隅に　糸
しつこいと言い出て行った人　風
カラオケのデュエット曲はどうしよう　糸
裸婦のモデルに惚れちゃいけない　風
海沿いのパンケーキ屋でアルバイト　糸
経験談が芥川賞　風
ハンモック月の光の煌々と　糸
三日三晩に梅乾きたり　風
知恵袋おばあちゃんからネットへと　糸
生活不活発病と判明　風
足取りも危うくなりし花見酒　糸
長者番付記事に亀鳴く　風
菩提寺（ナオ）の和尚跡継ぎ生まれ春　風
スポーツカーで走る箱根路　糸
からくりが十回以上の秘密箱　風
合鍵もらう彼のマンション　糸
絶頂のたかぶりつづく果てもなし　風
トランプ外交変える世の中　糸
切り札を何枚持つか窺って　風
縁故入社が三割を占め　糸
茶席まで飛び石続き敷松葉　風
山に籠って陶芸の道　糸
家猫と預かり猫と月を待ち　風
パズル一片無くしうそ寒　糸
ありのみ（ナウ）の皮を切れないように剥き　風
教会バザーヘルプ頼まれ　糸
土蔵から古き良きもの探しあて　風
大人買いする外つ国の人　糸
満開の花の門下に一年生　風
春の曙食卓に鯛　糸

平成二十八年　十月　七日首
平成二十八年十二月二十四日尾（文音）

歌仙『ＩＳ兵士』

深く深く緑へ車両切り離す　康雄
　宿舎を渡る麦の秋風　丹
陸上部土蹴る音の揃いいて　游子
　コーラの缶を回し飲みする　記
温暖化蓑虫鳴いて月仰ぐ　美美
　棘を避けつつ拾う木瓜の実　游
住所録整理しながら惜しむ秋　平
　サナトリウムに待つは兄の君　康
なにげなく髪梳くさまに胸キュンと　雄
　再婚同士と噂ひそかに　達
蕎麦街道追分山の地蔵尊　康
　国々なべて右へ舵切る　記
凍て空のＩＳ兵士月を射つ　丹
　暖炉の前でルービックキューブ　游
館内の窓がそのまま額縁に　平
　育ちの良さか仕草おっとり　康
黄昏に花の枝手折る人は誰　雄
　*紫庭の隅で揺れる鞦韆　丹

永渕　丹捌
狩野康子
佐々木游子
永渕　丹
荒川由美子
筒井草平
高山達雄
雄
康
美美
游
平
康
雄
〃
中村記
康
丹
記
游

*若駒を大草原へ駆り立てる　康雄
　撫の刳船陸に引き上げ　雄
新種かと研究室は賑わしく　丹
　祝の席に届く樽酒　游
業平忌料紙にかなのちらし書き　康
　紅差す頬の捺せる落款　記
豊満な*円窓妃図に妻は似て　雄
　渚場の鯉の巨き目玉よ　丹
二杯酢の味にひきつく伊達男　游
　布団部屋から漏れる衣擦れ　平
唐崎の雨はあがりて居待月　康
　写真に添える新松子なり　達
*ふと制し耳欹てて鹿の声　記
　健診日には服は前開き　游
誰にでも直ぐ話し掛け輪に入り　丹
　昼を待たずに解ける薄氷　康
浮き浮かれ一里過ぎても花の列　平
　目借る蛙の漏らす戯言　執筆

（於・仙台文学館）

平成二十八年　七月一日首
平成二十八年十二月一日尾

＊「紫庭」天皇の住居としての御殿、皇居、禁裏
「円窓妃図」棟方志功の描く女人図

《松山・松山連句協会》

歌仙

『無位無冠』

初夢の覚めて生涯無位無冠　戒能多喜
宝の孫に渡すとし玉　井上雨道
村あげて雛の節供は賑やかに　小池芳江
乗り捨てられて揺るるぶらんこ　岡本孝子
さざ波の海に影さすおぼろ月　土居栗
のど飴入れる赤いポシェット　曽根ともみ
御殿医の家系を持ちてホームレス　ウ　雨
高値の付きし姫の恋文　多
逢引はいつもの所あの茶房　と
夏風邪かくすティシュちらちら　孝
青蚊帳の中へ螢の放たれて　栗
トランプの壁ちぢむアメリカ　芳
名月に芸術心は爆発し　雨
声を掛ければ案山子うなづく　沖村むつ子
じつくりといちぢく煮込む赤ワイン　石丸信子
やつと揃うた姉妹三人　森澄子
姦しく往時を偲ぶ花の句座　多
芝萌ゆ城にひびく横笛　雨

戒能多喜捌

結願の寺へ納める遍路杖　ナオ　む
オープンカーの試乗販売　信
この店のパスタ料理が好評で　澄
編集会議終へて一息　多
猪狩りの武勇伝聞く焚火跡　む
ついて来るのは雪女郎かも　雨
鳩尾の辺りが昨夜は疼きゐて　信
思ひの丈をメール送信　澄
恋焦がれ添ひし夫に隠し妻　多
どうにもならぬ借金の嵩　松永勝政
唐松の上枝を月の離れ初め　芳
湖面を発ちて帰る雁　武智弘香
ふる里をしのぶ旅寝の菊枕　ナウ　多
地方紙に載る友のエッセイ　と
宅配は津々浦々にゆきわたり　栗
獺のまつりも今はまぼろし　雨
高遠の絵島囲に花満ちて　弘
青める畦に土筆摘む子ら　勝

平成二十九年一月二十三日首
平成二十九年二月二十三日尾
（於・たかのこふれあい館）

歌仙『海の匂や』

風入りて海の匂や夏座敷　中井淑子捌
あくまで青きギヤマンの壺　菅野陽子
合宿の発声練習切りもなし　高月三世子
好きな言葉は夢と挑戦　中井淑子
月見酒名山またも踏破して　世
宅急便で重い富有柿　淑
そぞろ寒見上る犬の賢い眼　世
アディダスで決めスローージョギング　陽
三つ編の今宵豊かにほどけをり　陽
挙式の前に探す保育所　世
ベビーカー連ね議事堂目指し行き　世
思ひのほかに強き枯蔦　陽
楷明りもののけ話月細く　陽
煎餅も良し大徳寺味噌　世
長老は甘いも辛いもにこにこと　鈴木アヤ
補聴器は厭筆談にする　淑
花万朶ハグして醸すオキシトシン　世
調子整ふ鶯の声　陽
モーツアルト流して朝寝ほしいまま　世
ウインナコーヒー香り聞き分け　伊能美智子
女性知事かじ取りの妙ご覧じろ　淑
天龍下り右に左に　陽
誘蛾灯虫がめつきり減りました　世
浴衣地ドレス直線で縫ひ　陽
検索の画面操る手の素早くて　ヤ
みつめられてることはご承知　世
終電を逃すホームのディープキス　世
赤いヒールはしなやかに去る　陽
歌奉納春日大社に月明し　陽
菊人形展会期延長　美
無農薬新米どつと店先に　淑
モンペの母の写真モノクロ　陽
国産のアニメに賭けた或る生涯　世
残る寒さも日々に和らぎ　ヤ
花あれば見にこないかと文届く　陽
舌にやさしき鰆丼　世

平成二十八年五月十一日首
平成二十八年十月　五日尾
（於・東京女子大学同窓会館）

歌仙『初茜』

初茜後姿の翁かな　狩野康子捌

節振舞に箸置きの松　谷田部弓子
五線紙に広がる思い写すらん　庄子陸子
よちよち歩きそっと見守る　熊坂昌子
朧月機内の人を包み込み　中村孝史
頂競い冴返る山　小岩秀子
凧合戦大技に出て意気揚々　水渕丹
男の子歓迎ダンスサークル　秋田てる子
二人だけ誤作動をする仲となり　菊池宏
いつのまにやら年増好みに　木田眞智子
神妙に野点の席の列につき　蔦とく子
借景となる八幡の杜　佐々木嘉宇
月満つる天動説の時代より　松ノ井洋子
夜長に開く西田哲学　高橋玻斗子
秋刀魚にはやはり地酒と思いたる　川村紀子
高台の居に海懐かしむ　秋葉芳成
花抄い再開果す母もあり　伊藤航
斑雪の下に透ける絵タイル　笹川圭子
春(ナオ)の鴨鳩も啄む池の端　菅原泰子
緑化ホールで珍種スケッチ　小松幹子
道化師の化粧を落し嘯いて　菅原弘子
為替相場に右往左往す　高橋美代子
雨色になりそこねたる雨蛙　山田史子
古ネクタイを解き襷に　高山達雄
着流しの後姿に惚れ惚れと　佐々木游子
ほほ笑み湛え招く手弱女　中村記康
後輩に先を越されて歯がみして　山崎博司
世界を巡るＰＰＡＰ　阿部堅市
名にし負う佐渡の荒波月砕く　鹿野恵子
秋の光を追う印象派　田中裕子
野(ナウ)に入りて野猪の親仔を驚かす　島田寛
折り合いつけるためのまじない　菅野好子
空を舞う悲しみを追い旅立てり　伊藤建宇
腸に沁む独り居の酒　鈴木文男
花筏隠したままの夢もあり　筒井草平
蝶ひらひらと畑一面　荒川由美子

歌仙『草紅葉』

長澤矢麻女捌

釣り人の影が揺れをり草紅葉　長澤矢麻女
　帽子の先に止まる秋蝶　黒澤かすみ
月今宵陶芸の町鎮もりて　上条洲紅
　長寿の秘訣軽い運動　大山とし子
詰将棋コンピューターが相手なり　か
　日向ぼつこで転寝の猫　矢
遠ウ筑波大根畑葱畑　と
　Uターンしてはげむ婚活　洲
エプロンが似合ふあの娘にドッキドキ　か
　連理の枝に下がる御神籤　矢
砂時計さらさらさらと時こぼす　と
　アームチェアにゆるり微睡み　洲
草笛がきこえる岸辺月昇る　か
　今年の梅酒出来は上々　と
同好の友集ひたる旅の宿　矢
　乗り鉄撮り鉄駅弁マニア　洲
妖精がのぞき見してる花籠　か
　降りみ降らずみ暖かき雨　と
畦（ナオ）を塗る家族総出で賑やかに　矢
　ポケモンゴーで町おこしとか　洲
アーケード化粧直しも進みゐて　か
　宝くじ買ひ夢はふくらむ　と
熱燗に酔つたはずみのひと夜妻　矢
　後朝惜しむ山茶花の垣　洲
菩提樹の僧は二足の草鞋はき　か
　見えてて遠き北方領土　と
ゆつくりと紙飛行機の舞ひ降りて　洲
　笑み含みつつ眠る嬰児　か
宇宙より眺めて見たき今日の月　矢
　詰襟を着て案山子直立　と
団栗（ナウ）でふくらむポッケ気にしつつ　洲
　ドレミの歌の響くキッチン　か
稀勢の里郷土の期待一身に　矢
　春の陽射に浮かぶ綿雲　洲
山野辺の塚をめぐりて花万朶　と
　じぐざぐに過ぐ遠足の列　か

平成二十八年　八月二十八日首
平成二十八年十二月　二十日尾（文音）

歌仙『柿たわわ』

人棲まぬ隣の庭や柿たわわ　松澤龍一
　垣根を越えて秋の蝶々　黒沢かすみ
月の舟ミステリーから顔上げて　高沖和
　さて晩飯は肉か魚か　植村義光
女子会でメニューが同じ三世代　水野昌美
　虹のかかった単線の駅　龍一
沼（ぬ）に入る形を枝に蛇の衣　かすみ
　歌舞伎役者に似てる面影　和
初恋は忘れましたよ今が旬　義光
　同窓会に探す元カレ　昌美
腹筋を鍛える夜のジム通い　龍一
　おまわりさんは直立不動　かすみ
遠火事にサイレン激し空を焼く　和
　ふぐ鍋つつき月と酌む酒　義光
ババ抜くなトランプタワー灯が消えず　昌美
　挙げる絵凧に描くゆるキャラ　龍一
早咲きの花の名所を巡る旅　かすみ
　耳をすませば鶯の声　和
蕗（ふき）のとう見つけて肴一つふえ　義光
　シンプルランチで「サラメシ」を観る　昌美
漬物で拭う飯椀禅の僧　龍一
　遥か彼方に淡き山並　かすみ
漕ぎ出でて星空で待つ花火舟　和
　団扇のそよぎ眠りをさそう　義光
イケメンに手が綺麗だと告げられる　昌美
　結婚指輪をティファニーで買い　龍一
伝統の母校の今は共学に　猿
　頂上に立つ猿の品格　和
稲を刈る人の後追い群れる鷺　義光
　風に吹かれて月とダンスを　昌美
捨（なう）てられてひねもす空を見る案山子　龍一
　ひとり暮らしの気まま身に付く　かすみ
襖絵の汚れ髑髏に見えてきて　和
　切り絵を貼って春の野原に　義光
くじ引きで孫引き当てる花鰻　昌美
　都おどりのチラシ置く店　執筆

平成二十八年十　月二十六日首
平成二十八年十二月　十三日尾（文音）

歌仙『春の雪』

衆議判

診察を待つ間に春の雪となる　後藤とみ子
窓を拭へば枝垂れ紅梅　永塚尚代
入学児母の手はらひ教室に　柳田宏子
いつものやうに友と川釣り　と
十三夜犬の首輪に豆ランプ　尚
松茸飯のにほい漂ふ　宏
村芝居鬼面をとると男前　と
若づくりして甘きささやき　尚
一途さに手管忘れて道行に　宏
ハワイの浜に響く波音　と
「はやぶさ」に夢を託して町工場　尚
予算求めて陳情書だし　宏
夕月になにはともあれ缶ビール　と
大事に飼はれ金魚太目に　尚
宿敵と交換しあふ縞のシャツ　宏
足踏みならしポルカ楽しむ　と
投句箱すこし傾き花の園　尚
畑打つ日々に心安らか　宏
近江路に善人集ふ御開帳　と
監視カメラのチェック厳しく　尚
古希の友独り身になりいきいきと　宏
廃棄食品減らす運動　尚
漱石忌電子書籍に「三四郎」　宏
真夜の嘘にキューピーもびつくり　と
リュック背に始発電車で旅に立ち　尚
寡黙な彼に趣味を尋ねて　宏
かずら橋ゆらゆら揺れてプロポーズ　と
口裂け女山中に消ゆ　尚
管弦の微かに聞こゆ月天心　宏
鶉の料理添へる仕出し屋　と
木の実落つガス灯並ぶ温泉街　尚
回顧話に時を忘れて　宏
からくりの茶坊主今日は休ませる　と
墨たつぷりと揮ふ大筆　尚
花吹雪あびて幼の歩み初む　宏
うららに望む金の鯱　と

平成二十八年二月十五日首
平成二十八年三月　六日尾（文音）

短歌行　『黒薔薇や』

静　寿美子捌

黒薔薇やモンマルトルの白い椅子　静　寿美子
似顔絵描きの傾ぐ夏帽　後藤とみ子
数独にはまつて家事はなほざりに　大杉澄江
録画機能の残り確かめ　三輪慶子
満月（ウ）の茶会にあそぶ付喪神　柳田宏子
殿様ばつた庭下駄に座す　美と
新築の祝におくる新走　江
宇宙船から熱き告白　宏
披露宴主賓に招く大統領　慶
腰痛体操ジムで教はり　宏
山峡の限界集落花万朶　美
鳥の巣立ちに子らの応援　静　寿美子
誰（ナオ）にでもなつく犬連れ野遊びへ　北畠明子
老いのつとめと語る戦争　江
ストーブに並ぶ弁当温まり　永塚尚代
御嶽山をおほふ寒煙　尚
折り紙の手解きをする旅楽し　慶
アンデルセンの生家訪ねて　江
天空へ聳ゆ古城に弓張月　明
夜長の路地に流る恋歌　と
鮭（ナウ）上る川に釣り客案内し　慶
鉄火奉行の捌きあざやか　江
花盛り銘ある大樹人を呼び　尚
夢の世界へしやぼん玉飛ぶ　と

平成二十八年八月　四日首
平成二十八年八月二十四日尾
（於・東京ウイメンズプラザ）

《横浜・横浜ベイサイド連句会―その一》

故生田目常義様追悼

歌仙『名月や』

名月やジュラ紀の空もかくあらん　本屋良子捌

金木犀の香り馥郁　生田目常義仏

早稲酒に遠来の客待ち兼ねて　本屋良子

両隣より届く好物　秋山よう子

街角の朝の公園鳩に餌　源桃子

フィールドホッケー汗もしとどに　国司正夫

Eメール暑中見舞は絵文字のみ　生田目美保子

どこへ行つたかあの赤い糸　良

靴音であなたと分る午前二時　よ

看護師さんに指示されるまま　桃

高層のビルの狭間に遠き富士　保

俳人Nを探す横浜　桃

冬籠りデューク・エリントンばかり聴く　桃

白き浜辺に仰ぐ寒月　よ

老僧は西方浄土夢に見て　保

コスパコスパと生やす顎髭　義

スケッチの画帳に花の散りやまず　夫

蜜蜂の箱並ぶ林床　よ

自転車に寝袋積んで春野行く　桃

大道芸を囲む人群　保

青臭い心をスリに盗まれて　良

うぶな私に謎の囁き　々

都知事より実は妻の座欲しかつた　桃

波除神社に嫁が君現れ　夫

松籟に何処ともなく箏の音　桃

地震の記憶はいまだ薄れず　よ

すめらぎの鎮魂の旅つづきゐて　良

さらりと溶ける型抜きの菓子　良

迷ひ込む小路の奥に月の光げ　よ

柿のたわわに実る裏庭　夫

芸術祭かぼちやパンツとラフなシャツ　良

にはかダンスに拍手喝采　よ

弔ひは薄くれなゐの柩にて　保

孫といつしよに垣を繕ふ　夫

独酌にくつろぎの刻花の昼　良

たも網のなか跳ねる若鮎　桃

平成二十八年十月一日首尾

（於・栄区民文化センター（本郷台リリス））

《横浜・横浜ベイサイド連句会―その二》

故生田目常義様追悼

歌仙　『ジュラ紀の空』

高山鄭和捌

名月やジュラ紀の空もかくあらん　　高山鄭和
　ふっと過るは小さき流星　　生田目常義佛
鍵盤に菊の二片零れゐて　　内田遊民
　午後の紅茶に添へるクッキー　　丹下誓
つかの間の安寧破る子の帰宅　　松田俊夫
　鰻掴まへ笑顔泥んこ　　酒匂道代
外(ウ)つ国の旅人混じる祇園の会　　高山鄭和
　籠巾着を胸に抱へる　　内田遊民
気になるは捩じり鉢巻あの鰡背　　生田目常義佛
　ほれた弱みの亭主髪結ひ　　丹下誓
カリスマの栄誉を得んとひたむきに　　松田俊夫
　大木葉木苑月のお百度　　酒匂道代
瞽女ひとり雪の峠を越えて来る　　高山鄭和
　目指す彼方に夢の乾坤　　内田遊民
埋め立て地面影辿る根岸線　　生田目常義佛
　昔ホテルで今やマンション　　丹下誓
愛猫が薄目を開ける花吹雪　　松田俊夫
力いっぱい揺らすふらここ　　酒匂道代
軟(ナオ)東風に深呼吸する朝まずめ　　丹下誓
　ゴンドラの唄口遊む人　　松田俊夫
酔ふほどに共に乱るるちどり脚　　酒匂道代
　水金地火木進む探索　　高山鄭和
昆虫の化石琥珀の宇宙なり　　内田遊民
　囲碁も将棋もともにプロ級　　生田目常義佛
マドンナは今も変わらず七変化　　丹下誓
　晩夏の海と路地裏の恋　　松田俊夫
町医者ぢゃとんとわからぬ煩ひで　　酒匂道代
　なぞなぞ遊びポワロ仕掛ける　　高山鄭和
静かなる古城の塔に登る月　　内田遊民
　涙を溜めし壺に竜胆　　生田目常義佛
爽(ナウ)涼に絵筆軽やか水彩画　　丹下誓
　良寛さんはかごめかごめと　　松田俊夫
草庵の屋根貫ける太き竹　　酒匂道代
　縁起かつぎてあたりめを食ぶ　　高山鄭和
花衣遠き昔に帰らばや　　内田遊民
　ハマの汽笛の届く惜春　　生田目常義佛

平成二十八年十月一日首尾

（於・栄区民文化センター（本郷台リリス））

脇起半歌仙　『光堂』

静　寿美子捌

五月雨の降り残してや光堂　芭蕉翁
　蛇の衣より零れ幸ひ　中村光声
幼子は絵本作家を夢にみて　静　寿美子
　セールスマンの呼びかける声　大坪白兎
しんしんと魚群れ来る月の水脈　植田雅夫
　蔦の絡まる螺旋階段　美
ゥ余所は余所うちはうちなり零余子飯　光
　亜麻色の髪そつとかきあげ　兎
朝陽差す右の腕に君眠る　雅
　銀座通りに帽子求めて　美
与野党の迷走を追ふ政治記者　光
　六十路の挑むハーフマラソン　雅
絹の道照らしてゐたる冬の月　光
　大くさめして一言となる　雅
聖壇をきしませてゐる修道士　美
　新発売の話すロボット　光
鼓笛隊花のトンネル抜け来る　雅
再会はまた噂りの中　兎

平成二十八年七月十四日首尾

（於・ルノアール中野）

歌仙『金盃に』

金盃に年酒かがやくゆゆしさよ　磯　直道捌

初東雲の空にたなびき　磯　直道

愛犬を抱いて畦道歩きゆく　櫻庭康夫

一本筋に続く海岸　佐藤治子

縁側につどいて作る月の膳　笠原悦子

青松虫の声の降りしき　服部早苗

喪の明けて運動会に子等元気　安藤君子

カメラ片手に追うは親たち　岡村和可

単線の列車待ちたる旅の閑　新相節子

窓辺に寄りて想う故里　磯　直道

遥かなる山ふところは紫に　櫻庭康夫

夕立去りて昇る三日月　佐藤治子

元彼の笑顔まぶたに昼寝覚め　笠原悦子

玉の輿かと天秤にかけ　服部早苗

立ち止まり亡きひとたちのこと浮かべ　安藤君子

空に向つて飛ばす風船　岡村和可

校門の記念の花は今盛り　新相節子

小鮎の影のちらと川の瀬　磯　直道

ナオちくたくと時計の針は動き出し　櫻庭康夫

お宮参りで人ごみの町　佐藤治子

携帯の鈴の根付を買い求め　笠原悦子

雨降る中を恋の待ち伏せ　〃

冬帽子目深にかぶり初キッス　服部早苗

凍えて受ける初めての事　安藤君子

障害者前途に暗き事件見て　岡村和可

どのチャンネルも同じニュースを　新相節子

屋島にて那須与一が的を射る　磯　直道

バックミラーに写る家並　櫻庭康夫

満月が中天に座し払う風　佐藤治子

松茸飯を器山盛り　笠原悦子

ナウ朝も来て番（つがい）の目白にぎやかに　服部早苗

幸の予感に心弾みて　安藤君子

三味線の調子合わせがままならず　岡村和可

おぼつかなげな子雀の声　新相節子

庭に立ち散りゆく花を惜しみつつ　磯　直道

長閑に過ぎし今日の一日　櫻庭康夫

平成二十八年十二月十二日首尾

（於・読売文化センター川口）

『海くれて』

脇起世吉　本屋良子捌

ウ公達の菊人形は凛と座し　城田咲
　上り框に名刺受置く　白石一有
ロミオロミオ何であなたはロミオなの　山中土筆
　一万本のバラを贈りて　志田則保
湖心へとふらり漕ぎ出す夏の月　安楽明賢
　いざ新天地締める靴紐　咲
どちらにも転ぶジョーカー忍ばせて　浅沼小葦
　迷ひ込んだる地図にない町　桂
小春日のどこかほほ笑む道祖神　保
　歯科の予約をふいにキャンセル　生
趣味ひとつ私の隠し味にする　希
　赤き箸添へ蛤の椀　扇
五弦琵琶花喰鳥を遊ばせて　淑
　庭の片隅すだく虫の音　和
げんげ畑に作る冠　生

翁　本屋良子　服部秋扇　遠藤尹希子　西原淑　高橋賢　小泉桂　山口和生

大空（ナオ）の雲ちぎり来よ半仙戯　桂

栄枯盛衰マチュピチュの址　郎

ＩＴでスタジオジブリ復活す　筆

新機軸いや焼き直しせんべい　有

何気なくついた吐息で見染められ　生

日記買ふたび初恋と書く　扇

野ざらしを抱いて佇む雪女　葦

乾風に乗り嬰の泣き声　扇

駅前に穴が開いたとテロップに　葦

体重計の針にびくびくと　賢

茶の味が腹に広がる休肝日　生

空也最中は電話予約で　筆

大人への旅の途次なる十三夜　筆

稼ぎさやかに闇秀の筆　淑

『詩あきんど・其角』（ナウ）読了　秋深し　郎

夢を育てて紡ぐ未来図　希

神棚に襖を受けるジャンボ籤　咲

竜樋むといふ滝壺の奥　有

語り部も老いて事件の色も褪せ　咲

家族総出の村の山焼き　保

上善は水の如しと花の宴　良

仔猫のあそぶ手造りの鞠　淑

平成二十八年十一月十一日首尾

（於・京橋区民館）

歌仙『わかば雨』

わかば雨御霊屋支倉国分町　伊藤草雨
雀跳ねとぶ五月の並木　鈴木おきよ
赤と黒ディーラー白き指鳴りて　佐藤文治
不思議な国に案内されけり　氏家富貴
子守唄くちずさむ子を照らす月　鈴木あこ
銀木犀はありとしもなく　石郷岡木瓜
友来たる昔肴に新酒酌む　酒井風信
ゆめにかよはぬ君を待つのみ　新宮美林
いま来むともう階段ののぼる音　萱場双魚尾
屋上からは青い海見る　伊澤小径
音楽と美食ランチを堪能し　浅沼呵々
ひとり黙々時計の修理　草雨
くっきりと兎餅搗く冬の月　おきよ
合掌造りに雪の降りつむ　文治
午後二時のラジオドラマの始まりて　富貴
横丁将棋外野の多さ　あこ
花ひとひらふたひらのせし傘を閉づ　木瓜
軒借る燕今年も来たり　風信
山路来て独活の香りに足を止め　美林
峠の茶屋はありやなしやと　双魚尾
急ぎ文早馬飛ばす武士ひとり　小径
朱色が目立つわが家計簿は　呵々
夏の霧お稲荷さんへお参りに　草雨
浴衣に三尺かっこからころ　木瓜
夜通しの怪談話盛り上がる　呵々
朝のしじまに君の横顔　おきよ
幾月も添はず別れの身繕ひ　文治
破れ垣根の近道抜けて　富貴
十五夜の鎮守の森の木の影絵　あこ
そよそよ風は秋の入り口　美林
ひやひやと壁に凭れて文を読む　双魚尾
ああなつかしの『暮しの手帖』　小径
銘仙の着物も出づる箪笥から　風信
リュックひとつで旅から旅へ　草雨
養花天行人何をする人ぞ　佐藤無風
季春味はふ伊達男あり　若生芥子

平成二十八年五月十四日首
平成二十八年八月　二日尾
（於・エル・パーク仙台・セミナー室）

歌仙『花冷えや』

板倉　合捌

武藤美恵子　花冷えや地震の報道鳴り止まず
稲垣渥　子　親子の猫の寄り添える窓
松井文　子　昼の月畑打ちの腰伸ばすらん
板倉　合　還暦すぎて趣味に挑戦
森田美耶子　バター溶け香り漂う舌鮮
田中イスズ　炭酸水の泡が弾ける
原田徹　夫　先生(ウ)の達筆の文字捨てがたし
イ　縁深めるパワースポット
合　今度こそ別れないよと君を抱く
渥　陶器の市で飯茶碗買う
合　開拓地荒れ果てたまま記念の碑
渥　クラーク博士の指に蜻蛉
耶　月よ月この世の戦火如何にせん
渥　ラッセラッセラ跳人練り行く
イ　関節の痛み取り去るストレッチ
恵　ホットワインでちょっと微睡む
渥　寒紅梅咲きほころびる蔵屋敷
合　ちりめん細工の個展開催

恐竜(ナオ)の巨大模型にはしゃぐ孫　恵
光を浴びるグランドキャニオン　イ
忍び寄る賭博の誘惑果てもなし　合
甲斐性なしの男優しく　宇井希
初恋が実る日が来る四十過ぎ　文
街の手相見拡大鏡持つ　渥
新緑のこの道行けば議事堂に　〃
ラニーニャ現象猛暑到来　徹
ヘビメタの化粧落とせば好青年　文
托鉢の僧駅前に立つ　耶
天地に耳澄ましおり月煌々　渥
舷を打つ銀の太刀魚　合
村興(ナウ)し運動会に人集め　イ
重荷になった空家対策　希
片隅に座敷童子の佇んで　耶
白い小鉢に山椒和え盛る　徹
碧空に花花花の舞うばかり　〃
蝌蚪の旅する清きせせらぎ　執筆

平成二十八年四月二十一日首尾

（於・竜神交流館）

歌仙『田園風景』

丘の百合田園風景統べており　　狩野康子捌

一輌電車過ぎる炎昼　　中村孝史

にぎやかに浴衣復習の幕開きて　　狩野康子

チラシの裏に買い物のメモ　　小岩秀子

半月へ飛ぶかりがねを連写する　　木田眞智子

べったら市は矢印の先　　菅沼邦夫

秋(ウ)湿り時代小説読み漁り　　鹿野恵子

土産を包む粋な風呂敷　　菊池宏

彼を待つ浮桟橋の揺れるまま　　田中裕子

身籠りしより運の付き初む　　恵子

携帯がお時間ですと鳴り出して　　康子

冤罪晴らす証拠物件　　孝史

月の下親子寄り添う寒立馬　　邦夫

葛湯と称しなぜかほろ酔い　　秀子

白髪染み皺の掌大勲章　　康子

人気のジムは順番を待つ　　裕子

観世音花の都に出でましぬ　　眞智子

凱旋門を仰ぐ麗日　　宏

亀(ナオ)鳴くを確かめたくて夕閻へ　　眞智子

季語を連ねる俳句初心者　　孝史

ナナハンが覆面パトカー追い越して　　恵子

映画狂いが二挺拳銃　　裕子

砂被る隊商宿と覇王樹と　　孝史

素直に生きて夏を乗り切る　　宏

やわらかな息で震わすピアス痕　　邦夫

哀しからずや性の倒錯　　秀子

うふふのふただそれだけよそれだけよ　　康子

朱が大好き夭折の画家　　恵子

月の曲譜面におどる連音符　　眞智子

豊洲の地下は虫と妖怪　　宏

身(ナウ)に入みて重き問題小池知事　　孝史

新体操のリボン交叉す　　邦夫

水平線つくづく地球丸いなあ　　裕子

頬杖をつく少年の像　　眞智子

御簾上げて姫の手招き花簪　　恵子

桜鯛釣り得意満面　　宏

平成二十八年　九月二十二日首
平成二十八年十一月　十日尾
（於・長町中央市民センター）

半歌仙　『あやめ』

辻　幸雄捌

あやめ挿し小体に囃子屋台かな　辻　幸雄
笛聞く畦に草螢舞う　馬場　英子
懐かしく酒酌む父と夢に居て　金枝　純
宇宙旅行の話半分　坂田　酔彦
チムチムニー誰より近い昼の月　幸雄
煙の中の秋刀魚香し　英子
仮説住宅揺れる灯火に親しんで　幸雄
鐘締め付ける惚れた一念　英子
制服の第二ボタンを無理に乞い　幸雄
応援団は校歌斉唱　〃
野を渡るざわめく風に月冴えて　幸雄
火の用心をさっしゃりやしょう　英子
今日こそは親が張り切るバーベキュウ　幸雄
お寺の庭を借りた手違い　英子
袈裟掛けの殺陣を見せ場のテレビロケ　幸雄
都踊へ清水を過ぎ　英子
花浴びてヒップホップに人だかり　幸雄
暮れなずみつつ春は闌　純

平成二十八年七月五日首
平成二十八年七月十九日尾（文音）

半歌仙　『秋　桜』

辻　幸雄捌

一斉に風を喜ぶ秋桜　辻　幸雄
揺れる穂波にまどう蜻蛉　馬場　英子
無人駅列車待つ間に月見して　幸
自販機で買うおつまみの味　坂田　酔彦
窓下で口笛吹けば顔を出し　金枝　純
年の塵掃くねじり鉢巻　英
湯豆腐を作ったはずのごった鍋　幸
美人が並ぶアンデパンダン　英
思い出は云わずに済んだ恋ばかり　〃
生まれ変わりはぜひ青ひげに　幸
月明かり夏蚕を照らす連子窓　英
眠りは足るや短か夜の夢　幸
宝くじ買ってにわかの神頼み　英
蜑（たがね）を呑んで回向院まで　幸
ミッキーも江戸のねずみも人気者　英
潮干に遊ぶ子連れ孫連れ　幸
お揃いのシャツに燥いで花吹雪　英
ボートレースは今ゴールイン　純

平成二十八年九月八日首
平成二十八年九月十七日尾（文音）

歌仙『初懐紙』

和田忠勝捌

和田忠勝
宮脇昌子
山本恵子
秋本忠重
中井淑子
内海鉄弥
遠藤尹希子
藤井恵美子
松本華与
大駒誠一
岡本貞子
宮下瑩子
宮坂和之
木谷藍
小川里江子
若松歌子
辻賢次郎
佐藤玻瑠

何のその三日続きの初懐紙　和田忠勝
　めでたき柄の春着様々　宮脇昌子
熟練の技継ぐという弟子の居て　山本恵子
　列もいとわぬ味の名店　秋本忠重
持ち寄りの地酒たっぷり月今宵　中井淑子
　秋振舞に村は賑わい　内海鉄弥
ハローウィン仮装パレード魔女気取り　遠藤尹希子
　ひとり鏡と対峙するとき　藤井恵美子
窓際でラストダンスを待ち続け　松本華与
　残りの福が今の愛妻　大駒誠一
子宝は野球チームが出来るほど　岡本貞子
　固唾を飲んで結果見守る　宮下瑩子
トランプに決まり世界は凍りつく　宮坂和之
　おでん屋でると煌々の月　木谷藍
吹きさらし最終バスの影もなし　小川里江子
　さてどこへ行くわたしこれから　若松歌子
一冊の花のアルバム満たされて　辻賢次郎
　湖の青きに引き残る鴨　佐藤玻瑠
春暖炉囲み弦楽カルテット　中井啓輔
　気心知れた悪友も老い　和田晶子
垣越しに隣家の犬を可愛がり　和田ひろ子
　煮物のこげる匂い何処から　高島幸子
タウン誌にあのモト彼の派手な記事　和田容子
　怖さ知らずの若いカップル　門間レイ子
通勤にアロハシャツ着るクールビズ　小柳由起子
　汗かく父の胡座分け合い　吉川みつ子
街角の鏡きれいな理髪店　谷内令
　夢にまでみたマチュピチュの旅　恵
有明に朝一番の汽笛聞く　重
　門前町に紅葉かつ散る　尹
試歩たすけ秋の斑猫杖の先　昌
　ネット爆発ピコ太郎節　淑
あした泣くきょうの笑いは隠し芸　弥
　焼き蛤が好きでたまらん　輔
精進に徹し高僧花を愛で　与
　鬼ごっこする遠足の児等　筆

執筆

平成二十八年　十月　十九日首
平成二十八年十二月三十一日尾（文音）

歌仙『羽抜鳥』

雨脚の激しき夜半よ羽抜鳥　和田ひろ子捌

葦生い茂る湖の渕　和田ひろ子
兄弟は蕎麦屋の暖簾守りいて　宮下瑩子
扉の奥でジャズが聞こえる　松本華与
刻々と満月のぼるビルの街　速藤尹希子
紅葉の旅誘う広告　岡本貞子
分け入りて円空仏と轡虫　中井淑子
礫瓦と子等がからかう　中井啓輔
葡萄酒のラベル集めが彼の趣味　和田晶子
アルジェのカスパバーで知り合い　内海鉄弥
超音波地下の財宝探り当て　辻賢次郎
開業未定豊洲がらんと　藤井恵美子
臥せてからまた丸くなる寒の月　大駒誠一
冬合宿で受験対策　山本恵子
OBの自慢話に辟易し　秋本忠重
免許返納皆で勧める　宮脇昌子
電脳に変わりゆく世の花老樹　和田忠勝
シャボン玉飛ぶジョギングの径　宮坂和之
手に掬うおたまじゃくしのドレミファソ　木谷藍
はなし合わねどうなずき合うて　佐藤玻瑠
見直しのバレー会場どう決まる　高島幸子
実験林を守り居し彼　谷内令
愛の巣はコンビニ五分駅五分　吉川みつ子
芥川賞夢を抱きつ　和田容子
待ちかねた博多山笠繰り出して　若松歌子
完熟トマト篭に頂く　小柳由起子
静物画写真のように描く人　門間レイ子
骨董市に象の置物　与
妖怪の月夜の宴始まりぬ　恵
入れ歯しっかり焼き米を噛む　淑
手を上げて試乗希望す無人バス　瑩
次回幹事は阿弥陀籤にて　重
山裾の鄙びた宿が評判に　里
草木染めする春のスカーフ　美
花の宴カラオケ合戦最高潮　輔
六輔・八大・九のうららか　筆

執筆

平成二十八年　十月　十九日首
平成二十八年十二月三十一日尾（文音）

歌仙『柿たわわ』

松本華与捌

松本　華与
和田忠　勝
和田ひろ子
辻　賢次郎
大駒誠一
中井淑子

蒼天や主なき家の柿たわわ　　勝
　ダム湖の上に薄き眉月　　一
鳩時計ほっほと一つ身に入みて　　ろ
　自動で沸かす風呂の湯加減　　郎
スマホでは孫が先生得意顔　　淑
　テラスに並ぶ剥げたサンダル　　与
浴衣着て産土神の縁日へ　　勝
　バスで隣に座る幸運　　ろ
恋人を残して学徒出陣し　　郎
　遥かにけぶる沖縄の海　　淑
自分史にセピアの写真スキャンする　　与
　熊に出くわす山裾の畑　　ろ
寒月に行った人ありあそこまで　　一
　電子頭脳の下剋上とや　　勝
和やかに緩和病棟見て回り　　淑
　南の窓に広き眺望　　郎
対岸の花守紫煙燻らせて　　一
　オーソレ・ミオを歌う春暖　　与
鳥つるむ辺りの空気ゆるみつつ　　一
　座持ちがいいと司会やらされ　　勝
安倍首相ゴルフの腕は如何なる　　与
　一反木綿目撃の里　　淑
人日の社員食堂賑やかに　　郎
　ほつれし髪の艶な初結　　ろ
今時は出来ちゃった婚悪びれず　　一
　記念の年のワイン開栓　　郎
ＴＰＰまず米国を牽制し　　勝
　旅の土産は玉手箱かも　　ろ
月高し鑿あと光る念持仏　　淑
　二時間待ちの芸術の秋　　一
あぶれ蚊をパンフ丸めて追い払う　　郎
　蝋石漫画袋小路に　　勝
同じ屋根老人ホーム小学校　　淑
　カレーが好きでライスお代わり　　与
研究の夢いっぱいに花の席　　ろ
　叙勲の知らせ運ぶ軟東風　　一

平成二十八年　十月二日首
平成二十八年十二月一日尾（文音）

歌仙『梅が香』

梅が香に励まされ行く急な坂　辻　賢次郎捌

景色目に入る風光る街　宮下螢子

炉塞ぎの支度を母とやり終えて　宮坂和之

子供の集う書道教室　速藤尹希子

澄む月に深夜便聞く散歩道　辻　賢次郎

馴染みの店で温め酒呑み　内海鉄弥

震災の復興半ばそぞろ寒　尹

病が癒えて囲碁の対局　和

看護士の優しき声を忘れ得ず　郎

自動運転不能この恋　弥

お御籤を引けばいずれも吉と出て　螢

基地の移転に兆す解決　螢

満潮のクラゲ浮く海月丸く　和

ちりんちりんとアイスキャンデー　尹

山深し人とお猿は顔見知り　尹

ＴＰＰの先に暗雲　和

高遠の花に歓声バス旅行　郎

空に輪を描く鳶ののどらか　弥

肉厚の春椎茸（ナオ）を天ぷらで　螢

井戸端会議相も変わらず　尹

英国のＥＵ離脱投票に　郎

最後の処分悩む原発　弥

懐かしき冬の足音ササラ来る　和

鮫鰊鍋を突く同胞　郎

カラオケの選曲嬉しデュエットで　弥

つぶらな瞳赤い口紅　尹

一言で秘めた想いのありったけ　螢

札所寺にて祷る毎日　尹

人類の夢の足跡月面に　郎

添水に慣れて荒らす田畑　和

鬼（ナウ）やんま校長室をひと回り　螢

鬚の長さを競う大会　郎

蘇る古代のロマン日本書紀　弥

ドラム高鳴りタクト終曲　〃

鯉跳ねて池に取り込む花吹雪　和

着物姿の姉妹麗らか　執筆

平成二十八年三月六日首尾

（於・大倉山ヒルタウン集会室）

尻取り半歌仙　『乱数表』

笹川圭子捌

床の蔭や茶席の朝のあわただし　笹川圭子
　茂み撒き水苔も青々　安斎厚子
親の責子どもの変化見守らん　井上せつ子
　乱数表を読み解かんとて　伊藤航
手許より酒の零れる月今宵　せ
　猪の罠またも逃げられ　圭子
檸檬(ウ)よりすっぱい話の人が来た　厚子
　箪笥貯金のはやる此の頃　せ
ころころと女心の揺れること　せ
　琴想夫恋小督悲しき　航
敷き写しお経知らずも成し終える　航
　ルーキー起用適時打の出て　せ
照る月は赤貝漁を祝うかに　厚子
　にはにはち十六並ぶ雪沓　圭子
ぐつぐつと呪文唱えて煮立たせて　美恵子
　鉄道に乗り巡るイタリア　厚子
リアカーで花じゃ花じゃと長屋衆　厚子
　独活和作り祖母の味付け　美子

平成二十八年六月　三日首
平成二十八年七月二十九日尾
（於・生涯学習支援センター）

山梨県連句協会

会長　後藤臣彦
副会長　後藤はるよ
事務局　後藤臣彦
〒400-0814 甲府市上阿原町1258
(055-235-1653)

秋田県連句協会

会長　茂呂雄太
副会長　髙山紀子・武藤拓自
事務局　佐藤康子
〒010-0826 秋田市新藤田中山台54-11
(018-832-5722)

鹿児島県連句協会

会長　前田　豊
副会長　五郎丸照子・日高うんま
顧問　梅村光明
事務局　五郎丸照子
〒897-0009 南さつま市加世田
ハーモニー6-3
(0993-78-3980)

京都府連句協会

会長　筒井紘一
幹事長　河合臥雲
〒606-8225 京都市左京区田中門前町
103-21随林院
(075-781-5541)

愛知県連句協会

会長　杉山諦子
副会長　松尾博雄・矢崎　藍
事務局　青島由美男
〒468-0034 名古屋市天白区久方
1-150-27-102
(052-806-0669)

奈良県連句協会

会長　生駒　聡
副会長　近藤蕉肝・竹山美代子
事務局　もりともこ(森　智子)
〒633-0077 桜井市大西834
(090-7095-0205)

福岡県連句協会

会長　八木紫暁
副会長　守口　薫
事務局　八木紫暁
〒816-0931 大野城市筒井3-13-12
(092-593-2575)

大分県連句協会

会長　中森順和
事務局　南雲玉枝
〒874-0902 別府市青山町8-72佐々木方
(0977-24-9407)

連句協会広島県支部

支部長　高橋昭三
事務局　高橋昭三
〒731-0223 広島市安佐北区可部南
4-5-47
(082-815-1914)

宮城県連句協会

会長　狩野康子
副会長　中村孝史・永渕　丹
事務局　狩野康子
〒981-0924 仙台市青葉区双葉ケ丘
2-5-12
(022-271-0005)

鳥取県連句協会

会長　音田諚治
副会長　新田幸子・永江重昭
高野重子・山崎君子
事務局　田中史郎
〒682-0402 倉吉市関金町大鳥居
関金町教育委員会内
(0858-45-2111・fax3961)

岡山県連句協会

会長　米林　眞
副会長　花房八映
事務局　米林　眞
〒700-0904 岡山市柳町2-2-1
(086-222-6176)

山形県連句協会

会長　内田素舟
副会長　浅沼葛子・三浦和枝
安部英子倍
事務局　内田素舟
〒996-0035 新庄市鉄砲町3-71
(0233-22-1285)

連句協会群馬県支部

会長　伊藤稜志
事務局　伊藤稜志
〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37
(0272-61-2297)

茨城県連句協会

会長　堀江信男
副会長　西　幾多・城　依子
事務局　根本美茄子
〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9
(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会長　諏訪欣二
事務局　中本蒼水
〒746-0025 周南市古市2-3-43
(0834-62-1400)

静岡県連句協会

会長　宮沢次男
副会長　久保田静男・飯田紫苑
顧問　石渡蒼水・中根明美
事務局　久保田静男
〒410-0822 沼津市下香貫280-1
(055-931-7219)

徳島県連句協会

会長　東條士郎
副会長　竹内菊世・梅村光明
事務局　東條士郎
〒770-8051 徳島市沖浜町東畑589-1
(088-622-3745)

地方連句組織

愛媛県連句連盟

会長　大西素之
副会長　岡本　眸・名本敦子
事務局長　岡田伊勢子
〒791-0113 松山市白水台
2-7-13
(089-932-9663)

連句協会石川県支部

支部長　藤江紫虹
事務局　宮島　茂
〒929-0327 石川県河北郡津幡町字庄
チ65
(076-289-4214)

連句協会三重県支部

支部長　西田青沙
事務局　西田青沙
〒512-0921 四日市市尾平町3768-188
(0593-32-8931)

埼玉県連句協会

会長　磯　直道
副会長　白根順子・福田たろを
顧問　金子兜太
事務局　石川光男
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町
寄居535
(048-581-5943)

岐阜県連句協会

会長　大野鵠士
副会長　瀬尾千草
理事長　清水貴久彦
顧問　伊藤百雲
事務局　松尾一歩
〒500-8415 岐阜市加納中広江町68
(058-274-9479)

連句協会岩手県支部

支部長　小原啄葉
副支部長　志和正巳・菅原多つを
事務局　沼田和子
〒020-0875 盛岡市清水町1-33
(0197-622-7907)

連句協会千葉県支部

支部長　東浦佳子
副支部長　伊藤貴子
顧問　下鉢清子・浅野黍穂
斉藤一灯
事務局　伊藤貴子
〒264-0006 千葉市若葉区
小倉台1-12-3
(043-233-3555)

連句協会栃木県支部

支部長　中尾硫苦
副支部長　高井利夫・田中きみ
田浪富布
事務局　中尾硫苦
〒321-0932 宇都宮市平松本町438-6
(028-633-8488)

富山県連句協会

会長　山本秀夫
副会長　大西紀夫・藤縄慶昭
事務局　野島清治
〒930-0114 富山市茶屋新町59-61
(076-436-0677)

香川県連句協会

会長　沖津秀美
副会長　清水定代
事務局　沖津秀美
〒761-8084 高松市一宮町357-9
(087-889-3141)

(2) 貸借対照表
(3) 損益計算書（正味財産増減計算書）

2 前項により報告され、又は承認を受けた書類のほか、監査報告を主たる事務所に5年間備え置くとともに、定款及び会員名簿を主たる事務所に備え置くものとする。

（剰余金の分配の禁止）

第46条 当法人の剰余金は、これを一切分配してはならない。

（残余財産の帰属）

第47条 当法人が解散（合併又は破産による解散を除く）したときに残存する財産は、総会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第8章 附 則

（最初の事業年度）

第48条 当法人の最初の事業年度は、当法人成立の日から平成26年12月末日までとする。

（入会金）

第49条 当法人の母体である任意団体、連句協会の当法人への権利義務承継の日の前日における会員には、第7条の入会金の支払を求めないものとする。

（設立時の役員等）

第50条 当法人の設立時の役員は、次のとおりである。

設立時理事　　臼杵悠治
設立時理事　　和田忠勝
設立時理事　　高尾秀四郎
設立時代表理事　臼杵悠治

（設立時社員の氏名又は名称及び住所）

第51条 設立時社員の氏名及び住所は、次のとおりである。

設立時社員
1 住所 神奈川県横浜市青葉区みたけ台2番地22
　氏名 臼杵悠治
2 住所 神奈川県横浜市港北区綱島東5丁目22番4号
　氏名 和田忠勝
3 住所 東京都町田市図師町1333番地8
　氏名 高尾秀四郎

（法令の準拠）

第52条 本定款に定めのない事項は、すべて法人法その他の法令に従う。

平成25年12月11日　制定
平成28年3月28日　第7条の年会費額を5千円に改定。

「日本連句協会」顧問・役員名簿

（顧　　問）小林しげと・磯　直道・宮下太郎
　臼杵游児・和田忠勝
（役　　員）
会　　長　青木秀樹
副 会 長　狩野康子・高尾秀四郎・東條士郎
　小川廣男
理 事 長　高尾秀四郎（兼務）
常任理事　大久保風子・近藤蕉肝・静　寿美子・白根順子・林　転石・松澤龍一・吉田酔山
理　　事　浅沼　璞・伊藤貴子・稲垣漸子・梅村光明・大山とし・木之下みなみ・小池正博・五郎丸照子・鈴木千恵子・鈴木了斎・高橋　賢・長嶋顕信・南雲玉枝・名本敦子・宮川尚子・宮澤次男・守口　薫・渡部春水・渡辺　柚
会　　計　林　転石（兼務）
幹　　事　石川光男・東浦佳子

取引
(3) 当法人がその理事の債務を保証することその他理事以外の者との間における当法人とその理事との利益が相反する取引
(責任の一部免除)
第28条 当法人は、役員の法人法第111条第1項の賠償責任について、法令に定める要件に該当する場合には、理事会の決議によって、賠償責任額から法令に定める最低責任限度額を控除して得た額を限度として、免除することができる。
(顧問)
第29条 当法人に、顧問を置くことができる。
2 顧問は、会員の中から、理事会の決議を経て会長が委嘱する。
3 顧問は、無報酬とする。ただし、その職務を行うために要する費用の支払をすることができる。顧問は会費を納めることを要しない。
(顧問の職務)
第30条 顧問は、会長の諮問に応え、会長に対し、意見を述べることができる。

第5章 理事会

(構成)
第31条 当法人に理事会を置く。
2 理事会は、すべての理事をもって構成する。
(権限)
第32条 理事会は、次の職務を行う。
(1) 当法人の業務執行の決定
(2) 理事の職務の執行の監督
(3) 会長、副会長、理事長及び常任理事の選定及び解職
(招集)
第33条 理事会は、原則として年3回、会長が招集する。
2 会長が欠けたとき又は会長に事故があるときは、副会長が理事会を招集する。
(議長)
第34条 理事会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該理事会において議長を選出する。
(決議)
第35条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
2 前項の規定にかかわらず、法人法第96条の要件を満たしたときは、理事会の決議があったものとみなす。
(議事録)
第36条 理事会の議事については、法令で定めるところにより議事録を作成する。
2 出席した会長及び監事は、前項の議事録に署名又は記名押印する。
(理事会規則)
第37条 理事会に関する事項は、法令又はこの定款に定めるもののほか、理事会において定める理事会規則による。
(常任理事会)
第38条 常任理事会は、原則として隔月に会長が招集する。常任理事会に関する事項は、理事会において定める常任理事会規則による。

第6章 基金

(基金の拠出)
第39条 当法人は、会員又は第三者に対し、基金の拠出を求めることができるものとする。
(基金の募集等)
第40条 基金の募集、割当て及び払込み等の手続については、理事会の決議を経て会長が別に定める基金取扱い規程によるものとする。
(基金の拠出者の権利)
第41条 基金の拠出者は、前条の基金取扱い規程に定める日までその返還を請求することができない。
(基金の返還の手続)
第42条 基金の返還は、定時総会の決議に基づき、法人法第141条第2項に定める範囲内で行うものとする。

第7章 計算

(事業年度)
第43条 当法人の事業年度は、毎年1月1日から12月31日までの年1期とする。
(事業計画及び収支予算)
第44条 当法人の事業計画書及び収支予算書については、毎事業年度開始日の前日までに会長が作成し、理事会の決議を経て総会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も同様とする。
2 前項の規定にかかわらず、やむを得ない理由により予算が成立しないときは、会長は、理事会の決議に基づき、予算成立の日まで前年度の予算に準じ収入又は支出することができる。
3 前項の収入支出は、新たに成立した予算の収入支出とみなす。
(事業報告及び決算)
第45条 当法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、会長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を経て、定時総会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、第2号及び第3号の書類については承認を受けなければならない。
(1) 事業報告

（議決権）
第17条　各会員は、各１個の議決権を有する。
（決議）
第18条　総会の決議は、法令に別段の定めがある場合を除き、総会員の議決権の過半数を有する会員が出席し、出席会員の議決権の過半数をもってこれを行う。
２　前項の規定にかかわらず、次の決議は、総会員の半数以上であって、総会員の議決権の３分の２以上に当たる多数をもって行う。
(1)　監事の解任
(2)　定款の変更
(3)　会員の除名
(4)　解散
(5)　その他法令で定められた事項
３　前２項の規定にかかわらず、法人法第58条の要件を満たしたときは、総会の決議があったものとみなす。
（議事録）
第19条　総会の議事については、法令の定めるところにより議事録を作成し、総会の日から10年間主たる事務所に備え置く。

第４章　役員等

（役員の設置等）
第20条　当法人に、次の役員を置く。
理事　３名以上35名以内
監事　２名以内
２　理事のうち、１名を会長とし、５名以内を副会長、１名を理事長、10名以内を常任理事とすることができる。
３　この法人の会長を法人法上の代表理事とする。
（選任等）
第21条　理事及び監事は、総会の決議によって選任する。
２　会長、副会長、理事長、及び常任理事は、理事会の決議によって理事の中から定める。
３　監事は、当法人又はその子法人の理事若しくは使用人を兼ねることができない。
４　理事のうち、理事のいずれかの１名とその配偶者又は３親等内の親族その他特別の関係にある者の合計数は、理事総数の３分の１を超えてはならない。監事についても、同様とする。
５　他の同一の団体（公益法人を除く。）の理事又は使用人である者その他これに準ずる相互に密接な関係にある者である理事の合計数は、理事の総数の３分の１を超えてはならない。監事についても、同様とする。
（理事の職務権限）
第22条　会長は、当法人を代表し、その業務を執行する。
２　副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。
３　理事長は理事会及び常任理事会を運営する。
４　常任理事は、会長、副会長及び理事長を補佐し理事会の議決に基づき当法人の業務を執行する。
５　前各項に掲げられた理事は、毎事業年度毎に４か月を超える間隔で２回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。
（監事の職務権限）
第23条　監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。
２　監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、当法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。
（任期）
第24条　理事の任期は、選任後２年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。
２　監事の任期は、選任後４年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時総会の終結の時までとし、再任を妨げない。
３　補欠として選任された理事又は監事の任期は、前任者の任期の満了する時までとする。
４　役員は、辞任又は任期の満了後において、定員を欠くに至った場合には、新たに選任された者が就任するまでは、その職務を行う権利義務を有する。
（解任）
第25条　役員は、総会の決議によって解任することができる。
（報酬等）
第26条　役員の報酬、賞与その他の職務執行の対価として当法人から受ける財産上の利益は、総会の決議をもって支給することができる。
（取引の制限）
第27条　理事が次に掲げる取引をしようとする場合は、理事会において、その取引について重要な事実を開示し、理事会の承認を得なければならない。
(1)　自己又は第三者のためにする当法人の事業の部類に属する取引
(2)　自己又は第三者のためにする当法人の

『日本連句協会』定　款

第1章　総　　則

（名称）
第1条　当法人は、一般社団法人日本連句協会と称する。
（主たる事務所）
第2条　当法人は、主たる事務所を神奈川県横浜市に置く。
（従たる事務所）
第3条　当法人は、理事会の決議を経て、必要な地に従たる事務所を置くことが出来る。
（目的）
第4条　当法人は、連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の内外における交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とし、その目的に資するため、ユニバーサルデザインの精神に基づき次の事業を行う。
1. 全国大会および地方大会の開催、共催
2. 会報（隔月）の発行
3. 連句年鑑の発行
4. ホームページの運営
5. 国民文化祭への後援
6. 前各号に掲げる事業に附帯又は関連する一切の事業

（公告）
第5条　当法人の公告は、主たる事務所の公衆の見やすい場所に掲示する方法により行う。

第2章　社員及び会員

（入会）
第6条　当法人の目的に賛同し、入会した者を会員とする。
2　会員となるには、当法人所定の様式による申込みをし、会長の承認を得るものとする。
3　当法人の会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下、「法人法」という。）上の社員とする。
（経費等の負担）
第7条　会員は、当法人の目的を達成するため、それに必要な経費を支払う。
2　会員は、入会金2千円及び1月から12月までの年会費として5千円を納入しなければならない。
（会員の資格喪失）
第8条　会員が次の各号の一に該当する場合には、その資格を喪失する。
(1) 退会したとき。
(2) 成年被後見人又は被保佐人になったとき。
(3) 死亡し、若しくは失踪宣告を受け、又は解散したとき。
(4) 2年以上会費を滞納したとき。
(5) 除名されたとき。
（退会）
第9条　会員はいつでも退会することができる。ただし、1か月以上前に当法人に対して退会届を提出するものとする。
（除名）
第10条　当法人の会員が、当法人の名誉を毀損し、当法人の目的に反する行為をし、会員としての義務に違反するなど除名すべき正当な事由があるときは、法人法第49条第2項に定める社員総会の特別決議によりその会員を除名することができる。
（会員名簿）
第11条　当法人は、会員の氏名又は名称及び住所を記載した会員名簿を作成する。

第3章　社員総会

（構成）
第12条　総会は、すべての会員をもって構成する。
（権限）
第13条　総会は、次の事項について決議する。
(1) 理事及び監事の選任又は解任
(2) 理事及び監事の報酬等の額
(3) 事業計画及び収支予算の承認
(4) 事業報告及び収支決算の承認
(5) 定款の変更
(6) 解散
(7) 会員の除名
(8) その他総会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項
（開催）
第14条　当法人の総会は、定時総会及び臨時総会とし、定時総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時総会は、必要に応じて開催する。
2　前項の総会をもって法人法上の社員総会とする。
（招集）
第15条　総会の招集は、理事会がこれを決議し、会長が招集する。
2　総会の招集通知は、会日より1週間前までに各会員に対して発する。
（議長）
第16条　総会の議長は、会長がこれに当たる。会長に事故があるときは、当該総会において議長を選出する。

一般社団法人

日本連句協会定款

年鑑担当

○編　集

〒330―0053さいたま市浦和区前地二―九―二二

（電話・ＦＡＸ　〇四八―八八一―二七五六）

大久保風子

○購入申込・発送

〒201―0011狛江市西和泉二―一四―五〇六

（電話・ＦＡＸ　〇四二―四八九―〇七九〇）

林　転石

○連句年鑑会計・送金先

郵便振替　〇〇一八〇―四―七六六八三六

加入者名

林　転石

○日本連句協会会員名簿担当

〒166―0003杉並区高円寺南五―一五―八

（電話・ＦＡＸ　〇三―六三一三―六七九一）

靜　寿美子

■編集後記■

★『連句年鑑平成二十九年版』をお届け致します。協会行事、国民文化祭報告に続き、全国一一一グループの作品記録が一六八巻です。データでの応募が九十二巻、全体の55%となりました。お陰様で諸経費の節減に繋がっております。

★巻頭の評論「『猿蓑』巻五所収四歌仙の構成」の筆者大城悦子氏の紹介は「協会会報214号俳海往来」に詳しく掲載されています。この評論では春夏秋冬各季を発句にした芭蕉の四歌仙の月・花の配置等を一覧表にしてあり、現代の連句人にもバラエティに富んだ歌仙に挑戦する目安になるものと思われました。

★エッセイでは今年97歳を迎えられる俳人金子兜太氏の一文「俳句の産み出す詩語」を転載致しました。兜太氏の俳句は難解といわれておりますが、それらを連句的に鑑賞してみようと鼎談形式で話し合いました。この鼎談には兜太氏より「あまりに近似の美意識に触れ恐れ入りました」との感想を頂いております。

★さらには協会会員・監事の東浦佳子氏に「宇田零雨について」と題して、零雨氏との思い出を語って頂きました。東浦氏は『芭蕉語彙考』（1999年）の著者でもあります。「佳人」に関するところで零雨氏の人となりが窺い知ることができるかと思われます。

★来年の『連句年鑑平成三十年版』には従来通り、各グループからの作品出稿に加え、個人会員からの自由な作品を募集する方針です。所属グループを超えて座が成立し、あるいは文音の機会を設けて連句の輪が広がっております。こうした活動の記録を「個人作品の部」として出稿を募り掲載することになりました。①形式・内容について、編集部からは何も規制することはありません。②投稿の連句に自解等がありましたら、誌面の許す範囲でお書き願います。③投稿内容については、投稿する個人が全責任を負う、という方向でお願い致します。④ただ一つの掲載条件は投稿者が日本連句協会会員であることです。出稿料の金額など目下審議中であり、「日本連句協会会報十月一日発行号」に募集案内を掲載する予定です。皆様の応募を心よりお待ちしております。

（大久保風子）

平成二十九年六月二十五日　印刷
平成二十九年六月　三十日　発行

平成二十九年版　連句年鑑

定価　二、五〇〇円

編集人代表　大久保　風　子

発行所　〒194-0203　町田市図師町一三三三-八
高尾方
一般社団法人　日本連句協会
電　話　〇四二-七九三-三九八四
公式サイトアドレス
http://renku-kyokai.net/

印刷所　〒336-0021　さいたま市南区別所三-一-一〇
関東図書　株式会社
電　話　〇四八-八六二-二九〇一
FAX　〇四八-八六二-二九〇八